

Tokyo Urban Tech

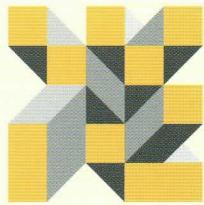
NIKE

工学院大学建築系学科同窓会誌

<http://www.kogakuin.or.jp/kenchiku/>

m_a_k_k_e e Y_o_u_r_s_s_o_u_l_d

2007 Vol.30



国土交通大臣 登録住宅性能評価機関
住宅金融公庫 協定指定機関

国土交通大臣 指定確認検査機関
(財)住宅保証機構 検査機関

株式会社 住宅性能評価センター

・代表取締役会長兼CEO	田野邊 幸裕	(建築学科 昭和44年卒)
		(建築系学科同窓会 会長)
		(校友会 監事、学校法人評議員)
・代表取締役社長	杉山 正博	(建築学科 昭和45年卒)
・取締役	大塚 廣	(建築学科 昭和44年卒)
・技術推進室	宮田 奈津	(建築学修士 平成15年卒)
・建築基準適合判定資格者		
	石川 良男	(建築学科 昭和37年卒)
	蒂金 貞介	(建築学科 昭和38年卒)
	加藤 肇	(建築学科 昭和39年卒)
	平野 久雄	(建築学科 昭和41年卒)
	勝谷 尚武	(建築学科 昭和45年卒)
	中島 範義	(建築学科 昭和47年卒)
・審査統括部・検査統括部		
	曹 政雄	(建築学科 昭和44年卒)
	漆間 幹	(建築学科 昭和47年卒)
	五月女 元良	(建築学科 昭和51年卒)
	並木 靖	(建築学科 平成09年卒)
	門脇 賢治	(建築学修士 平成11年卒)
	佐山 弘枝	(建築学科 平成12年卒)
	望陀 佐和子	(建築学修士 平成13年卒)
	加藤 朝子	(建築学修士 平成13年卒)
	小田 恵美子	(建築学科 平成15年卒)
	須藤 光俊	(建築学科 平成15年卒)
	西川 恵理	(建築学科 平成15年卒)
	泉澤 恵子	(建築学科 平成16年卒)
	船原 友子	(建築学科 平成16年卒)
	富田 究子	(建築学修士 平成17年卒)
	吉田 研史	(建築学修士 平成17年卒)

一人でも多くの方が「家族の命を守る家」を手に入れるために、
私たちは審査・検査で、貢献してまいります

建築適合判定資格者の方、募集中です！

〒160-0022 東京都新宿区新宿2-3-11 ダヴィンチ御苑前311(5階)
電話 03-5367-8730(代) オフィシャルHP www.seinouhyouka.co.jp

住宅性能評価、【フラット35】適合証明、住宅保証機構:日本全国

建築確認、現場検査:東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、山形県、群馬県、長野県、静岡県、愛知県
三重県、岐阜県、石川県、富山県、新潟県及び福島県の全域

おかげさまで

【フラット35】買取件数

全315取扱金融機関中 第5位

(H18年度
(11月現在)

新商品で、さらにパワーアップ

新発売

マイホーム パーフェクト

【フラット35】の長期固定金利に、
3年・5年・7年の固定特約金利、変動金利をプラス。
100%全額融資を可能にしました

マイホーム サポートスリー

【フラット35】の融資実行前に、工事資金をご融資。
「つなぎ融資」を実現しました

※サポートスリーをご利用いただける住宅会社は、当社との提携が必要です

建築業界に強い、住宅ローン専門の金融機関です



住宅金融公庫【フラット35】提携金融機関

株式会社 優良住宅ローン

貸金業 東京都知事(1)第29316号

代表取締役社長 田野邊 幸裕 (建築学科 昭和44年卒)



工学院大学新宿キャンパス隣の
エステック情報ビル20階です

詳細はホームページから

www.yuryoloan.com

次の世代の資産を創る。

わたしたちは、開発型不動産流動化事業の
フロントランナーとして、時代と土地を凝視し、
その地にあるべき「建築の姿」を追求しています。
そしてそれは、レジデンス、オフィス、ショッピングモール
となって、これから次々と誕生します。
「ものづくり」の原点を見つめ、ひとつひとつ、丹精を込めて
建物を創り上げること、そして、人が真に心地よさを感じる
空間を創り続けること――。
わたしたちは、この基本姿勢を大切に守りながら、
未来を見据え、次の世代に引き継がれる、
優れた社会資産の創造に寄与して参ります。



DUPLEX

リテック・コンサルタンツ

国土交通大臣(2)第5847号(社)不動産流通経営協会会員
(社)全日本不動産協会会員(社)首都圏不動産公正取引協議会加盟
〒112-8683 東京都文京区自白台2-9-13 目白台デューブレックススター
TEL.03-5976-8688

トルテック都市建築設計事務所

一級建築士事務所 登録番号 東京都19172号
〒112-8684 東京都文京区目白台2-9-13 目白台デューブレックススター
TEL.03-5976-8881

デューブレックス・ギャザリング

東京都知事免許(2)第76366号
〒112-8685 東京都文京区目白台2-9-13 目白台デューブレックススター
TEL.03-5976-8885

同窓会会長挨拶

NICHE 2007 vol.30の発刊に寄せて 田野邊幸裕 4

NICHE Topics

校友会2008全国大会は沖縄で開催 芳田真喜人 6

卒業生(校友会)の求職・転職をサポートします! 工学院大学校友会

特別企画/30号特集記事

昭和43年同窓会誌創刊号 同窓会 会長挨拶 小高鎮夫 8

NICHE 30号記念 座談会 南迫哲也 宮崎勝弘 久野和作 初田亨 大場光博 10

専任教員在籍一覧(1955~2006) 14

NICHE Topics

建築系学科同窓会総会開催 15

輝かしき先輩たちが、フジTVに!

同窓会主催交流忘年会2006開催

八王子キャンパスに新校舎「工房・化学実験棟」竣工 平井真夫 16

工学院大学付属高等学校 校舎竣工について 望月大介 18

<福井駅前交番>が第14回福井市都市景観賞を受賞 藤木隆明

<aqua-space>がAR Awards for Emerging Architecture2006のHonourable Mentionに

空気調和衛生工学会 学会賞受賞 野部達夫 20

独立行政法人都市再生機構 都市住宅技術研究所主催コンペ最優秀賞 井上幸作

第12回IFHP国際学生コンペティション佳作 小林丈史 21

第8回提案競技「美しいまちをつくる、むらをつくる」優秀賞 小林丈史他

平成18年度工学院大学総合プロジェクト研究成果発表会 22

駅型保育園の建築計画学的研究 赤木徹也

資源循環型環境共生地域社会の構築に関する研究 東 正則

日本都市計画家協会関東甲信越支部主催「第15回東京都学生設計コンクール」金賞 澪川幸太 23

第3回日経アーキテクチュアコンペ優秀賞 花沢 淳

第29回学生設計優秀作品展 レモン賞 梅中美緒 24

シェルター学生設計競技2006優秀賞 徳野由美子

第1回住まいのパリアフリーコンペで優秀賞 谷口宗彦 鯉坂誠之 25

三鷹市連雀通り商店街活性化に本学学生・卒業生が奮闘中! 谷口研究室

文豪が愛した町並保存へ 香川祐司 26

第1回 大学・地域の協働によるまちづくりプレゼンテーション大会in四谷 初田研 梨子田チーム

「まちなみ歴史探訪・横浜」 初田 亨 27

新刊書紹介 28

特別企画

学会賞を受賞して 吉田偉郎 30

國學院大学渋谷キャンパス再開発計画 朝田志郎 32

モバイルアーキテクチャー 鈴木敏彦 36

私の「ランドスケープ」という仕事 井上洋司 4

フランク・ロイド・ライトツアー

ライトの誕生日に「落水荘」を訪ねて 高橋昭彦 44

NICHE Topics

国際交流プロジェクトの経緯 赤木徹也 46

ベルリン工科大学 国際ワークショップ 藤木隆明

世界の建築家と工学院大学④ 47

再びPaul Rudolph 山下司

建築系学科ホームページの紹介

53

特別企画

インド、人間と生と死 小野司 54

NICHE鼎談

「NPO法人 家づくりの会」 十文字豊、濱田昭夫、半田雅俊、谷口宗彦 60

輝かしき先輩たち⑧

高崎觀音を実施設計した石川文二郎 類洲環 64

同窓生を訪ねて

室内環境汚染の実測調査から見た住宅 半田雅俊 70

同窓生からの便り

お客様と共に楽しむ家づくり 新井隆元 74

今、成すべき事 児玉達朗 76

「モノ創り」倉持春夫 78

around the World

プロセスとして建築デザインを考える 片桐和也 80

「シートル」あたりの身近な情報です。 鴻巣泰宏 84

米国トヨタケンタッキー乗用車製造工場に携わって 伊庭孝 88

NICHE PASSPORT

感性を養う旅 小菅美沙子 90

場と生態の新たな関係を求めて 濱奈津子 93

スウェーデン アスブルンド建築を堪能する旅 梅中美緒 96

エジプト・ギリシャを訪ねて 丹羽礼 98

ドイツの旅 水と自然と人々から 上原碧 100

フランス&スイス 期待と不安に揺られながら 猪野俊幸 102

NICHE GALLERY

小さな町並と住まいづくり 濱田昭夫 104

金明小学校 石川雅博 108

蒲田教会 久野和作 112

2006年度 運営委員会名簿

116

2006年度 同窓会/年会費・寄付金

117

学科だより

① 第1部 建築学科の近況 大橋一正 118

② 建築都市デザイン学科の現状 倉田直道 119

③ 第2部 建築学科主任のことば 宮澤健二 120

④ 大学院建築専攻の近況 安原治機 121

⑤ 2006年度大学入試について 久田嘉章 122

2005年度 卒業設計・卒業研究題目名簿

123

2006年度 各研究室の在籍者名簿

126

表紙デザインのコンセプト・編集後記

136

NICHE 2007 Vol.30の発刊に寄せて



耐震構造偽装問題後、我々建築士の誇りは何処にいったのか。取り巻く環境は、大きく变ろうとしています。

そのひとつは、先の第164回通常国会において建築基準法など的一部改正案が可決・成立し6月21日に交付され、1年以内に施行することとされている。新たに導入される構造計算適合判定は、特定建築物((例)木造など4階建て以上、RC造20M以上等)を対象とした構造計算を、新たに設置される各都道府県知事指定の構造計算適合判定機関が、2重チェック(ピアチェック)する制度の導入です。国家資格である1級建築士の信頼は、責任は、と考えると信用されない仕組みになるのではないか、疑問と不安を抱きます。

さて、母校は少子社会をむかえ、多くの大学で大学受験生が激減していることを、ご承知だと思います。理科離れを含めて、本学も同様に直面しているところです。学園の歴史や卒業生の活躍、日本の中心「新宿」という立地条件を考えて、学校関係者や校友会OB・OGが、真剣に前向きに取組めば、よりよい結果につながると期待しています。我々卒業生の一人一人が、何か協力・支援できることはないと、校友会でも取組んでいるところです。

幸運にもその機会を、得る事ができました。私の出身高校である鹿児島県立鹿屋高等学校で11月2日、「三星塾」が開催され、全国各地で活躍している卒業生たちが将来の進路を指南する「先輩授業」等が行われました。会社経営者や裁判官、大学教授、医師など24人が講師を務め、各学年8クラス(計24クラス)一齊に授業が行われました。私も卒業生の一人として招かれ、2年8組(理数クラス 男子30名・女子10名)を受け持ち、「安全な住宅・建築に進学したら(何ができるか)」の講義タイトルで100分授業を行いました。前半は、兵庫県南部沖地震や新潟県中越地震の被害状

況を写真で、「安全な住宅」を得られる方法として品質確保促進法(住宅性能表示制度)の性能基準を交えて話をいたしました。後半は、不動産に関する資格制度(測量士、土地家屋調査士、司法書士、不動産鑑定士、1級建築士、適合判定資格者、住宅性能評価員、宅地建物取引主任者など)の難易度や取得したら何ができるかについて、また「建築を卒業後の世界」については、NICHE28号・29号を教科書に利用しました。NICHEのページを捲りながら、作品紹介・業界での活躍状況を話しましたところ、生徒は興味津々(ワイワイ ガヤガヤの状態)、同窓会誌NICHEが威力を発揮。大場編集長と同窓会の皆さんに感謝・感謝で、建築志望生徒が3名いるとのことで、工学院を選択してくれないかなあ、生徒達の感想文が不安だが大変充実した時間でした。vol 31号で再度、紹介したいです。

■校友会全国大会

2005年10月21日(金)に(社)工学院大学校友会 第15回全国大会青森大会が青森県弘前市の式典会場(弘前文化センター)、祝賀会場(ホテルニューキャッスル)で開催されました。同窓会からも多数参加し、総勢300名を超える盛大な集まりでした。

■建築系学科同窓会総会

2006年5月28日(日)新宿キャンパス 第1114号室で開催致しました。第40期事業結果及び収支決算、第41期事業計画及び予算などの議案を承認後、校友会総会に参加しました。

■学会賞を受賞して 吉田教授

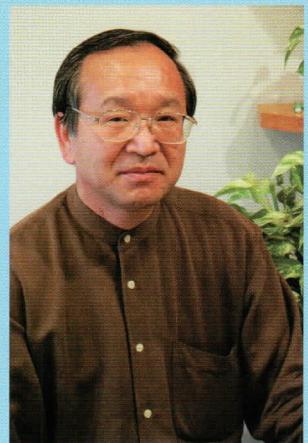
日本建築士上学会学会賞(論文賞)に受賞され、2006年7月29日(土)「AGORA」(エステック情報ビル4階)にて盛大に祝賀会が開催されました。



工学院大学建築系学科同窓会 会長

田辺 幸裕

昭和44年 大学1部建築学科卒業
鹿児島県立 鹿屋高等学校 出身



受賞論文名は「循環型社会のための建築ストックの活用と資源循環に関する研究」です。

■「大学の先生と楽しむ理科教室」が八王子キャンパス、付属中・高キャンパス内で2006年8月19日・20日開催されました。

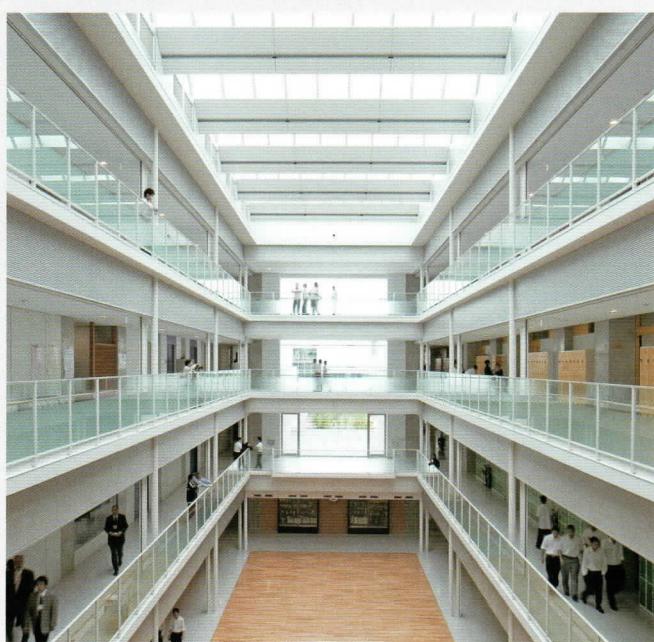
13回目を向かえた理科教室は、八王子市や周辺の11市教育委員会後援による小・中学生対象教室で、約9000人の子供たちが参加いたしました。わかり易い科学の原理、不思議な化学現象、面白い実験、楽しい科学遊びなどを紹介し、子供たちに科学技術に対する理解と夢をあたえることを伝えるとともに、参加する学生のコミュニケーション力やエンジニアとしての自己啓発、育成することを目的とした教室です。

■交流事業

2006年12月2日(土)に本学建築系学科同窓会主催の「交流忘年会2006」を開催しました。

交流忘年会は卒業生と各研究室の現役学生(同窓会への協力をお願いする学生幹事)とのより一層の親睦を深め、皆が気軽に参加でき、しかも楽しい思い出となるよう企画を位置づけました。

また、当日は学生が興味を持っている様々な話「実社会での建築業界の話」、「OB各自が現在取り組んでいる仕事・プロジェクト等の具体的な話」、「就職活動の話」等について、ご出席いただいた同窓生の中から数名の



方に、スピーチをお願いしました。

■工学院大学建築系学科「現役学生&同窓会会員対象」資格支援!

皆様既にご承知おきのとおり、最難関資格である1級建築士の合格者数が一昨年初めて発表されました。工学院大学は、全国出身「大学別ランクイン」で2004年度第5位、2005年度は第6位と、良い成績をおさめています。これも、母校の伝統ある建築教育と難関資格にチャレンジしてきた同窓生皆様の努力の賜物と言えましょう。

こうした実績をさらに発展させるべく、建築系同窓会では4年前よりOBや現役学生へ、様々なサービス事業を検討し実行しております。特に1級・2級建築士・宅地建物取引主任者の「資格支援Web講座」を特別価格(別途ご案内参照)にて、同窓会会員の皆様へ格安に提供させて頂けることが実現致しました。

■求職・転職希望の同窓生に光明!

校友会が主体になり求職・転職を希望される同窓生の方々に新しいサポートが開始されます。社会的な背景、卒業生の声を考慮して、校友会が卒業生をサポートするのは、社会的な急務になっています。詳しくはTopics欄7ページの「求職・転職をサポートします」及び135ページを是非ご覧下さい。

■スチューデントセンター学生参加コンペの紹介

八王子校舎の中心施設となるスチューデントセンターが、2007年11月開設に向けて工事が進められています。本施設の完成に学生が参加できる機会を作りたいと、設計者の澤岡教授と同窓会とで企画をたてております。詳細は5月に発表いたします。

■年会費の納入お礼

建築構造偽装問題は、建築界のみならず社会全体に大きな波紋を広げ、建築系学科にとって厳しい2006年度入試でした。しかも18才人口の減少は、受験生確保に難しい環境にあります。

我々建築の「同窓会活動」は、卒業生のみならず在校生への各種支援、及び本学を受験し合格者を出した全国1500高校(昨年実績)にも「NICHE」を配布し、大きな母校躍進のイメージアップに貢献しています。こうした活動を発展・持続させるには、たゆまぬ努力と皆様のご協力が是非とも必要です。この意義をご理解いただき、会費を納入いただきました卒業生の皆様ありがとうございました。この誌面をお借りして厚くお礼申し上げます。

「校友会2008全国大会は 沖縄で開催 めんそーれ沖縄へ」

校友会沖縄県支部は1965年8月発足、今年8月で満42歳を迎えます。我が会員は総数119名で県内の建築業界、電力業界で活躍されている方が多く、沖縄県の都市づくり街づくりに貢献しています。

沖縄県支部発足当時は祖国復帰されておらず米国民政府の統治下で、その頃、沖縄から東京を見ると精神的な感覚としては遠い遠い国に感じられました。

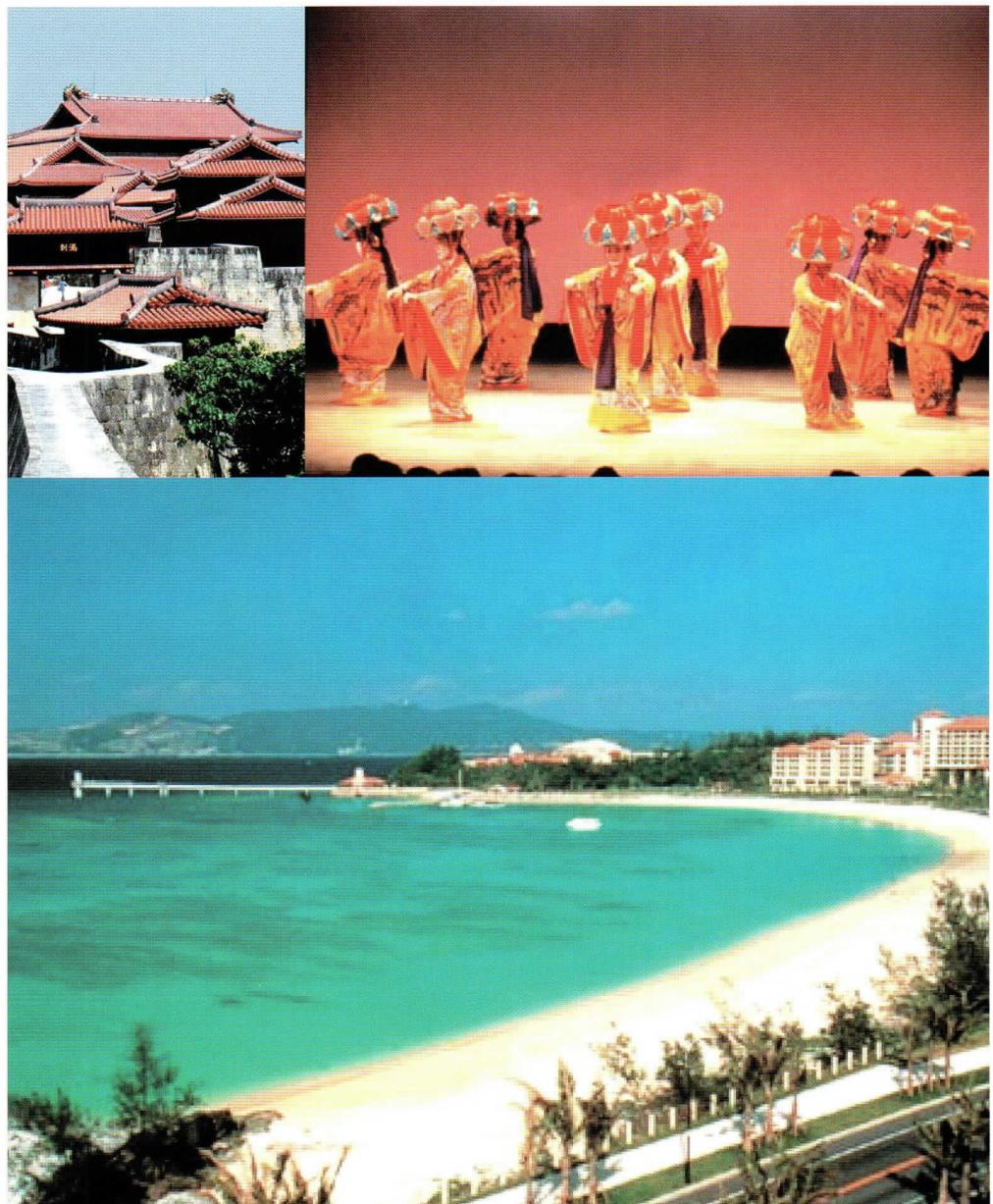
そんな中沖縄から東京へ行き、大学で学び、故郷へ帰って来るという事は大変な事でした、帰って来た我々は、同じ大学出身の仲間が集い沖縄校友会を立ち上げ、人脈を広め、情報を交換し合い、沖縄の発展に貢献しようと燃えていました。

あれから40年、地道に会員を増やしながら活動を続けて参りました。

沖縄は青い海、青い空に象徴される南国の島で琉球王朝によって育まれた独特的の芸能文化があり、世界遺産に登録された数々の史跡や建築等があります。

第16回全国大会開催を平成20年10月11日(土)に決定し準備を進めております、翌12日は那覇祭りがあり、芸能パレードや那覇で恒例の大綱挽きが予定されています。この大綱はギネスブックに掲載されており、直径約2メートル、全長200メートル、重さ43トンもある大綱で地元の方や観光客、外人等が東西に分かれて楽しく綱を挽き競争をします。迫力満点の競技です。

沖縄での2008年全国大会に向け、私共沖縄会員は皆様を暖かく迎えられるよう、着々と準備を進めております。「めんそーれ 沖縄へ」



沖縄県支部長
芳田眞喜人

1970年3月 工学院大学電気工学科卒
中森研究室
沖縄県立沖縄工業高校卒
沖縄県中頭郡西原町翁長920-57
098-946-7062 携帯 070-5818-5570
Eメール bmdqw501@yb.ne.jp

卒業生(校友会会員)の求職・転職をサポートします!

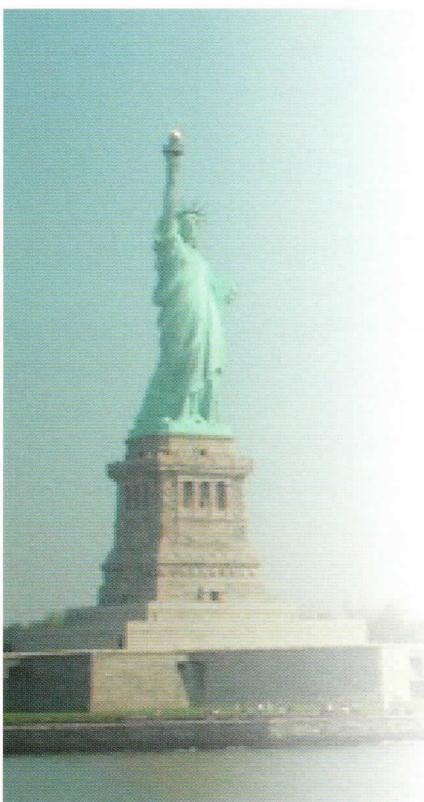
1. 求職・転職希望の卒業生(校友会会員)に朗報!

(1) 社会的な背景

- バブル経済の後遺症から抜け出し、ようやく建設業界では活況を呈してきました。
- 企業縮小等で人材を整理した反動から、人材不足の企業も多く見られます。
- 即戦力になる技術者の獲得が、特に活発化しています。

(2) 卒業生の声

- 企業倒産のため職を失う技術者も、後をたちません。
- リタイアされた熟年層の方々の再就職希望も、増えています。
- 大学の研究室には、卒業生からの就職相談が急増しています。



(3) 卒業生へ、校友会がサポートします

- 建築系を中心とする技術者の紹介を、校友会のサポートとして開始します。
- 建築系業務に関する機械、電気、応化系などの方々もサポート致します。
- 卒業生の要求に応えることが、社会的急務になっています。

学校友会事務局へFax 03-3342-2035 して下さい。

①氏名、②性別、③年令、④自宅住所、⑤自宅電話、⑥自宅Fax、⑦メールアドレス、⑧勤務先名(任意記入)、⑨本人連絡電話、⑩保有資格(1級建築士、2級建築士、インテリアプランナー、建築設備士、技術士、宅地建物取引主任、その他)、⑪主なご経験職種(施工管理、意匠設計、構造、設備、土木、CAD、営業、リフォーム、インテリア、事務、その他)

(4) 専門企業がサポートします。

- 日建学院のグループ企業(株)ニッケン・キャリア・ステーション(登録企業3,500社)が、全国主要都市にある130校の日建学院ともタイアップし、求人などの窓口として、皆様を強力にサポートします。

(5) キャリア・カウンセリングを受けることが前提です

- 東京・横浜・大阪の(株)ニッケン・キャリア・ステーションで、キャリアカウンセラーによる面接可能な方を最優先致します。

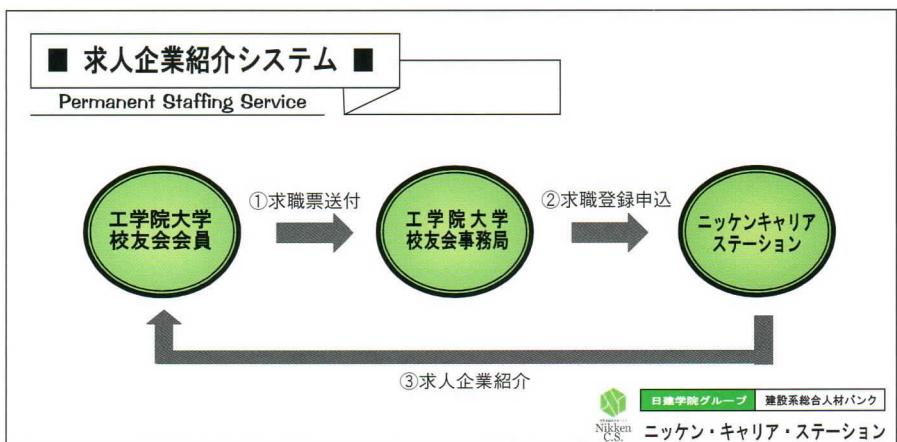
2. 求職・転職希望者の卒業生の方々は、まず登録をお願いします。

次の①～⑪を記入して校友会事務局へFaxするか、又は「求職者情報票」を校友会のH.Pからダウンロードし記入し、工学院大

3. 具体的な作業手順

- (1) 上記の求職者情報①～⑪をFaxで、校友会事務局宛に送付してください。
- (2) 事務局より情報票の転送を受けた職業紹介専門企業(株)ニッケン・キャリア・ステーションのカウンセラーが、求職登録とキャリアカウンセリング実施日程(東京、横浜、大阪)及びその後のステップについて連絡(Tel、Fax、メール等)致します。

<個人情報は守秘します。簡単な手続きです。>
(同窓会費納入の方を優先しますが、未納の方は就職決定後に2年分以上の会費振り込みを、お願い申し上げます。)



※(株)ニッケン・キャリア・ステーション(厚生労働大臣許可13-ユ-090149) 建築系資格取得教育を主な業務とする日建学院(全国130校)のグループ企業。建築系を中心に、人材紹介などを実施する建築業界に特化した会社。現在社員数140名(社員30名、派遣社員110名)顧客企業3,500社、登録人材6,000名。

詳しくは、下記のH.Pを是非ご覧下さい。

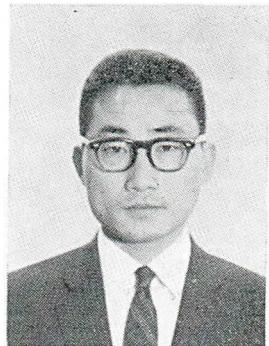
163-8677東京都新宿区西新宿1-24-2 工学院大学校友会

電話 03-3342-2064 Fax 03-3342-2035

<http://www.kogakuin.or.jp>

建築学科同窓会発足一周年を迎えて

小 高 鎮 夫 (建築34年卒)



この会は工学院大学建築学科(建築・設備), 建築学専攻科及大学院建築学専攻の卒業生を正会員に, 又在校生を準会員とする組織で4年制大学以後の卒業生を対象にして構成されております。しかし今後はそれ以前の先輩工手学校出身者及, 学校の教職員も加入する建築学科の全体的組織へと拡充して行く事も考へられるわけです。

大学の建築学科卒業生は本年迄で第10回生となり, 約2,500名の同窓生が実社会にて活躍しております, 在校生2,000名を加えると実に約4,500名の方々が現在, 会員となっているのです。約2年前, 内外の強い要望の中で, 同窓会設立の準備委員会が発足し, 杉野準備委員長を中心約1年間の努力の結果, 42年1月22日に第1回総会を開催し, 会は正式に発足致しました。会則も卒業生が全員会員となる事。卒業年度別に運営委員が選出される事。事業の項を具体的に列記した事等, 会員のための同窓会となる様に作られました。

昨年11月には, 工学院大学学園同窓会が発足致しました。これは校友会(2年間態度保留), 専修学校同窓会, 高等学校同窓会, 大学4学科(機械, 化学, 電気, 建築)同窓会の7同窓会の団体会員による組織で, それは各同窓会の意見交流の場であり, 共に工学院大学の発展に寄与すると云う事で, 互に結び合った連合体です。ですから各々の同窓会の活動の主体性は各同窓会にあるのは当然なことです。

学園同窓会にとって重要な問題は, 校友会との関係の事で昭和27年, 校友会結成以来, 支部活動を中心に工手学校及, 大学の卒業生の親睦機関として現在迄運営されて参りましたが, 卒業生の数が多くなるにつれて, 今迄の会の運営方法では, 会員の連絡さえ思うように出来ず更に会費未納の者は, 会員とみなされないと云うような会則では同窓生の把握すら思う様に出来なくなっています。実はこの点が一番重要な問題となって來たのです。私学は, 学校, 学生, 卒業生の三位一体により成立しているのですが, 卒業生にとって, 校友会は, 同窓生

全員の組織となる資格を備えていないのではないかと思います。だから, 大学卒業生が全員加入していない校友会は成立当初からすでに老化現象を示めしていたのです。工手学校卒業生を中心に作り上げて来た校友会自身当初の体質を脱皮出来ず, 今日に至ったのです。そこで当然の事の様に大学卒業生は卒業生全員の構成する同窓会を作り, 更に全学園的なもの各同窓会を会員とする, 学園同窓会が組織されたのです。そして校友会は大学以前の工手学校卒業生中心の同窓会として組織を改変し, 学園同窓会の団体会員となる事になったのです。しかし実際は2年間の態度保留の希望があり, その決定は校友会の自主性にまかせられております。校友会自身, 会は社団法人である事, 活動は支部中心である事の二点の処理に時間と充分な検討を必要とするでしょうが, 全体的視野に立って解決される様願ってやみません。私達若者にとっては校友会が主導的立場で, この様な学園全体の組織化をして頂けたら最も自然であったろうと思うのですが, その機会は既になくなってしまったのが残念に思われます。

去年は工手学校が明治20年に時の帝国大学総長渡辺浜基氏により創立されて以来, 80年を迎えての80周年記念式典が挙行されました。明治4年, 工部大学(東京大学)14年, 東工職工学校(東京工業大学)に次いで, 工学院大学は, 第一線の技術者養成のために, 設置され, 建築科は造家学科と称しました(早田大学は明治41年に設立)。そして一時期, 中堅技術者は工手学校出身者で占められる程に隆盛を示めました。昭和24年, 新学制の下で, 先輩の御努力によって大学の設置が許可され, 昭和30年, 4年制の建築学科が新設されたのです。しかしそれ迄の67年の歴史があった事は私達にとって, 他校に誇る財産を受け継いだ事になるのです。私達はこの歴史を大切にしなければなりません。自ずからはこの80年の歴史に身を投じ, その渦中に入り, 対岸を求める, 河底を凝視すべきで, いたずらに, 水面に身をゆだねる怠惰

に反省をすべきであろうと思います。

建築学科同窓会は、会則の前文にある様に「健全な人間関係の確立と、意志伝達の機関」として結成されたのであります。そして会員個々の利益と、母校の発展につくと云う、同窓会本来の姿に向って、着実に歩を進めて行きたいと思っています。幸い、毎月1回の定期運営委員会は20名前後の出席を得、順調に会を運営しております。

ます。運営委員間の繋がりはそのまま会員同志の繋に拡がるものだと思います。昨年度は、名簿発刊を致しましたが本年度は雑誌発刊、そして事業業務を通じての組織充実を計りたいと思います。まだ会は創生期でありますから、会員諸氏の協力によってより正しい発展を期したいと思います。

創刊号発刊にあたり

工学院大学建築学科同窓会の設立後満一年を迎えるに当たり、その機関誌建築学科同窓会誌を創刊出来ます事は、昨年7月の名簿発行と共に意義ある事だと思います。

一つの組織はその体質とその変化を具象化するのに、機関誌を発行しております。別な云い方をすれば、機関誌の中にこそその組織の実体を発見出来るとも云えましょう。それだからこそ、機関誌の発行はその組織にとって自由に、かつ慎重なものでなければなりません。若輩であろうとも一個の人格と個性をそなえたものとして具象化して行くべきものだと思います。

私達建築学科同窓生は先輩、後輩の別なく又諸先生を含めて広く結びあって社会に生きて行かなければなりません。

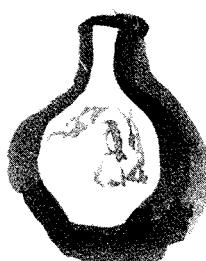
社会に出て思う事は、出身学校が同じというだけで信頼感が流れるものなのです。それを一つにまとめたものが同窓会なのです。だから同窓会誌は同窓生の技術の交流と共に精神の交流の場でもあるわけです。人間の一人の歴史の中で、30で思う事、40で思う事、50で思う事はそれぞれに必然性があるものだと思います。だからその時

点で、自分を記録する事は大切な事なのです。自分を一つの形に現すのは、至難な事です、しかし、その努力をした時に、又、一つの前進が得られるに違いないのです。

同窓会誌は、今後、会員のエネルギーで満される事でしょう。

創刊号はやむを得ず限られた会員の投稿によりましたが次号からは、皆様の原稿で埋められる様願ってやみません。

(建築学科同窓会会长)



編集後記

途中色々な問題にぶつかった。それは単に建築というジャンルだけで前進しないからである。しかし限られた時間内での活動、安く上げるための写真やカットづくり……今夜も時計は11時を回っている。所詮未熟ではあるがこの編集もやっと終りに近づいてきた我々のこの機関紙が同窓会発展のためいざれかの契機となることを期待します。

今回経験のない私が、編集に参加して感じた事は、自分の仕事以外にサイドワークとしてやるには大変なことなので、次回より、会員の中から多数の参加を願いたい。

建物の設計は敷地全体と、与えられた条件を頭において設計しなければいけない事を充分知っている者と、現場で、段取八分と鍛えられて来ている連中とが集まって作ったはずなんですが、ウォーミングアップせずに水に飛び込んだのですから、足の筋肉が硬くなれば良いと心配しております。ただ、今夜も仕事がたまって

残業だから出られないという同志のいる事も附記させて下さい。

—O生—

どうにかこうにか我々の会話が誕生したことに意義があるはずだ。これからこの児がどう育って行くかは、我々会員がどう育って行くかにかかっている。世界を動かす「大もの」などにならなくとも、意欲的で革新的な児に育てたい。

—K生—

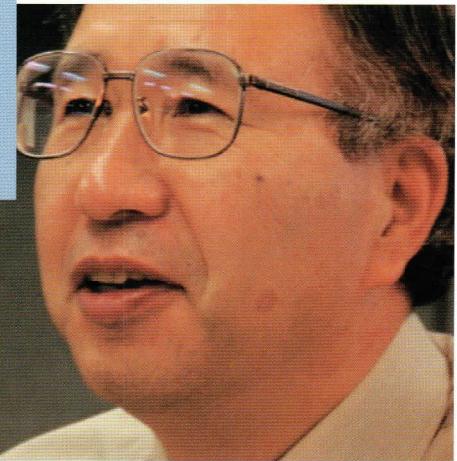
山下先生の所へ、割付けの件で伺う。「なんだ、この原稿の事か、あまり古い話で忘れちゃったよ。」会長現る。「小高、今頃何だい。」「色々都合がありまして」「お前が悪いんだぞ。」「どうも……。」小生協にいて腋の下から冷汗……。小高会長の「ベースメーカーは誰かがならなければならぬんだ」とことばによって、この会報は出来たようなもの。この欄を借り、御礼申し上げます。「謝謝……。」

—M生—

編集兼発行人 宮崎 勝 弘
編集発行 工学院大学建築学科同窓会
印刷所 株式会社 富士工芸



写真左より、司会/初田亨さん、大場光博さん、久野和作さん、南迫哲也さん、宮崎勝弘さん



初田亨さん

日時／平成18年9月15日(金)午後1:30～3:00
場所／工学院大学新宿キャンパス28階 校友会談話室
出席者
南迫哲也(昭33卒、工学院大学名誉教授)
宮崎勝弘(昭35卒、株宮崎建築設計事務所代表)
久野和作(昭46院修了、山下研・パリインターナショナル(株)主宰)
司会／初田亨(昭46院修了、武藤研、工学院大学教授)
記録／大場光博(昭46院修了、荻原研、株都市建築デザイン研究所)

はじめに

工学院大学建築系学科同窓会の会報として生まれた「NICHE」は、その時々の編集者の熱い気持を受け継いで、今日迄続いてきました。この度、NICHE 2007 Vol.30を記念して、創刊時代に編集や同窓会に関わってこられた主な方々に集まって戴き、発刊当時の苦労話を伺いました。「NICHE」は、卒業生の担当者が変わっても、バトンリレーのようにこれからも引き継がれていくと思います。

表紙はその時代を物語っています。創刊号から30号迄の表紙デザインを整理してみました。

「NICHE」の由来

司会/初田亨

同窓会誌の創刊号は、昭和43(1968)年です。今回で30号の記念号になります。まず会報の名前が、何故「NICHE」(ニッチ)という名前になったのですか?

久野和作

5号(1973)の編集を担当しましたが、それ迄は「同窓会誌」という「名前」とはいえない名前しかなく、編集長の権限で命名をさせて頂くことにしました。何か相応しい建築用語がないか、色々さかして「NICHE」の単語を発見し、それに相当する漢字を辞書で調べたら「龕(がん)」という意味に近いことを知りました。表紙の図柄として「龕」とNICHEを組み合わせればいい感じになると、勝手ながら名前を決めさせていただいたのが経緯と記憶しています。ヨーロッパの礎石造の建物の壁にマリア像などを飾る窟んだ場所を「NICHE」と呼びます。当時、雑誌「都市住宅」を磯崎新が編集し、表紙デザインに建築用語を出して解説していました。その手法を拝借しました。5号の表紙デザインは、古代ローマの建築図版を活用し紙質も厚手でつや消しのものにしました。

南迫哲也

「NICHE」の言葉には、色々な時代の文化の象徴を刻み込むという意味もあります。昔は神とか英雄を飾っていました。

創刊号発行の頃

宮崎勝弘(創刊号編集長)

昭和35年卒業、当時は研究室がない時代でした。小高鎮夫さん(昭和34年卒)が初代会長。同窓会活動も年一回集まるだけなので上下左右の繋がりをよくしようと同窓会誌を考えました。愛川高朗さんも創刊号から編集を担当してました。当時既に波多江さんが「ニッチ」、天野さんが「アルコープ」という言葉を授業で良く使つてました。創刊号に「ニッチ」とも思いましたが、あえて同窓会誌としました。天野さんにかぶっていたので、創刊号表紙デザインは無限に続く渦巻き、色はライトレッドにしました。同窓会の活動に同窓生の眼をどうやって向けるかが主な関心ごとで、創刊号はお祝の言葉を下さいと、小高さんが各先生を回られました。中々原稿が集まりませんでしたが、山下先生にルドルフのことを書いて頂いたのは大変ありがたいことでした。編集スタッフは寄せ集めで分担もはっきりせず皆の盛り上がりで編集長をさせられ割り付け、編集後記などを分担しました。創刊号から3号位迄関わりました。金田昭治さんと小高さんが、編集活動を一生懸命やってくれ、園田君も3号の編集に加わりました。2号以降では、同窓生の便りとか、建築の記事をかける人に原稿を頼みました。

活動費用について

初田

発行する際に印刷費用もかかったと思うますが、資金ぐりはどうされたのですか。

南迫

同窓会費は入学時に払っていました。何に使うか何もない、お金が余っていたのです。せめて同窓会誌を出そうじゃないかというのが発端です。校友会は任意加盟なのでお金を払わなくてもいい。卒業したら校友会員になりなさいっていう勧めで、入る人もいましたが、同窓会は全員が強制加盟です。お金は自動的に入ってくる。それを校友会が使おうとしたので、ストップをかけました。同窓会の費用は我々同窓会のもので、同窓会が独立したのです。非常に大切な点です。どういう目的で同窓会活動をやるのか、最初の頃は影も形もなかった時で活動内容が良く見えなかった。卒業したら色々な場所で仕事をしていま

工学院大学建築系学科 同窓会誌 表紙デザイン 創刊号(1968)~30号(2007)



同窓会誌 (NICHE) 歴代編集関係者
(編集後記等の記録より抜粋)

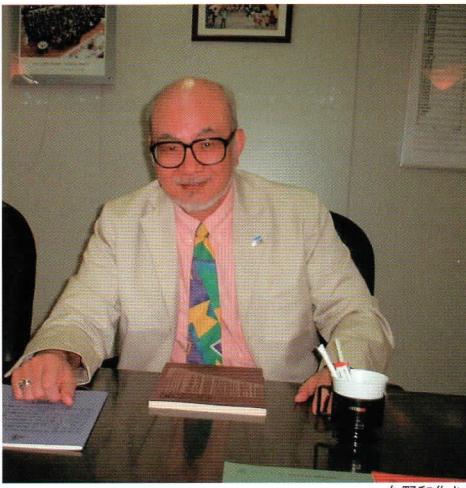
編集・発行/工学院大学建築(系) 学科同窓会

- 1号. (昭43/1968) 会長 小高鎮夫、編集 宮崎勝弘
- 2号. (昭43/68) 会長 小高鎮夫、編集 金田昭治、戸田庸二
- 3号. (昭46/71) 会長 金田昭治、編集 園田邦彦、古角充宏
- 4号. (昭47/72) 会長 金田昭治、編集 園田邦彦、古角充宏
- 5号. (昭48/73) 会長 山根茂、編集長 久野和作、編集ブレーン、岡本宏平、久保昌也、久保史子、
- 6号. (昭48/73) 会長 山根茂、編集 不明
- 7号. (昭56/81) 会長 小高鎮夫、編集 愛川高朗、金尾武彦、宮崎勝弘
- 8号. (昭57/82) 会長 小高鎮夫、編集 愛川高朗、金尾武彦、宮崎勝弘
- 9号. (昭60/85) 会長 金尾武彦、編集 初田亨、岩田俊二
- 10号. (昭61/86) 会長 南迫哲也、編集 初田亨、岩田俊二
- 11号. (昭61/86) 会長 南迫哲也、編集 初田亨、岩田俊二
- 12号. (昭63/88) 会長 南迫哲也、編集 初田亨、岩田俊二
- 13号. (昭63/88) 会長 南迫哲也、編集 初田亨、岩田俊二
- 14号. (平2/90) 会長 南迫哲也、編集 初田亨、岩田俊二
- 15号. (平2/91) 会長 南迫哲也、編集 初田亨、岩田俊二
- 16号. (平4/92) 会長 南迫哲也、編集 初田亨、岩田俊二
- 17号. (平5/93) 会長 高木雅行、編集 岩田俊二、初田亨
- 18号. (平6/94) 会長 高木雅行、編集 高木雅行、谷口宗彦、静賀正樹

- 19号. (平6/95) 会長 高木雅行、編集 高木雅行、谷口宗彦、静賀正樹
- 20号. (平7/95) 会長 高木雅行、編集 高木雅行、谷口宗彦、静賀正樹、協力・レイアウト SCRIPTORIUM、印刷 弘和印刷株式会社
- 21号. (平8/96) 会長 高木雅行、編集 高木雅行、初田亨、谷口宗彦、静賀正樹、協力・レイアウト SCRIPTORIUM、印刷 弘和印刷株式会社
- 22号. (平9/98) 会長 高木雅行、編集 高木雅行、初田亨、谷口宗彦、静賀正樹、伊藤真人、大場光博、レイアウト・編集補助 SCRIPTORIUM、印刷 弘和印刷株式会社
- 23号. (平11/99) 会長 高木雅行、編集委員 伊藤真人、大場光博、静賀正樹、高木雅行、初田亨、谷口宗彦、編集協力 斎藤陽久、表紙 イラスト 横原哲生、印刷 大日本印刷株式会社
- 24号. (平12/2000) 会長 高木雅行、編集委員 大場光博、高木雅行、初田亨、谷口宗彦、類洲環、編集協力 佐藤弘規、表紙デザイン 佐藤弘規、印刷 大日本印刷株式会社
- 25号. (平13/2001) 会長 田野邊幸裕、編集委員 大場光博、高木雅行、田野邊幸裕、谷口宗彦、初田亨、類洲環、編集協力 横田彩子、表紙デザイン 鰐坂誠之、印刷 大日本印刷株式会社
- 26号. (平14/02) 会長 田野邊幸裕、編集委員 大場光博、田野邊幸裕、谷口宗彦、初田亨、類洲環、編集協力 鰐坂誠之、表紙デザイン 鰐坂誠之、印刷 大日本印刷株式会社
- 27号. (平15/03) 会長 田野邊幸裕、編集委員 田野邊幸裕、谷口宗彦、大場光博、伊藤真人、初田亨、高木雅行、編集協力 鷹野陽洋、表紙デザイン 内健健、レイアウト 早乙女デザイン事務所、印刷 大日本印刷株式会社
- 28号. (平16/04) 会長 田野邊幸裕、編集長 大場光博、編集委員、谷口宗彦、初田亨、田野邊幸裕、伊藤真人、高木雅行、三好薰、鰐坂誠之、編集協力 小野あゆみ、表紙デザイン 藤原智恵、レイアウト 青空広告事務所、印刷 株式会社ブロネット
- 29号. (平18/06) 会長 田野邊幸裕、編集長 大場光博、編集委員、谷口宗彦、初田亨、田野邊幸裕、伊藤真人、高木雅行、三好薰、鰐坂誠之、編集協力 嶽城彰人、小林茉莉、表紙デザイン 嶽城彰人、レイアウト 青空広告事務所、印刷 株式会社ブロネット



宮崎勝弘さん



久野和作さん

1956 後列左から 小川弘、天野大郎先生 前列左端 小高鎮夫
右から1人目 宮崎勝弘、右から3人目 南迫哲也

1959 左より山下司、平岡正夫、波多江健郎先生

す。学内ばかりじゃなく卒業生の中にも入っていくコミュニケーションは大変大切な同窓会の活動と考えて同窓会誌がスタートしました。

その後の編集活動

久野(山下司研)

1971年に大学院を修了して、ある設計事務所に勤め始めていたのですが、5号の編集を進んで担当させていただきました。当時在学中は新宿駅周辺に人が集まり、就職はしたものまだ決起盛んな学生運動の余韻が残っている時代で、勤め先でもそのような発言をしたり、自分の力で社会が変わるのはないかと幻想を抱かせてくれるような雰囲気がありました。その後、段々と社会も静かになっていった訳ですが、当時「デザインサーベイ」というものが大学の研究室でも、建築雑誌でも流行っていましたので、担当号の前号の4号1972年に「天狗祭」に参加した報告記事をデザインサーベイ風にまとめ、掲載していただきました。それがきっかけで5号へつながりました。当時は、建築よりも建築の原点みたいなものを書いていこうという動きがありました。山下研究室では、山下司先生が「ケビン・リンチの都市のイメージ」をベースにして、新宿の街のサーベイをしていました。四年生の論文、都市〈月島〉のサーベイも5号で発表しました。編集の骨子は、卒業生の作品、サーベイ、社会的な背景(団地の中で住むのは都市の中でどういう意味があるのか等)。当時の時代を背景とした適確な表現を誌面で構成できないかと考えました。それらのテーマに合致した写真を出版物で見つけた時、その週刊誌や写真家に電話し、版権を使わせて下さいと頼みました。著作権の問題があり苦労しましたが皆さん協力的で、著作権料も甘えさせて頂いた思い出があります。エール大学とかハーバード大学では建築学科の名で市販できる程の立派な本がでているのを見ていきましたので、我々の会報も国内の他校の同窓会誌にはないものになればと希望しました。同窓会誌NICHEもここ数号は希望が現実になり内容の向上はめざましく、充実してきて、私も読むのを楽しみにしています。大学と関係のない、意外な場所でNICHEがおいてあるのを見て誇らしく思っています。

初田

安原さんも編集を担当されました。6号(1973)の後が、7号(1981)で宮崎さんが担当されています。一時期、発行が途絶えていました。

宮崎

7号(1981)に、小高さんが松本与作さんや、下元連(むらじ)さんの

取材をするからといわれて呼び出され、その都度記事をまとめました。私は事務所を建て直すことになり編集から少しづつ手を引きましたが、当時は毎週のように打ち合わせしていました。

新宿新校舎建設時代

南迫

1980年代には研究室がありました。新しく新宿キャンパスが計画された時です。新しいビルの中に校友会の部屋を確保するのが大変でした。死にものぐるいで随分議論しました。

宮崎

伊藤ていじ先生が、新校舎工事時に大学全部を八王子に移して、また新宿に戻るという考えをしていました。しかし大学は法規上工場と同じで、一度都心から「外に出たら戻れません」と伝えました。文部省に問い合わせしたら、大変だとなりました。

南迫

工場等規制法の「等」に大学が含まれていました。この法律は一昨年なくなりましたが、中央大学とかは八王子に出ていったままになりました。

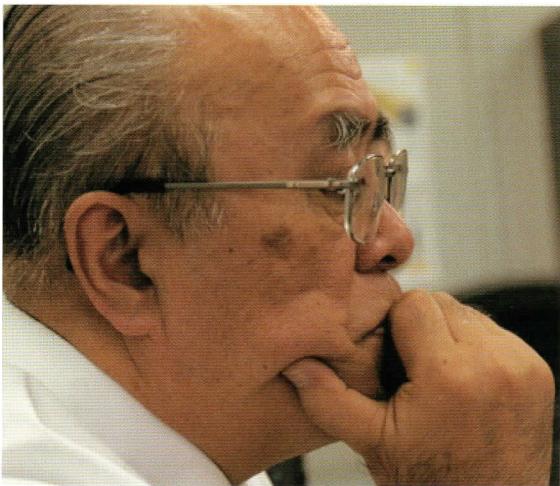
その後の編集活動

初田

1985年から私が岩田俊二さんと一緒に9年間編集し、93年迄担当しました。それまでは、時々発行されない年がありました。岩田さんがこまめに動いてくれて毎年発行できるようになりました。一番最初に考えたのは工学院は歴史があるのに、同窓会誌に歴史が載っていない。まず退職された先生方を大切にして昔の話し学校の話を取材しました。1986年から同窓生にも立派な人がいるので取材を始め、7名の同窓生から話を聞いています。安芸の宮島、巣島神社で宮大工の岡田貞治郎さん[大正7(1918年)工手学校卒]に、直接広島へ行き取材しました。三菱地所副社長をされた鈴木昇太郎さん[大正10(1921年)工手学校建築科卒]。東京都水道局の伊藤真治さん[大正13(1924年)工手学校土木科卒]。先輩が色々な職場で随分頑張つていて、先輩の活動を誇りに思っています。

大場

私は1998年から編集を担当始めましたが、それ迄は新建築の静賀正樹さんが編集されて全体構成が随分あか抜けていました。谷



南迫哲也さん



大場光博さん

1959 左より 小川弘、石渡敦子、堀越三郎
樋口清先生

1959 左より 武藤章、天野太郎先生

口先生がキーマンで私と伊藤真人さんが加わり、それ迄のB5版をA4版の大判にしカラーページも大幅に増やして広告をとり易くしました。レイアウトデザイン担当も伊藤さんが引き継ぎました。パソコンが普及し編集内容も時代の流れとともに変化し、環境設定をミスすると印刷段階でトラブルも発生しました。イギリスのA.A.スクールを始め海外へ行く方が増加したり、海外渡航の支援が既に始まっていたので在校生の海外紀行文を掲載しました。今はE-Mailや研究室のBBSへも海外から卒業生の活躍情報が入ってきます。更に編集部で取材したり、各研究室の情報や、学生のコンペ受賞も増えましたので、Topics記事が大幅に増加しています。パソコンを皆が上手く使う時代になっています。

久野

私は留学の先駆けとしてUCLAで学びましたが、卒業後実務につき、1982年に初田先生から依頼されてアメリカから「ロサンゼルスからなつかしさをこめて」と題して最新作をホットニュースとして掲載していただきました。

初田

最近はニッチギャラリーとか、around the worldとか卒業生の海外情報にも視点が広がっていますね。また伊藤真人さんが「輝ける先輩たち」のシリーズで昔の先輩の記事をまとめています。大切なことです。

大場

同窓生の活躍はその大学の評価に直接に繋がります。ある同窓生は日本の先端で頑張っていたり、大学を卒業した仲間の話が、何時の間にか日本の動向にも重なっていたりして、色々な情報が入ってきています。それを知った仲間の同窓生が元気づけられるし、頑張った同窓生の事を、読んでいる皆が凄く詳しく知っています。何処何処研の誰々というだけで、本当にみんな先輩後輩の流れを瞬間でわかりあえます。同窓会のNICHEは、同窓生にとってみんな身近な話です。

久野

メディアには新聞やテレビ、本などがあり、地震が起ればすぐにテレビで構造家の宮澤健二教授の名と母校の名を見るすることができますが、しかし安心してより身近に見られるのは、NICHEが送られてきた時で、自分の同窓生はもちろん、僕が非常勤講師をやっていた頃の教え子が活躍して記事を掲載しているとか、狭い範囲でも非常に濃く知ることができます。NICHEはメディアの中でも非常に個人的ながら重要なデータソースだと言えます。

NICHEの最近の活動

宮崎

NICHEの活動は大変に喜ばしい。途中同窓会誌の発行が途絶えた時は消えたかと思ったくらいです。私達も最初の頃に、その年度の主な出来事を載せましたが、情報を集めるのが大変で長続きしませんでした。卒業生も増えたし、先生が海外に行かれる機会も増え、日本国内ばかりでなく海外の建築に目を向けるのは大変いいことです。ましてや若い人が研修を兼ねて渡航したとか、卒業して海外に就職したとか、実務の情報が入るのは嬉しいです。各界で受賞された人も増えてきました。それを若い人が見て刺戟になる、それがこれだけの厚さに成長したと思います。

久野

取材の幅が凄く広がって多角的でかつグローバルになっていますが、我々が編集をしていた頃は友人や先生に声をかけました。最近は卒業生が大手の設計事務所で中心的な活躍をする時代になってきたなど感じます。それから海外の学校を出てそのままどまって活躍している人、あるいは独立されて大学と関わりのない人、大学から巣立つて大学と縁が切れている人達が、NICHEの誌面に戻ってきて同窓生との繋がりを感じます。NICHEはその役目を果たしてくれていると思います。

南迫

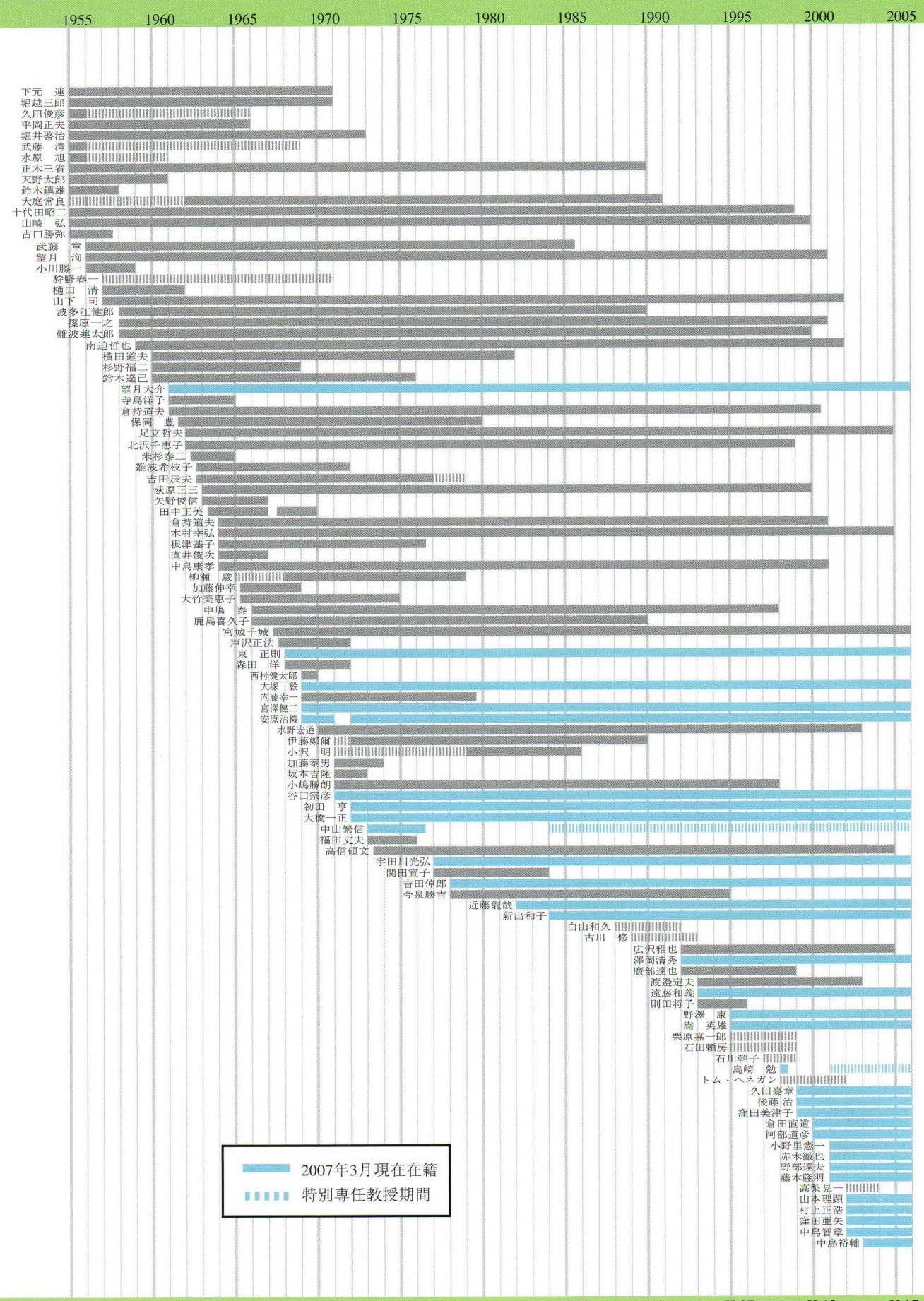
最初は無我夢中ではじまりましたが、途中からニッチという文化的内容が、一つ一つ意味が込められて工学院大学の建築学科同窓会がどういう意味があるのか、皆で考えていくそういう広場みたいな場になっていましたことを私は高く評価しています。そして、NICHEが今後も、工学院大学の人々の中でどういう意味となって発展していくのか、今以上に内容が高まるように強く望んでいます。非常に喜ばしい30号迄の流れだと思います。

初田

毎年発行することが重要です。途絶えることなく毎年発行して貰いたいと思います。本日は貴重なお話を戴きました、ありがとうございます。30号以降の発刊を大いに期待し応援して行きたいと思います。

以上

工学院大学建築系学科 専任教職員在籍一覧(1955~2006)



建築系学科同窓会総会開催

平成18年5月28日 午前10時30分～11時30分
工学院大学新宿校舎11階 1114号室

小雨の中を34名の同窓生が出席。笠原克議長、三好薰書記により議事進行。田野邊

幸裕同窓会会长の挨拶に引き続き議題が審議されました。



谷口宗彦同窓会副会長の説明

議案1、第40期(2005年度)事業結果の報告。運営役員、NICHEの発刊、H.P.の充実、生きた教材としての見学会・研修会、資格取得支援事業などについて担当者から説明がありました。引き続き議案2、第41期(2006年度)事業計画(案)の報告。前期と同様の活動内容の説明が

あり、中でも交流・支援事業は更に多様化し各担当者から実現に向けての具体的な説明がありました。最後に第41期(2006年度)一般会計予算(案)、収入778万円、支出749万円が全員の拍手で承認されました。

(取材/NICHE編集部)



田野邊幸裕同窓会会长の挨拶

『輝かしき先輩たち』が、フジTVに!



同窓生の皆様は、本誌連載の『輝かしき先輩たち』をお読みいただいておられるだろうか。Vol.28(2004年)の輝かしき先輩は、

小林正紹であった。東京・明治神宮外苑のシンボル「絵画館」の設計者である。その「絵画館」で、隠し部屋が発見され、2300点もの新たな貴重な資料が発見された。竣工してから80年も経っている。マスコミが好みそうなミステリーではありませんか。最初に反応したのが、フジTVであった。設計者は誰だ? 小林正紹? 工学院大学建築系学科の卒業生? ジャア、工学院大学に聴け??といふことで谷口研究室から『輝かしき先輩たち』を担当している類洲環に取材依頼がきた。

というわけで、さる2006年11月16日(木)、18:00、フジTVの「スーパーNEWS」で、類洲環の声が流れ、工学院大学建築系学科同窓会誌のテロップが、日本全国に流れた。

(取材/NICHE編集部)



「建築系学科同窓会主催 交流忘年会2006」開催

平成18年12月2日(土)午後6時半～8時半、工学院大学新宿校舎28階 第一会議室、幹事、三好薰・高城文一・高橋昭彦・鰯坂誠之・学生幹事北村岳彦 他多数



会場風景

役学生(同窓会へ協力の学生幹事)との一層の親睦を深める為に企画され約60名が参加。先ず懇親会に続き各種の味見競技やbingoに全員が参加しました。味見競技では、田野邊会長獲得の一等賞を在校生に譲渡し、折りたたみ自転車は沢

役にたった事など体験談が披露されお開きになりました。

(取材/NICHE編集部)



一等賞の山本美保さんと、田野邊会長

交流忘年会はOB幹事と学生達との手作りパーティ形式で、卒業生と各研究室の現

岡研4年生山本美保さんが獲得。最後に先輩方より「建築へ目覚めた頃」「在学中の

八王子キャンパスに新校舎 『工房・化学実験棟』竣工

株式会社
昂設計
顧問
平井真夫



私にとって八王子キャンパスは40年前、入学と同時にに入った学生寮の生活と青春の思い出の地である。設計者として初めてキャンパスに立った時、階段状に並んだ学生寮を思い浮かべながら大きく育った銀杏並木に時の流れを感じた。

ファーストインスピレーションはキャンパスの顔である『銀杏並木の軸線』に『時の力』を借り、各々異なる機能を縦に関連付けることであった。

Path: もともとキャンパスは段差克服をテーマにしており、利用者が階段を登りながら視線の変化を体感し目的階に到達出来る工夫をした。銀杏並木から正面の階段空間を抜け、総合工学研究棟に通じる新しいパスを創り出した。

Landmark: 銀杏並木の正面に建築が位置することから計画建築の背景を意識できるように『建築に穴を開けよう』とひらめいた。

並木の先にインパクトのある凱旋門的ランドマークを設け、軸線の強化とした。斜面をぶらぶら登ると階段状小広場にたどり着き、学生、教職員の交流の場となるサーキュレーションのランドマークを提案した。

見える建築: 建築を通して全ての工学系学生に語りかけたかった。デザイン過多になることを避け、デザインシステムが感じられる建築やスケルトン建築、隙間建築のディテールから仕組みが感じ取れる建築表現を目指した。無駄が無くそして自然環境と溶け合う空間から成る建築こそ生きた標本としてキャンパスに求められていると感じたからである。

我が母校の後輩諸君にはキャンパスの建築や公共空間の重要性を認識し、勉強だけでなくクラブ活動や友達との共同体験を通して社会性を育むことを切に希望する。



建築写真提供：北嶋俊治

工学院大学 八王子キャンパス (仮称) 工房・化学実験棟新築計画



設計者によるイメージスケッチ

株式会社昂設計 顧問 平井真夫

〒151-0053 渋谷区代々木2-41-2-110
TEL.03-3370-7381/FAX.03-3370-7467
subaru03@u01.gate01.com

経歴

1947年	新潟県長岡市 生れ	一
1950年	県立長岡高校卒	
1970年	工学院大学建築学科卒業	
1973年	(株) 九連閣設計事務所に入社	
1983年	「都・設計候補者選定委員会」により選定され、八潮回地区派出所設計。	
1985年	同上	
1990年	（社）東京建築士会 委嘱設計、一級建築士設計製図模擬試験、チーフ指導員に選定。 以後毎年組合（1985～現在）に至る）	
1990年	工学院大学兼任講師（1990～1995）	
1998年	工学院大学機械工作機設計	

受賞歴

1974年 東京建築士会	「区立図書館」	佳	作
1975年	「小都市に立つ公営葬場」	佳	作
1976年	「新しいプラザ」	銅	賞
1977年	「地域婦人会館」	全	賞
1978年	「地域郷土資料館」	佳	作
1979年	「文番のある街角のミニセンター」	銀	賞
1980年	「防災センターになる地域施設」	銀賞 及 佳	作
1980年 日本建築学会連合会	「古文化財周辺の観光施設」	銅	賞
1980年 （株）新建築社	「歴史と現代の接点にたてこな」	佳	作
1980年 日新工業（株）	「魅力あるウォーターフロントの提案」	2	等
1981年 東京建築士会	「みんなの住民センター」	銀賞二点及佳	作
1981年 日本建築学会連合会	「『みみがえらせる郷土の建物』」	英	賞
1983年 東京建築士会	「市民のための市街地小空間への提案」	銀 賞 及 銅 賞	
1984年 墨田区東京建築士会共催	「墨田下町住宅コンペ」	優	秀 賞
1986年 日本建築学会連合会	「マイタウンライブリー」	吳	勤 賞
1986年 栃木県農原町	「会津磐梯山麓ミニパーク施設としての評価」	吳	勤 賞
1987年 田島ルーフィング（株）	「三星フネシング設計・施工原画コンテスト」	3	
1996年 長岡大手通1丁目創り	「デザインコンペ」	グランプリ	
1983年 平井真夫「都・設計候補者選定委員会」により八潮回地区派出所の設計者に選定			

工学院大学附属高等学校 校舎竣工について



建築都市デザイン学科教授
望月 大介



附属高校校舎新築計画については本誌(2004年Vol.28)で報告いたしましたが、今回はその竣工までの経緯の概略を報告致します。

本校舎の基本設計が理事会で承認され、さらに実施設計は日建設計(担当:朝田志郎、浦俊弥・本学卒業生)により2004年9月初旬完了し、大手8社による指名入札の結果、戸田建設(株)に決定しました。2004年12月15日(木)地鎮祭が行われ、着工となりました。

設計・工事監理に当たり、週1回の定例工事会議(計:約60回)を通してプランの修正、階段その他詳細打合せ、照明、彩色、植栽計画、原寸検査など学園側責任者として参加し、貴重な体験をいたしました。施工は中学校授業を抱えての工事となり、生徒の動線と工事車両の問題、既存図書館の解

体とアスベストの件、プールと校地周辺の外構など戸田建設も苦慮された工事でした。

2006年3月中旬の竣工致しましたが、ローコストが前提で予算の制約のある中で、日建設計の多面にわたる優れた技術力により、アトリウムの最新空調システムが可能となりました。

高校側からの種々の要望については城戸前校長先生、竹花教頭先生のご尽力で学内を調整して頂きましたが、今後の生徒たちの新校舎での生活ぶりを見届ければと思います。

工事期間(15ヶ月間)無事故無災害の記録で、工事責任者の岡田所長には誠意に満ちた工事監理の賜のであり、また私には多種の職能技術者の皆さんとの意見交換もあり、有意義な工事体験でありました。

竣工後、何度か新校舎に足を運びましたが、生徒たちの反応はおおむね「明るく、清潔感のある校舎」と聞いております。先生方は白くて落ち着かない、汚れが目だちやすいなどメンテナンスを心配されるのも当然かと存じます。基本設計者として、生徒の皆さんのが新校舎での新しい体験と多くの発見を期待しているのですが、、、

最後に、多くのご協力をいただきました日建設計、戸田建設の皆様に、厚く御礼申し上げますと共に、学園関係者のご支援に心より感謝申し上げます。

建築都市デザイン学科教授 望月 大介
(工学院大学附属高校校舎:基本設計・監修担当)

《福井駅前交番》が第14回福井市都市景観賞を受賞しました。

現在、福井市では、新JR福井駅の完成を踏まえ、駅を核とした中心市街地活性化のための整備計画が進行中です。この福井駅前交番は、駅前広場のエッジに位置するとともに、西口広場と東口広場を結ぶ歩行者専用道路の結節点もあります。こうした立地の特性から、街角としての表情をつくり出すことを意図しました。

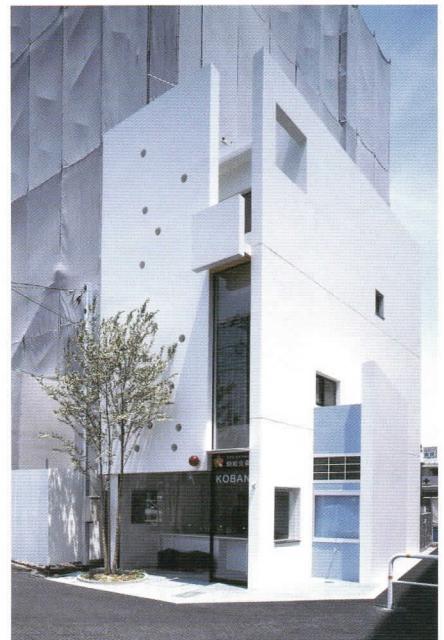
交番も他の公共施設と同様に、なによりもまず、市民に対するサービス施設として位置づける必要があると考えます。そうした意識とイメージを市民に向けて発信するためのシンボルとして、樹木を1本植えることに最後までこだわりました。また、照明器具に関しても、

ほとんどの交番で用いられている冷たい感じのする蛍光灯ではなく、暖かみのある電球色を用いた計画としました。ランダムに穿たれた丸孔からもれる黄色い光は、まるで雪が舞い降りているかのような雰囲気を醸し出しています。

駅前交番といつても、予算や設計期間、工事期間などに特別の位置付けはなく、県内の一般交番と同じ条件設定しかなされていなかったため、大変厳しいプロジェクトでしたが、「福井市都市景観賞」という形で努力が評価されたことを、とても嬉しく思っています。



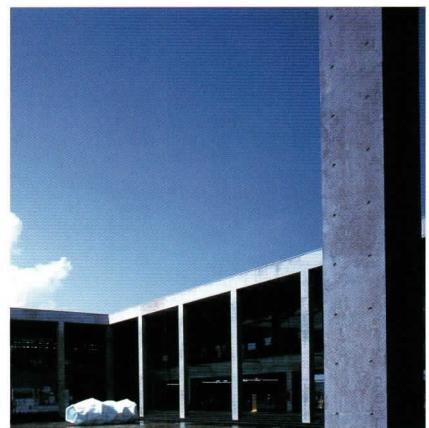
建築学科助教授 藤木隆明



《aqua-scape》がAR Awards for Emerging Architecture 2006のHonourable Mentionに

今年で8回目となるAR Awardsは、英国の『The Architectural Review』誌が世界の若手建築家による現代建築を顕彰する賞で、460を超える応募作品の中から藤木隆明+工学院大学藤木研究室の作品《aqua-scape》がHonourable Mention(佳作)に選ばれました。《aqua-scape》は、今夏新潟県十日町市を中心に開催された『第3回大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ2006』に招待され制作したもので、柔らかいプラスチック素材を折り紙のように「折ることと織物のように「編む」ことでつくられた、アートであると同時に実験建築としての意味合いを持った作品です。3年がかりの構想で、素材の選定や構造的な問題、施工法の検討など試行錯誤の連続の中、成功する見込みが得られないままのぶつけ本番となりましたが、研究室全員のがんばりによって、佳作とはいえ世界的な評価につながったことを大変嬉

しく思います。11月30日にロンドンのThe Royal Institute of British Architectsで行われる表彰式には、大学院生5名とともに出席してこようと思っています。最後になりましたが、構造的な検討に関し、本学の小野里憲一助教授ならびに小野里研究室の小澤卓真君には大変なご尽力をいただきましたこと、感謝の気持ちを込めて一言書き添えておきます。



空気調和・衛生工学会 学会賞受賞

この度、建築学科 野部達夫教授が、社団法人空気調和・衛生工学会から第44回学会賞と第20回振興賞を同時に受賞されました。前者は技術賞建築設備部門で「品川三菱ビルの空気調和設備」に対して授与されたもので、野辺研究室は受賞業績のうち環境・エネルギー性能の検証を担当しました。また、後者は技術振興賞として「仙北市立田沢湖病院」に対して授与されたもので、研究室では自然換気の実測・解析を担当したものです。野辺先生に受賞内容のご感想をうかがいました。

『いずれも実際に建設された建物の室内環境及びエネルギー性能を調査して実態を詳しくにしたもので、研究活動を支援していただいた関係各位とフィールドワークを担当した学生諸君に、衷心より感謝致しております。自分自身の経験から申せば、学生時代に研究対象として没頭した建築は貴重な原体験



として脳裏に焼き付き、社会に出てからも様々な局面で思考の基準点となっています。このような原体験を質の高い受賞作品で経験することのできた学生の皆さんには幸運であろうと思います。

建築は時に生物とのアナロジーが説かれますが、建築を人体に例えれば、このような研究は医学で云うところの臨床例の報告に該当します。ところが、セキュリティと個人情報に関する過剰な警戒心ゆえか、最近は大学という中立的立場を以てしても運用中の建築への立ち入り調査が困難な場合が多く、建物の中央

監視システムで収集したデータすら充分に提供いただけないこともあります。臨床例なくして医学の進展がないのと同様、建築も運用中の評価なくしてその理念とテクノロジーの進化はありません。

関係各位には是非とも運用実態の調査は建築の健全な進化と優秀なデザイナー及びエンジニア育成のために不可欠なものとご認識いただき、是非調査の機会を与えていただきたいと願っています。』(野辺達夫)

(取材/NICHE編集部)

独立行政法人都市再生機構 都市住宅技術研究所主催コンペ「昭和40年代住宅はこう変わる」最優秀賞

At the foot of a housing complex

団地のふもとで

大学院修士1年 中島(智)研究室
埼玉県立入間向陽高等学校卒 井上 幸作

本計画は、住棟の足元を魅力的な空間にすることで団地の持つ空間的な魅力低下という問題を改善し、より美しく住むための提案である。

団地にはふたつの中間領域が欠けている。一つは屋内と屋外をつなぐ半屋外空間であり、もう一つは、プライベートとパブリックの中間にあたるセミパブリックの空間である。この提案における一番大きな改造は、南側に、大きなサンテラスを設けることである。この一つの操作によって、先に挙げたふたつの中間領域を作り出す。

サンテラス下の一階部分は、ピロティとして、共有部としての半屋外空間となる。この空間は住棟と前庭とのつなぎの空間であり、ここを魅力的にデザインすることで空間的なつながりを作り出す。

一階の住戸はアトリエを持つメゾネット住宅とする。各住戸間に扉を持ち、開け放つことで一つの空間となる。共同での展示会などを開くことが可能である。一階レベルにあわせて設けたテラスもまた、演奏会など簡単な催し物を



行うのに最適である。パーゴラとともに南側の庭に場を作り出す。

住戸部分では多様な生活スタイルの居住者に対応できるよう、五つのユニットを計画した。各住戸は南側サンルーム、屋外ベランダを持つ。これらの空間はセミパブリックと半屋外空間の両方を併せ持つものである。

各階のEVホールは1住戸もしくは2住戸でのみ

使用するもので、確実に小さなコミュニティを作り出す。また、エレベーターホールを挟んで親子が隣に住まうことで、集合住宅でありながら二世帯住宅のような形式を可能とする。

本計画では多様なライフスタイルを持つ居住者が団地のふもとに下りてきて賑わいを作り出すようなストーリーを目指した。

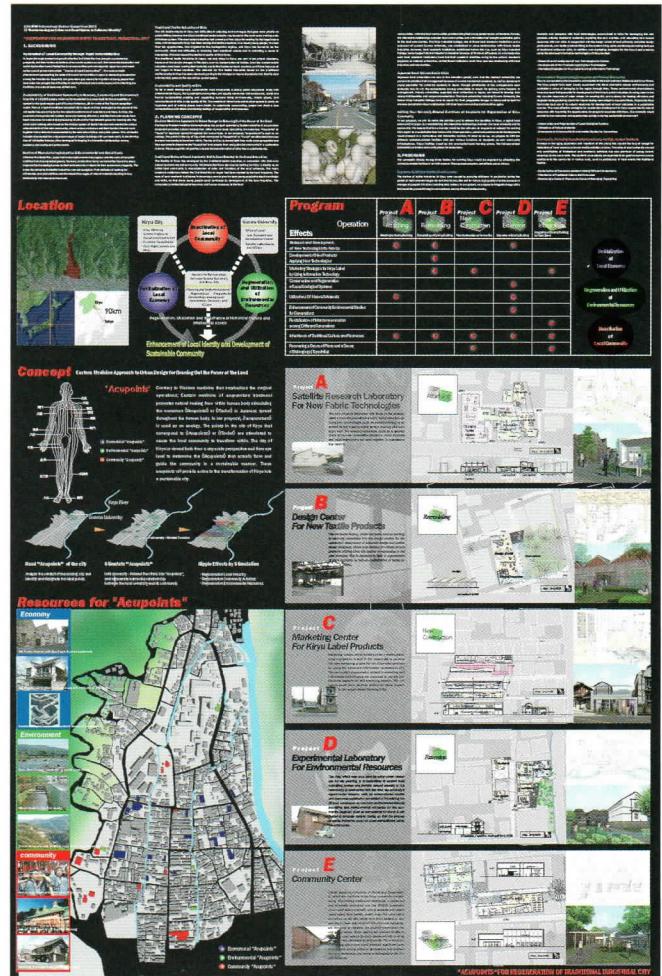
第12回 IFHP国際学生 コンペティション佳作



小林丈史
群馬県立桐生高等学校卒
大学院修士課程2年(倉田研究室)

IFHP(International Federation for Housing Planning)は2005年10月イタリア・ローマ国際大会に伴い開催された国際設計競技です。「第12回 IFHP International Student Competition 2005」において、25カ国97作品の応募作品があり、都市デザイン学科倉田研究室の作品「“ACUPOINTS” FOR REGENERATION OF TRADITIONAL INDUSUTORIAL CITY」が佳作に選ばれました。1983年に開始されたこのIFHP国際コンペは、都市・建築計画案を世界中の学生から募り、世界の各国の都市・農村の抱える問題に対して、その土地の状況や都市・建築の実際的な問題を読み取り、具体的な解決方法を提案するものです。

「第12回IFHP International Student Competition 2005」のテーマは“アイデンティティを高めるための都市及び田園の空間の再構築”でした。私たちは群馬県桐生市を事例として、地域のアイデンティティを活かした地域コミュニティの再構築手法を提案しました。



日本建築学会創立120周年記念支部共通事業 第8回提案競技 「美しいまちをつくる、むらをつくる」優秀賞

「足立区を対象としたまちづくり提案競技において、私たちは区内に散在する農地を足立区固有の大切なまちづくりの資源として評価し、その活用方法を提案しました。3年生は初挑戦のコンペティションで、院生の協力のもとに多くのことを学びました。大学から外に出てまちを考えた初めての機会でもあり、それが受賞に結びついたことは大変嬉しく思っております。今後の研究室活動などに大いに役立たせ、精進していきたいと思います。」



工学院大学建築学科・倉田研究室



平成18年度工学院大学総合プロジェクト研究成果報告会

学内研究者が中心となり、外部機関の研究者と実施した共同研究の成果報告会です。今年度は3~4年間にわたった継続研究で、平成17年度に終了プロジェクト研究7テーマの内、建築学科は次の2テーマです。（NICHE編集部）

少子化時代の多様な子育支援を目的とした駅型保育園の建築計画学的研究

制度化されて間もない駅型保育園に対して、21世紀の少子化時代に求められている多様な「保育環境（保育・通園環境+労働環境）の質」に関する環境整備条件を導き出すことを主な目的として、環境行動論的に駅型保育園を検討した結果、以下の事柄が明らかとなった。

①保育環境：駅型保育園では保育環境の質的向上を図るために、主に認識性の向上、安全への配慮、保育に適した空間、面積の有効活用などの工夫がみられる。

②通園環境：園児は保護者に比べ、多様な視点や興味を持ちながら通園しており、車や看板や自然物などの環境要素が、園児にとって交通ルールや文字、様々なものの名前などを学習する日常の貴重な学びの場となっている。

③労働環境：園児から少しの間だけでも離

れる時間を持つことは、保育者の集中力を持続させるために大切である。よって、短い時間でも園児と離れ、ゆっくりと体を休められるスペースを保育室内か、その近傍に確保することが重要である。



建築学科助教授
赤木 徹也



資源循環型環境共生地域社会の構築に関する研究

本研究の目的は、都市の中で環境・防災的にも重要な都市農地を活かして、これを核として農家と市民がふれ合い、食物の循環を通して、健康で安全な地域社会を濃い馳験する仕組みを検討するものである。

最初に、我が国は食料の6割を輸入に頼つ

ていながら、いかにその多くを無駄にし、また危険な食料に依存しているかを明らかにし、農家と市民が連携し、食品残さを資源として循環し、安全な食料の確保する動きについて示した。

環境共生の貴重な資源としての、都市農

地を残す手法を、地区計画等のまちづくりの方法を通して検討した。更に防災・避難の観点から、食品購入協定等による農家と市民の連携による、防災拠点としての農地の保全を提案した。



工学院大学建築学科教授
東 正則

農村開発企画委員会

楠本侑司

農政調査委員会

長浜健一郎

農業工学研究所

筒井義富



日本都市計画家協会関東甲信越支部主催

「第15回東京都学生設計コンクール」金賞「そこで人は暮らせるか」



瀬川 幸太

卒業年度:2006年3月(藤木研究室)
倉田研究室
出身高校:伊豆中央高校出身
メールアドレス: k.o.u.t.a@hotmail.co.jp



■作品概要

現在、世界人口は65億人をこえ、都市人口はその半分近くにも達している。このような状況に対処するため、都市部は高層化し土地の有効利用を計る必要がある。しかし、既存の高層建築のつくり方では、その内部に都市的空間をつくりだすことは難しい。そこで、多様で偶然的な集落のようなつながりをもつ

た立体的都市を提案する。

敷地は江東区豊洲で、総人口3000人を想定した、住宅・オフィス・商業施設と幼稚園や病院などの公共施設から成り立つ立体都市を計画する。

できるだけ計画しないこと/部分からつくること
都市空間は計画されてできた空間ではなく、

自然発的に生まれてきた空間であるといえる。そのため、多様性や偶然性といった特性を持ちそれが都市空間の魅力となっている。ゆえに本計画では「できるだけ計画しないこと」、「部分からつくること」をコンセプトに自然発生的な形態を生成し、その内部に多様性をもつた都市的空間をつくる計画を行う。

第3回日経アーキテクチュアコンペ優秀賞

この度、第3回日経アーキテクチュアコンペにおいて優秀賞を獲得しました。審査員は建築家の隈研吾氏で converted environment ここを、こう変える、こう使うというテーマのもと行われ、残念ながら最優秀賞は該当者なしでしたが応募総数103点の中から上位4点の優秀賞に選ばれました。



建築学専攻 倉田研究室

花沢 淳

卒業年度:2007年3月(卒業見込)
倉田研究室
出身高校:千葉県私立市川高校
略歴:2005年3月 工学院大学建築
都市デザイン学科卒業
(倉田研究室)
現在 工学院大学大学院
建築学専攻修士2年(倉田研究室)
tutuuraura8730@mv.biglobe.ne.jp

■このコンペの特徴

従来のアイディアコンペとは一線を画すために、現実の「何か」、「どこか」を選定し、コンバージョンすることで現実の社会や都市に対する批評性、メッセージをもった提案をすることが求められました。

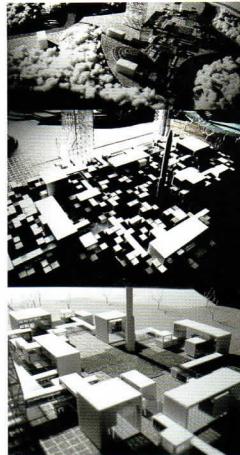
■提案の概要

私は江戸東京博物館の広場を選びました。ご存知の通り、いろんな意味でバブル期の特徴が出ている場所です。無味無臭な広場が1KMもの長さで道に沿って延々と広がっ

ていることが、逆に都市に閉じている場所を生み出しています。ですから道と広場の境界を変えることで都市との接点をつくり、広場、そして建物そのものの価値も変えてしまう可能性があるという提案です。この計画論は



他の公開空地型の広場にも適応可能です。固有の場所から発見された方法から一般性を作り上げるということを意図的に行うことで、近代の都市、建築家に対する批評性を持たせています。



「第29回学生設計優秀作品展—建築・都市・環境—」レモン賞
及び「第6回埼玉建築監理協会卒業設計コンクール」優秀賞受賞について

Systema city

—tanegashima aerospace-center project—



梅中 美緒

2006年3月建築都市デザイン学科(澤岡研究室)卒業
2006年4月大学院建築学専攻澤岡研究室在籍
神奈川県立多摩高等学校出身
Setsail_ume@hotmail.com

「世界の美しい場所のほとんどが、建築家以外の人々によってつくられる。」

建築家ではなく、建築の住み手・使い手が形態操作可能な建築はないか

「世界情勢は刻一刻と変化し続ける。状況の変化に伴い、人々のニーズも想像を絶するスピードで変化する、建築に対するニーズも然り。それはすでに建築の寿命を超越してさえいる。」

この先起こりうるすべての変化に対して適応可能な建築はないか

以上たった二つの主張を、最も攻撃力のある形で伝えたかった。

この作品が一種の爆発力を持っている分、理論が甘い部分が存在することも事実で、ある角度から見ると欠落が露呈し、酷評を受けることもあった。

しかし反対に、「作品から放射されるエネルギー量が圧倒的だ」と非常に高く評価される審査員もいて、学内での最優秀賞はじめ複数受賞の背景には、良くも悪くも話題にあがる“問題作”であったからだと理解し

ている。建築の形態操作をうまくやれない自分が没頭してきたシステム提案を通して、レモン画翠展では講評を受けるだけでなく著名な建築家の方々とディスカッションという大変貴重な経験をさせていただき、その時の出会いは今でも続いている。大学院進学後も卒業設計が終わることなく私の隣で息づいて、自身と共に進化し続けている事を幸せに思います。（取材/NICHE編集部）

Shelter Student Architectonics Competition 2006 優秀賞

シェルター学生設計競技2006において、作品「たべることも忘れて、都会の並木道を歩いたら」を出品し、2006年11月11日に優秀賞受賞。全国から過去最多の547点もの作品が寄せられ、審査は建築家青木淳氏を委員長に東北大、東北芸工大の教授4名。優秀賞の徳野さんの作品は「都会の真ん中で食事しようとする時、並木道の上に子供の頃に空想したような秘密基地があつたら面白いのではないかと」という発想から生まれたもの。都会の居場所として面白いという点と、殆どの応募者が抽象的な提案だったのでに対して、はっきりと形で出してきたことも

評価されました。徳田由美子さん「今回審査員の先生方や多くの皆さんの中前で自分の作品をプレゼンテーションする機会を頂き、とても素晴らしい賞を頂けたことをとても嬉しく思います」。

（取材/NICHE編集部）



たべることも忘れて、都会の並木道を歩いたら。

たべることは、ひとに見てほらうなれしな。
けれど、自重や世間で、自分の中へとめぐれて、
たべること、おもひことにじめていたい……。

都会の雰囲気をそのまま感じて、自分の門を開きたいんで。
山道に入るもの結構だからな。うどんで買っても辛気がないからなんでもあるまいな……。

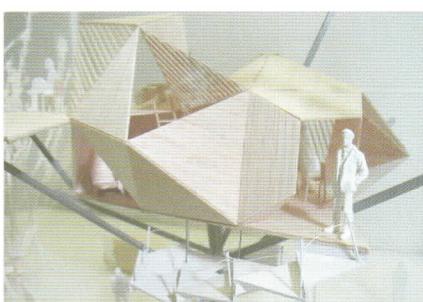
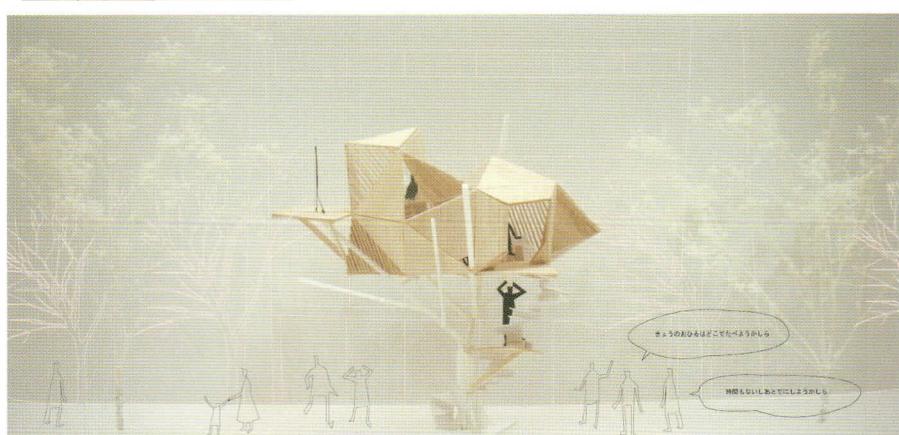
そこで、ササギの巣木達の木の一束が、本物ではない、なんとも「さ」、これでこんなに作った秘密基地ができたんだから……。

えへ、なにこれ、ここでたべてみようかな？

都会の風を感じながら、たべてみませんか？



建築学科建築学コース山本研究室4年
徳野由美子
福岡県私立西南学院高等学校卒



第1回住まいのバリアフリー・コンペで優秀賞!

打ち水効果で涼を得る
中庭を持つ車椅子の家



住まいのバリアフリー・コンペ2006にて「優秀賞」受賞
東京都住宅バリアフリー推進協議会主催

所在地: 神奈川県座間市

設計者: 谷口宗彦 (担当: 鮎坂誠之)

施工者: ハウステクノプロテュース(中山亮)

本学建築都市デザイン学科の谷口宗彦教授と鯵坂誠之(本学・院2001年卒)が、東京都住宅バリアフリー推進協議会主催の「第1回住まいのバリアフリー・コンペティション2006」において、優秀賞を受賞致しました。本コンペは、住宅のバリアフリー施工事例を広く募り、優秀な作品を表彰することで、民間住宅におけるバリアフリー化のさらなる普及促進を図ることを目的として開催されたものです。

(取材/NICHE編集部)

取り組み一般家庭の主婦の役割も受け持つ。

プランの核である中庭は、バリアフリーであることに加え、日射、通風を季節に応じて適切に制御する空間として機能する。この中庭から室内に続く地面、床面の一部に保水性土舗装(中島祐輔研究室協力)を使用することで、夏季には打ち水によって涼風を起こし、冬季には晴天時の蓄熱空間となり、一年を通じて快適な生活環境を得ることができる。』

(谷口宗彦)

谷口宗彦

(たにぐちむねひこ)

所在地: 神奈川県座間市

工学院大学建築都市デザイン学科・教授

1971年山下研究室・卒

福岡県立門司高校出身

連絡先: 03-3340-3529

(谷口研究室直通)

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1022/>

鯵坂誠之

(あじさかしげゆき)

(株)都市建築デザイン研究所・所員

2001年谷口研究室・院卒

神奈川県立大磯高等学校出身

連絡先: ajisaka@mac.com

三鷹市連雀通り商店街活性化に本学学生・卒業生が奮闘中!



2006年2月28日付で掲載された讀賣新聞武藏野版記事。
記事内写真は谷口研究室の嵯峨彰仁さん(2006年院卒)。



2006年3月に行なわれた三鷹市長への学生の夢提案。

谷口宗彦教授が専門家として参加している三鷹市連雀通りまちづくり協議会において、2006年11月14日(火)から19日(日)の6日間、まちづくりの活動を広く地域住民に周知するためのパネルや模型を使った展示会が開催された。

(取材/NICHE編集部)

『連雀通り商店街は、都道(三鷹3・4・7)「連雀通り」沿いに約400mに渡って延びている。店舗数は55店ほどで、車が頻繁に通るにもかかわらず歩道の幅員はわずか約1mという状況のため、2004年8月に住民が主体となって「まちづくり協議会」を結成。

電柱移設や街路灯のデザイン検討、歩道補修の要望書を市に提出するなど地域の安全について検討を重ねてきた。2005年度には、当時大学院生だった嵯峨彰仁さんが、連雀通りの再生計画を研究テーマに選び同協議会において発表した。

東京都の都市計画道路整備方針が決定し今後10年を目処に、道路幅が8mから16mに拡幅される工事へ着手することを受け、11月に協議会の取り組みを説明するパネルや学生の夢提案をベースとした模型による展示会を開催した。まちづくり協議会には、多くの本学卒業生が関与し、現在も継続して商店街活性化を支援している。』

(谷口研究室、鯵坂誠之)



2006年11月には商店街の店舗を活用した展示会を企画。



三鷹市長に説明する協議会 出口委員長(手前側)

奥で説明する谷口研究室の鯵坂誠之さん(2001年院卒)

後藤研/文豪が愛した町並保存へ 朝日新聞2006年5月31日掲載

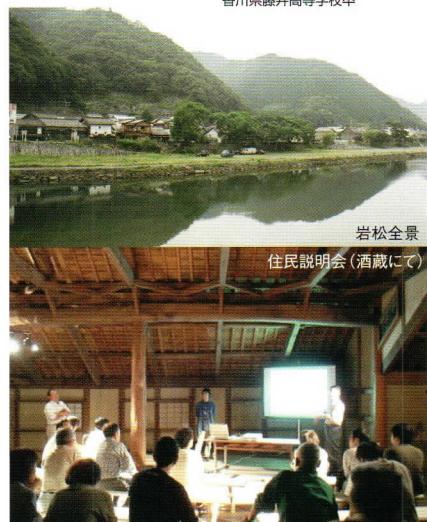
宇和島市津島町の岩松地区は、愛媛県の南西部にあります。岩松には、幕末から昭和初期にかけて建設されたと思われる民家が点在し、町並みの西側には岩松川が流れ、かつては港町として栄えた場所です。また文豪の獅子文六による「てんやわんや」の舞台となったことでも知られています。

この岩松地区に残される伝統的町並みの保存対策を検討するため、その基礎資料を得ることを目的として、津島町(現宇和島市)

は3年度にわたる伝統的建造物群保存対策調査を計画しました。この調査依頼が後藤治教授にあり、平成16年度より後藤研究室において岩松での調査を開始しています。これまでに7度の調査を終え、岩松地区における町屋の特徴や、町並みの変遷などについて分かってきました。こうした調査結果を岩松の住民に説明するために、これまで調査報告会を2度行っています。調査報告会では、どのような調査が行われているかを伝えるとともに、住民に岩松の町並みのよさを再認識してもらうことを目的としています。

岩松での3年度の調査が終わり、あとは報告書の作成が残るのみとなりました。しかし、伝統的建造物群保存地区に選定されるには、今からがスタートと言えます。これからは、町と住民とが主体となって、町並み保存が行われることが望まれます。

後藤研究室 4年
香川祐司
d303016@ns.kogakuin.ac.jp
香川県藤井高等学校卒



第1回 大学・地域の協働による まちづくりプレゼンテーション大会 in 四谷

初田研究室梨子田チーム(修士1年 梨子田勉、猪野俊幸、奥田真史、深澤剛

近年、大学・専門学校などの教育機関が、地域や社会とのつながりをより一層重視し、まちづくりや地域活性化の現場で、大きな役割を担いつつある。一方、各地域では、これまでの商店街活性化や地域活性化の方策では、十分に対応できない課題が散見される。東京商工会議所ではそのような状況に着目し、教育機関と連携したまちづくり支援策の検討を進めている。このような検討の一環として、東京商工会議所が主催となり、大学・地域の協働による学生まちづくりプレゼンテーション大会が実施された。今回のプレゼンテーション大会では、四谷地域の現状把握・課題抽出を行い、地域が目指すまちづくりの姿を提示することが求められた。このような課題に対し、私たちは、「四谷再発見～遊路四谷～」をテーマに、四谷の特徴・魅力を活かしたまちづくりを提案した。四谷地域は江戸時代からの歴史と起伏に富んだ地形

という特徴がある。また、近年では幹線道路沿いはオフィスなどが増加傾向にあり、それ以外は集合住宅が増加傾向にある。このような状況に対して、歴史系の初田研究室チームらしく「歴史を活かしたまちづくり」、「新しいプログラムの挿入」という2つの基本理念をもとに提案を行った。「歴史を活かしたまちづくり」では四谷地域の歴史的資源を活かした散策路の形成、また、「新しいプログラムの挿入」ではオフィス、住居、商業がとなりあう状況に対して、地域内の交流の場の創出、また、地域外からの集客を目的として、アートを活かしたまちづくり、街路のモール化を提案した。それぞれの提案を四谷地域の特徴・現状に即したかたちで実施することで、まちの魅力を活かしたまちづくりを目指している。

学部4年 川島一記、中嶋洋輔 以上初田研究室)



「まちなみ歴史探訪・横浜」初田亨教授

平成18年9月30日
工学院大学後援会主催

平成18年9月30日(土曜日)午後2時横浜桜木町駅集合、参加者47名。雲多く気温20~24度と歩くのには最適。NICHE Vol.28で予告した「第1回まちなみ歴史探訪・横浜歴史を生かしたまちづくり横浜関内地区」。歴史ある横浜を新たな視点で捉え、建築とまちを見て歩き、歴史を生かしたまちづくりなど、最新情報を取り混ぜ、同窓生の初田亨建築学科教授(近代建築史1969年卒)がご案内、H.Pでお知らせし参加費無料。先ず初田先生が挨拶で説明「住んでいる人にとって潤いのあるまち、全国に先駆けて横浜らしいまち、歴史を生かしたまちづくりを横浜ではやっています。関内地区には江戸から明治の開国時代に中心になって動いていた当時の遺産が残っています。今迄は取り壊されていましたが、これからは大切にしてまちづくりをしましょうと、日本で今最先端のまち

づくりが行われています」。主なコースは日本丸メモリアルパークから始まり、ランドマークタワー周辺→動く歩道から馬車道を経て→日本火災横浜ビル(本大学の先輩、矢部又吉設計の建物を保存・活用)、神奈川県立博物館(旧横浜正金銀行)→横浜赤レンガ倉庫(旧新港埠頭倉庫)→横浜税関、海岸通り、神奈川県庁→横浜開港記念会館→同資料館(旧英國総領事館)→開港広場、山下公園通り、戸田平和記念館(旧バターフィールド&スワイヤー商会)、山下公園、最後はホテルニューグランド迄の約3時間。

横浜開港資料館の開港広場に記念プレートがあり。「日米和親条約締結の地」は、「安政元年(1854)2~3月にかけて、日米代表が横浜村の海岸で会見、和親条約を結んだ。(中略)日本の開国を促し、横浜市の誕生の遠因ともなった」。江戸時代の海岸線の

所に外人居留地が設けられ、イギリス何番館と当時の建物がそのまま残っている。歩いていても歩道が広く、子供達や市民のデザインしたタイルが埋め込まれていて楽しい。市民が愛着を持てる工夫がされている。参加者から「横浜は偉い」の一聲。

午後5時過ぎに懇親会を中華街で開催、今年も盛り沢山なコースでした。全員と別れてから横浜港大桟橋国際客船ターミナルへ急ぎ立ち寄ると板張りの小高い丘がそのまま海の上に迫り出し、山頂のような芝生に家族連れや恋人同士があちこちに腰を降ろし茜色に染まる空、夕日が沈むのを眺めました。

(取材/NICHE編集部)



1 日本丸メモリアルパーク、旧横浜船渠第1ドック



2 左横浜ランドマークタワー、右クイーンズスクエア横浜



3 日本火災横浜ビルの入り口



4 神奈川県立博物館（旧横浜正金銀行）



11 横浜開港記念会館資料館（旧英國総領事館）

12 山下公園と水川丸

新刊書紹介

同窓生や建築学科の教員など関係者が執筆しました新刊書をご紹介致します。

BOOK



①

「建築の可能性、山本理顕的想像力」



山本理顕 著

工学院大学建築学科教授

王国社

Tel.047-347-0952

221ページ

定価1,995円(税込み)

2006年4月25日 初版発行

B5版

「東雲キャナルコートCODAN」「北京建外SOHO」「埼玉県立大学」「公立はこだて未来大学」など、つねに新しいライフスタイルと建築空間を提案し続ける建築家の仕事と思索の現在進行形。

②

「図説西洋建築史」



中島智章 他

工学院大学建築学科助教授

彰国社

Tel.03-3359-3231(代表)

196ページ

定価2,940円(税込み)

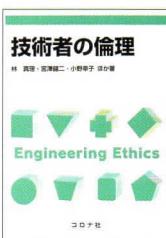
2005年4月10日発行

B5版

本書では、通史の基本を押さえながらも、建築史の面白さがわかるよう、古代、中世、ルネサンス、バロック、18世紀以降の各時代につき15の切り口で各時代の建築の魅力を語っています。75トピックはすべて見開き完結で読みやすく、図版も多く載せてあります。

③

「技術者の論理」



林真理・宮澤健二(工学院大学建築学科教授)

小野幸子ほか著

工学院大学教員の共著

建築からは、編集・執筆:宮澤健二
吉田拓郎 著筆:嵩英雄、後藤治
中島裕輔

コロナ社

Tel.03-3941-3131

258ページ

定価2,700円(税込み)

2006年4月20日発行

A5版

科学や工学の進歩とともに、近年は技術者の倫理観の欠如による事故や災害が多発している。建築では特に、最近アスペクト、東横インや姉歯問題がある。本書は工学系の大学生が卒業し、社会で技術者として働く上で必要な倫理について述べている。工学院大学の共通課程、機械、化学、電気と建築系の専任教員の共同試筆で、技術者の倫理全てについて述べている。

④

「目でみる木造住宅の耐震性」



林真理・宮澤健二(工学院大学建築学科教授)

小野幸子ほか著

工学院大学教員の共著

建築からは、編集・執筆:宮澤健二
吉田拓郎 著筆:嵩英雄、後藤治
中島裕輔

コロナ社

Tel.03-3269-2961

326ページ

定価2,500円(税込み)

2007年1月25日発行 B5版

2007年は阪神淡路大震災12周年である。この12年間で木造住宅の耐震性は大きく発展した。本書は主に宮澤研究室の12年間の研究と社会活動の成果(地震のしくみについては東大名誉教授の溝上先生)で、耐震の歴史、耐震のしくみ、地震と地震災害、耐震理論、耐震実験・解析・CG、耐震補強などを図版や写真で説明している。特にテレビ等で取り上げられた映像も整理して述べている。

⑤

「手で練る建築デザイン」



中山繁信

工学院大学建築学科
特別専任教授

彰国社

Tel.03-3359-3231(代表)

96ページ

定価2,100円(税込み)

2006年11月30日発行

B5版

描くことは、単にモノの形を上手に写し取ることばかりではなく、モノの仕組みを理解し、そして、頭の奥底にその形を記憶する効果があります。人間の優れた能力を「描くこと」によって切り開いていくための本です。

(6)

「徹底討論、私達が住みたい都市 工学院大学連続シンポジウム全記録」



山本理顕編
伊東豊雄×松山巖×上野千鶴子、八束はじめ×西川祐子、磯崎新×宮代真司

平凡社
Tel.03-3818-0873(代表)
268ページ
定価2,310円(税込み)
2006年1月20日初版発行
A5版

身体、プライバシー、住宅、国家。建築家VS社会学者！ 都市のかたち、時代のかたちを問い合わせ直し、21世紀の住み方をめぐって4人の建築家と4人の社会学者・哲学者が繰り広げる熱い議論。

(7)

「星の降る場所」

武井 伸吾

工学院大学建築学科
1992年卒・谷口研、日建設計

ピエ・ブックス
Tel.03-5395-4811
104ページ
定価2,520円(税込み)
2006年9月9日発行
A4判変型(220x265mm)



満天の星空、静かに流れる天の川、ゆっくりと軌跡を描く星々、星明りと月明りが織り成す夜の風景…。そんな“星空のある風景写真”=“星景写真”88点を収録した写真集。夜空一面の星空に出会える一冊です。

(8)

「雨の建築術」

井上洋司

1975年工学院大学大学院修了他、日本建築学会編

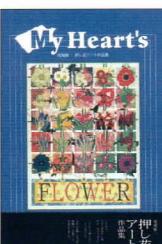


北斗出版
Tel.03-3291-3258
158ページ(オールカラー)
定価2,500円(税込み)
2005年7月25日発行
A5版

雨を楽しく、多段階に利用しつつ、地球の健全な雨水循環に貢献する建築物の創造のために、実践的実例技術集です。

(9)

「押し花アート作品集 「My Heart's」」



尾城雅一

工学院大学建築学科
1979年卒(南迫研OB)

新風舎
Tel.03-3746-4648⑫
108ページ
定価2,625円(税込み)
2004年10月25日発行
A4版

趣味で始めた押し花。原色で残せる世界に魅了され全国・世界コンクール入選を重ねて参りました。恩師南迫教授が愛したFLライトが自然から建築を創造したように、自然の持つ偉大さと美に感謝を込め、我が想いを託した作品集。

(10)

「ライフスタイルを生かす 楽しいインテリアの基本」

大倉祥子

工学院大学建築学科
1975年卒業
伊藤研究室



新星出版社
Tel.03-3831-0743
215ページ
定価1,470円(税込み)
2006年7月25日発行
B5版

ライフスタイルを生かす 楽しいインテリアの基本」従来のインテリア書のようなモダン、カントリー、アジア、和風等のイメージによるインテリア解説書ではなく、多様なジャンルに興味をもつ読者のそれぞれの指向にあったライフスタイルの空間を、身近な暮らしのなかに実現する手法を紹介します。

(11)

「まるごと覚えるキッチン スペシャリスト ポイントレッスン」

大倉祥子

工学院大学建築学科
1975年卒業
伊藤研究室

新星出版社
Tel.03-3831-0743
254ページ
定価1,890円(税込み)
2001年8月15日発行
A5版

キッチンライフをより快適で充実させるために、消費者と一緒にプランニングするスペシャリストの資格。確実に合格するためのポイントを網羅した、必携の1冊です。

(12)

「最強の住宅相談室」

監修:村島正彦 他

工学院大学大学院
1992年修了・初田研

ボプラ社
Tel.03-3357-2212
262ページ
定価1,575円(税込み)
2005年2月22日発行
B6版

インターネットの「住宅ねっと相談室」に寄せられた約2万件の相談から“よくある相談”を中心にまとめたQ&A集。建築家、法律家、税理士、不動産業者など住宅に関わる各分野のプロフェッショナルが真摯に答える。

特別企画

学会賞を受賞して

工学院大学建築学科教授

吉田 倖郎



この度、日本建築仕上学会学会賞(論文賞)を建築学科教授 吉田倖郎先生が受賞されました。受賞論文名は「循環型社会のための建築ストックの活用と資源循環に関する研究」ですこれは1編の論文ではなく、このタイトルに関連する近年発表した10編の論文を束ねたものが高く評価されました。吉田先生に次のように感想をうかがいました。

(取材/NICHE編集部)

『私が「循環型社会のための建築ストックの活用と資源循環に関する研究」に繋がる研究に初めて参加させていただいたのは、1981年に始まった建設省建築研究所の通称「耐久性総プロ」でした。それまでは、工業化住宅や集合住宅などの生産性向上や性能評価を手がける機会が殆どだったのですが、私の研究にとって、というよりは日本の建築界のひとつの転機だったようです。その後、関連する大きなテーマとしては、住宅リフォーム、耐用年数と寿命、地球環境保全、資源循環、資産評価を手がける機会に恵まれてきています。受賞論文は、大きく建築ストックに関するものと、資源循環に関するものから成っているといえます。

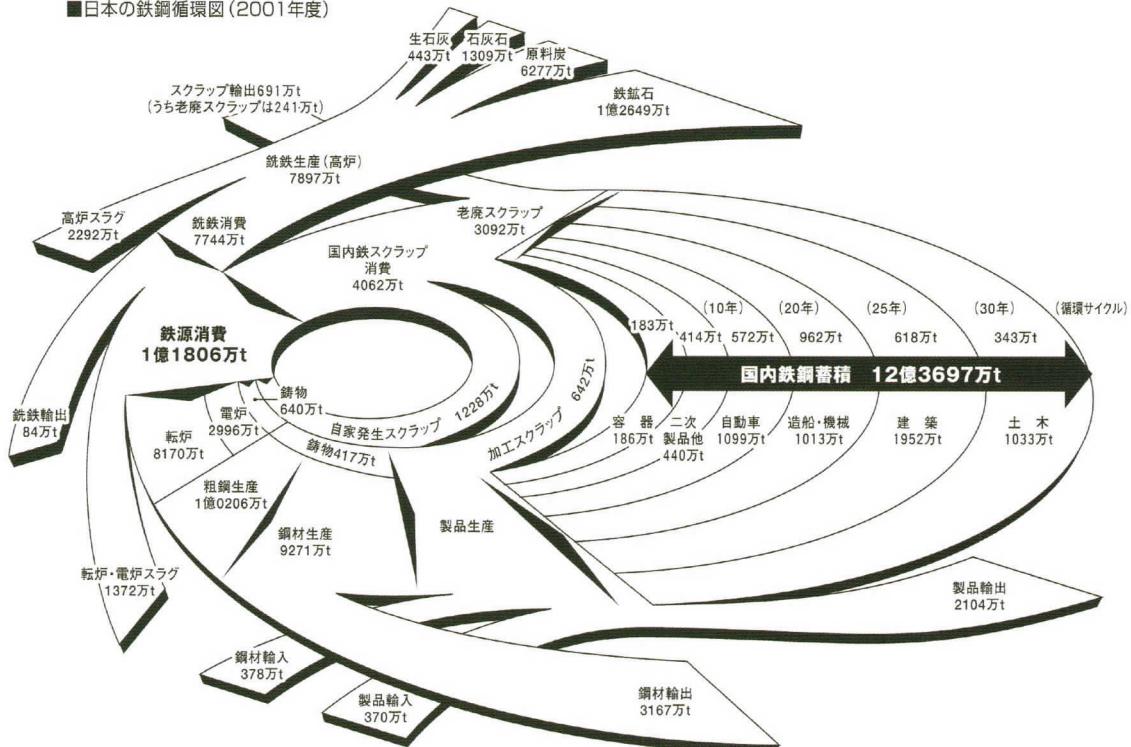
建築ストックに関しては、住宅リフォーム工事の調査、住宅リフロー

ムに適した建材のあり方に関する調査、公共建築のストック量および投資状況の調査を行い、それらの実態に関する資料を取りまとめています。また、住宅リフォームについては、建築市場の観点から、その現状の推計や今後の予測について検討し、日本が少子高齢社会に向かい住宅の長寿命化が進む中で、住宅の新築が停滞し、それを補うものとしてリフォームを中心とするストック対応の業務への期待が大きいことを論じています。2000年の時点では、住宅の着工統計では、日本の住宅工事費は20兆円ですが、これに対しリフォーム市場の推計値は8兆円でした。(その後現在まで、住宅工事費は漸減しており、リフォーム市場は、善戦しているものの期待ほどには伸びていないようです。)住宅リフォームについては、何度か現場調査をしています。卒論生の数に恵まれていればこそ可能な調査です。

建築のストックの資産価値評価についても、機会がありやや思い切った論考をしています。建築ストックが様々に関心を集めようになってきており、その中で、建築資産価値の評価が重要な意味を持っているますが、日本の不動産に関する権利関連の法と制度が、欧米先進国に比べ独特で、土地と建物が別々に登記され権利の対象になっ



■日本の鉄鋼循環図（2001年度）



ていることから、これまでの不動産の取引とそれに伴う不動産評価が地価に引っ張られ、築後の年数が一定以上の建物は健全に供用されていても適切に評価されないという実態があります。もつといえ、しっかり建っているほど解体費が嵩むという理由でマイナスの評価をされる場合があるという現実は、建築ストックの今後のあり方を考える上でゆゆしい問題です。地価が高いこと自体を適切に論じる力は私にはありませんが、建築の立場からは、最近の地価の下落を見ても、なお高すぎる水準にあることを述べています。ただ同じ冊子に、地価デフレに適切な対策を打つべきである旨を主張している論文があり、やや冷や汗ものでした。

資源循環に関しては、木造住宅や高層建築の解体工事の調査を行い、その工事の工程や作業、解体物などについて、詳細な実態資料を取り纏めることができました。これも、大勢の学生諸君の協力の賜物です。

各種の建築資材について、機会を捉えマテリアルフローの作成を試みました。建築の主要資材である、木、コンクリート、鋼については、日本建築学会地球環境委員会資源循環小委員会の活動を通して、

年間のマテリアルフローを作成しました。そこでは、原材料、各種製品、製品の分野別供用状況、廃棄、再生利用などについて、何とか整合性のあるフローを示すことができました。また、鋼材については、整備が進んでいる鋼材関係の各種統計資料を基に、鋼材関係者が主体となって完成度の高いマテリアルフローを取り纏めることができました。これは様々に活用されており、建築の資源循環の議論の深化に大きく貢献できているようです。

受賞論文に関連する研究は、近年、建築分野でも質量ともに充実してきています。それらから多くを学びながら、今後ともささやかに成果を上げるべく研究を進めたいと考えていますが、最後にひとつだけ、建築ストックの問題においては、建築分野の枠組みを超えて、資産評価や経済評価の観点からの取り組みが重要であるということを申し上げたいと思います。特に資産評価の局面で、地価の高騰状態の中での建築ストックの資産価値評価の現状には根深い問題があり、その克服が重要であることを、重ねて述べさせていただきます。このことは、建築分野における多くの研究成果がより有効に活用されるためにも、重要な意義があると考えています。』 （吉田倬郎）

特別企画

都市と調和する大学

國學院大學渋谷キャンパス再開発計画



朝田 志郎 asada@nikken.co.jp

経歴

出身高校 東京都立武蔵野北高校
工学院大学大学院建築学専攻修士課程(山下研究室)修了
株式会社日建設計
設計室主管



1.はじめに

國學院大學は、平成14年に創立120周年を迎えるに当たり、記念事業として8年間に渡る段階的整備による渋谷キャンパスの再開発計画をすることに踏み切りました。

その後、4社からなるプロポーザルを開催し、日建設計が特定されることとなりました。私は、プロポーザルの当初から関わっており、早5年が経とうとっています。今回、この特別企画に寄稿するに当たり、國學院大学が描いていた将来ビジョンとそれを実現する為の建築、大学運営者と設計者の役割を経緯に即して紹介しようと思います。

2.驚かされたキャンパス全体を対象とした建替計画

最近、工業等制限法が廃止され、郊外に移転していた大学の都心回帰の動きが活発になってきています。しかし、本計画が開始された当初は、まだその制限を受けており、さらに國學院大学自体も、たまプラーザにサテライトキャンパスを持っている中での渋谷キャンパスの整備がありました。

私も、いろいろな学校の設計競技に関わってきましたが、大半は既設キャンパスの中の一部の建物の建替計画です。当然、膨大な事

業費用がかかるので、致し方の無いことです。ところがこの大学は、老朽化した校舎をこまめにメンテナンスしながら事業費を貯め、満を持してキャンパス全体の建替計画に踏み切ったのです。

使いながらの建替計画ですので、大学としても相当なリスクがあつたと思います。それゆえ、プロポーザルの要求でも、最終的なマスター キャンパスプランの絵姿を求める将来ビジョンを大切にしたものであり、与件は大変細かなところにまで及びました。

キャンパス全体を対象とした建物有効率を低く抑え、都心でありながら学生のためのオープンスペースを多く確保することや、建替中の教室数やそれぞれの大きさ、学生の居場所など、事細かなプログラムが提示され、かなり引き締めて臨まねばならないと思ったのを憶えています。

3.設計者の役割

大学の姿勢は、設計が始まって変わりませんでした。学外へのアピールのことを考えれば、少しでも早く着手したいところですが、最初の半年から1年は、マスター プランの確定に心血を注ぎ、将来キャンパスの図面をすべて確定するまで第一期に着手しませんでした。

我々設計者はその間、学内に立ち上がった再開発プロジェクトメンバーとの打合せでしたが、学内ではその再開発プロジェクトのメンバーが、学内調整に扮装し、すべてが合議制で進んでいったのには驚きました。それも当初作成したスケジュールに乗っていたのです。我々設計者に求められたことは、単なる図面描きではなく、学校の理念を建築にどのようにあらわすのか。國學院の「らしさ」とは何か。コンセプトはソフトから、建築の素材に至る多岐にわたるものとなりました。黒板のあり方や、チョークがいいのかペンがいいのか。図書の管理方法から、学内の全ての本の数の調査など、小さなところから大きなところの表と裏にすべて関わることが必要でした。さらに、設計者も一人格で関わり続けることにより意思疎通があ・うんの呼吸で可能となり、その結果が信頼関係の構築につながったのではないかと今にして思います。

4.意識改革

第2期の講義棟の設計をしているとき、工事期間中に講義室数が足りないのではないかという問題に直面したことがあります。私にできることと言えば、キャンパスの中に空き部屋がないか調査することくらいでした。途方にくれたまま、次の会議に向かうことになったのですが、会議が始まって冒頭に一枚の資料が大学側より提出され、問題は解決したとの話がありました。唖然としていると資料の説明が始まわり、それには、残る教室数と大きさ、さらに前年のカリキュラムを分析し、朝1限から均等に割り振られ、最大限効率的に教室を利用したカリキュラム表でした。先生によっては朝の授業を嫌がる為、教室の稼働率が午後に偏重していたものを、「平準化すべし」と大学の方針として打ち出し、成り立ってしまったのです。

伝統のある学校ほど過去の慣習に縛られるものですが、すべての

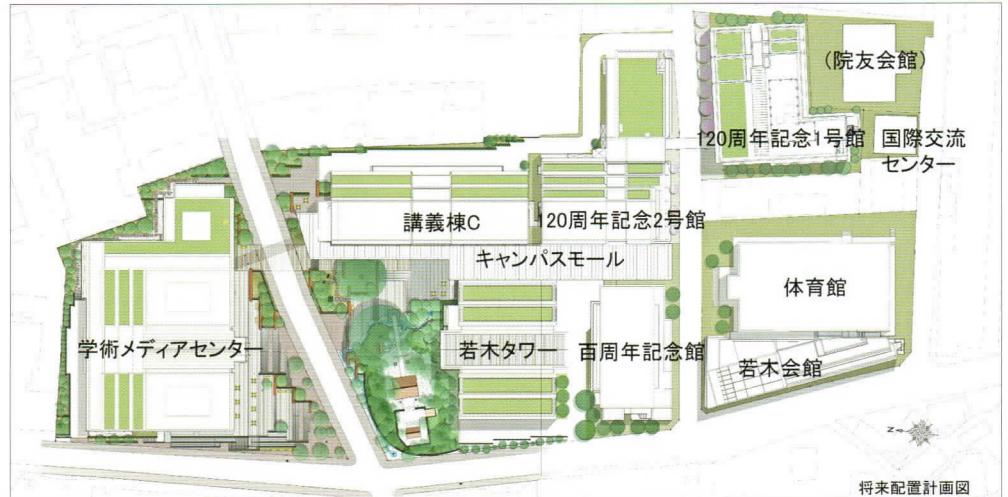
事柄が再開発に向けて改革されているのだと実感させられた出来事でした。

5.渋谷キャンパス計画内容

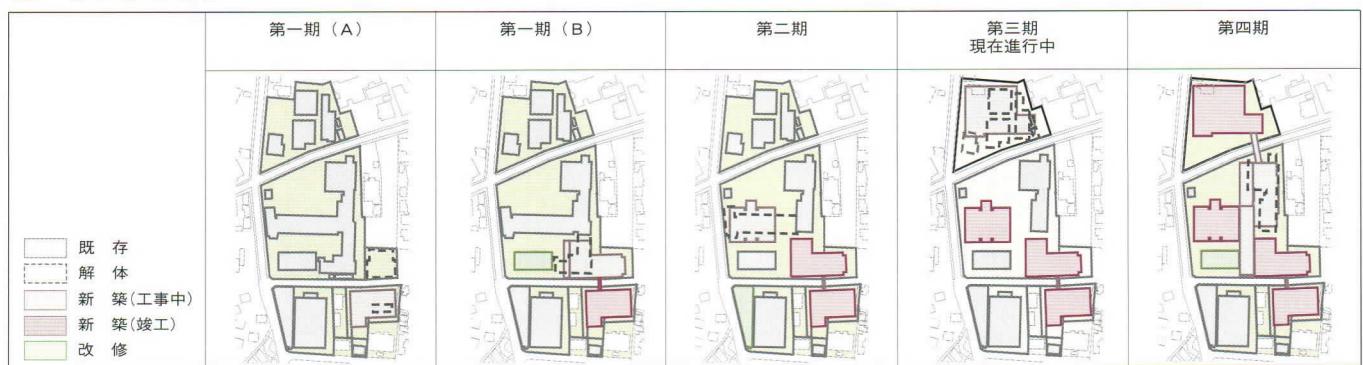
大学の新たなシンボルとなる18階建ての若木タワー棟を中心として、キャンパス全体を高層化し、限られた敷地を有効に活用した開放的で、快適な都市型キャンパスを再生することが目標です。2001年2月よりマスタートップランに着手し、2002年3月には最初の校舎である120周年記念1号館が竣工し、次に2号館、若木タワー棟が竣工し、現在メディアセンターが着工したところです。大学の日常的な教育・研究活動を支障なく運営しながら、敷地外の施設に頼ることなく48,000m²の既存施設のほとんどを建替え、最終的に58,000m²のキャンパスを完成させるためには、大学の運営と一体になった周到な建設計画が必要となります。敷地の南街区に新たに取得できた敷地に、最初の一棟である1号館を建設することをきっかけとして、以降、解体と建設を交互に行い、内部機能を段階的に刷新していくローリング方式を基本に工事中の利用者動線と工事動線の分離や、存続する施設のリニューアルを全体計画の中に支障なく盛り込み、計画の進捗に伴う様々な変更を吸収しながら、残すところ3年の再開発計画を推進中です。

6.都市を志向するキャンパス

生涯学習の進展による大学の多世代化や、修学時間の多様化、海外とのリアルタイムな交流による24時間化が進む中で、キャンパスは、学問を修めに来る場から生活空間としての性質を備えた総合施設へと転換し始めました。その為大学は、学生、教員、職員のみならず、



ローリングプラン





■若木タワー



■1号館

そこに係わる市民すべてにとって住み心地の良い場所となることが必要です。

高度情報化社会の到来にともない、大学の機能は、知識を生み授けるという一方通行では無くなり、経済界・政策との連携や海外研究機関との情報交・教授や学生の起業化などの動きに代表される横糸の繋がりや、小学校からの一貫教育化と生涯教育やリカレント教育などの縦糸の多様な活動を通じて、知的ネットワークの中心に位置づけられるようになってきました。情報化が進めば進むほど、返って人と人が直接出会うFace to Faceの交流の必要性が叫ばれています。大学においては、講義室や研究室といった機能空間のみならず、食堂やラウンジ、キャンパスモールなどの共用空間において、活発な交流の場が生み出され、教育・研究のための機能的な空間と補完し合うことで、大学の知的・文化的雰囲気を創り出すことが重要となります。

キャンパスを構成する校舎群は、多くの人や物が出入りするアクティビティの高い施設は地面の近くに、専門性が高く静謐な施設は高層化して、限られた敷地を有効に活用して、明快で分かりやすい空間構成を目指しました。

マスタープランにおいては、キャンパス全体の共用空間を周囲の都市に対して積極的にオープンにして、都市の中心に位置する渋谷キャンパスの立地が、最大限に生きるようにしましたが、その一方で個々の建物の中にも個別の共用空間を設けるようにしました。

共用空間のスケールに変化を与えることで、都市の中に普通に存在する大通りから路地空間へ至るスケールのヒエラルキーをキャンパス空間にも再現し、大学の様々なアクティビティに対する受け皿としてすることで共用空間の活性化を図りました。

7.都市にあっても環境と呼応する エコキャンパスを創る。

機能的で快適な施設を、最小のコストで効率的に運営することは、これからの大経営にとっては不可欠な視点です。単にエネルギー消費量を押さえるのではなく、自然の力を活用した総合的な施設設計を行い、将来の教育・研究環境の変化にも柔軟に対応していくける、高いフレキシビリティを備えた長寿命建築を目標としています。

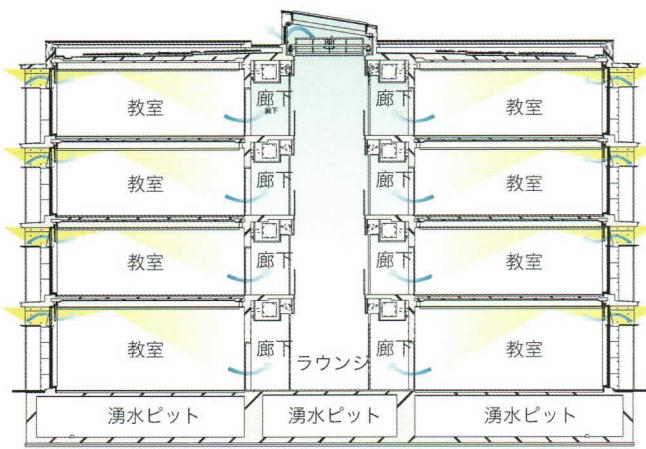


■2号館

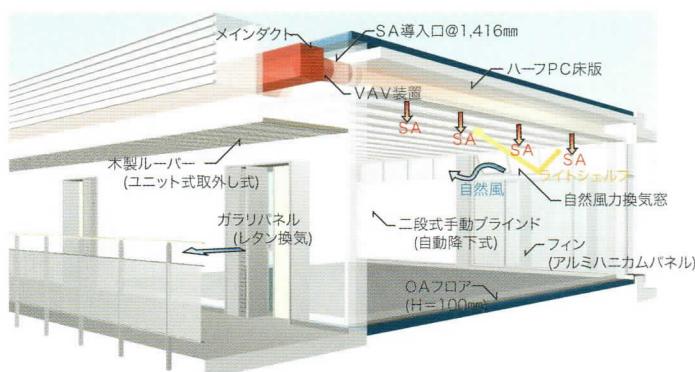
キャンパス全体の設計のコンセプトは、國學院大学の建学理念にも謳われている日本文化と伝統の特徴である自然を取り込み、周囲の環境と調和する現代の大学施設を創ることです。我国の建築は、もともと穏やかな気候風土の中にあって、自然と一体化することを旨として来たが、近年では伝統的な思想は影を潜め、都心のオフィスビルに代表されるように、建築の内部空間を外部から分離して、人工的に環境を制御することを前提に設計が行われるようになっていました。学校建築も昔は、永く自然換気を前提としたローコストな校舎が主流でしたが、ここ20年の間に都市型大学を中心に空調設備の普及が急速に進み、それに伴い多くの人工エネルギーが消費されるようになってしましました。國學院大学では、日本の伝統的な建築の作法に立ち返り、高密度な都市の中にあっても極力自然の力を活用して、エネルギー消費の少ない快適で長寿命な校舎とすることを目標としています。

8. さいごに

工学院大学を卒業して早12年、昔は学校の先生になりたいという夢を持っていた時期もあった自分がこうして学校建築に従事する日々が続いているのも何かの縁ではないかと思っています。今はまだ修行の身ですが、常に聞く耳を持った設計者になろうと思っています。



■吹き抜け環境イメージ



■窓まわり環境イメージ



■1号館アトリウム部



■自然の力で自ら呼吸する窓



■日射コントロールをした一般教室

主な業務経歴

東洋大学板倉キャンパス新築工事
鶴見大学仏教文化研究所
梁川町立梁川中学校新築工事
勤労体験プラザ
一関遊水池管理施設北上学習交流館“あいぼーと”

國學院大学 120周年記念1号館
國學院大学 120周年記念2号館
國學院大学 若木タワー新築工事
工学院大学付属高校新築工事
神田美土代ビル新築工事

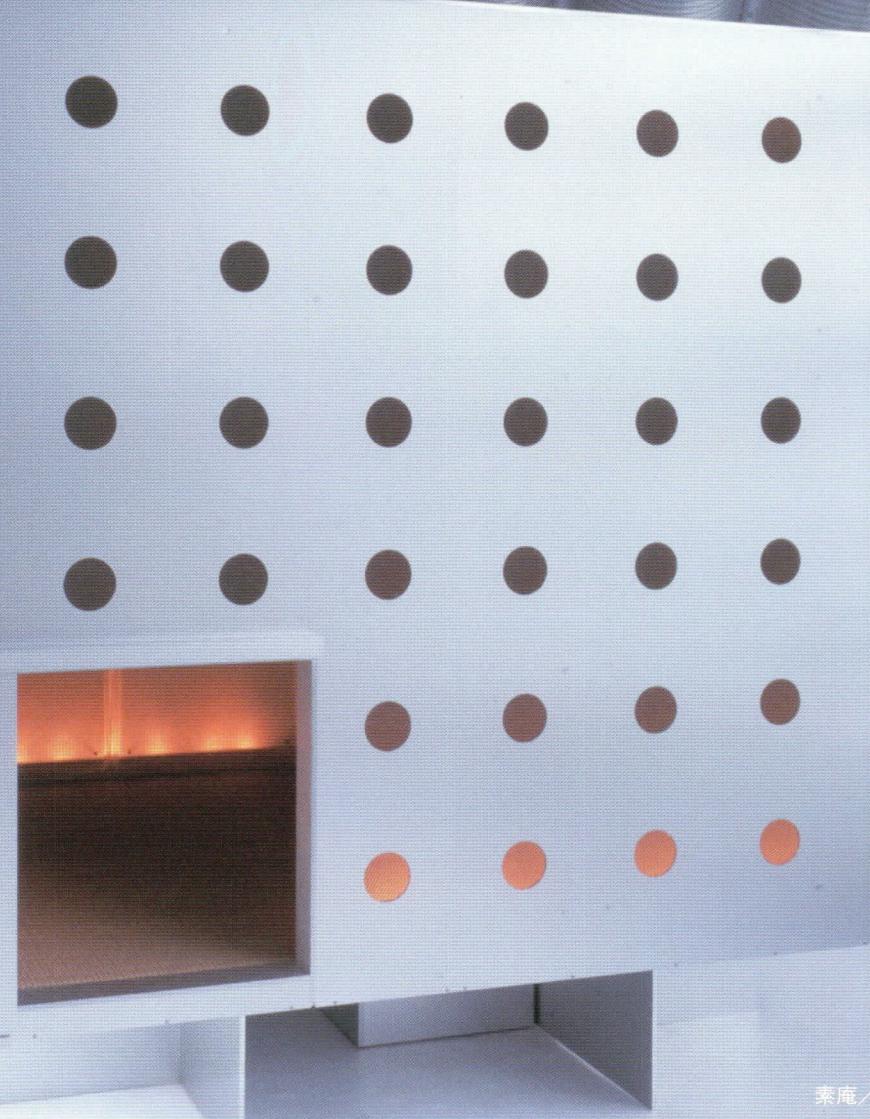
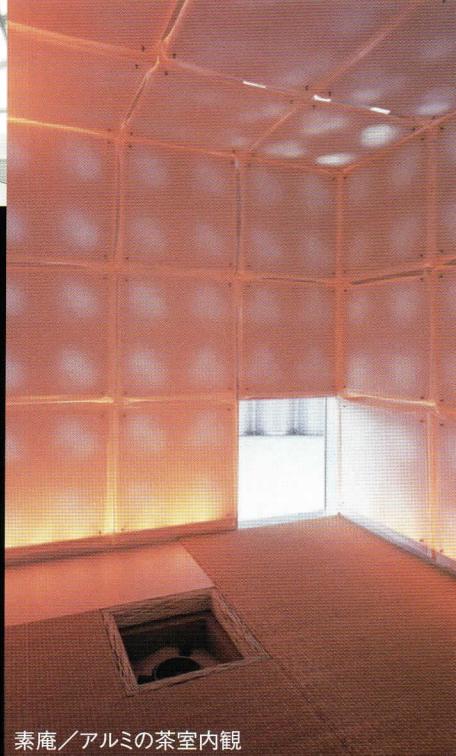
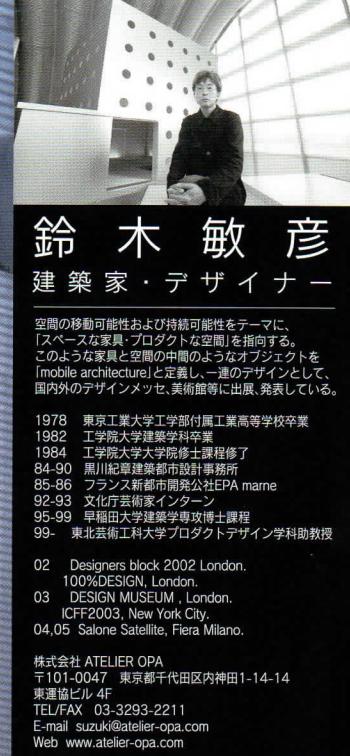
賞歴

梁川町立梁川中学校新築工事 2002年度文教施設協会施設計画部門協会賞

特別企画

“モバイルアーキテクチャー”

スペースな家具／プロダクトな空間





外観



A・B・C撮影 鈴木研究室／その他撮影 斎藤さだむ

1.はじめに

「決断だよ、すずきくん。」

卒業設計の最終段階で、どうしてもしきりこない部分があつて悩んでいた時、波多江先生がこの言葉とともに一本の線をぼくの図面に引いてくれた。その線は、ひとの流れを決定づける一枚の壁であり、その壁が見事にすべてを解決してくれた。あれから、25年。ぼくも今大学で学生を指導する立場となった。一本の線を引いてあげること。これが今、ぼくがめざす教育となった。

今ぼくは、プロダクトデザイン学科において家具・インテリアデザインの教鞭をとっている。そして、「プロダクトデザインにおける家具・インテリアデザインとは何か」という問い合わせをして、「建築とは何か」について改めて考えはじめている。本稿では、まず「インフィル／動く家」というマンションの1戸のリノベーションをとおして考えたことを述べ

る。次に、その際に感じた移動可能性と持続可能性から、モバイル・アーキテクチャーという概念に至り、それにもとづいて計画、建設した「山のアトリエ」というプロジェクトを紹介する。最後に、プロダクト、建築そして都市を横断する視点の重要性について考えてみたい。

2.プロダクトデザインにおける家具・インテリアデザインとは何か

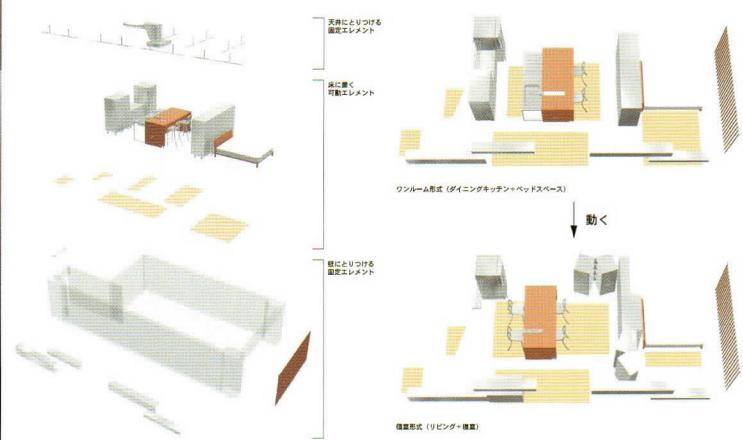
東北芸術工科大学のプロダクトデザイン学科に属し、家具・インテリアデザインを担当することになったことが、デザインとは何か、建築とは何かをもう一度考え直す契機となった。一般にインテリアデザインは、プロダクトデザイン学科に属しているが、それはなぜか。建築とどう差別化すべきなのか。この疑問に答えを出さなければならなかった。ちょうどその頃、オープンビルドイング・システムという概念について考え



寝室よりクロゼット越しにダイニングを望む



動くキッチン



ていたこともあって、その相互に関わり合う階層的な考え方には、その答えの手がかりを見つめた。

それは、家具と建築の中間のような空間的なプロダクトが、インテリアの使い勝手の自由度を高め、建築の寿命を維持し、都市景観の保全に貢献するのではないかという考え方だった。プロダクト、建築そして都市という相互に関わり合う階層的な視点から「空間的なプロダクト」とはなにかを明らかにすること。ひとつの答えがここにあると思った。つまり、アーバンデザインが都市的な視点に立った建築のデザインであるように、インテリアデザインは空間的な視点に立ったプロダクトのデザインと考えられる。都市が、建築が集まることによって生まれるように、インテリアはプロダクトによって機能する。ぼくは、インテリアデザインがプロダクトデザインの領域に含まれるということをこのように理解した。

3. インフィル／動く家

プロダクトと空間。空間的な視点に立ったプロダクトとそれによって構成される内部、その内部を持つ建築、そして建築によって構成される都市との連続した関係性。このような視点から家具・インテリアデザインのあり方を再考したのが、この「インフィル／動く家」のプロジェクトである。

この住宅のリノベーションは、SI住宅（スケルトン・インフィル）にお

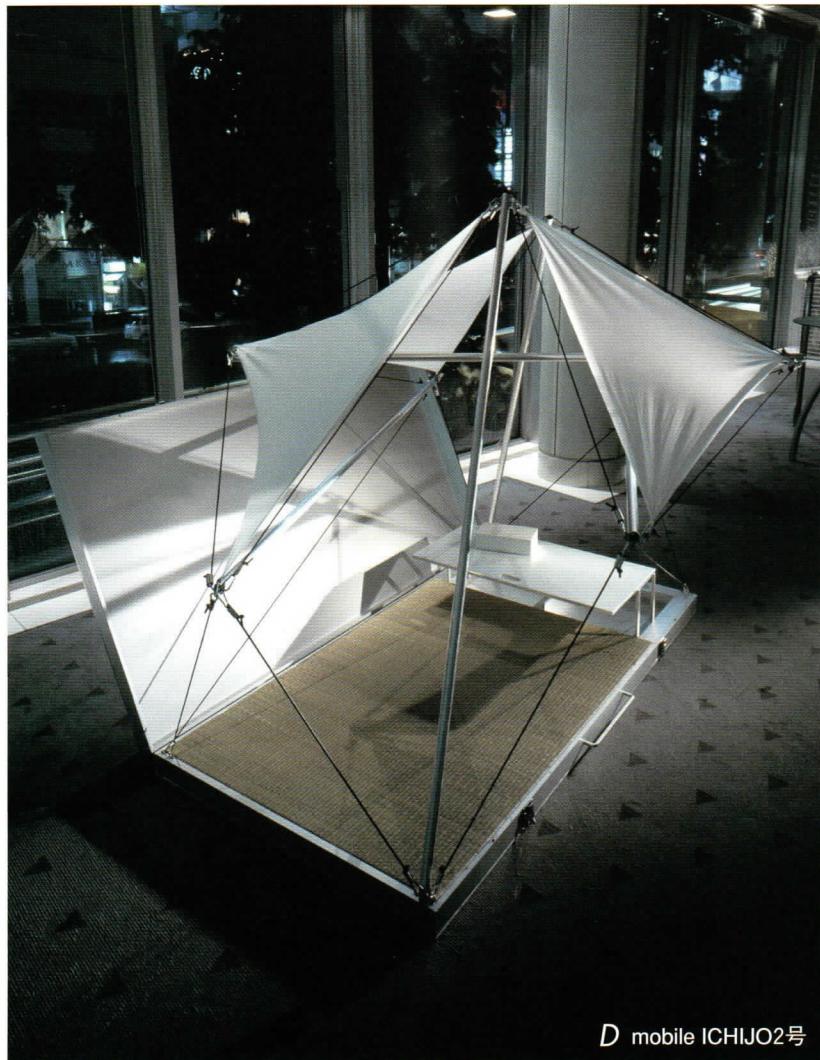
けるインフィルの提案であると同時に、ぼくの考えるプロダクトデザインにおける家具・インテリアデザインのあるべき方向性を示している。

インフィル全体は、すべてが移動可能性の高い、いくつもの空間的プロダクト（エレメント）の配置によって構成される。すべてのエレメントが、移動あるいは移設可能のため、ライフスタイルの変化に合わせた空間構成の変更が容易である。そのため、もっと大きなスケルトンに引っ越しするときもすべて持っていくため、不要なゴミが発生しない。つまりこの空間の移動可能性は環境の持続可能性に貢献する。

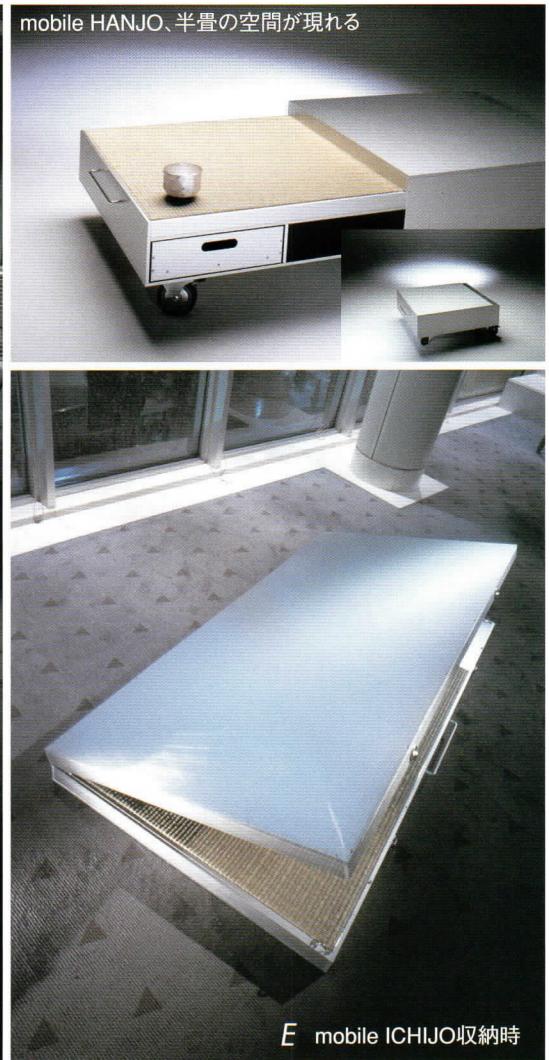
このように空間的な視点に立った移動可能性の高いプロダクトがインフィルを構成し、そのフレキシビリティによって居住者のライフスタイルの変化を寛容に受け入れる。それが、建築の機能的寿命を高め、建築によって構成される都市景観の持続可能性につながっている。プロダクトのデザインが、都市の持続可能性につながっていること。この視点こそが、もう一つの答えとなるだろう。

4. 山のアトリエ／モバイルアーキテクチャー

「インフィル／動く家」は、空間的なプロダクトによるプロダクトのような空間、つまり、「スペースな家具・プロダクトな空間」と言い換える。このような家具と建築の中間のようなオブジェクトを「モバイル・アーキテクチャー」と定義する。モバイル・アーキテクチャーは、移動可能



D mobile ICHIJO2号



E mobile ICHIJO収納時

D・E撮影 ©ナカサ&パートナーズ／その他撮影 斎藤さだむ

性を内包するプロダクトおよび建築である。プロダクトが空間的であれば、あるいは、プロダクトによって空間が生まれたり、プロダクトが置かれた空間に大きく影響を与えるような存在であれば、そのスケールにはこだわらない。その目的は、動く・変化する・分解できる・組み立てられる・移動できるというような移動可能性から、持続可能性を達成することにある。

このような観点から、たとえば、「分解しやすい建築が環境の持続可能性に貢献する」という考え方方が成立する。このコンセプトにもとづいて計画、建設したプロジェクトが、移動可能性の高い建築、「山のアトリエ」である。

全体は、主空間としての「シェルター」とそれをサービスする「エアーストリーム」から成る。したがって、両者は相互補完的に一対を成し、またすべてが分解・組み立て・移動可能を前提としている。敷地内のほぼ中心には白い花咲く梅の木があり、その木の西側にはアトリエの小さな窓、東側には夏でも冷たい蔵王の湧き水が流れて小さな池となっている。

現在、シェルターには、「素庵／アルミの茶室」、「mobile HANJO」、「mobile ICHIJO」が置かれ、一時的な茶の湯の空間となっている。したがってエアーストリームは水屋あるいは次ノ間として機能している。このような環境全体を研究室の「山のアトリエ」として位置付け、さまざまな活動の拠点としている。

移動する空間として生まれたこれらの建築およびプロダクト(モバ

イル・アーキテクチャー)は、移動時にビス1本も不要なゴミを発生しない。山の自然の生命力は図り知れない。この敷地も、ひと夏も過ぎれば自然がもとの景色にもどしてくれるだろう。その時に移動可能性による持続可能性が実証される。

5.おわりに

2つのプロジェクトをとおして、プロダクト、建築そして都市を横断する連続した関係性について考えてきた。これからは、このような階層横断的な視点から、もう一度建築を考えてみたいと思う。

今後、建築には、100年間以上の寿命、持続可能性が求められていくだろう。その際、将来を見越した計画には、内部の自由度が求められる。あるいは、近い将来、建設の市場の大半がインテリアに向かっていくと言った方がいいだろう。このような予測の上に、ぼくは、プロダクトの可変性や移動可能性から、建築や環境の持続可能性について考えてきた。しかし、このような考え方こそ、次世代の建築家に求められるひとつの方向性なのではないだろうか。

今ぼくは、インテリアの視点から考えてきたことを、もう一度建築の視点から考えてみたいと思っている。内部、あるいは内部を構成する空間的なプロダクトについて建築が考え始めたときにこそ、次世代のサステイナブルな建築が生まれるのではないだろうか。と、我が母校の建築家の卵たちに伝えたい。

特別企画

私の「ランドスケープ」という仕事



井上 洋司 mail:y.inoue@land.scape.co.jp

経歴(東京生まれ)
1969 都立昭和高等学校卒
1975 工学院大学大学院修士課程修了(伊藤鄭爾研究室)
一級建築士 登録ランドスケープアーキテクト
早稲田大学芸術学校講師
株式会社背景計画研究所代表取締役

気がついたら、「背景計画」

そもそも私がこの世界に入ったきっかけは、20代半ば、集合住宅の企画設計をしたことに端を発しています。今では、民間のデベロッパーの内部や一部の建築事務所で行う、いわゆるマンション建築企画を、地主さんと契約することで実行をするという仕事を、ある人と始めました。低層の中庭のある建物だったのですが、事業全体の収支計算をはじめ、デベロッパー探し、融資の銀行探し、土地の金融的条件整理、当然建築のとりまとめ、など其の業務は今でも無謀と思われるほど多岐にわたり、しかも短期間で行わなければなりませんでした。かなりの中庭としての外部スペースを企画できたにもかかわらず、実際にできあがった中庭は何となくできてしまったもの以上になっていました。

一方私は学生時代、伊藤鄭爾先生の研究室に在籍していましたから、よく昔からの町並みや、集落を見て廻っていました。ただ移築された民家園で見る民家の姿と、実際の村にある建物とでは、建物は民家園の方が立派に修復され小綺麗になっているのに、なぜか佇まいは、その場にそぐわない感じがしてなりませんでした。実際の村で見る民家の周りは、至極自然に感じられたのです。よく見ると、そこには、幾度となく繰り返された試行錯誤が読みとれました。排水の取り方の美しさ、なるほどと思わせる植栽の配置、其の場所でしかとれない石の加工の方法など、使っているものは高価なものではない



のですが、じっくりと考えられた要素の数々が構築され独特の佇まいを形成していました。しかも隣とは微妙に違うのに、その地域の”らしさ”を、そこはかとなく創り出している。

そんな風景を目のあたりにして、また前述の失敗をかんがみて、現代でもこのような外部だけを考える仕事はないものかと考えたのです。

地域や建築やそこにすむ人々の物理的背景を作るお手伝いができるないものかと考え、無謀にも「背景計画研究所」などという事務所をはじめてしまったのです。当時はランドスケープという言葉はあまり一般的な言葉ではなかったと思います。むしろ、日本のランドスケープアーキテクトの仕事は「背景計画」であると思ってはじめました。

だからと言う訳ではないのですが、私たちの仕事は、主役たちの隙間を縫って、それぞれの関係を浮き彫りにし、つなぎあわせるような仕事になっています。いくつかの例で私たちの仕事を紹介させていただきたいと思います。

建築との調整・今井ニュータウン (1998年冬季オリンピック選手村)

「私たちの仕事は、皆様方のお仕事の隙間を埋める仕事、つまり隙間産業です。」

こういってはじめたのが、この仕事です。長谷川逸子・遠藤剛生・内藤廣・元倉真琴・新井千秋・富永譲・松永安光諸氏のコンペで選ばれた建築家たちを相手に、長いランドスケープの仕事が始まりました。全体の会議は合計34回、3年に及ぶ作業でした。建築家諸氏との打ち合わせもさることながら、行政や関係諸機関との打ち合わせもあり、大変な作業量でした。中でも1/200の計画地全体のランドスケープ模型の上に各建築家の模型を並べ、建築とランドスケープ、建築と建築の関係を語り合ったことは、この計画の貴重な体験でした。つまり私たちは、この計画で建築と街・建築と建築の関係を調整する作業に専念したことになります。



1～2. 敷地内を流れる農業用水路を街の中に通す

3. 境目の土留めをかねたベンチ



嘗ての庭を再生し、敷地内への路地入口を街に向かえた。
成田山表参道三芳屋の例(左:改修前・右:改修後)

通りとの関係を整える・ 切手の博物館と成田三芳屋

一つの計画は工学院大学の先輩に当たる谷口宗彦さんからの依頼で、目白の切手の博物館の外構の仕事をしたことから始まりました。目白の雰囲気を伝える素材を見つけだしたり、自主後退して生まれる歩道のデザイン原理を提案することになりました。現在この博物館に向かう歩道は、緩やかなまとまりを持つ姿になっています。時間のあるときには是非みなさまに散歩していただきたいと思います。



歩道と敷地の境界を消すしつらえ

一方成田の三芳屋さんのリノベーションは市の補助金制度や電柱の地下埋設事業の等、いわゆるまちづくりの仕事の一環から生まれたものです。写真で見るように、事業の前後で町並みの連続性がよみがえったことがわかります。それと業種を変換することもこの仕事の大きな収穫でした。裏庭は今、成田の新名所のオープンカフェになっています。

この建築設計も、研究室ゆかりの中山繁信さんとのコラボレーションです。



何も使われていなかった裏庭を背景の竹藪で繋ぐ(右のみ撮影:栗原宏光)

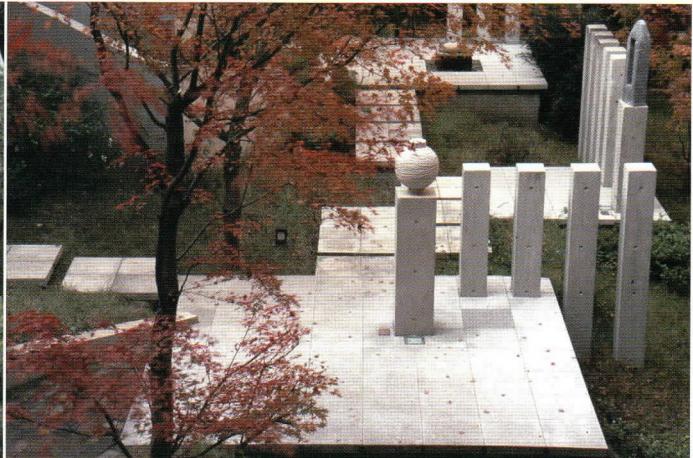
住む人との関係の場・様々な中庭

中庭論を展開できる紙面はなさそうですが、私たちは、中庭を周辺環境との調整の場・そこが人の住む場であれば、その人たちの人間関係の調整の場になるものと思って、様々な中庭を作ってきました。

荏田 小さな中庭しかも地下に駐車場があり、住戸が面する面もあります。中庭の活動の音が直接住環境に影響しそうな空間で、しかも部分的に高層階があるため、多くの人が上からの眺めだけで、季節をわかるような植栽を施しました。



子供が彫刻と遊べる庭



季節の変化を中庭の樹が知させてくれる

幕張13街区 直線で構成された町並みの中にあって、曲線を多用した空間を作ることで、住む人に街では味わえない体験をしてもらおうと設計しました。

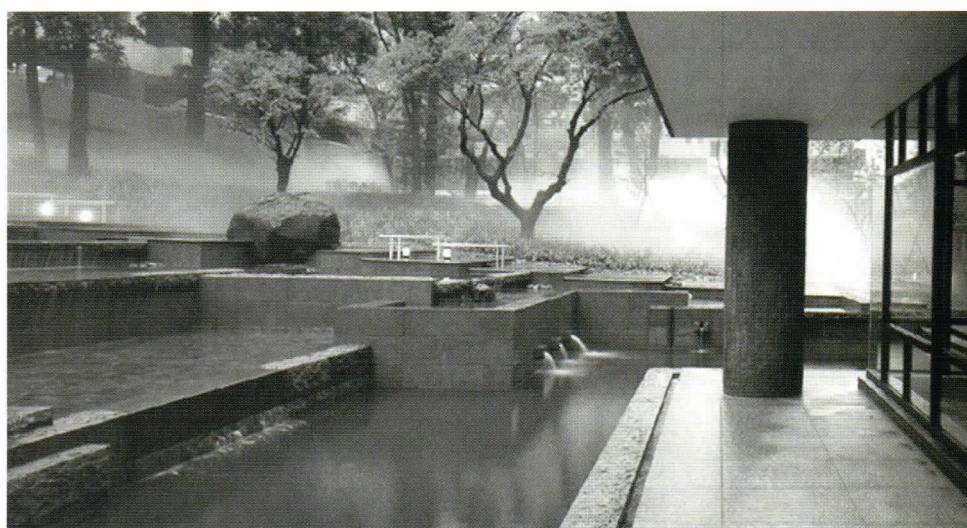


円弧は緩いスロープになっていて、2階まであがることが出来る



この町にあまり見られない円形で、構成された中庭

高井戸 約1200坪の広大な中庭はこのマンションの貴重な財産です。中庭の半分を既存の木々を残しつつ、住戸間の風景を整えました。



人工霧は保存された樹林を守る散水をしてくれる



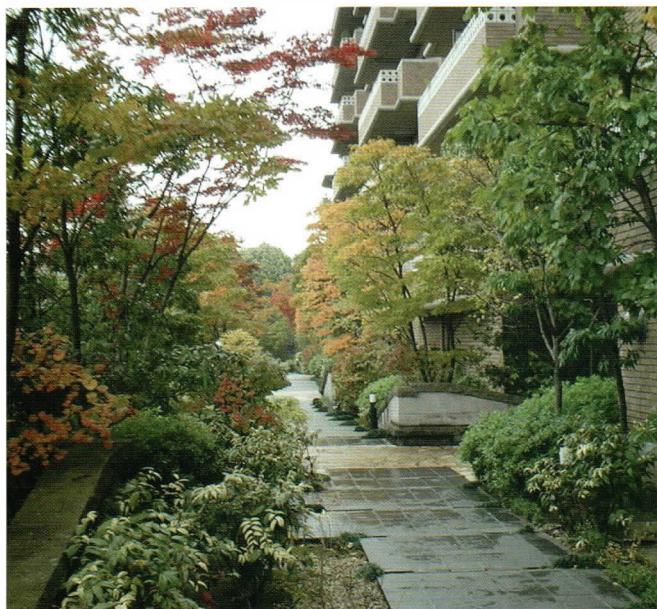
300戸の共通の財産になっている中庭、「中庭の会」が出来たそうです

時間と時間を繋ぐ・ あるマンション屋上庭園と脇町の公園

一つ目は屋上庭園です。土壌の厚みは、多くのところで、25センチ、当時は珍しい霧の発生装置が、共用の通路に面して設置されています。苔むす庭園を目指しました。10年後その庭は、ここに住まわれる人たちの愛情に支えられ、見事に完成していました。



苔をつけるためと、通路を通る人が散水でぬれないように人工霧の通路を設計した



10年後の姿、小さな木から育った木々、苔のある「現代の通り庭」

もう一つ同じ伊藤研の大学院・同級生であった最勝寺靖彦さんのお仕事の手伝いで、何もない公園の設計をしました。何も作らない設計は難しいものです。ただ茅が河面に吹く風に揺られる風景、公園名「船着き場」にふさわしい風景を目指したものです。ここ徳島県・脇町は文化庁の伝統的建物群の指定を受ける町並みを有しています。風にたなびく茅の向こうに、この伝統的な町並みの美しいスカイラインを楽しめる場・秋には刈り取りをし、様々なイベントを行える場に使えたらしいと思って設計しました。長い時間でできあがった街の姿を、いかにそのまま、次世代に楽しんでもらえる姿に包み込むかがこの公園のテーマです。

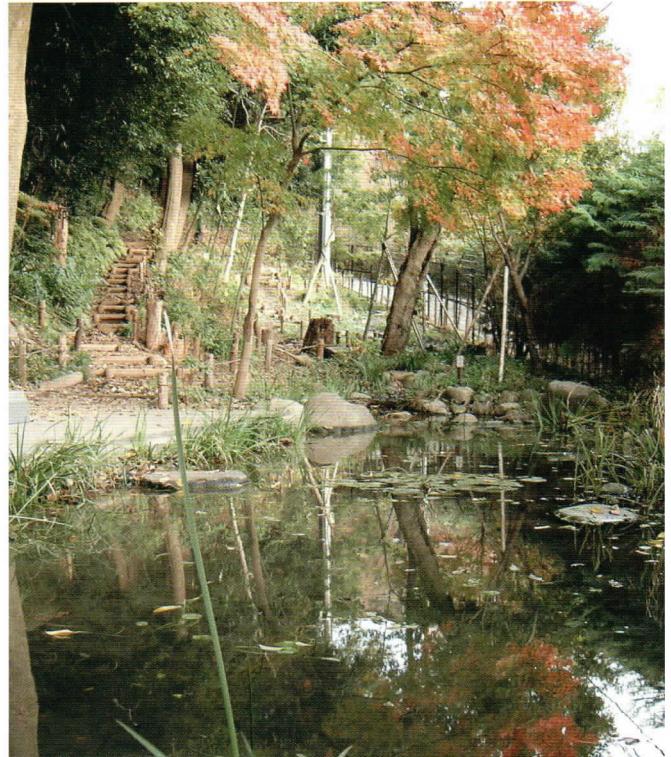
ともに、日々の時間が風景を少しずつ作り出せるようにするというちょっとした仕掛けを持った仕事と過去の時間が作り出してきた風景をいかに多くの人に享受してもらうかを腐心した仕事。ともに時間を意識した仕事です。



茅が育ち、白い穂が川風に揺れる日、この街のスカイラインを楽しんでほしい

自然との調整・ドミニコ学園すだれ沼

世田谷の小学校の敷地内にある小さな湧水池を保全する仕事をしました。生徒と自然をつなぐための環境テキストや保全活動のマニュアルづくりにも取り組みました。



「すだれ沼」といわれるこの池を保全する活動が、父兄の間でこの整備をきっかけに生まれた

ここに紹介出来なかった「隙間産業的仕事」も多々あります。

たとえば道路行政と交通行政の隙間に道路の整備・複数の地方自治体の間に横たわる河川とその周辺の修景・民地と公地の間に細い路地の整備・まちづくりの活動・ずいぶんと落ちたコンペ・でもそんな仕事のすべてが、それぞれの景を繋ぐ作業です。

そうです、私たちは全く新しい風景を作っているのではなく、心地よく、美しいが、特別でなく知らず知らずのうちに多くの人の心にとけ込んでしまう「背景」を作っていくことを理想として仕事をしています。そしてなにより大切なのは、このような私たちの仕事を理解してくれる多くの本学の先輩も含めた方々の存在があることです。今日もその方々に感謝の気持ちを持って、与えられた仕事をしています。

背景計画研究所:<http://www.land.scape.co.jp>にはそれらの仕事をまとめてあります。

受賞歴

1993年	“谷津遊路”(千葉県習志野市)	千葉県街並み景観賞知事賞
1994年	出石町うなぎの寝床町屋コンペ	(兵庫県出石町) 最優秀賞
2000年	彩の国さいたま景観賞	奨励賞
2000年	ウェルシティ横須賀港周辺街区計画	都市景観大賞「都市景観100選」

主な著書

日本の都市デザイン'85~'95(学芸出版・編集委員)
ノルタルジア・ブーン(エクスナリッジ社共筆)
雨の建築学(北斗出版・日本建築学会編・共筆)
雨の建築術(北斗出版・日本建築学会編・著・編者)

「落水荘」を訪ねて ライトの誕生日に



■落水荘

2006年6月8日、いよいよ「落水荘」を訪ねる。しかも今日はライトの誕生日。不思議なことに、この日程は計画したものではなく、日程調整を進めていくうちにまるで尊かれるように決まっていったのである。つまり、すべてのスケジュールが決定した後、偶然気がついた。南迫研究室とF.L.ライト、なんとまあ相愛な縁であることかと感激した。

ライトツアーは、南迫研究室にとって念願の企画であった。故・西村健太郎さん(南迫研究室第一期生・S43卒)が生前よく私に「高橋、いつか先生と卒業生の皆でライトツアーをやろうな！」と熱く語って下さっていた。残念ながら西村さんは、2年前その夢を実現する前に病で亡くなられてしまい、その役目は私に託されたものと、その時心に決めた。

南迫研究室は先生を中心に、先輩から後輩まで幅の広い、とっても仲の良い集まりである。「山の家」の建設をはじめ、いろいろなことをやってきた。そんな皆のエネルギーが私への応援となってこのツアーを企画・実施できたことと思う。

さて、当日は早朝から雨と濃霧に見舞われ、いったいどうなってしまうことかと不安な車中であったが、敷地へのゲートに近づくにつれあつ

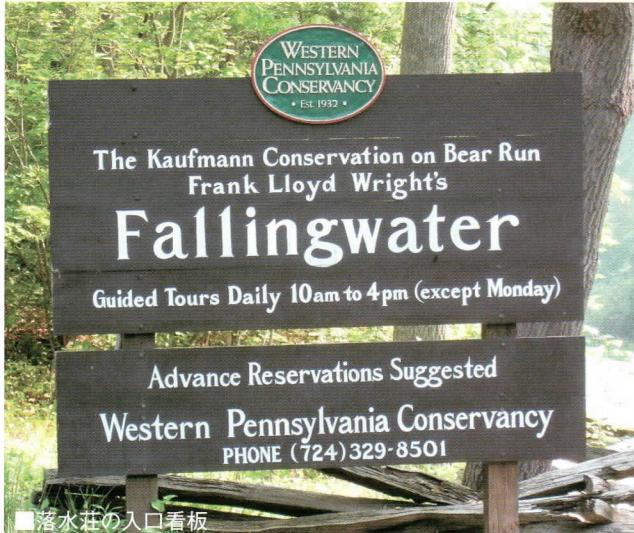
という間にすばらしい青空が広がった。そして緩やかなアプローチを下っていくと、新緑の森と雨露の中に「よく来たね。待っていたよ。」と語りかけるように輝く美しい姿を私たちに見せてくれた。思わず息を呑んだ…。私の人生の夢がひとつ叶った瞬間でもある。そして静かに滝の音が聞こえる…。森の木の葉から風の音も聞こえる…。目の前には「落水荘」。歩み寄り、やがて隙間のようなエントランスに吸い込まれるように入っていく。そこには、落ち着きのある静かな空間がある。心地よい…。そしてめぐるよう暗く狭い階段を上ると、2階の主寝室の先にブツッと明るいバルコニーが広々と展開する。まるで天空の棧敷だ。バルコニーに出て思わず背伸びと深呼吸をする。足の下からは滝の音と共に清涼感が流れ、目線には揺れる樹々が風の流れを描き出し、頭上には木漏れ日と共に無限の天空が続く。なんとも気持ちの良いバルコニーである。360度、ぐるりと見渡してみる。もう一度ぐるりと…。思わずため息が出た。ベストポジションである。そしてゆっくりと室内へ戻り、あちこちひたすら動き回ってみると、それぞれの空間がただ接しているのではなく、巧みに相互に編まれているのを感じる。「生活を楽しむための空間」として、とっても健康的に豊かに編み上げられているのである。またため息が出る。



■落水荘のレバーハンドル



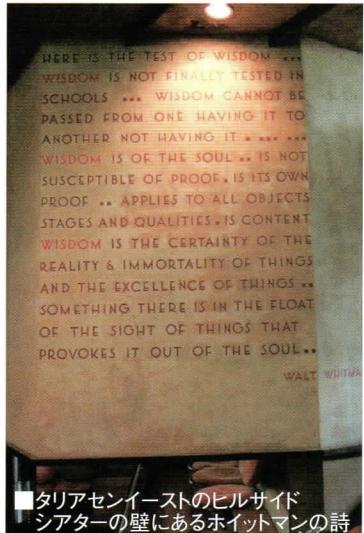
■タリアセンイースト



■落水荘の入口看板



■落水荘の外壁ガラス納まり



■タリアセンイーストのヒルサイドシアターの壁にあるホイットマンの詩



■「ウィンズロー邸

さらに水平に走り回る棚板や面縁が楽しい。ライトのそれは、まるで音楽(楽譜)の五線譜のように、規律を持った実にリズミカルなものであって、思わず踊りだしたくなるほど楽しい。本来、自然の中というものは実に細やかな陰影があるのであり、人間もその自然の中で進化・育まれてきている。陰影の少ない面というものは実に無機的で、近頃のファッション雑誌にもてはやされるようなミニマリズムのような空間は、果たして人間の住生活空間としてふさわしいものなのだろうか? (と言いながらこの前自分で設計したRCの建売住宅は、そんな真白な家を造ってしまった…。) 最後に皆で集合写真を撮影し、そして何度も振り返りながら別れを惜しんだ。

明後日はこのツアーのもうひとつの目玉「タリアセン・イースト」が待っている。

ホイットマンの詩を心の中で感じながら、タリアセンの広大な敷地を思いっきり歩き回ることにしよう!

2006年6月8日 南迫研究室ライトツアーにて。



高橋 昭彦

筆者略歴

1957年 新潟県生まれ
(新潟県立十日町高校より工学院大学付属高校に転入)
1980年 工学院大学建築学科卒業(南迫研究室)
1980年 (株)GA設計 入所
医療・福祉施設を主に担当
現在 副所長

(自宅)

〒169-0074 東京都新宿区北新宿4-25-3

TEL.03-3368-1218

(会社)

〒112-0012 東京都文京区大塚11-5-7SOB-101

TEL.03-5976-7711 FAX.03-5976-7755

E-mail ga-takahashi@po1.dti2.ne.jp

※南迫研究室OB会ホームページ

<http://www.sekoken.com/>

国際交流プロジェクトの経緯

建築学科助教授 赤木徹也



2005年度から開始されたUniversity of Wisconsin Milwaukee(以下、UWM)との国際交流プロジェクトは、本年度で2回目を迎えるました。

このプロジェクトは、UWMと和歌山大学との間で交わされた大学間協定に端を発しております。その延長線上において、後藤研究室(建築都市デザイン学科)と赤木研究室(建築学科)が、UWMの東京における

サポートを足立啓教授(和歌山大学)から依頼され、両研究室が本学における学生の教育効果向上、および、教員の国際的研究の手掛けとなりえる効果が絶大であると判断し、引き受けた次第であります。

UWMより学生を引率してこられるMatthew Jarosz教授は、建築家であると共に、Wisconsinに点在している建築家Frank Lloyd Wrightの建築物の修復にも取り組ま

れている保存修復(Historic Preservation)の専門家であります。

この国際交流プロジェクトでは、当初、予想されていた以上に学生間の活発な交流が行われており、UWM学生の帰国後も学生間で電子メールのやり取りが続いているように参加学生より報告を受けております。

参考:<http://www.uwm.edu/Dept/HPI/>

ベルリン工科大学 国際ワークショップ

建築学科助教授 藤木隆明

工学院大学とベルリン工科大学は、国際ワークショップを2年に一度行っており、2回目となる今回は、ベルリンでの開催となりました。工学院大学からは、講師として山本理顕教授と私、学生14名、ベルリン工科大学からは、Finn Geipel教授とSusan Draeger助教授、留学生を含む学生18名が参加し、「仮設建築」をテーマに、日独の混成チーム(6チーム)が与えられた敷地の中でそれぞれ提案を行うという課題に取り組みました。8月30日～9月7までの日程でしたが、課題が出されたのは8月31日で、また、最終提出日は9月5日でしたので、その間が実際のワークショップ期間といえると思います。最終日には、両大学の教官とともにドイツ・ナショナルギャラリーのキュレーターやドイツ人建築家数名がゲストクリエイターとして招かれ、講評会が行われました。課題が抽象的であったことや、外国人との英語でのコミュニケーション、短い期

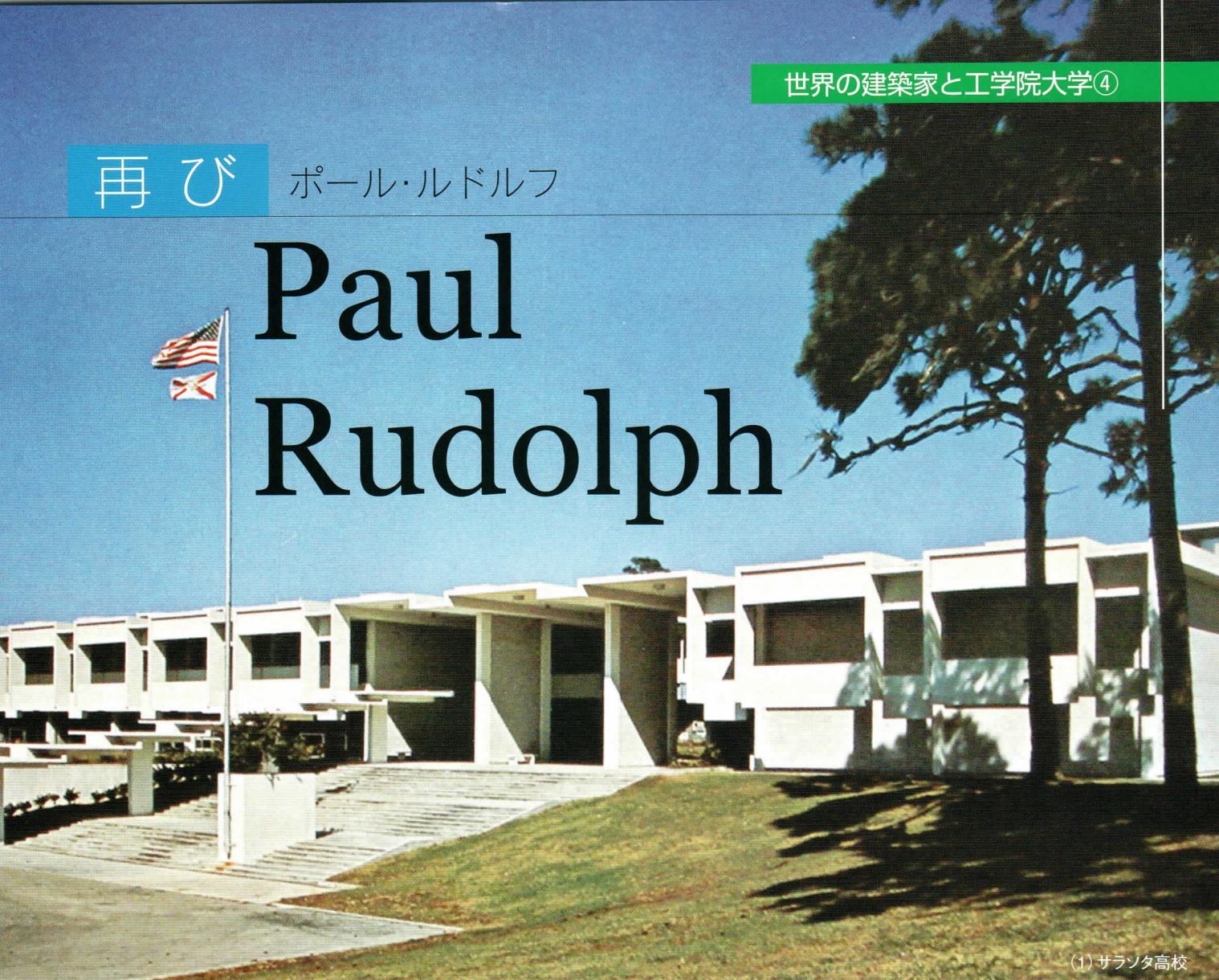


参加学生
(工学院大学
大学院修士課程14名)
荒井 希
石井 真
岡村 麻耶
忍足 知彦
鬼束 準三
金井 直隆
高倉 潤
高山 基
徳野 由美子
濱 奈津子
藤本 卓也
森野 和彬
八木橋 悠
鷲山 泰喜



再び ポール・ルドルフ

Paul Rudolph



(1) サラソタ高校



工学院大学 名誉教授

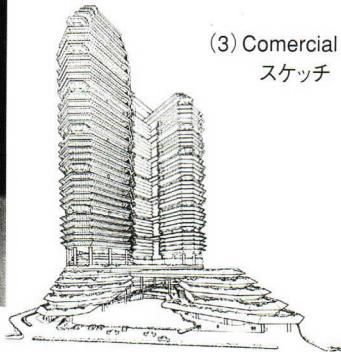
山下

司

主な経歴

- 1953年 3月 熊本県立済々黌高校卒業
- 1957年 3月 早稲田大学建築学科卒業
- 1964年 6月 米国、エール大学建築学部大学院卒業
Master of Architecture (学位)
- 1964年 7月 ポールルドルフ（エール大学主任教授）建築事務所勤務
- 1972年 3月 箱根国際観光センター企画競技設計優秀賞受賞
- 1974年 1月 米国、キャンサス大学客員教授
- 1975年 4月 Expo'75沖縄海洋三陵館
- 1979年 4月 工学院大学教授
- 1982年 6月 高陽ニューカウンセンター地区広場
昭和56年度都市計画学会賞、設計賞受賞
- 1983年 6月 第2回国際建築都市ビエンナーレ
1983年度グランプリ受賞
- 1985年 10月 麻生文化センター
神奈川県最優秀賞建築賞受賞
- 2001年 4月 工学院大学名譽教授
- 2001年 7月 御所浦博物館
- 2005年 3月 D'グラフト多摩センター煉瓦坂

(3) Comercial office Building
スケッチ



(4) ハーバーロードコンペ入選案



(5) シンガポールマンション模型写真



(2) SMTIホール、ステューデントラウンジ

約40年位前に同窓会誌の創刊号(昭和43年)に「ポール・ルドルフの横顔」と題して特別寄稿をしたことがあり、この記事を現在の編集部の皆さんに見つけてくれ、懐かしい気持ちで思い出が甦りました。

当時は私も若く教育と建築の創造に情熱を燃やしていました。箱根の国際会議場のコンペに入賞したのもその頃であったと思います。

そこで巨匠達の建築の思想とその方法論を学生の諸君に熱っぽく語ると同時に私自身も勉強していたのだと思います。特に私にとって師匠であり、仕事場でのボスであったルドルフは特別な存在で彼の一舉手一投足が注目的でした。彼の創造に対する全てを吸収したいと考えていました。そしてそこで獲たものを全て学生に伝えることが、教師としての私の仕事だと感じていました。そんな思いで学生の諸君に対していたので時に一人よがりで行き過ぎたこともあったかも知れません。今この特集記事を読み返してみると、現在の世界の建築界にこそ彼の考え方が必要ではないかと思われます。一見軽やかに見えるファサード重視の建築が流行し、彼が求めた都市空間における建物の意味、象徴、役割の表現が欠如し、人間性(ヒューマニズム)の欠如した都市になっているようです。そこで今回の「再びPaul Rudolph」では、NICHEの創刊号の記事を再録し、それに加え都市空間に於ける公共建築の役割を再録し、その後のPaul Rudolphのこと及びそのプロジェクトについて述べたい。

「真に立派な建物は、スケール、プロポーション、建物相互間のスペースの諸点において、互いに関連性を持たねばならない。公共建築、宗教建築、レセプションホール、都市へのゲートなどは、都市の焦点として考えられるべきであり、商業建築、事務所建築などは、われわれの都市環境を支配するような形であってはならない。-----われわれはモニュメンタリーの意味を探究し、靈感の発祥をうながす空間、静寂にして孤立した空間、賑わいアメニティに満ちた空間、そして境界を感じさせながら相対する二つの性格をつなぐ空間などを如何にして創造するかを学ばなければならない。空間には、

連続した継起、アーティキュレーション、ヒエラルキーが必要であり、これらが人々に予見の感覚を与え、方向を暗示し、空間のオーダーの中でクライマックスへと導く。これはルドルフの云う公共建築の持つべき性格である。

フロリダ時代の作品では、いろいろな機能とスペースを単純なアウトラインにまとめる傾向が強かった。そして、ルーバー、スクリーン、スカイライトなどの機能部品によって華麗なファサードを構成し、亜熱帯の太陽の下でその陰影は「新しい世代の輝しき知性に溢れたストラヴィンスキー」(写真1サラソタ高校)と言わしめた。しかしその後東部に計画されたフォード財団の実験劇場、ロードアイランドのアパートメントなどにおいては、内部機能及び空間ヴォリュームそのものを構成要素とし、さらにイェール大学建築芸術学部、サウスイースタン・マサチューセッツ工科大学、SMTIボストン(写真2)・ガウアメント・センターなどでは、中世イタリアの都市空間の手法が、ルドルフ独自のデザイン・ウォキャブラーを駆使し、最少のシステムの中で都市空間からインテリアまで連続した空間のドラマを感動的なまでに演出し、公共建築の性格を表現した。

Paul Rudolphは1918年にアラバマ州の牧師の子として生まれ、1997年8月ニューヨークの病院で肺癌のため亡くなった。その原因是恐らく第二次大戦中のブルックリンの海軍工廠とイェール大学のA+Aビル工事中のアスペクト吸入によるものと思われ、まさに仕事に命をかけた結果となった。死後、ニューヨークタイムズによる、追悼シンポジウムでは多数の参会者を集め大盛会であったと聞いている。1990年から亡くなるまでに3つの大きなプロジェクトをまとめている。それらは1990年『BangkokでComercial office Building(写真3) "Wireless Road Project"』、1989年香港、ワンチャイ、ハーバーロードのコンペで入賞図(写真4)、1989年シンガポール高級マンション等がある図(写真5)。これらの作品はいずれもPaul Rudolphの建築哲学と方法を具現化したプロジェクトであり、未完に終わったことが残念でならない。

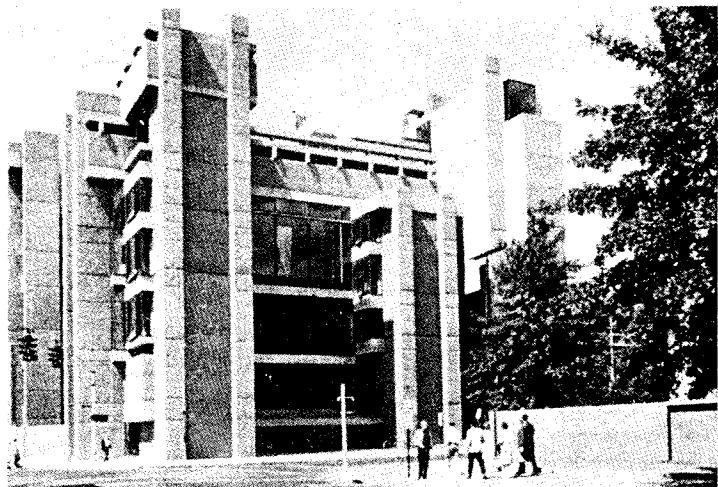
— 特別寄稿 —

ポール・ルドルフの横顔

工学院大学講師 山 下 司

私がポール・ルドルフに最初に逢ったのは、1960年の春、東京で開催された世界デザイン会議に出席のため来日中の時であった。当時日本では混乱した都市に対する再開発の確固とした Vision がなく、メタボリズムと云うキャッチフレーズのもとに、ユートピア的な空想都市計画によって、建築家の自己満足的な推案で大衆を啓蒙しようと考えていた。会議での日本建築家達の主要テーマは、メタボリズム、即ち、都市は生物の新陳代謝と同じように、常に古いものから新しいものへ交換出来る可能の次元で考えるべきものである。と云うことであった。このテーマのもとに計画されたいくつかの project に対し、会場でのルドルフのこれらに対する批評は、一言のもとに “It is no meaning” であった。紺の夏服をスマートに着こなした彼は、アメリカ建築界の青年将校と云う感じがした。物おじしない直裁なこの批評に私は好感を持つと同時に、意志の強さを感じた。その後彼は、工学院大学で彼の作品のスライドを見せながら、彼の建築哲学について講演をやった。正直に云って、彼のそれ迄発表されたいいくつかの住宅から得た私の彼の作品に対する評価は、あまり好ましいものではなかった。しかしこの講演を聞いて、彼の作品に対する考え方を改めた。その夜、食事をするため、彼の泊っていた日本での最高の室内空間を持つ帝国ホテルに彼を迎えに行つた。ロビーでの彼は、まづ最初にその空間の質の高さをほめ、そしてその空間の流動、構成、比例、自然光の効果について明確に分析した。レストランでの彼にとて、ハシを使うことは丁定規を使うのよりもるかに難しいように見えた、ウェイタレスの助けもあまり効果なく、むしろ迷惑そうに感じられた。そこでアメリカの建築界について色々と話し、その中でサーリネンに関して、“彼はセールスマンだ”，と云つた。これは後で Yale の学生より聞いたことだが、皮肉にもルドルフ自身が最近は忙しく

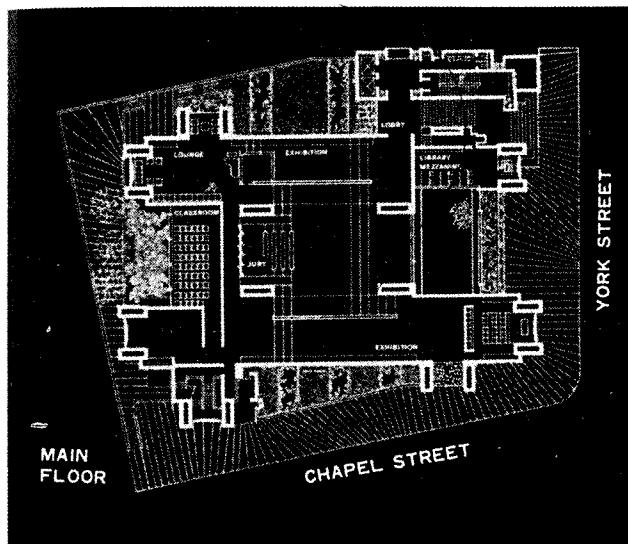
“まるでセールスマン見たいだ、と云われている”。と聞いた。この食事の席で私は彼の元で学ぶことをすすめられた。それから4年後の1964年9月、やっと渡米のチャンスがやって来た。私は Yale 大学のある NEW HAVEN に着くと直ちに Chapel St. に出た。彼の代



Art & Architecture Building, Yale University. /1963

表作である建築学部校舎 (A&A) を見るためであります。この建物を見ることによって、彼の建築に対する考え方、アプローチ、方法論が学べると思ったからである。Chapel St. から見るこの建築のコーナーは、他の多くの Yale campus のタワーがそうであるように、一つの重要な焦点として私に話しかけた。Binghan Hall, Art Gallery, Karn の New Art Gallery と続く一連の動きを彼の A&A のコーナータワーが強く受けとめ、建物に近づくにつれて、A&A は次第に大きく横に広がり、屋上パラペットのリズムがそれを強調し、そしてもう一つのコーナーにつながり、campus えのゲート、コーナーサイドの建物としての動きを充分に果していた。この建物に対する彼のデザインアイディアは、建築及び芸術の教育にふきわしい創造的な環境を、Active に創りだし、その形が都市に対していかに語りかけるべきかと云

う。建物と人間との間に雄弁な communication を成立させようとの試みから出て来たように思われ、それが充分に成功していると思われる。

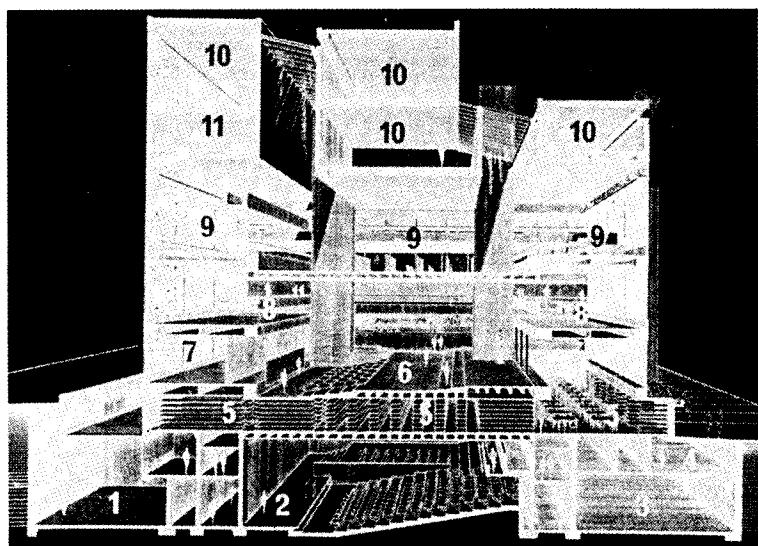


A & A. Building, Main Floor Plan.

実際私は、ルドルフが創ろうとしたものと同じかどうか知らないが Main FL. の入口、Exhibition Space, Student Lounge からこの階の支配的空间である Jury Space えの空间の集中的な動きと、さらにここから中2階の Office 階及び階下の図书館えとつながる Space の動きを充分に感じることが出来た。特に4階の製図室に於いては、その動きは更にダイナミックであり、この space は建築を学ぶ学生にとって、最も重要な創造的な雰囲気を創り出し、一年の短い間であったが、私は充分にこの空間を楽しみ、かつ学んだ。そしてこの space は私にとって生涯忘れることの出来ない space でもある。そこには Human な空间を創造すると云う一つの大きなテーマの下に、強い order があり、単純な system が、ディテールから構造、space そしてマッスの combination 迄つらぬかれ、この order を支えている。その system とは、長方形の積み木を面と面で重ねたようなものであり、これが次元に充分駆使されている。私は、この建物にライトの建築のもつ Human な space を感ずると同時に、コルの建築の持つダイナミックな迫力を感じた。この迫力こそ、建物及び都市が持つべき人間に対する communication であろうし、かつて中世の都市の素晴らしさもここに起因するのであるま

いか。私は Yale で学んだ一年間、毎朝の登校時にこの建物との精神的対話を楽しんだ。

私の二度目の彼との出逢は教師と学生と云う立場であり、その場所は彼の設計した A&A Drafting Room であった。これは教師にとっても学生にとっても、まったく理想的な状態であり、創造の場と云う緊張感があふれていた。二度目に見る彼は、4年前の青年将校と云う感じより、堂々たるアメリカのリーダー的建築家である様にみえた。教師としての彼は、厳格そのものであってクラスに於いてはめったに笑はないが、笑えば糸切歯が出て、愛想のいい感じさえ人々に与える。全ての学生にとって、彼の criticism は絶対であり、彼の顔色を見て学生は一喜一憂したものである。実際、Master's class には5年～10年の経験を持った建築家が数人居たが、彼等の図面に対するルドルフの読解力は実に早く適確であり、彼等自身よりはるかに深く読んでいた。彼の criticism は実にきびしいものあり、数人の学生の顔色を青ざめさせる程であった。ある時、学生の作品に対し structural Expressionism をいましめ、「私は16年前、カテナリーの住宅を設計したが、カテナリーの構法は、もっとそれにふさわしい規模のものに使用すべきだ。まだ若い私は、たった 22ft の span にカテナリー*を使ってしまった。もっと大きいものでそれを試みるまで待て

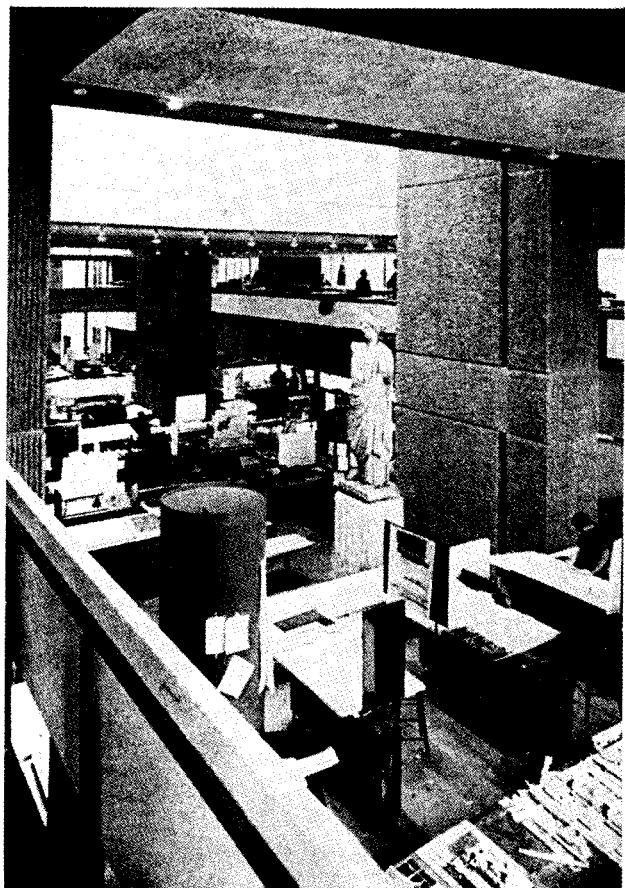


A & A. Building, Section.

- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1. SCULPTURE STUDIO | 7. CLASSROOM |
| 2. LECTURE HALL | 8. FACULTY OFFICES |
| 3. MECHANICAL | 9. DRAFTING ROOM |
| 4. DARKROOMS | 10. PAINTING STUDIOS |
| 5. LIBRARY | 11. STORAGE |
| 6. MAIN HALL & "JURY PIT" | |

なかったからだ。」と学生を笑わせた。

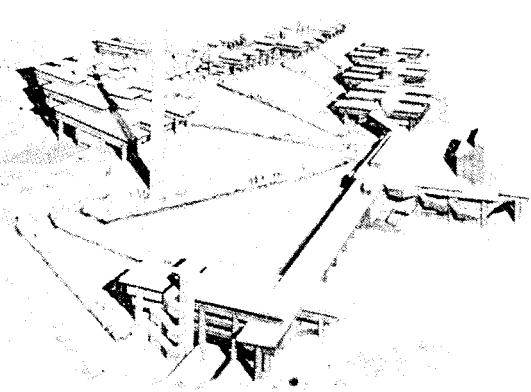
私は Yale を卒業後更に彼の彼の建築に対する方法論を学ぶために、彼の office に応募し、運よく彼の下で働くことが出来た。office での彼は、全く天皇みたいであり、全てのデザインが彼の手によってチェックされる。彼は常に忙しく、歩くことを知らない。いつも広くもない office で図面の間を走っているように感じられる。協同設計の何たるかをよく知っている彼は、所員の意見をあまり重視しない。ある日、一人の所員に対し “I am never ever interested in a excuse.” と云ったことがあった。実際、Design の出来、不出来がその日の彼の気嫌を決定する。幸福な時の彼は口笛を吹きながら、実際に楽しそうに、スケッチをやったり、皮のクッションの上で昼寝をしているかと思うと、突然起き上り、製図板の上でスケッチを始める。不気嫌な時の office は非常に静かである。私がいた時、彼の office では、ボストンガヴァメントセンター、シラキュース市庁舎、コルゲート大学アートセンター、南マサチューセッツ工科大学、ロードアイランドのアパート等の仕事が進められていた。これらの建物のどれもが、それぞれの時代の代表的な建物になり得るものであると思われる。これだけの仕事をかかえているのに office の所員はたった 15 人であった。したがって彼の忙しさは大変なもので、週初めと週末の数日だけ office に居て、他はボストンやシラキュースに行き、彼にとって土曜とか日曜は全くなく、飛行機とか、汽車とか、会議場のテーブルがたびたび彼の Design の場所になり、それらの場所でやったスケッチが所員の手で図面化され、それを更にルドルフがチェックすると云う様なことがくり返えされる。建築は彼にとって全てであり、その他に趣味は全くな



A & A. Building, Drafting room.

い。タバコも吸わないし、酒もあまり多くは飲まない。スポーツもあまり彼の興味を引かないようである。彼の office での presentation drawing はすべて彼のチェックの下に行なわれ、その Drawing については仲々ウルサイ。彼は巨大な図面が好きで、長さ 20ft 位の図面が数多くある。彼の staff は皆、非常にいいパーソナリティであり、私は非常に楽しい事務所生活を送ることが出来た。

彼の現在もっとも力を入れている建物は、ボストンガヴァメントセンターであろう。何故なら、彼は現在、都市に於いて建物の役割は如何にあるべきか? と云うことに対して強い意見を持ち。この建物が、それに対する解答だからである。彼は都市の core になる建築をいくつかあげているが、公共建築はその一つである。この敷地はボストン再開発計画の中心をなす地域であり、現在、工事中の新市庁舎につづいている。この計画の main concept は都市の core としての public building は如何にあるべきか monumental



South-Eastern Massachusetts Technological Institute (SMTI)/1964

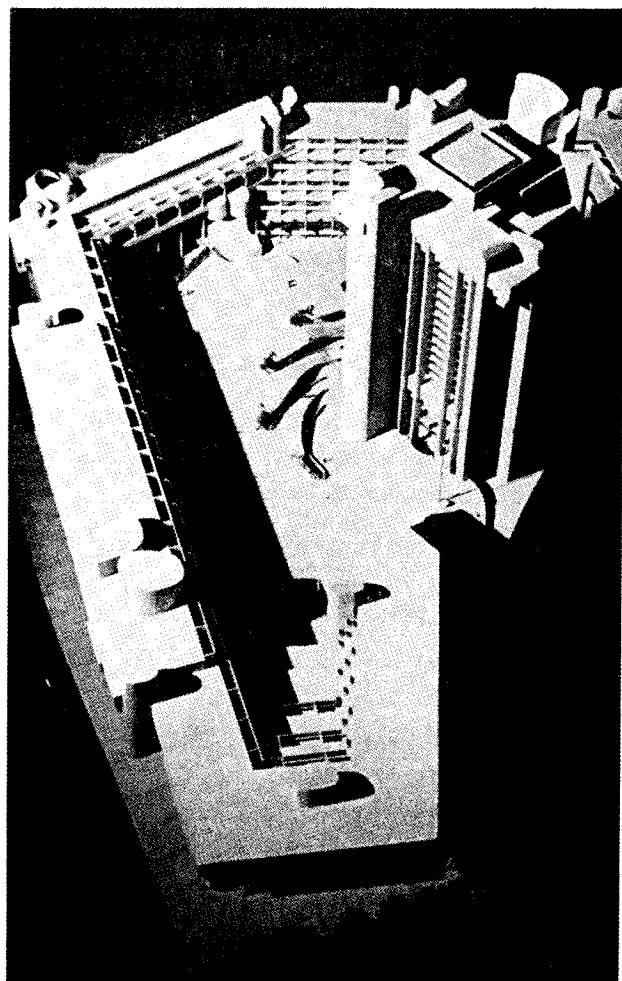
な性格を持つべき都市の core となる建築に、いかにして Human Scale を持つ space と form を与えるかという点である。

彼は米国に於けるリーダー的建築家であると共に、最も out spoken critics の一人であり、きびしい建築教育家であり、1956年、A・R に発表した、six determine of Architectural Form. をはじめ、数多くの論文を発表している建築思想家でもある。そして、非常にセンスのいいユーモアの持ち主でもある。ライトなき後のアメリカ建築界において、彼の存在は非常に大きいと云わねばなるまい。

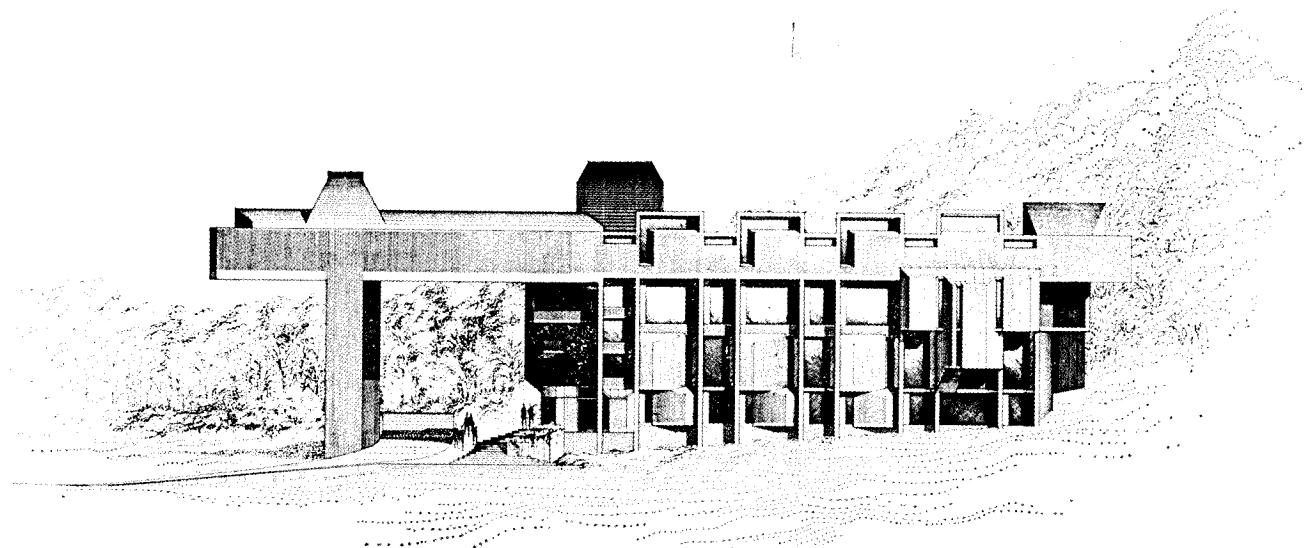
〔註〕 *吊屋根の週末住宅/1950



Paul Rudolph



Boston Goverment Service Center/1964



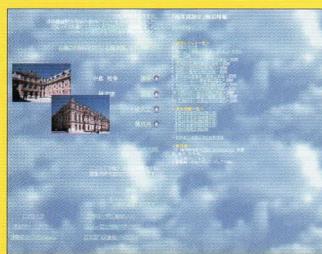
Colgate University, Hamilton, New York,
Creative Art Center/1964

www.

工学院大学建築系学科 ホームページの紹介

20

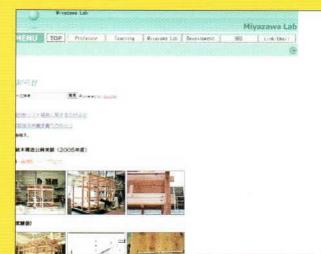
■建築学コース



中島智章研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13029/>



初田研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1015/>



宮澤研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1019/>



吉田研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1035/>

■環境建築コース



東研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1030/>



遠藤研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1018/>



大橋研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt72069/>



藤木研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1034/>

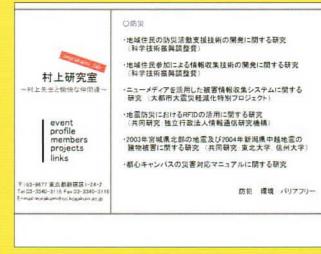
■建築都市デザイン学科



野部研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13006/>



久田研究室
<http://kouzou.cc.kogakuin.ac.jp/>



村上研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1028/>

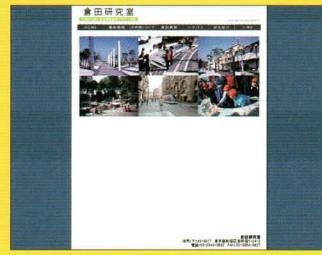


小野里研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1026/>

■建築都市デザイン学科



窟田研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1029/>



倉田研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1031/>



後藤研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwa1023/>



澤岡研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1021/>



谷口研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1022/>



中島裕輔研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13052/>



野澤研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~nozawa_lab/



望月研究室
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt61124/>

特別企画

Travel to India

インド、人間と生と死



小野 司

ononomono2005@yahoo.co.jp

経歴

出身高校 東京都立立川高校'96年卒
工学院大学 谷口研究室2000年学部卒
早川邦彦建築研究室 バルフィ総合建築計画
神崎建設株式会社

カシミアウールの原産地、カシュミール地方。スイスを思わせるさわやかな高原地帯。インドにもこんな地域もある。

インドへ

人間誰しも、時に自分を取り巻くしがらみが嫌になるときがあるだろう。どこか、自分の知らない全く違う世界へ行ってしまいたい。そんな手前勝手な欲望を抱いていた自分は、気づいたらスケッチブックを片手にインドの大地に立っていた。はじめは建築を見るのが主で行ったつもりだったが、インドはそれだけで済ませてくれるほど甘くはなかった。

灼熱地獄

摂氏45度、2005年5月のインドは乾季の真只中。インド北西部～パキスタンにかけて広がるタール砂漠を行く。その暑さたるや半端ではなかった。日本ではうだるような暑さというが、こちらの場合、蒸発してしまいそうな暑さといつても過言ではない。夏が好きだった私も、ここまで不毛な砂漠をエアコンなしの車で走っていると、さすがにまいってしまった。車の中はオーブントースターで焼かれているようで、窓から入ってくる風はドライヤーの熱風と違はずだった。

さらに厄介なことには、インドはかなり広大な国で、道も悪く、地図の上では近そうに見える隣の街まで、平気で6時間とか8時間くらいかかるってしまう。そして夜は街灯もなく、道路も穴だらけなので夜の涼しいドライブは様々な死の危険に満ちている。したがって移動するなら必然的に灼熱の日中でとなってしまうのである。

縁起でもないといわれるかもしれないが、僕は実感として「死ぬ」という感覚がわかった気がする。インドの厳しい環境の中では、天災としても人災としても、いつでも死ぬ危険性がある。僕はそんな厳しさのなかで、初めて

自分が生命体として呼吸して、心臓を鼓動させて生きているんだという実感がわいてきた。どうしようもなくうれしく、また怖い感覚だった。

暑くてどうにもならないことが、インド特有の、のんびりさも引き出している。無理をすると死ぬかもしれない。だから、強行軍はできない、休み休みいこう、という具合になる。実際、最も暑い日中はほとんどの人が日陰でしゃがんでいるか、休み休み働いている。

路上の驚異

こちらに来てから最初のうちは見た目にインパクトのあるものにまず目を奪われる。道路では、過積載の車が目立つ。バスなどは中も外もベコベコに凹み、真っ黒にすすけている。超満員で東京のラッシュ時の電車のように寿司詰め状態、屋根の上にまで20人以上乗っている。車の側面や後ろにもさらに20人くらいがへばりついていて、重さで傾いてよたよた走っている。炎天下で屋根の上に乗っていては、気分が悪くなつてバスから落ちたりしないものだろうか? そんなことを考えている最中にもまた1人、また1人、バスに駆け寄り、あいている隙間にしがみついていく人たち。個人の乗用車でも、つかまるところがあると勝手にどんどん乗り込んでしまう。とにかく自分と同じ方向に行く車は乗らないと損だと考えている。道行く車はとにかく人満載か、物満載で走っている車ばかりだ。ひどいときには、ポンネットにまで数人、絶妙なバランス感覚でどこにも捕まらずに乗っていた。運転手がまるで見えない。どうやって運転しているのだろう?

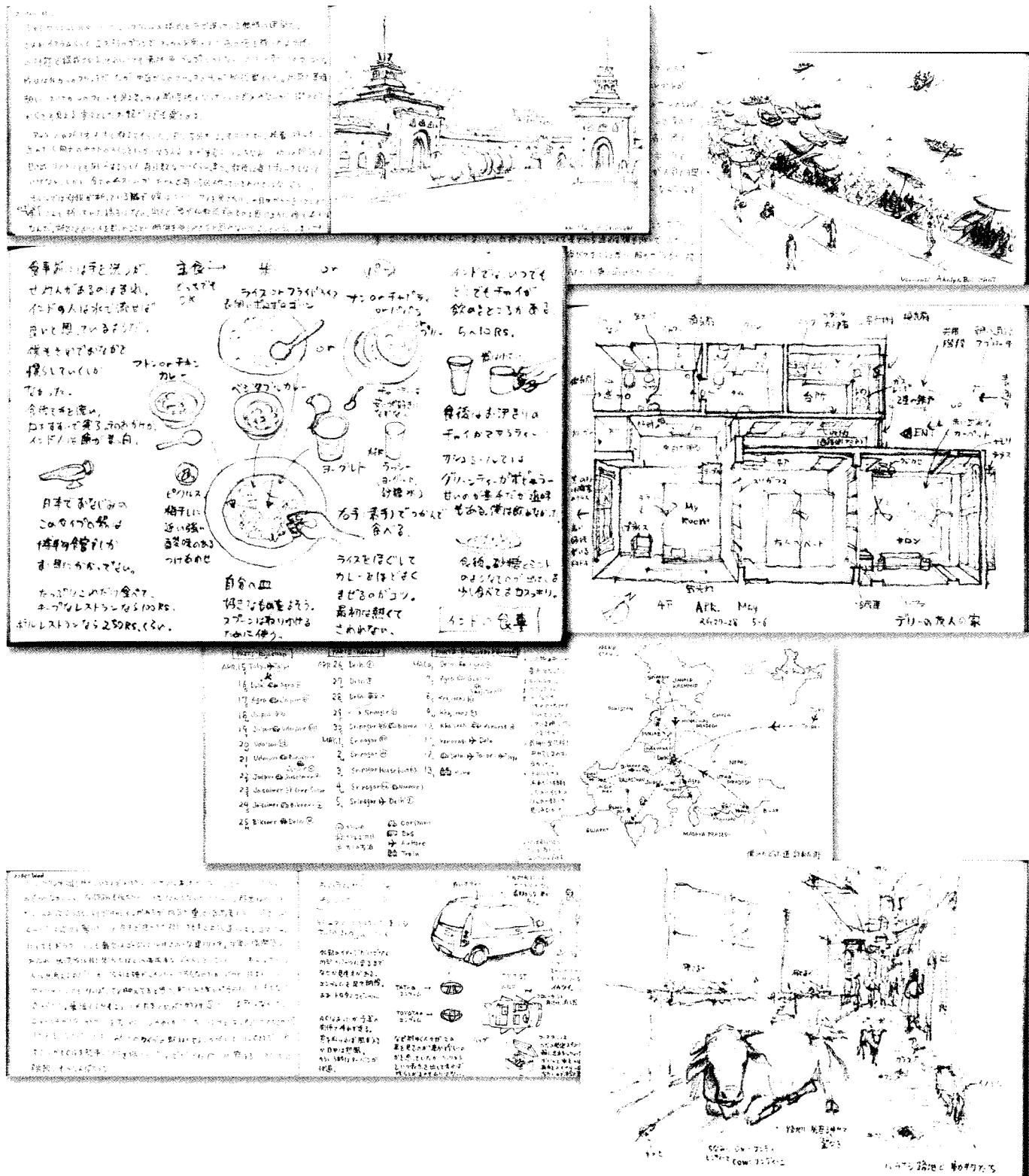
スケッチに群がる人々

僕は建築や風景をスケッチし、日記をつけながら旅をした。インドの時間の流れは日本の半分のスピードに感じる。スケッチする余裕もある。日本ではあまりスケッチを観かれることもないが、インドではみんな好奇心旺盛で、しかもいつも退屈しているらしく、スケッチをしていると面白がってどんどん集まってくる。描いている途中は話しかけてはこないが、みんなそれぞれに絵について話している。『あ、あの塔を書いているとこだ』『いや違う。あっちの塔をかいてるんだ!』『鳩が書かれていません、鳩はどこだ。』『窓の数が1,2…12個。本物と同じだ!』など、勝手にワイワイとやっている。目が良い彼らは、僕の小さいスケッチブックの中身を遠くからよく観察していると意見を言ってくる。こっちが見られて気まずいのではないかとか、邪魔しては悪いなとか、そういう配慮は一切感じられない。自分の退屈しのぎが、世の

中で最も重要なといわんばかりに、僕のスケッチを楽しんでいる。10分後、スケッチを終えるころには多いときには30人くらいの人だからができる。そして、その人たちと握手で挨拶を交わして別れていくのが、毎度のパターンとなってくる。その中には、さきまで僕をだまそうとして必死にほつたり値を吹っかけてきていた土産物売りもいるから面白い。握手するとそのバカ高いはずのお土産をくれた。根はいいやつなのだ。

必死な旅

インドに慣れていない自分にとって、インドで何かするときにはいつも「必死で」取り組まないとならなかった。買い物するにも、値段を交渉し、ほつたり、釣り銭のごまかしなどに必死で注意し、食事も安全なものにありつくため



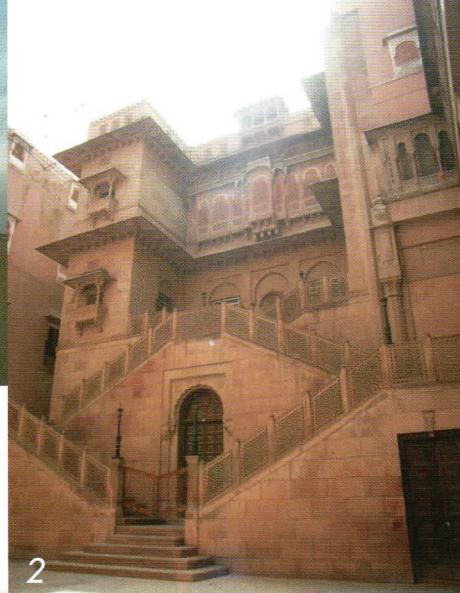


ジャイナ教の寺院。すべて白大理石で柱も天井も精緻な彫刻が施されているのは圧巻。

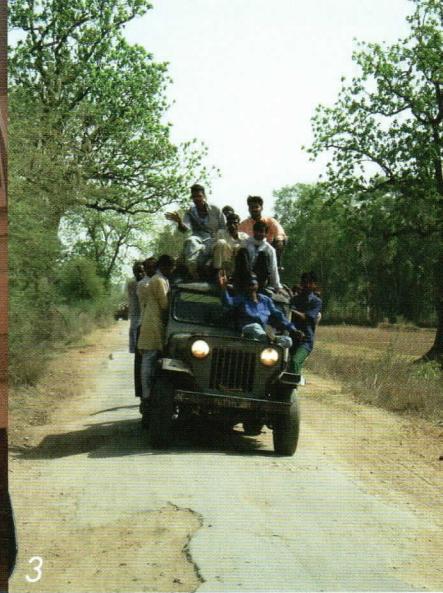


1

- 迫りくる巨大な砂嵐の壁。10分後には巻き込まれ、視界が全くなくなった。しかし現地の人はへっちゃら。
- ビカネルの砦。ラジャスタン州で典型的に見られる様式。
- 時速10km未満で走る、乗用車。後ろにも10人くらい貼りついている。カメラを向けると陽気に手を振ってくれるが、外は40度。陽気どころではない。



2



3



4



5

4. 干草を積んで走る車。荷が膨らんで、車体の倍の幅になり、もはや、もとの車体の姿はわからない。対向車線まではみ出して走っている。

5. 階段井戸。一番上が地上レベル。いまだに使われている井戸。建築的にも非常に質が高い。

には必死だった、トイレだって、まず必死に探さないと見当たらない。おなかを下しやすいインドではトイレ探しはかなり重要である。しかもここでは紙で拭くという習慣もない。ピンなどに水を汲んでおしりを手で洗うのも最初は必死だ。会話をするのにも、基本的な英語は身につけていたつもりだが、インドなりの英語はなかなか聞き取れず、必死で伝え合った。

ある店での出来事。チャイを注文し、10ルピーほど払ったあとに、別のインド人が『テン、テン!』といいながら迫ってきた。僕は『さっきテンルピー払ったじゃないか』と何度も説明するが、変わらずテン、テンとまくし立てられる。しばらくすると、彼は手首を指差しながら、またテンと言った。そう、彼は時刻が知りたかっただけだったのだ。そして彼の『テン』というのは、「TIME」を「ティム」と発音していたのだった。もはや英米のオリジナルの発音など関係なく、彼らの言いやすいようにアレンジして堂々と使ってしまっている。それが彼らにとっての正しい発音なのだ。

直す職人、ファスナーを直す職人なんていうのもいた。彼らはそれぞれ、一日中それだけをやっている。他の分野を開拓しようにも、それだけの余裕もなく、ひたすら同じ仕事を繰り返す。技術は日々蓄積し、他に負けないものになっていくのである。これが、細密画、彫刻や建築などにも同じことが言えると思う。インド特有の生と死の緊張感と、それに相反するようにのんびり流れる時間により、焦らずじっくり熟成されて、他に類を見ない素晴らしい芸術作品へと昇華していく。

現代に生きるカースト制度

インドにはいまだ、カースト制度が根強く残っている。悪く言えば差別だが、技術の伝承という意味ではこれほど徹底した社会は他にないと思う。彼らは生まれたその家で、家業を引き継いでいく。それしか道がない。それに反することは可能ではあっても、まだそれが十分認められない風潮がある。カースト制度は4つの階級があり、憲法上ではすでに廃止されているものの、集落では依然として階級ごとに住む場所がしっかりと線引きされている。何百年も続いてきた彼らの価値観がそう簡単に消えるはずもない。ただしインドの若者たちにカーストのことをどう思うかと聞くと、『差別ではなく社会的な役割分担のようなものだ』という。『あるカーストの人は農業を担当し、ある人はレンガ焼き、この人は掃除といった具合。カーストが違っても仲良しの友達はたくさんいる』。

なるほど、これは僕にとって新鮮な感覚だった。インドでは職業とカーストは切っても切れない関係となっている。もはや差別という概念だけでは捉えきれない、社会の一部なのだ。貧しい家の場合、子供は重要な労働力であり、歩けるようになったとたんから家の仕事を手伝うようになる。日本ではわがまま放題ぬくぬくと育っている歳ごろの子供が、おもちゃも持たずに毎日ひたすら働いているのだ。それだけに、職人としてのスタートも早い。一度床屋

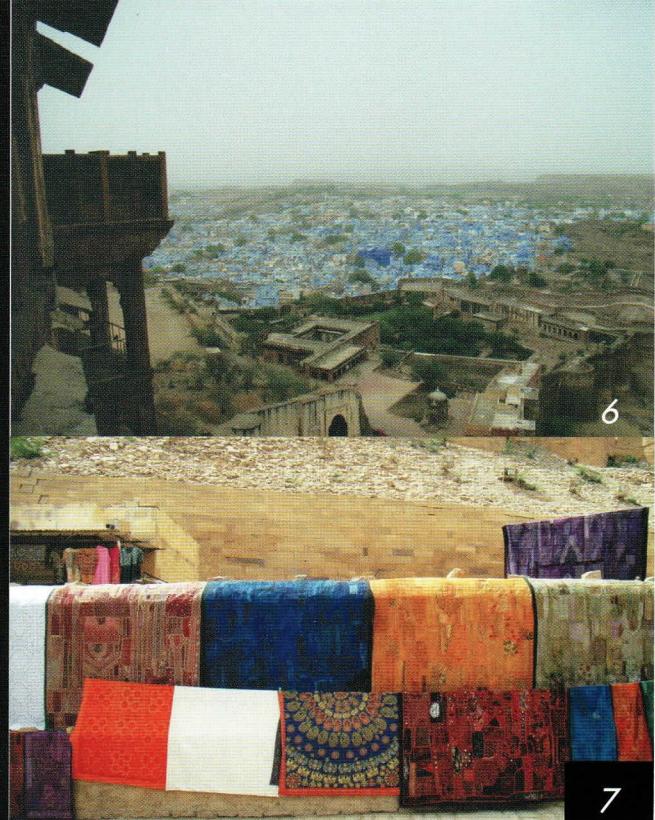
必死から生まれるインドの芸術

必死なのは初心者の僕だけでなく、インドの人々もそれぞれに必死だ。彼らは生きるために必死なのだ。灼熱の太陽のもと、下手をすれば彼らも熱中症で死ぬ。しかし貧しい人々はそんなこともいっておられず、真っ黒に日焼けして暑さと闘いながら働いている。この暑さのなかではただ座っているだけでも体力を消耗する。インドでは、ただ居るだけでも必死にならざるを得ないのだ。

僕はこの生きることへの必死さがインドの精緻な芸術や創造性につながっているように思う。インドにも現代的で多才な人もたくさんいると思うが、多くの人は貧しく、一芸にのみ秀でることで自分の生業としている。道端には、毎日いろんな職人が商売をしている。タイヤのパンクを修理する職人、靴を



8



6

7

6. ブルーシティ、ジョードプル。家々の壁がすべて青く塗られている。「なぜ青なのか?」と尋ねたが、だれも教えてはくれなかった。
7. ラジャスター州の美しい織物。城壁に掛けられて売っていた。
8. “ゴールデンシティ”と呼ばれるジャイサルメールは、この地方特有の黄金色の砂岩でできている。

行ったときなどは、10歳くらいの男の子が席を任せられている。彼の手には大きすぎる散髪ハサミをカシカシ動かしながら、『ここに座れ』と合図する。不安もあったが、腕前は抜群。カミソリもばっちり使いこなしていた。すでに6年目だという彼はこれからどんどん腕をあげていくのだろう。こういった、社会全体の技術の蓄積というのは、日本では到底真似できないことだ。

隣人を大切にするインド人

インドでは、道路を歩いていても家の様子まで良くわかる。1歳くらいの弟の面倒を見ているお姉さん、たくさん集まって遊ぶ近所の子供たち、家の前で暑さにまつて寝転んでいるお父さんたち、奥の中庭ではたおりしているお母さんといったような人々の営みが町中で見られる。みんなが何から関係を持って、大きな家族のように暮らしているのを見ると、なんだかすごく暖かい気持ちになる。

一方で日本では住宅街を歩いていてもブロック塀が続くばかりで、人の営みはたとえ見えたとしても見ないのがマナーのようになっている。防犯とプライバシーのために家はどんどん閉じていく。日本の都市の中では、いつそう人のつながりが希薄になってきていて、今後も近くの人が遠い存在になりつつある。そろそろインドにも慣れてきた私にとっては、この日本の状況のほうがひどく恐ろしいものに感じた。

そういうわけで、一日目に出会ったインド人の友人が言っていた。『インド人はみんな親切だよ』と。ヨーロッパや東京では、見知らぬ人が道を聞いたときに、わからなかつたら「知らない」の一言で終わるかもしれないが、インドでは聞いたそばから話しかけた人の周りにたくさん人が集ってきて、各自のわかる限りの情報を教えてくれる。たとえ目的地を全く知らない人でも自分はこういったほうがいいというのを、自信満々に告げてくれる。その情報が正しいかどうかは定かではないが、とにかく親切心でたくさん的人が集まつ

てくるのは本当だ。

インド人の原理

はじめは日本とのあまりの違いに戸惑い、衝撃の連続だったが、しばらくいると、それも厳然としたルールのもとで合理的に働いていることがわかってくる。それは、人と人、物と物、人と物に至るまで、単独で存在しているものなど何もないということだ。全てに相互関係があり、自分は他の何かに生かされている。そういう世界観が見えてくる。

彼らは道端にごみを捨てるのが当たり前なので我々にとってみれば奇異な感覚だが、それが野良犬や牛の餌になつたりして動物たちを養っているといえなくもない。残った燃えないごみを集めることが、掃除を担当するカーストの人たちの仕事になるので、ゴミがないと彼らの仕事がなくなってしまうという見方ができる。物乞いたちですら、日本のホームレスのような疎外感ではなく、彼らに小銭を与えるインド人もわりに多いため、社会の循環の中に入り込んでいるといった感じすら受けた。

1ヶ月間の貧乏旅行。荷物も最小限にまとめ、普段会社に持っていくブリーフケースくらいの大きさにまとめた。足りないものは現地で何とかなる。そのくらいの度胸で、印度になじんでいった。そのおかげで、すっかり印度を感じ、友人もたくさんできたり分かり合えた。印度がちゃんとわかったなどとは到底いえないが、彼らの人間的な温かさ、ひたむきさは日本人が失いつつあるものであり、どんなに頑張っても彼らほどの質を手に入れることは難しいだろう。日本とは違う価値基準を野蛮だと見ることもできるかもしれないが、僕は印度の文化は「生きる」ことを前提に据えて成立している、素朴で美しい文化だと思う。生と死を身近に見つめ、人間がいかにあるべきかという根本原理が印度にはあるのではないだろうか。それだけに、心に訴えてくる感動と感謝の念は果てしなく大きいのである。



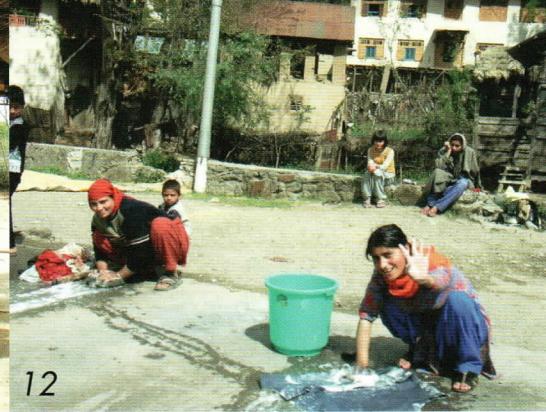
9



10



11



12

9. ガンガー岸にリズミカルに並ぶ日除け傘。対岸には果てしなく不毛の大地が広がる。
10. ガンガーの聖地、バラナシ。夜明けにボートに乗りガートと呼ばれる階段状の沐浴場を見る。
11. カジュラホ村の若者たちとピクニック中。僻地に独りで住む祖父を訪ねた。(写真中央が筆者)
12. 道路で洗濯をする女性たち。スリナガル郊外にて

「NPO法人 家づくりの会」



平成18年10月10日(火)午後6~8時、NPO法人月例会40名出席

「NPO法人 家づくりの会」の工学院大学卒業生の方々に集まつていただき、会の活動内容や今後の豊富等についてお話を伺いました。
(NICHE編集部)

「平成18年8月18日(金)午後6~8時 工学院大学28階、校友会談話室

出席者

十文字豊／アルコープ・U代表、工学院大学(武藤研)1970年卒

濱田昭夫／濱田建築設計事務所代表、工学院大学(波多江研)1972年卒

半田雅俊／半田雅俊設計事務所代表、工学院大学(武藤研)1973年卒

谷口宗彦／司会、工学院大学建築都市デザイン学科教授、工学院大学大学院(山下研)1971年修了

記録／NICHE編集部

NPO法人 家づくりの会
151-0015東京都渋谷区千駄ヶ谷1-20-1 パークアベニュー205号室
Tel03-5771-6051 Fax03-5771-6052
月曜日~土曜日 1pm~6pm 日曜日 1pm~5pm
(祝祭日 休み)
<http://www.npo-iezukurinokai.net>
info@npo-iezukurinokai.net

NPO法人家づくりの会設立趣旨書(抜粋)
「住宅が一家族の財産を超えて、社会の財産になります。私達は個々の家づくりを通じて、まちづくりに貢献することを目指します」 1983(昭和58)年、建主と建築家の出会いの場をつくるために、建築家たちによって家づくりの会は設立されました。2003年8月に東京都から認証を受けました。

活動内容／相談窓口、連続講座(年2回)、家づくりニュース発行。
各種講座、住宅見学会開催
研究活動／建築道場、研究活動、ギャラリー活動など。
実績／2004年迄に、延べ500件以上の家づくり。

「家づくりの会」設立の発端について

十文字豊／「家づくりの会」の発端は、一昨年、交通事故死された中村洋子さんの呼び掛けでした。23~4年前にあるデパートの家具売り場のカウンタースペースが自由に使えるという事で、30代半ばの建築家20数名に声がかかり、その内約1/3近くが工学院大学出身でした。武藤章先生も2~3回オブザーバーとして会設立の会合に来てくれました。デパートで建築相談を受けるなど、約半年位手探しの活動をしました。その後自前で場所を確保することになり大塚に木代さんの事務所があり、家賃が安かったのでそこに事務局を置きました。まだタイプライターの時代で、一枚の新聞づくりから始めました。その後、菊竹清訓さん設計の銀座TOTOパビリオンの集会室を自由に使ってもいいというので、そこでセミナーも始めました。手分けして新聞社にあたり記事を掲載してもらったら、プラット人が集まり始めて、やっと会の流れが見えてきました。

「家づくりの会」小史

木代和雄

未知の「世界」を前にして人は、その世界に大きな期待と多少の不安を秘めて夢を夢みるものである。それは時にあこがれと自らの欲望に深く結びつく魅惑的な瞬間もあるが……。しかし、その「世界」をいったん通って来た人は、かつての夢見る人に変わって、極めて現実的にその世界が何であったかを語ってしまうものである。それも自らの限られた視座から既知のものとして物語られるのである。それは時により、聞くものにとっては大変退屈な物語となり、語られぬ方がよほどよい事だつてある。とするならばこの小史も「事のカタログ」としてつづられたほうがより良いのだろう。

1983年5月1日私達の会が正式に発足した。あえて正式にといふのは、そのための準備が82年の11月から始まっていたからである。

1982年 11月	設立のための集まりをもつ
12.23	第一回準備会、設立趣旨の確認
1983年 1.13	第二回準備会、会員制に対すること等話し合う
2.5	第三回準備会、企画書の作成
2.26	第四回準備会、会の名称を「家づくりの会」とする
3.4	第五回準備会、作品集の作成、会員、賛助会員の募集
3.12	第六回準備会、会印の作成、会事務所の選定、年間活動の企画
3.19	第七回準備会、年間予算の立案、会則の検討
3.24	建設省、建設振興課を訪ね、問題点を事前協議
3.26	第八回準備会、会の性格と運営について
4.7	第九回準備会、埼玉での初会合、会の性格と運営について

この頃、[会の目的、アピール文集]が内部で作られ、会員各自の意見が文章化された。そこには、こう書かれている。「会は、住まい手、設計者一人一人の違いを大切にしよう」という発想を原点として、いろいろなかたちでの「住まい手と設計相互者の選択の機会と場」—「出会いの場」—をたくさん作り、これを運営してゆくことを主な目的としています】H.Y.「建築設計家の協力による“家づくり”を通して、設計管理業務に対す

る必要性や楽しさの認識を社会的に広める」T.M.「自分にふさわしい“家”に住みたいと思う人々と住宅設計を大切に思う建築設計者が出会える機会を多く作るよう努める」Y.N.「この会は会員個々の業務内容を社会の人々が十分に理解し、比較検討できる場を設け、社会の多様なニーズに応える」A.F.「建築家のデパートを作る事により、施主はこのみの建築家と気軽に出会える」M.F.「私達は“住まいかた”的提案のない住宅は商品であると考えます。私達は商品の“使いかた”を大事にする以上に、“住まいかた”を提案する事を大切にしたいと考えます。商品によって“住まいかた”的発想が限定され、貧困になっている現代では特に重要なことだと思います。私達は本来自由である“住まいかた”を住まい手に取り戻したいと考えます」M.H.

4.15 公開討論会（家づくりの会発足にあたっての説明及び討論）

4.16~4.17 第一回アンケート調査（住まいと設計に関する意識調査）

4.18 再度建設省、建設振興課を訪ね、問題点を事前協議

5.10 第一回住宅見学会（川越市元町、葉子屋横丁の家：設計者／中里 昇）

5.14 オープニングフェアの準備

5.21 常任委員会で各活動開始

5.28 対外へのアピール文の完成

6.10 建築家賠償責任保険への加入検討

6.25 「サンケイ新聞」に紹介記事掲載

このころ松田聖子のく秘密の花園>が良く流れていた。—歌謡史上初めての10週連続第一位記録を作っていた時だったー「月明かり青い岬に……Moon light magic……流れ星を見上げてah…さすらう 白く白く輝く秘密の花園……」振りかごでリズミカルにゆられるようなメロウなサウンドに聖子ちゃんは「ノリ」に乗っていたのを思い出す。時代はメロウに響きあっている。そんな時期、大都市近郊の新興住宅地にはデコレーションケーキのような住宅がどんどん建ち始めていた。それは、ラブホテルの様でもあり、教会のよにも見えた。

1983年7.1新宿某デパートにて相談窓口開設

抜粋:家づくりの会のあゆみ 20周年記念誌2003年7月

にもなります。

NPO法人の運営

半田／会の運営には、会員が年会費を払い。設計料の数%を会にバッケージしています。それらをストックして会の運営にあたっています。NPO法人を通して仕事を得たかは自己申告です。現在会員は40名になりました。

十文字／我々も、もう還暦なので、若い人達を会員に迎えたい。

半田／当初は楽しいサロン的な雰囲気でした。これを次の活動に続けるようにしました。今は世代交代の時期です。30代の若いメンバーを増やしていきたい。私たちが培ってきたノウハウを世代を超えて継承してゆきたいと思っています。

濱田／当初は技術的な仕事の見せ合いをしていました。

半田／日常の仕事以外に、今だに建築論を戦わしています。

JIA等との交流はどうですか？

濱田／JIAは、人との交流が中心です。「家づくりの会」は、住宅を中心ですのでバッティングしません。話題が即、現場や、図面のことで現場に密着しています。密度があります。

情報の変化について

十文字／ここ数年は、新聞に記事が出ても、インターネットで、セミナーを呼びかけても、集客力が以前のようにはいかなくなりました。会の活動が長続きしたのは、会員間のいろいろな規制を必要最小限にして、会員同士が信頼の上に立って運営してきたのが良かったと思います。住宅の設計は、相手が建築家を選ぶので仕事量に差がでています。このことは当たり前のことがですが、我々の会の永遠の課題かもしれません。



NPO法人家づくりの会
設立主旨書



- 家づくりとは、個人の夢を形にすることであり、社会や時代の表現でもあります。
- より良い家づくりを目指すことは、自分のためになるのはもちろんですが、社会のためにもなります。住み手にとって心地よい住環境は、道ゆく人にあっても心地よいものです。
- 時間とともに味わい深い住風景が生まれ、社会的な価値も高まります。住宅が一家族の財産を超えて、社会の財産になります。私たちは個々の家づくりを通じて、まちづくりに貢献することを目指します。
- 建主も専門家も学生も、家づくりに関心を持つ人々が集まり、より良い家づくりについて、共に学び、考え、実践していく場。それが家づくりの会です。外から与えられる情報を吸収するだけではなく、自分や家族と向き合い、社会や時代と向き合い、自分の力でつかんだ情報。
- それを互いに公開し、共有することで、互いに刺激を与えあい、励ましあいながら、一人一人が成長していくような場を、家づくりの会は目指します。
- 1983年に、建主と建築家の出会いの場をつくるために、建築家たちによって家づくりの会は設立されました。
- 2003年8月に東京都より認証を受けました。
- これまでの活動から得た知識や経験を活かし、様々な立場や領域の人々とのつながりを広げ、より良い家づくりを実現していくために、私たちは、ここに「NPO法人家づくりの会」を設立します。

家づくりの会は、こんなことをやっています
これから家を建てる方へ

● 相談窓口(要予約)

祭日を除く毎日、建築家が交代で事務局にいます。家づくりに関する相談や実例の資料、図面の閲覧などに来られた方や、電話での相談に対応しています。身近に建築家と相談できる窓口です。

● 連続講座

春秋年2回、建主さん向けに行われる家づくり講座です。家づくり実践のプロがお話を基礎知識から、ワンランク上の情報までお役立ち情報満載のセミナードです。建築家に会う機会の少ない方にとっては、一度に3名の建築家と会って話ができる、現場の生の声が聞けるというのも魅力となってています。

● メールマガジン発行

隔週発行、家づくりのお役立ち情報、講座や見学会のお知らせ、建築家紹介などの情報です。

● 入会されるごとに可能ですか

● 具体的な相談OK

家づくりの会所属の建築家の事務所訪ねて、具体的な予算、法規、間取り等の相談ができます。

● 家づくりニュースの購読

毎月1回発行、建主と家づくりの会を繋ぐ家づくりに関する情報や会員の紹介、各講座の案内などのお知らせを掲載します。

● 各種講座への参加

少人数でより深く、より多方面な家づくりを知る講座です。完成した建物の写真などを使い、実例に基づいたお話

をします。建築家の持ち味を理解できるのも、ミニ講座の利点です。

● 住宅見学会への参加

家づくりの会を通して生まれた住宅を訪問します。モデルルームと違って実際に住まわれている住宅を訪ね、直接受けている感想も聞けるのが魅力となっています。

● 建主俱楽部

家を建てた人と、これから住まいづくりを考えている人のコミュニケーションの場です。完成した家の懇親会、hpの専用掲示板での情報交換などが可能です。

● 研究活動

毎月第1土曜日開催 PM7:00~9:00、20代~30代の学生や建築に携わる人たちの勉強の場。見学会、勉強会等を通して建築家を育てる場です。

● 研究活動

左官や瓦などの素材の発掘、町並み調査、パリアフリー等、建築家が持った疑問や興味をテーマに調査、整理し、各種建築雑誌等に発表してきました。また、現在社会問題になっている室内汚染についても、早くから取り組みをしてきました。

● ギャラリー活動

ギャラリースペースを利用して、さまざまなセミナー、家づくりにまつわる展示を行います。

「家づくりの会」のあゆみ

2004年までに、延べ500件以上の家づくりが実現しました。

● 講座・見学会

1. 春・秋家づくりの会連続講座 開催
2. 住宅見学会ミニ講座・茶話会 開催
3. 各種セミナー開催
4. 無料相談会 開催
5. 創立20周年特別講座
6. 各地での講座に講師派遣
7. 住宅金融公庫「すまいのカレッジ」講師派遣

● 記載

1. 「住宅画報」誌「楽しく賢く家づくり」
2. 「神奈川新聞」「優しい家づくり・神奈川の木を訪ねて」
3. 「ニュー・ハウス」誌「住まいと暮らし再考」
4. 第一勧銀小冊子「家づくり」「快適に住む工夫」
5. 「New HOUSE」誌「建築家の発想力」

● 出版

1. 「住棟の住空間設計術」
2. 「これまで完ぺキ!住まいの建て替えAtoZ」
3. 「住まいづくりの達人」
4. 「アーティストいばい住まいの達人」
5. 「住みよい家の間取りプラン」
6. 「運動としての住まいづくり」
7. 「まちに出た建築家たち」
8. 「家づくりの落とし穴トラブル解決法」共著

● 自主研修

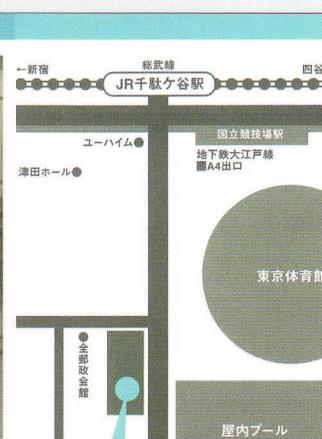
1. 研究会「職能としての建築家」「住宅の生産」等
2. 研究会「住宅建築」誌で連載

● 若手育成

1. 学生・若手建築家向け「建築道場」開催

● 講演

1. 公開講座「建築家と住宅」開催
2. 「阪神淡路大震災住宅被害報告会」開催
3. 公開シンポジウム「住宅設計者に明日はあるか」



NPO法人
家づくりの会
(15年基盤構造第86号)

〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷1-20-1
パークアベニュー205号室
TEL:03-5771-6051
FAX:03-5771-6052
月曜日～土曜日1pm～6pm
日曜1pm～5pm(祝祭日 休み)
<http://www.npo-iezukurinokai.net>
info@npo-iezukurinokai.net

市民講座 街・住まいづくりの今を伝える

大学教授と建築家が家づくりの今を伝える市民講座

5月 13日・20日・27日 会場 工学院大学 6F-0652室

13 (土)	第一回講座 ■世界の住環境と住まい ●丈夫で長持ちする住まいづくり ●頑な地盤の条件を建築で健全化させる	Mitsuhiko Taniguchi 谷口泰吉	Hiroyuki Honda 半田弘之	Aito Fujimura 藤原聰夫
20 (土)	第二回講座 ■風土と住まい ●都市の住みやすさを生かす ●狭小敷地の住まいづくり	Daisuke Machizuki 望月太郎	Yasuka Matsunaga 松永豊	Michimasa Kawaguchi 川口通正
27 (土)	第三回講座 ■住まいと構造 ●伝統木造技術を現代に生かす ●丈夫で小さな街並と住まいづくり	Kenji Miyazawa 宮澤健二	Seiichi Yamada 山田成一郎	Akio Hamada 浜田明夫

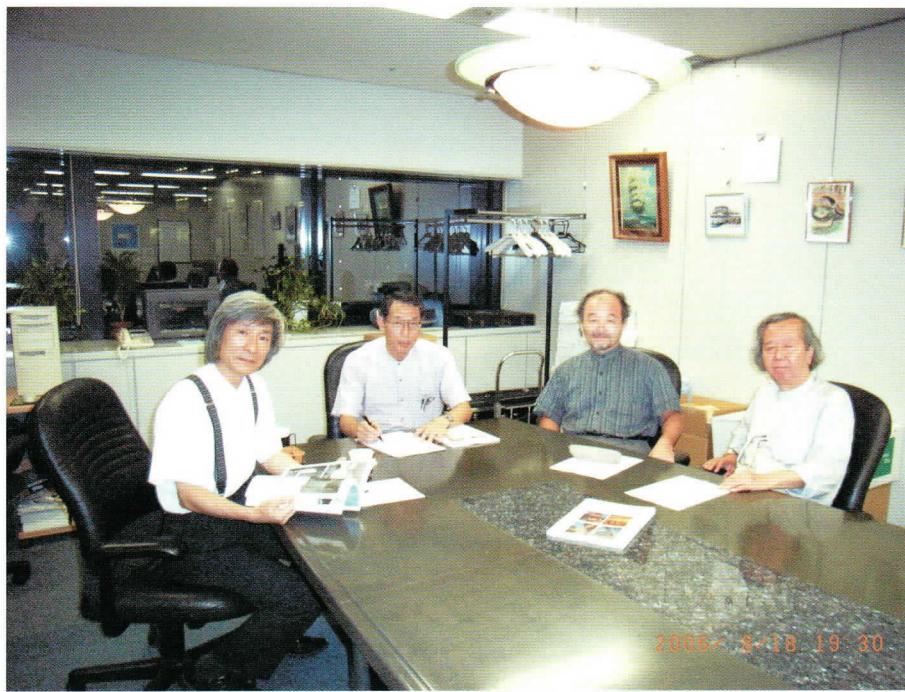
主催「街・住まいづくりの今を伝える実行委員会」

委員長工学院大学准教授谷口宗吉
NPO法人家づくりの会

● 参加無料 お申込は、お電話またはメールで
TEL 03-5771-6051
E-mail info@npo-iezukurinokai.net
ホームページ www.npo-iezukurinokai.net
NPO法人
家づくりの会
TEL03-5771-6052
渋谷区千駄ヶ谷1-20-1
パークアベニュー205号室



2006年5月



NPO法人座談会 左より濱田昭夫、谷口宗彦、半田雅俊、十文字豊各氏



半田雅俊講師(左)
「各断熱材の熱抵抗値と価格」の研究説明会



溝田正二さんの仕事展「アブリオリなプラン」

濱田／しかし、仕事の上手い人が、仕事を取れるとは限りません。

半田／私の場合1/3位が会を経由した仕事です。昨年は3件ありました。最近建築家を紹介するプロデューサー業もふえており仕事をとるのは厳しくなっています。

濱田／毎年コンスタントに3件位やっていましたが、今年はインターネットに流れています。

今後の活動について

濱田／大学で市民講座を開講するのは、実学と教育の合体です。住宅の物づくりは、水面下の作業が多くて、教育の場でのりににくい面がありますが、市民講座というスマートな形で参加者、学生に仕事の内容を見せることができました。大学側にも接点があり、商業的でない大学で開催するのは良いことです。参加した学生には技術以外にも理解力があります。山本成一郎さんの講義は、山本さんご夫婦で仕事をやっている面白さを、学生が良く見ています。学生から提出されたレポートを、うちの宝にすると喜んでいました。

半田／卒業以来30年、久しぶりに大学で話をしました。講義の準備をしたりチャンスを与えていただき有意義でした。仲間の川口道正さんも話をさせていただいたことが自分を振り返るいいチャンスだったようです。

谷口宗彦／川口道正さんの話はバイタリティがあり、大学の講義にも来て、学生に話して貰いたいくらいです。在校生に何かご意見は？

濱田／市民講座の感想文を25名からBBS経由でもらいました。個々に返事をメールでだしました。レポートが大変良くできています。

谷口／レポートは出席していないと書けません。

谷口研究室ではBBSの有効活用で毎日私の研究室のH.P.に、70~80

件アクセスがあり、授業が始まると100件に増えます。大学と連携して、NPO法人の活動状況を、H.P.等でOBや在校生にも見せることができます。NPO法人の40名の会員の力は、大きな教育効果になると思います。

濱田／メディアを通じたり、新聞に記事を掲載して、社会性のあるテーマを強く展開したい。

半田／インターネットはもとより、会の広報がとても大切です。

濱田／素材と技術は、例えば山の木を切ってきてどう加工するのか、建築家と職人との繋がり、一貫した教育として役にたつ実際に踏み込んだ実例、建築とかかわりのある方達との交流を深めると、立体的になります。

半田／独立して四半世紀になってしましましたが、この仕事にかかわって良かった。一流の建築家も大切だが、町場で一件々大切に住宅の仕事に関わっていることも大切です。市民講座で意義を感じたのは、学生に向かって話ができたのが良かった。

濱田／机上の学問ではなく、実際に作った住宅を見てもらう。オープンハウスもいろいろなものが含まれていますので、何をテーマにどうものづくりを見せるか。

谷口／活動内容を具体化して、強く学生にアピールできるようにします。教育効果も上がると思います。

半田／会員の平均年齢が50才前後となりました。65才を過ぎると仕事が来る人と来ない人がいます。社会的な定年が来てしまいので、世代を継続したい。70代の建築家になっても、如何に楽しく会とつき合っていくかが、緊急の課題になってきています。

「高崎観音」を実施設計した

輝かしき先輩たち……⑧

石川文一郎 (いしかわぶんじろう)



石川 文二郎

東京湾観音は、その名の通り東京湾に面して立っている。東京から近い場所にあるにもかかわらず、その存在はあまり知られていない。高さは56mあり、完成は昭和36年。私が巡る巨大仏のなかでは、高崎に次いで古い巨大仏である。

(「晴れた日は巨大仏を見に | 連載第八回・東京湾観音篇」／宮田珠己／<http://www.hakusuisha.co.jp/topics/buddha/005.html>)

世の中には変わった……というと叱られそうだから、奇特な人がいるもので、日本中の巨大仏を“晴れた日”に見て歩くのを趣味にしている。そして、マニアックな性向にふさわしく、自らのホームページには、その探訪記を写真と文で微に入り・細に入り紹介しているのだ。

で、宮田さんが何気なくサラリと流している、「私が巡る巨大仏のなかでは、高崎に次いで古い巨大仏である」の「高崎観音」——。この正式には「高崎白衣大觀音」を実施設計した石川文二郎こそ、工学院大学建築系学科卒業の、わが“輝かしき先輩たち”的一人であった。

井上工業の優待生として工手学校へ

石川文二郎は、1891年（明治24年）9月1日、群馬県高崎市に生まれた。5人兄弟の末っ子であった。石川家は代々、高崎藩士を勤めていた。



卒業写真

文二郎は学校を卒業すると、井上工業に入社する。日本の地方都市には、地元に密着しつつ全国区で名を馳せるゼネコンがあるものだが、群馬県では井上工業であった。創業は1888年（明治21年）、創業者を井上保三郎という。高崎市の近代化はこの人に寄るところ大……といっていいくらいに、保三郎は高崎市の発展に人生を捧げた。実は、「高崎観音」も保三郎が私財を投じて建立したのである。

保三郎は子弟教育にも篤かった。文二郎は、この保三郎より「建築を学問として学ぶ」ことを勧められる。その言葉に従い、東京・新宿の工手学校へ入学する。学費は、もちろん保三郎が出してくれた。「大旦那に足を向けて寝られない」——後年の文二郎の口癖であった。

高崎～東京は今でこそ上越・北陸・長野新幹線で1時間の距離だが、その頃はまだ官有鉄道の時代で上野～高崎は3時間かかり、まさか電車通学していたとは思えない。下宿をしていたのだろうが、どこに住んでいたかはわからない。

1913年（大正2年）、文二郎は工手学校を卒業する。第48回生になり、建築学科からは55名が卒業した。ここでみんなは“現場”に出ていくわけだが、文二郎の就職先は、もとより井上工業である。井上工業では、1898年（明治31年）に、保三郎の長男で2代目社長となる井上房一郎が誕生していた。

文二郎は、井上工業で、設計および会社が請負った施工の工事監理に従事する。主な“現場”には「群馬会館」「日本製粉高崎工場製粉工場本館」「旧陸軍岩鼻火薬製造所」などがある。

「群馬会館」は、所在地：群馬県前橋市大手町、設計：佐藤功一、竣工：1930年（昭和5年）、構造：鉄筋コンクリート造、規模：地下1階・地上4階。同じ佐藤功一の設計による「群馬県庁舎」（竣工：1927年）の対施設として建てられた。

県庁舎と大通りを挟んで対峙する群馬県初の公会堂建築で、今上天皇の即位を祝して建設された。県庁舎と同じ佐藤功一の設計になり、それゆえ、外壁のスクラッチタイルや重厚なルネッサンス様式の外観など、共通するところが少くない。

（『総覧日本の建築第2巻関東』／新建築社／1989年）



群馬会館

「日本製粉高崎工場製粉工場本館」は、公式の記録によると「設計者：不詳、施工：大竹組・浪速組」とある。文二郎は、施工の2社から乞われてこの“難しい”現場をみていたようだ。“難しい”……そう、5階建ての木造建築なのだ。

下見板貼りベンキ塗りの外壁に控え壁をつけ、柱や梁を通常より太くし、床の厚板を各階交互に斜めに張り、基礎には松杭を用いるなど、高層建築に対する周到な配慮がうかがわれるが、鉄骨などによる補強はいつさい行なわれておらず、その点ではれつきとした純木造建築である。

（『総覧日本の建築第2巻関東』／新建築社／1989年）

一般施設の木造高層建築で想い出すのは長野県岡谷市の「吉田館繭倉庫」である。こちらは6階建てで「日本史上で最も階数が多い」といわれていたが、1993年に取り壊されてしまった。ということは「日本製粉高崎工場」がトップに躍り出たわけだが、残念ながら、こちらも1994年（平成6年）に解体されてしまった。

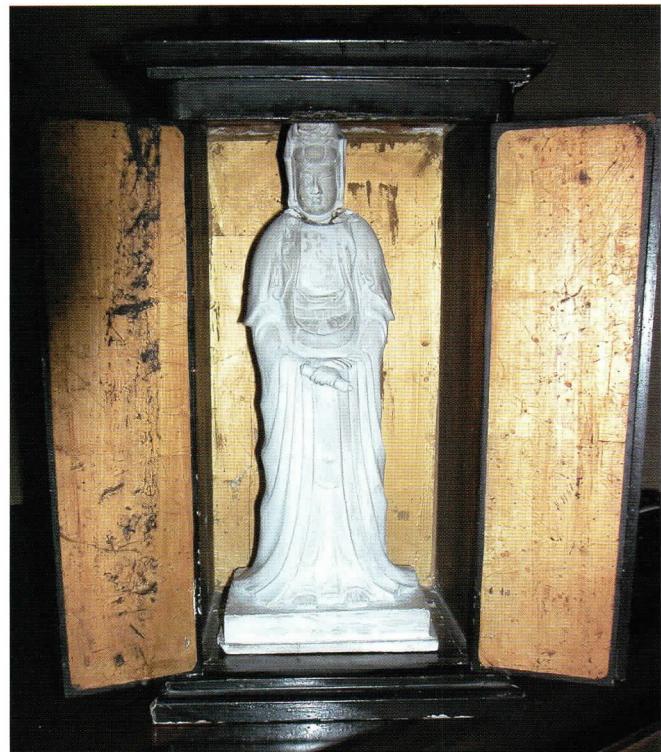
あるドイツ人建築家が高崎に住むことになる

1934年(昭和9年)11月、井上保三郎は、今上天皇との単独拝謁を賜わった。満州事変が勃発し、戦雲が中国大陸に拡がろうとしている折も折、戦前最大といわれた陸軍大演習が、天皇陛下を迎えて高崎市の乗附練兵場で行なわれたのだ。“今上天皇との単独拝謁”という儀式に接して、保三郎の胸にある想いが駆け抜けた。観光・高崎の建設、高崎歩兵第15聯隊戦没者慰靈供養、国民思想善導……が今こそ必要だ。そして、その三大目的を託すものとして建立されたのが「高崎白衣大観音」であった。

「白衣大観音」の原型モデルを依頼したのが、森村西三であった。森村は伊勢崎市出身の鎌金彫刻家であった。

東京の森村から1/100の模型が届いた。この模型を届けた井上工業・東京支店の社員は、誰であろうあの田中角栄であった。時に角栄、16歳。「まあ、その……」とダミ声を飛ばしながら、額の汗を拭きながら持ってきたのかどうかわからないが、蛇足で加えれば、井上工業のこの時の2年先輩で角栄の生涯をかけての“竹馬の友”となる入内島金一は工学院大学土木科の1936年(昭和11年／第93回)の卒業である。

「白衣大観音」の実施設計を任せられたのが、文二郎である。



「白衣大観音」模型

夜中……というより明け方近くに便所に行こうとすると、親父の部屋の灯りが点いている。そつと覗くと、模型にメジャーを当てては図面に移し描いている。それを何回も何回も繰り替えていました。

と、ご子息の石川保二郎さんは、ご自宅の床の間に置いてある模型を見ながらおっしゃつられた。大恩人の保三郎が全精魂を傾けたプロジェクトの実施に、文二郎のプレッシャーは相当のものだったろう。断面図、詳細図、施工図など、引かれた図面は1,200枚にのぼったという。

ここで、1934年(昭和9年)の高崎市と聞いて、避けては通れない建築的出来事がある。前年の1933年、ヒットラーの手から逃れて一人のドイツ人建築家が来日した。そう、ブルーノ・タウトである。そして、タウトは1936年に離日するまでの2年3ヶ月を、高崎市の「洗心亭」で過ごすのである。その面倒をみたのが井上房一郎であった。タウトが高崎滞在中に、高崎の工芸運動に尽力し、日本各地を歩いて古今の建築について論評していることはすでに多くの人や書物が紹介している。が、その膨大な声と活字のどこにも「高崎観音」は触れられていない。彼は「高崎観音」の計画も工事も建立も知っていたはずである。何故なのだろう。

“歴史はミステリー小説”だと解釈している筆者には、このときの亡命者・タウトの心に迫るのは興味深いのだが、本編の主役はタウトではない。彼自身のある日の想いに耳を傾けるだけにしておこう。

十二月五日(水) 少林山・洗心亭

——工芸の仕事について——洗心亭の生活

昨日も今日も井上(房一郎)氏と仕事の方針について長いこと話合つた…

…私は、なにも井上氏に不當な非難を加えようというのではない。同氏は萬事に、そつが無いし、また根は親切な人柄でもある。要するに根本的欠陥は資本が足りないということだ(井上氏のお父さんは私達の仕事に全く理解をもっていない)、そこで木工場の仕事もその日暮らしになり、『生きる』為ならどんな注文にでも応じようというあさましい心根にならざるを得ない。(中略)それに井上氏には、文化的な人々を惹きつける力が缺けているようだ。

(『日本・タウトの日記・1934年／訳：篠田英雄／岩波書店／1975年)

何とも悲しい嘆息だが、“知の巨人”と呼ばれた表現派の先駆者が、日本にいるまさにその時に「高崎観音」が計画され施工され建立されたのは……「高崎観音」から幾つかの尾根を越えて、直線距離にして3kmの真東の山中に暮らしていたのは、実に象徴的なことである。

文二郎は、タウトと顔を合わせたのだろうか。言葉を交わしたのだろうか。

観音像は建築なのだろうか

文二郎と一緒に「高崎観音」の現場に立会ってみよう。

まず基本の工法には「竹籠工法」が選ばれた。とっくりを並べて搔つたりして像の安定感の工夫をいろいろと試行したところ、農夫の背負い籠にヒントを得て「竹籠工法」とした。

現場は、山の上である。技術の時代になったとはいえ、車で資材を運ぶにも限界があった。あとは馬車に頼るしかなかった。相当に難儀な工事であったことは想像に難くない。

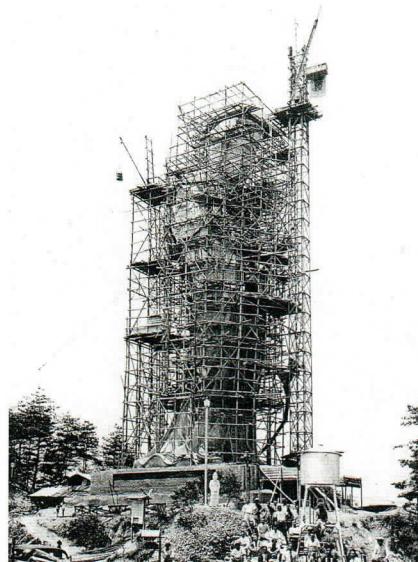
本体はラーメン構造9層。それに外壁ブロックと特殊ブロックを緊結していく。今でいう外壁用プレコンを取付けていく案配だ。ブロック積みは、内部の柱・梁の鉄筋組立ておよび内側型枠建込み終了後、クレーンを用いてブロックを外部から吊り上げ、各階ごとに数段積み上げ、そのブロックの内側に出ている鉄筋を本体鉄筋に緊結する。コンクリート打込みは各階層ごとまたはブロックの状況に応じながら、クレーンによってコンクリートをバケットで吊り上げて打込むと

いう方法が採られた。

1935年(昭和10年)3月の着工より1年7ヶ月、ついに観音様が、その白衣に包まれた姿をあらわした。

高さ:41.8m、重量:5.985t、台座:20m四方、胴回り:48m、親指の太さ:直径40cm、手に持つ巻物の長さ:4.5m、裾回り:67.7m。

工事費は、16万円であった。工事台帳には次の記載もあった。セメント:1袋50kg高崎駅レール渡し98銭、鉄筋:1t高崎駅レール渡し78円、大工・鳶手間賃:1円10銭~1円30銭(労働:約10時間)、土工・人夫手間賃:80銭~1円(労働:約10時間)。



竹籠工法



工事現場



完成した高崎観音の現在
在

しかし、観音様の白衣姿を、文二郎は見ていない。文二郎と一緒に現場に立会おうと言ったが、工事が始まって間もなく、文二郎は病の床にあった。「高崎観音」の実施設計に向けた無理がたたつたのかも知れない。

1936年(昭和11年)10月21日、保三郎の誕生日のこの日、「高崎白衣大観音」は開眼式を迎えた。それに遡る10月8日、石川文二郎は、この世を去っていた。享年46歳であった。余りにも若い死である。その2年後に、保三郎とタウトも逝去してしまう。

「高崎観音」は高崎市のエポックを背負っている

筆者も2004年(平成16年)2月中旬の、まさに“晴れた日”に「高崎白衣大観音」を訪れた。繁華な町並みを外れると、連山の稜線から突き出る「観音様」が見える。ランドマークとは、これをいうのだろう。

観音様は、穏やかで優しい顔をしていた。模型より、前傾姿勢である。きっと構造がそうさせたのだろう。ずっとくすぶ燻っていたある想いを抱きつつ、観音様の体内に入る。

ある想いとは、「観音像」は建築か?……である。実は、いろいろと下調べをしているうち、開設者が誰なのかわからないけれども、「群馬県内の主な技術遺産(近代化遺産)」というホームページに出会った。用途別に、145件の施設が紹介されていた。しかし、そこには「群馬会館」「日本製粉高崎工場製粉工場本館」「旧陸軍岩鼻火薬製造所」はあっても、「高崎観音」はなかった。橋梁や発電所まで網羅しているのに「観音像」は無視されている。こんな“技術遺産”はないというのに……。

観音の社会的な評価は、筆者などより、やはり“巨大仏オタク”に任せよう。

人は大観音そのものをダイレクトに見ておらず、歴史を織り込んで見ているのだ。

そういうえば加賀の大観音は、その場所に立つ必然性を強引にゆかろうとしていた。場所の歴史が大観音の觀光価値を高めると考えたからだ。しかし、現実にはガイドブックにも無視されるありさまで、ほとんど客は来ていなかつた。

それはなにも加賀に限ったことでなく、高崎以外のどの巨大仏も同じことで、結局、高崎観音だけが特別なのは、それがその時代に要請された風景だったからであり、ほかの巨大仏たちは、できた時代があまりに遅すぎたのである。つくる側の時代感覚が欠如していということだろう。

(「晴れた日は巨大仏を見に」連載第五回・高崎白衣大観音篇)／宮田珠己／

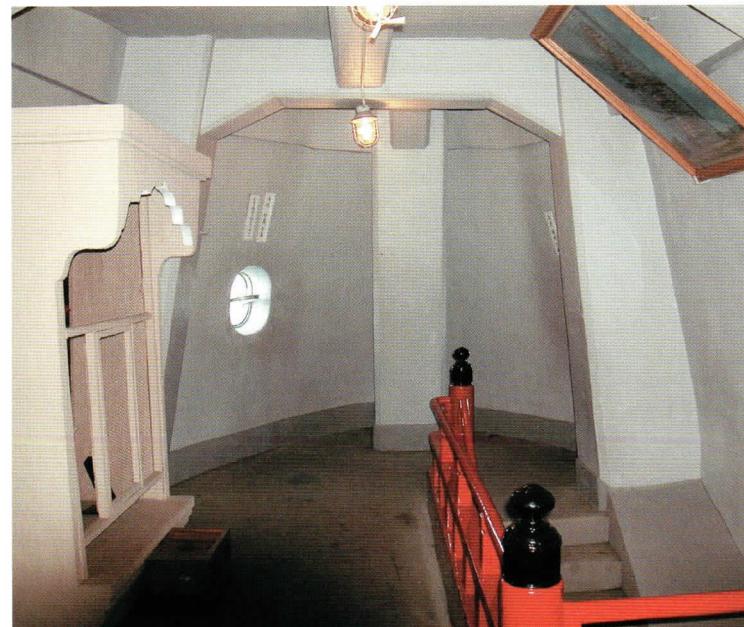
<http://www.hakusuisha.co.jp/topics/buddha/005.html>)

「高崎白衣大観音」は、確かに時代感覚では、世界中のどんな施設や建造物より鋭敏である。ある時代のエポックが渦となって「高崎観音」を巡っている。

計画された1934年(昭和9年)～建立された1938年(昭和13年)の間に、ブルーノ・タウトの来日、井上保三郎の今上天皇と単独拝謁、田中角栄の「観音像」模型の持参、ブルーノ・タウトの離日、石川文二郎の死去、そして保三郎とタウトの死去……。これだけの時代の集中を背負っているれば、余りに重すぎて前傾姿勢になるのは無理からぬことかもしれない。

でも、それから66年、「高崎大観音」は、何事もなかったように、穏やかな表情で立っている。前屈みなのは、見上げるわれわれに、優しい眼差しを注ぐためなのだ。

(レポート：類洲 環)



高崎白衣大観音の内部

石川文二郎の存在を教えてくれたのは、高崎市在住の平野博司さんである。平野さんは、ライフワークとして、群馬県下の近代建築を調査・研究している。本文中の「日本製粉高崎工場製粉工場本館」の設計者も、今までのアカデミズムは“不祥”としていたが、平野さんたちの研究により「木子七郎」と判明している。石川文二郎も、そうした地道な活動のなかから発掘されたのである。断っておくが、平野さんは工学院大学の出身ではない。こうした母校と縁も所縁もない人が“輝かしき先輩”的情報を提供して下さったことには感謝に堪えず、熱いものを感じる。改めて、平野さんと、平野さんに紹介されて貴重な資料をお貸しくださった文二郎のご子息の石川保二郎さんに、お礼を申し上げたい。



2000年に登録有形文化財に登録された

【参考文献】

『群馬とブルー・タウト』(あさお社／1976年)

『私の美と哲学』(井上房一郎／あさお社／1985年)

『ブルー・タウト／1880—1938』

(マンフレッド・シュパイデル&セゾン美術館／1994年)



繁華な町並みを抜けると、市内のどこからでも見える

同窓生を訪ねて

室内環境汚染の 住まいと健康 実測調査から見た住宅

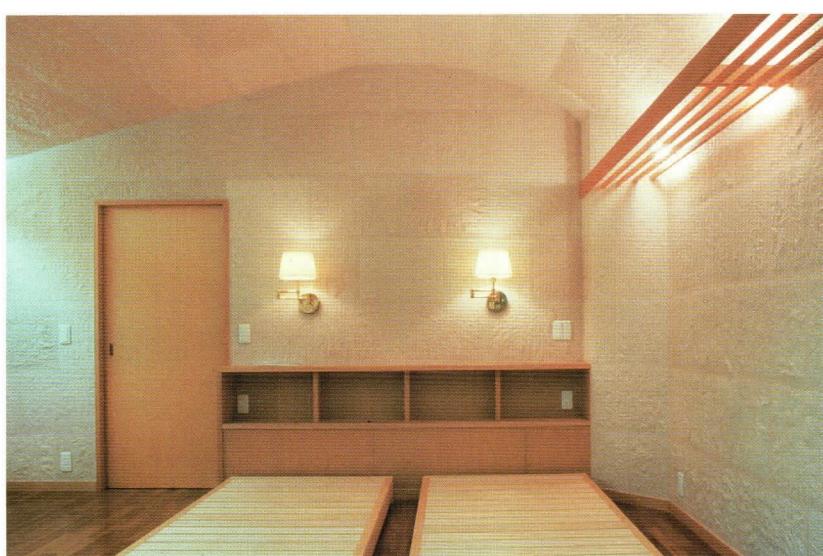


A邸。シナ合板と現場塗り塗装を多用した無対策の家である。
竣工時、HCHO濃度は居間で0.148ppm、食品棚(写真右奥)は、なんと1.01ppmもあった。VOCもかなり高かったが(144ppm)、一夏過ごした秋には、1/6以下に減少した。



半田 雅俊

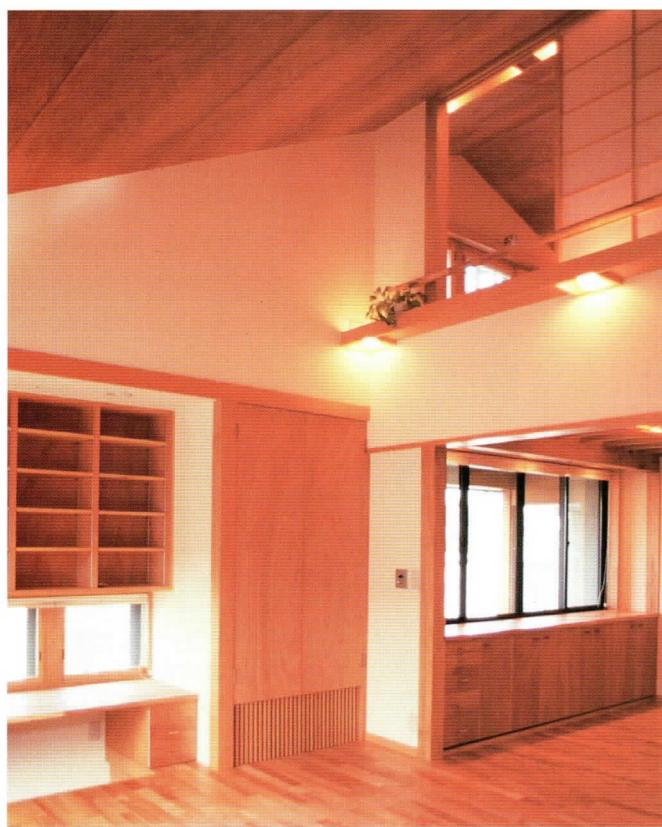
1968年 新島学園高等学校卒業
1973年 工学院大学建築学科(武藤研)卒業
遠藤楽建築創作所を経てフランク・ロイド・ライトの設計組織「タリアセン」留学
1983年 半田雅俊設計事務所設立 現在に至る



T邸寝室。壁、天井はPB下地に手漉き手揉み和紙を貼った。



マンションの改裝例。改裝工事は工期が短く、マンションは換気が悪いことが多いので、被害が出やすい。



F邸。合板は全面的にF1合板を使用した。通常の合板を使用した家と比べれば、はるかに低いが、使用量が多い場合、夏に閉め切った状態になると、ガイドラインを超える場合もある。

室内汚染調査のきっかけ

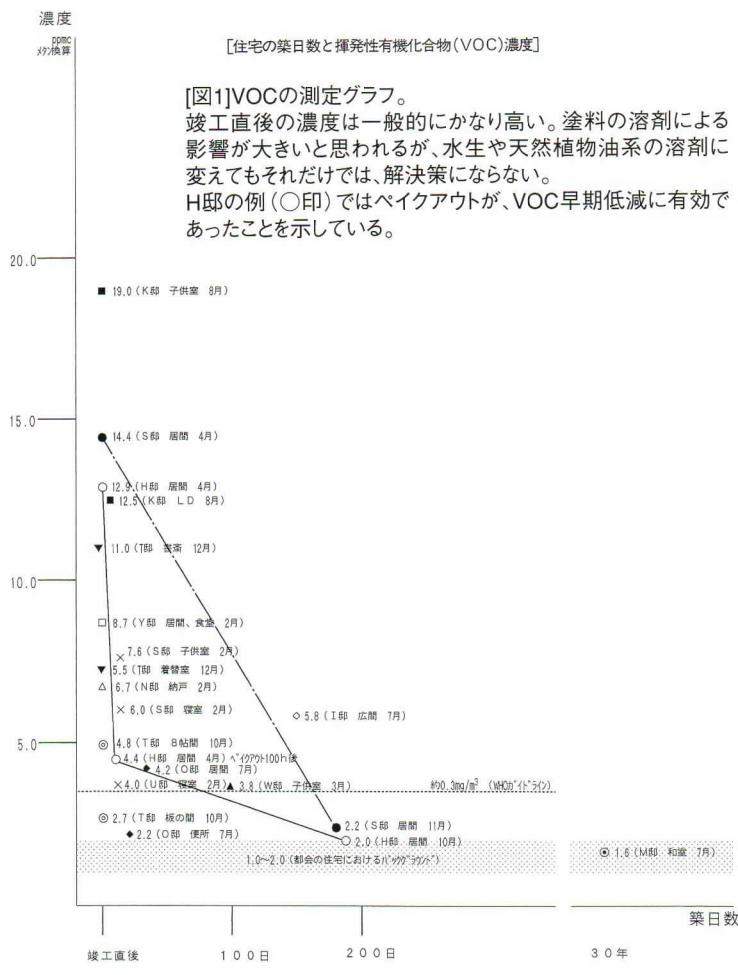
1970年代中頃に担当した住宅で、施主から接着剤と合板を使わないでほしいと要望されたことがある。その方は、自宅の改裝を何度もしたことのある人で、その度に、微熱や発疹が出て気分が悪くなる、原因是接着剤と新しい合板だと言う。そこでできるだけ無垢剤を使い、

水道配管も塩ビ管は使わず、ライニング鋼管や鉛管を使うなど、合板や接着剤の使用をできるだけ減らすようにした。しかし、それらの使用をゼロにすることはできなかったので、その建て主は、完成後半年間風通しをしてから入居された。その当時は、ずいぶん過敏な特殊な人だと思っていたが、化学物質過敏症のことを知って、一般にも起りうる話かもしれないと思うようになった。新築の現場で目がチカチカした経験をお持ちの方は多いと思う。新築の匂いは、かつて杉や檜、蘭草などの香りであったが、新建材の使用や塗装工事が増えるにしたがって、石油系の臭いに変わってきた。防腐剤、防蟻剤、シンナー等、体に良くなさそうだなど薄々感じていながら、代替案を考えもせず、住宅の設計監理にあたっていた。住宅の供給に携わる者として、無知による加害者になりたくないとの気持ちから、設計者仲間に声をかけて、化学物質過敏症について勉強を始めた。そのうち、自分たちのつくっている建物が、実際にどのくらい汚染されているのか知りたくなって、研究者の協力を得て実測調査をすることになった。

汚染の実体

室内環境汚染の悪玉と言われているものは、有機リン化合物、有機塩素化合物、ホルムアルデヒド(HCHO)、揮発性有機化合物(VOC)などである。そのうち、主にホルムアルデヒドと揮発性有機化合物について測定を行った。測り始めてみると、かなりの高濃度が出て、その実体に驚き、様々な条件で測定を続けた。

ホルムアルデヒドは、最近もっとも話題に上る物質である。新築時に目がチカチカする主な原因で、濃度が0.1ppmを超えると目に刺激が感じられる。対策をしていない新築直後では、2/3の家で目安としていた0.05ppm(二四時間平均値)を超えていた。継続して測ってみると、春から夏にかけては濃度が高く、気温の低い冬には濃度も低い。冬に濃度が低い部屋でも、夏にはかなり濃度が上がる。この



T邸居間。仕上は無垢材フローリング、ラスボード下地珪藻土、タイル、プラスチックボード下地ルルナファーザー、和紙など。合板はできるだけF1を使用するなど、HCHOの低減につとめた。冬季の測定でもあり、全体にHCHOの濃度は低いが、建具、家具などのF1でない化粧合板の使用率が高い部屋ほど濃度も高かった。

竣工直後(12月)のHCHO濃度は、着替え室0.023ppm、書斎0.050ppm、食品棚0.065ppm。

季節による変化を繰り返しながら、だんだん減っていくことがわかった。初期の濃度や条件にもよるが、一般的には、問題がなくなるまで減少するのに、二、三年を要するのではないだろうか。揮発性有機化合物(VOC)には、ベンゼン、トルエン、キシレンなどたくさんの物質があり、個々の物質の人間にに対する毒性は、はつきりしていないものが多い。測定も難しく、初期の段階では三〇種類ほどの物質をメタンに換算して分析していただいた。分析の結果、新築直後の状態ではかなり濃度が高く、ホワイトゾーンといわれている0.3mg/m³を大部分の測定点で超えていた。

塗料の溶剤による影響が大きいと思われるが、新築後半年を過ぎればかなり低減する。揮発性の高い物質なので、室温が10°C上ると発生量は倍になるといわれており、暖房機などで室温を連続的に上げて換気するペイクアウトが有効であることがわかった。(図1)

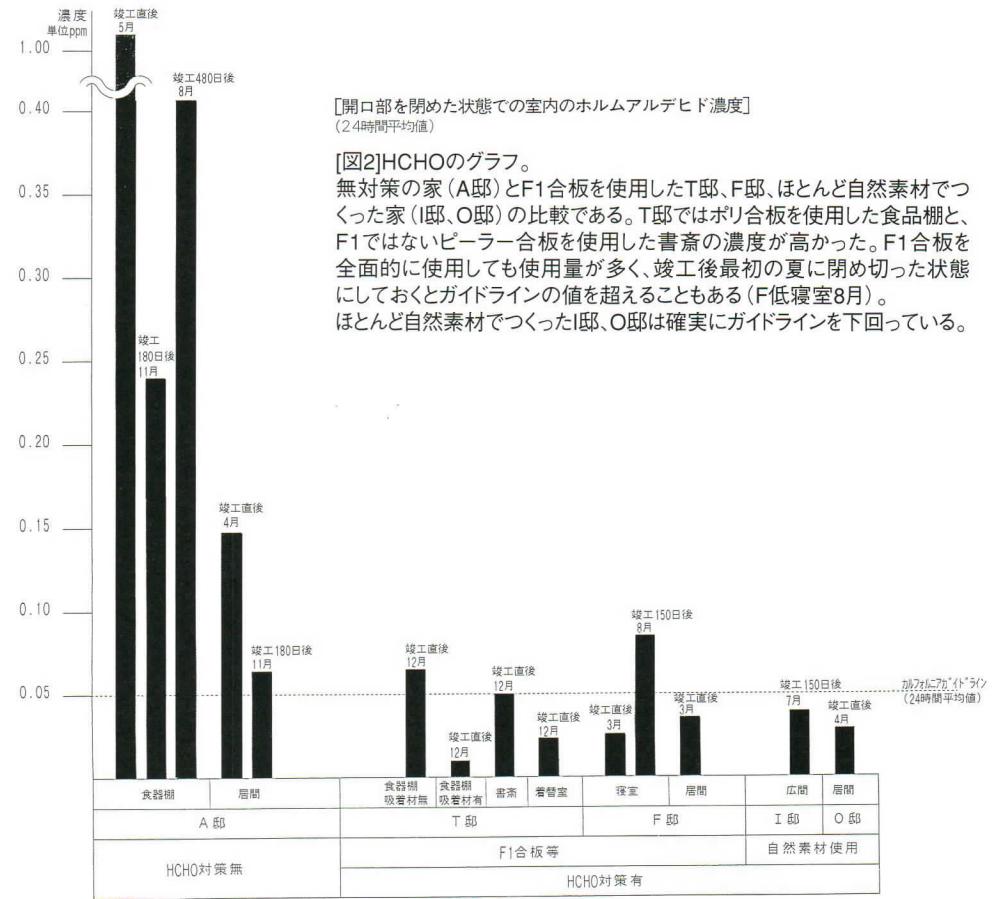
素材選び—自然素材と新建材

測定を繰り返しているうちにいろいろ見えてきたことがある。当然だろうが、自然素材の家は濃度が低いということ。床と天井を杉板、壁は珪藻土仕上の家では、ホルムアルデヒドの濃度が、竣工1年目の夏の測定としては最低値の0.039ppmを示した。木、土、紙などの自然素材は、化学物質汚染に関しては問題が少ない。時間の経過とともに風合いを増すこれらの素材は、設計者の立場からもとも使いたい建築材料である。ただし、かつては建築材料はすべて自然素材であったにも関わらず、今日新建材に取って代わられたのには、

それなりの理由があるのは当然のこと。割れる、反る、狂う、補修がしにくい、時間がかかる、品質が一定でない、コストがかかるなど、施工者の立場からは扱いにくい。供給の面から考えてもすべてを自然素材に転換することは不可能だ。

ホルムアルデヒドの発生源として、もっとも大きな要因の合板の場合、昭和40年代にも問題になったことがあり、その際、F1、F2といった合板のJAS規格ができた。F1合板はフェノール系の接着剤が使われており、従来使われてきたユリア、メラミン系の接着剤に比べて、ホルムアルデヒドの発生は少ない。F1合板に切り替えた住宅では、明らかに濃度が減少した(図2)。ただし、合板の使用量が多く、窓を閉め切っていると、最初の夏にはガイドラインの濃度を越えてしまうこともある。自然素材であるはずの畳には、有機リン系の防虫シートが裏打ちされており、藁の畳床には有機塩素化合物であるパラゾールが入っている。化学物質過敏症の人には、スタイロ畳のほうのが影響が少ないこともあるのだ。ただし新しい素材の場合、代替フロンのように、安全と見なされていたものが実は危険なものだったというようなことが、起こることはあり得る。

昨今もてはやされている珪藻土でなくとも、左官仕上は成績が良い。金属や硝子、タイルや煉瓦などは、発生源にならない。たとえすべての素材を安全なものに取り替えたところで、問題の解決にはならない。ファンヒーターなどの開放型暖房機からは、大量のVOCが発生するし、防虫剤や芳香剤の使用は、確実に室内空気を汚染する。原因は建材だけでなく、我々が室内に持ち込む生活用品からも発生しているからである。



気密性と換気量—住まいの変化

室内汚染が問題になってきた背景の一つに、住宅の気密性の向上とエアコンの普及が考えられる。

夏の発生量の多い期間に、閉め切った生活をするのは問題が大きい。住まいの温度環境と省エネを考えれば、断熱性の向上、気密化は避けて通れないが、換気量の確保は、空気の質を維持するために重要である。成人の呼吸量は18~(18kg!)／日もあり、鼻や肺からは、化学物質を呼吸しやすい。換気量の目安として二酸化炭素(CO₂)の濃度は1000ppm以下とされているが、換気回数0.5回/hの六畳一間に夫婦二人が寝ていた場合、八時間後には1700ppmになってしまうと言われている。まして室内に有害物質が存在すれば、換気量の確保が大切なのは当然である。すきま風だらけの日本家屋に住み慣れた我々は、従来換気に關して鈍感であった。これからは、空気の質について関心を持たなければならなくなっている。

安全な住まい

問題を起こしやすい薬品の一つに白蟻駆除剤がある。住宅金融公庫の融資条件として使用が必要と見なされていたこともあって、毒性がしばしば指摘されながら、白蟻駆除剤は広く使われてきた。しかし、白蟻が直接人間に危害を加えるわけではないのに、なぜ白

蟻を駆除しなければいけないのか。薬剤を使わなくとも、白蟻にやられない家をつくればいいではないか。白蟻と共存できる方法は、昔から考えられてきた。床を上げて建物の足下を乾燥させる、軒を深く出し壁に雨をあてないなど、日本建築の基本は、現代でも生きているのだ。陽当たり、風通し、深い軒、日除け風除けの植樹などの必要性を、改めて認識させられる。我々の生活様式が変わってきた以上、昔の形だけが良いわけではない。新しい技術によって、よりよい住まいがつくれる。大抵の場合、新しい技術は生産性の向上など、経済的な改善を優先に考えられてきた。

本当のよい技術とは、住む人のためになる技術のことである。このごく当たり前のことが、問い合わせられているように思う。

私が住宅の空気質の測定をしていたのは1995~6年頃である。この記事を書いた時も日本では住宅の室内環境汚染に関するガイドラインはまだなく、一部の過敏な人の問題だと思われていた。その後、厚生労働省によってホルムアルデヒドなどのガイドラインができ、建築基準法でもシックハウス対策が法制化された。住宅でも機械換気が義務づけられ、ようやくシックハウス対策が一般化した。建材もF☆☆☆☆☆が当たり前になった。10年でシックハウス対策の環境は大きく変わったのである。

(グラフは1997年作成。当時、日本のガイドラインはなかった)

(はんだ・まさとし 半田雅俊設計事務所)

“新しい住まいの設計”

お客様と共に 楽しむ家づくり



新井 隆元



私は大学を卒業して中堅ゼネコンで5年間勤めた後、静岡にUターンしました。現在勤めている会社は(株)建築工房わたなべという、主に住宅を手がけているビルダーです。10名ほどの小規模な会社ですが、地元でも変わった建物を造る会社ということで知られております。

会社での私の仕事は、設計から始まり、積算、お客様と打ち合わせ、現場の監理、と用は何でも屋です。大変な業務ではありますが、建物に最初から最後まで携わることができ、すべて自分の範囲で物事を進め

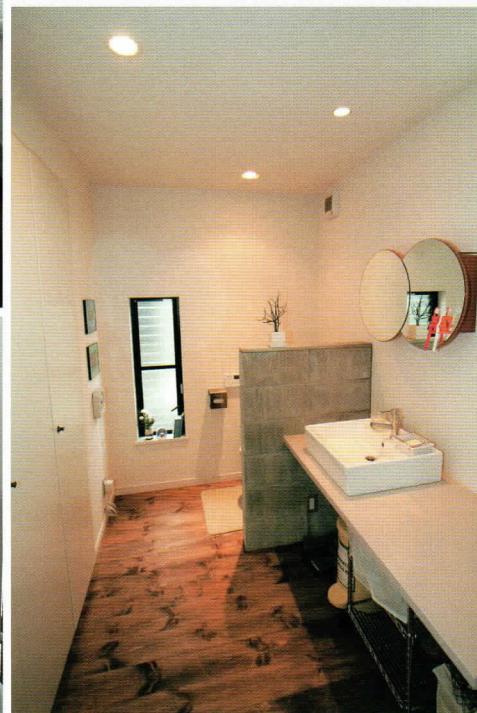
ていけるので、とてもやりがいを感じております。住宅の仕事の大きな特徴は、お客様とダイレクトに接することができること、それは、喜びも直接感じることができます。同時に不満も直接ぶつけられてしまうのです。お客様とのコミュニケーションがいかに大事かということを日々感じております。

平成17年秋、自分の設計施工した建物が「新しい住まいの設計」という住宅雑誌に掲載されました。建築地は富士市の郊外の住宅地で土地が狭く外部からの視線

をさえぎって、中央のへこんだところから光を取り入れたものです。いわゆる都市型住宅です。最近は、プライバシーを尊重する方が増えてきて、こちらのような田舎でも、このような形式の建物が増えてきました。建物を造るにあたり施主とはかなり打ち合せを重ねて、お互い満足のいくものが出来上がったと思っております。

ここで最近私が家造りをしていて感じることを挙げてみます。

-お客様が自分を成長させてくれる-



今回この雑誌に掲載された建物の施主とは、お互いの偶然が重なって出会うことことができました。何か運命のようなものを感じたものです。そんな風に感じることはめったにありませんが、常に、すべてのお客様との出会いというのはこの仕事をやっていて、とても刺激的で、いろいろな意味で、自分にプラスになっていくと感じることができます。

-打ち合わせを、やればやるほどいい家はできる-

当たり前のように感じるでしょうが、これが忙しい業務が重なるとなかなかできなくなってしまうのです。しかし、そんな合間を縫つて(その場合もちろん施主の方も)打ち合わせをすることによって、建物はより完成度の高いものへと変化していくのです。

特に、こだわっている施主の場合、こちらの提案、施主側の提案などが相互に絡み合って、お互い最初には予想もしなかったようないいものが出来上がることがあります。

しかし、それはとても大変な作業です。いい建物を作るには、施主も疲れるようです。

-家を建てるのは不安だらけ-

ほとんどの人は、初めて家を建てる人で、特に最近の人は、細かい人が多くインターネットの普及もかなっています。いろいろな情報が入手できるため、自分たちの建物と照らし合わせて、いろいろ質問してきます。不安な気持ちもわからないわけではないが、いい加減にしてくれと思うこともしばしば。ところが、たてものが上棟すると施主の顔色が変わんですね。これは最近発見したことですが、それまでと違い、こちらに対するあたりが非常に柔らかいのです。やっと形になったことへの安堵感か、自分の家の全貌が見えたことの感動か、そうなると、今までギクシャクしていた関係が非常に良好になっていくのです。逆を言うと、そこへたどり着くまでは、極力お客様に不安感を与えないように、連絡を絶やさないことが大事なのです。

家造りで大切なのは、相手を思う“思いやり”だと確信しています。

最近お客様で何人かが「完成はうれしいけどもう家造り終わっちゃうんですね。」とちょっと寂しそうに言ってくれました。これは自分にとって最高のほめ言葉だと感じました。この人たちには自分たちの家を造ることをとても楽しんでくれたのだなと。いつまでも、お客様にこのような思いをしていただけるようがんばっていきたいと思います。

あらいたかはる
新井 隆元

略歴

1992年 工学院大学建築学科卒業(谷口研究室)
静岡県立御殿場南高校出身

1992年 (株)藤木工務店入社

1997年 (株)建築工房わたなべ入社

連絡先

静岡県富士市厚原1838-8
0545-72-0141

定年で途切れることのない人生を送るために

今、成すべき事

～40半ばからの研究生活～



児玉 達朗



広野火力発電所

私は、工学院大学の卒業生ではない。

私は今まさに工学院大学の大学院生として2年目の秋を迎えていた。45歳にして手にした学生証。今私は最高に幸せだ。

策である根拠の説明責任を負う。一方で、建物の利用者である社員にとって建物は、働く場・職場としての環境として存在し、私たちは、職場環境の向上と改善に向けた取り組みが求められる。

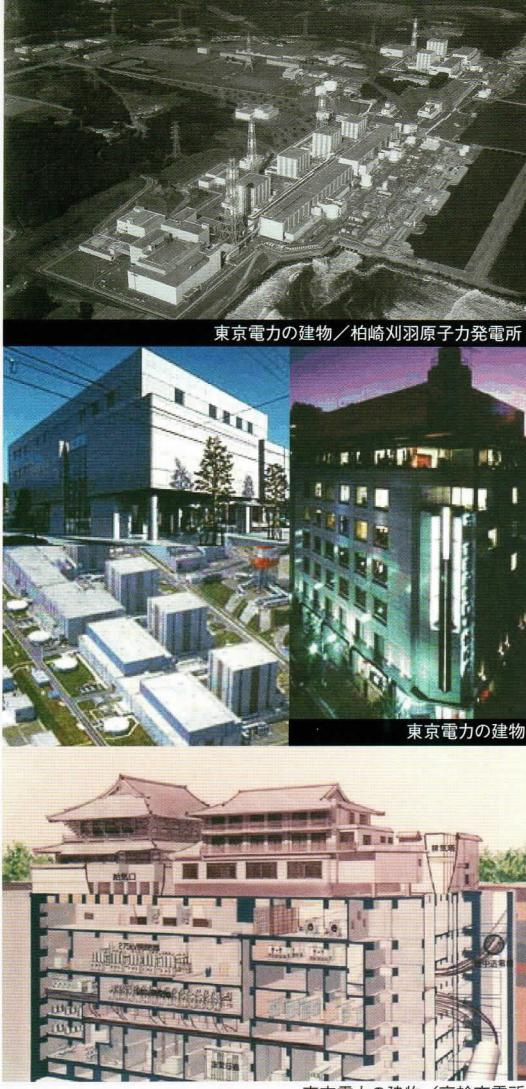
私は東京電力のなかで、その取り組みを進めるための「よりどころ」となるマニュアル・標準類を立案・作成してきた。5000億の建物資産、120～150億円程度の建物維持管理費という環境のなかで、十分にやりがいのある仕事に巡り会い、成果をあげ、会社からも十分な評価も受けてきた。

しかし、社員である以上、そこには定年という限界がある。定年とは、ある歳を境にそ

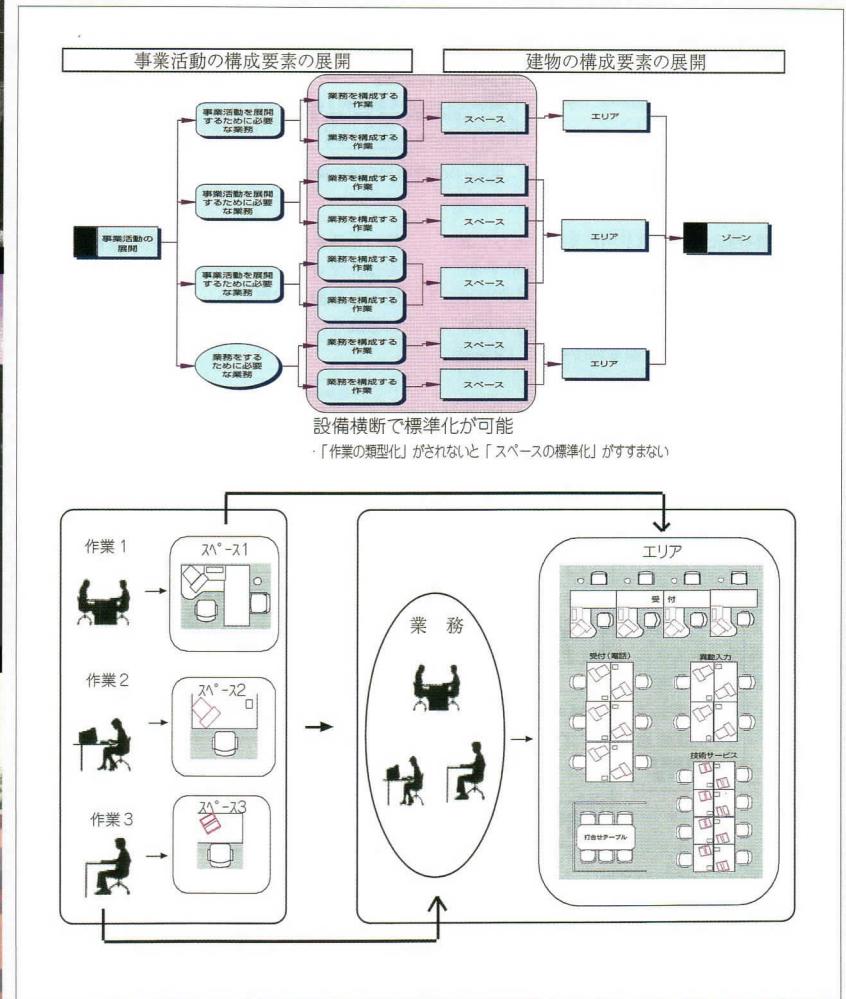
れまでの人的、物的、そして情報環境をすべて置いて行かなければならない、という残酷さがある。なんとか定年によってとぎれることのない人生を送れないものだろうか、その問に対する答えが、大学院への進学だった。大学院で自らの経験をまとめて、永く研究テーマとして取り組む。定年のない人生を送りたい。そう気がついた時、私は40歳を半ば過ぎていた。

私が志した研究課題は、広く分野を求める建築経済学・ファシリティマネジメント(FM)の領域になるが、大学院にその研究の場を探した場合、そもそも建築経済関連の講座や専門の教員を配置していない場合もある

私が、大学院で研究を志すきっかけになったのは、建物の発注者である東京電力の建築技術者として27年間、業務に携わってきた経験・経歴による。私たちは、発注者側の代表者である経営者から、企業の財産である建物の価値を高めるために、必要で無駄のない投資による建築行為の選択を求められ、その行為を選択することが最善



東京電力の建物／高輪変電所



東京電力における「よりどころ」となるマニュアル「施設標準」の考え方

ことを知った。そのような中でも工学院大学では、学部の科目として建築経済、FMの講座があり、特に建築経済学は、建築学会においてその第一人者である遠藤先生が指導されている環境にあることを知った。

私は幸運にも建築士会連合会の推薦を頂き、本学の社会人選抜として受験するチャンスを得た。受験に際しては、遠藤先生をはじめ、吉田先生、倉田先生などの諸先生方から一方ならぬご指導とご尽力を頂いた。建学以来、実践力に溢れる技術者を育成するという伝統は、単なるキャリアの評価だけではなく、研究者としての可能性をも評価して頂いたと感謝している。

大学院での生活は、想像以上に快適だ。今回の進学は、会社としての国内留学制度によらないことから、社内的には自薦・国内外私費留学という先例のないケースとなった。服務上の問題から取り扱いについて紆余曲折あったが、所属長の英断により正式な社内承認手続きを得て、勤務時間内での通学は認めて頂いている。そうは言っても中間管理職として部下も預かる身、そぞう

勤務時間中に抜け出るわけにもいかない。もっぱら大学院には週末に通うという生活を過ごしている。大学院では、院生室に個人のワークステーションが与えられ、図書館やインターネットを初めとする豊かなインフラが自在に使うことができる。近くに代々木体育館を望む院生室は、思考の場としては最高で、日常業務に流される発想の転換には欠かせない場となっている。

私は過去に良いサービスを学校から受けたことが無く、学校と名の付く組織に身を置くスタッフには良いイメージをもっていなかつた。しかし、本学のスタッフは、誰もがプロ意識を持ち、親身で献身的な姿勢であることは、同じく社会人として見た場合、学ぶべき事が多い。

院生室の先輩から受ける影響も新鮮だ。職場の部下よりも若く、子どもの年齢に近い方の考えと同じ目線で聞くことができるのは、学生の特権だろう。学食で食事、生協で買い物をし、時に研究室の仲間と明け方まで飲んで歌う。20代に比べて財力は強くなつたが、疲れが翌朝まで残るとき、体力が落ち

たことが身にしみる。

大学院での研究は、想像以上に大変だ。会社での業務は広さを要求され、程々に達成すれば評価は受ける。しかし、業務と同じ事象を研究テーマで扱うと全く違う世界になることを痛感している。研究には、広い視野と深い洞察力、人とは違う着眼点が要求される。歳だけは同じである我が師、遠藤先生と接する機会が増すにつれ、自身の未熟さを痛感する。路は未だ半ば。二度と来ないと思っていた学生生活だからこそ、日々を大切にし精進を重ね、晴れて工学院大学OBとなることを願っている。

こだまたつろう

児玉 達朗

略歴

1979年 3月 神奈川県立神奈川工業高等学校建築科卒業
1979年 4月 東京電力(株)入社
1985年 3月 関東学院大学工学部第二部建設工学科(建築系)卒業(星野研究室)
2005年10月 工学院大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程後期入学(遠藤研究室)

連絡先

東京電力株式会社 神奈川支店

〒231-0007 神奈川県横浜市中区弁天通1-1

<http://www.tepco-switch.com/>

dd05502@ns.kogakuin.ac.jp

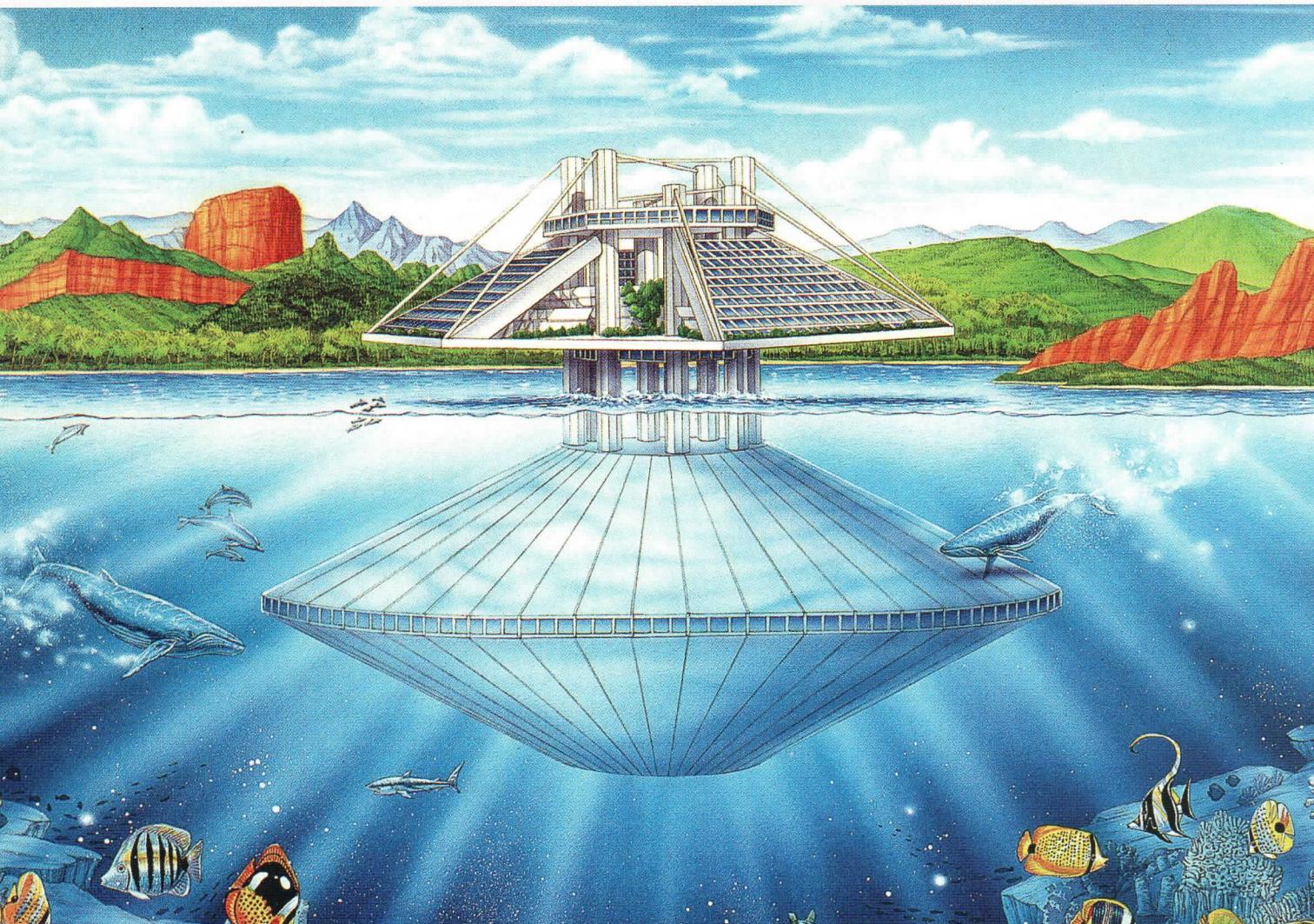
仲間と目指す

「モノ創り」

～楽しんで・いろいろな方々と研究開発～
(団塊世代・退職後を楽しんでいます)



倉持 春夫



ノアの方舟(回遊式・海洋国際大学)

1972年:卒業設計 2000年:seee(株)研究会にてリニューアル計画

(卒業論文・設計が縁)

私の卒業論文は、大塚先生にスラブの応力解析の指導を受けました。このことが、入社して、プレストレストコンクリート合成床板の開発に、大いに役に立つとは思いませんでした。

また、一般的に卒業設計は、地上の建築

物の提案をするのですが、私は「海が好き」だったので、海洋構造物「ノアの方舟(回遊式・海洋国際大学)」を計画しました。その構造は、プレストレストコンクリート構造と吊りケーブルで構築する提案をしました。

そして、縁あって、プレストレストコンクリート製造会社の設計部門に入社して、設計・製造・施工・技術営業・技術開発をしてきました。

した。

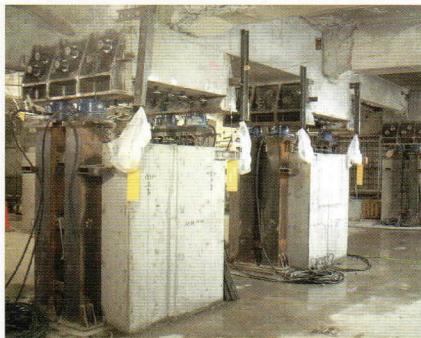
現在、会社を退職して、本学の建築学科・大塚研究室で研究開発をしています。

そこで、私の担当している大塚研究室での研究開発と他の研究開発で、いろいろな方々と研究開発をしていること、また、大塚研究室の活動について、述べさせていただきます。

(免震レトロフィット工法)

本工法は、PC鋼材のプレストレスを利用した免震レトロフィット工法であり、仮受のための躯体補強および仮設スペースを、コンパクトにできることが大きな特徴です。これにより、改修後の免震層に十分な建築空間を確保することができるため、中間層における免震レトロフィット工事に適しています。

本工法は、実大実験と実施工において、十分な安全性と高い支持性能を確認しています。



圧着接合の施工・地下一階



山梨県庁舎本館免震改修(地上9階地1階)
共同開発者:鰐沢(構造設計)さん



免震展示台:滋賀島出土の金印展示・共同開発者・
青木(機械制御設計)さん



TBSテレビ「はなまるマーケット」、震動実験の結果について
説明する大塚先生

(多重吊り免震装置・3方向)

本免震装置は、組み込まれた複数の立体トラスを吊り材で多重に吊った機構であり、水平・鉛直の3方向に免震効果があります。そして、一次固有周期は、総吊り長さに依存して、振り子の式($T=2\pi\sqrt{L/G}$)で表すことができます。本免震装置は、通信シェルターの免震化のために開発され、実大実験において、減衰性能・復元特性を確認しています。また、吊り部材をPC鋼材にして、重荷重に対応する免震装置を構築できます。



大塚先生を囲んで、児島さん、北山さん、野口さん、
八木沼さん、鳥屋さん、星野さん、倉持



免震・通信シェルター(静岡県掛川市)

(軽量・薄型免震装置・2方向)

本免震装置は、転がり機構を応用した装置であり、水平の2方向に滑動をして、装置寸法の2倍のストロークを発揮します。さらに、装置の高さは9cmと薄型です。

そして、本免震装置は、既存住宅の免震化に対応できるように開発された、小型ながら耐荷重性・滑動性能・耐久性能を有した免震装置です。



軽量・薄型免震装置の振動実験状況



屋久島にて、大塚先生、天野先生(元本学:機械学科教授)、児島さん、北山さん、倉持

(「メカトロストラクチャー」構法を目指す)

今、いろいろな方々の助言を頂きながら、私は仲間と共に、「メカトロストラクチャー」構法による「モノ創り」を目指しています。「メカトロストラクチャー」とは、メカニック(機械)、エレクトロニクス(電子・制御)、ストラクチャー(構造)を組み合わせた造語です。これから建築空間は、機械・制御・構造技術の特性を融合した新しい構法、「メカトロストラクチャー」構法により、もっと・おもしろい・楽しい「モノ創り」ができそうです。

そして、私の夢は、おおらかな「仲間」と「メカトロストラクチャー」構法で「ノアの方舟」を現実化して、「ノアの方舟」が回遊する太平洋上で、「仲間」と一緒に、冷えたビールを飲みたいものです。

くらもちはるお
倉持 春夫

略歴

1968年 東京都立南高校卒
1972年 工学院大学建築学科卒(横田研究室)
1972年 ドーピー建設工業株式会社
(旧 北海道ピーエスコンクリート株式会社)入社
2004年 ドーピー建設工業株式会社退社
2004年 建築学科大塚研究室客員研究員
現在 工学院大学構造実験室
技術補助員

連絡先

工学院大学建築学科大塚研究室

〒192-0015

東京都八王子市中野町2665-1

Tel:0426-28-4739

E-mail:dq04002@ns.kogakuin.ac.jp

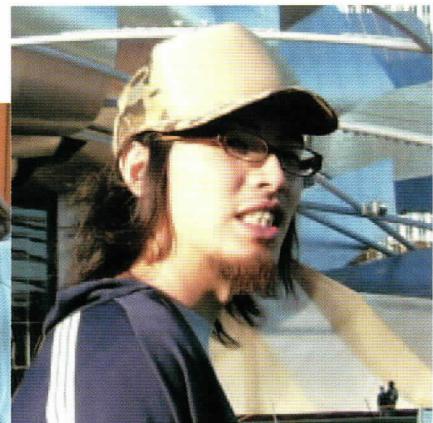
片桐
和也

イリノイ工科大学大学院留学中 プロセスとして 建築デザインを考える。

一度日本之外から見つめなおす
かたぎり かずや
(谷口研 2005年3月卒)



with David Chipperfield



- 2004 工学院大学卒業
ロサンゼルス留学
- 2005 イリノイ工科大学建築学部修士課程
選奨全生
- 2006 ARCHITECTSインターナーシップ受賞
- 2005 秋スタジオプロジェクト
・イリノイ州歴史保存グループ展示会
・ブルマンタウン歴史保存美術館発表
・イリノイ工科大学展示会
- 2006 春スタジオプロジェクト
・ミルウォーキー美術館発表
・イリノイ工科大学展示会

e : kazzle_dazzle@yahoo.com
W: www.kazzledazzle.com

イリノイ工科大学

2004年度工学院大学(谷口研究室)卒業し、その後1年間ロサンゼルスでの留学を経て、現在シカゴのイリノイ工科大学建築学部大学院で勉強しています。

アメリカの大学院で勉強しようと思ったきっかけは、より高度な専門知識を身につけることもそうですが、新しい環境で、いろいろな人々とともに勉強することで、自分が日本で学んだことを発展させたいとおもい、決意しました。

シカゴの街には、ミースの建築はもちろん、フランク・ロイド・ライトの住宅群やルイス・サリバンなど、モダン建築の教科書の様な街です。

そんなシカゴにあるイリノイ工科大学はミース・ファン・デル・ローエが創った学校として有名ですが、最近ではOMAの学生センターやマーフィー・ヤーンの学生寮など、建築への新しい動きが盛んに行われています。新旧の融合がなされた教育環境で充実した日々を送っています。

スタジオ

2005年の秋セメスターでは、建築の構造とデザインの設計を考えるスタジオでした。スタジオでは教授と生徒、そして構造家を交えデザインを進めていました。そこでの話し合いは、構造解析から始まり、ディテールのデザインまで非常に高度で専門的な分野まで及びました。特に構造解析は、専門のソフトを使って構造のマテリアルの



open house



open house



イリノイ工科大ステューデントセンター



nArchitects france



nArchitects france

細部までデザインすることができました。このスタジオではハイテクノロジーを駆使し、非常に現実的な建築デザインのアプローチを学ぶことができました。

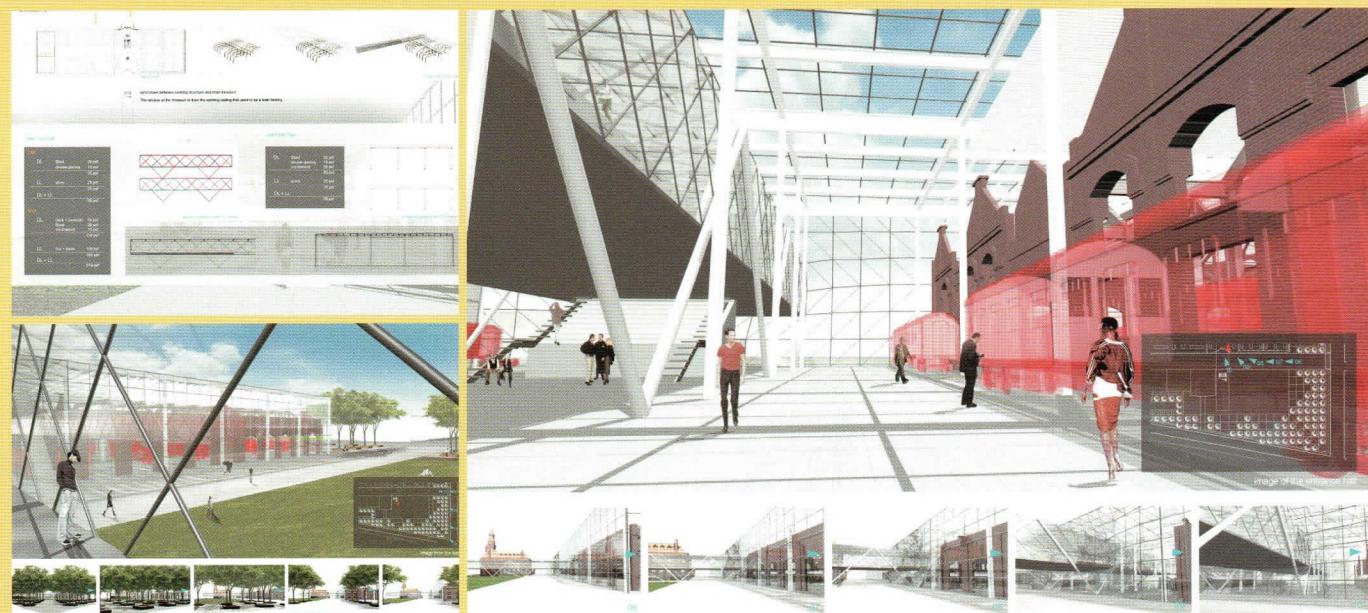
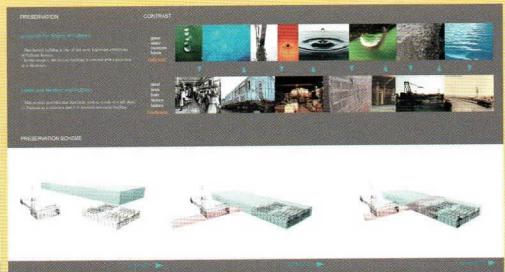
2006年の春セメスターでは、ゲストとしてデビッド・チッパーフィールドをむかえプロジェクトを進めてきました。スタジオのテーマは、ミルウォーキー美術館の拡張のデザインでした。このプロジェクトは、実際美術館の人たちやキュレーターと共にデザインを進めていくという、建築家とクライアントという関係に近い形をとることで、建築のデザインだけではなくプロセスとして建築のデザインを考えるということを学びました。

このようにこの学校の教育の方針は、ハイテクノロジーを用いてより現実的で専門的なプロセスを学ぶというもので、自分のアイディアをどのように実際の形にしていくかというプロセスを非常に考えさせられます。

インターンシップ

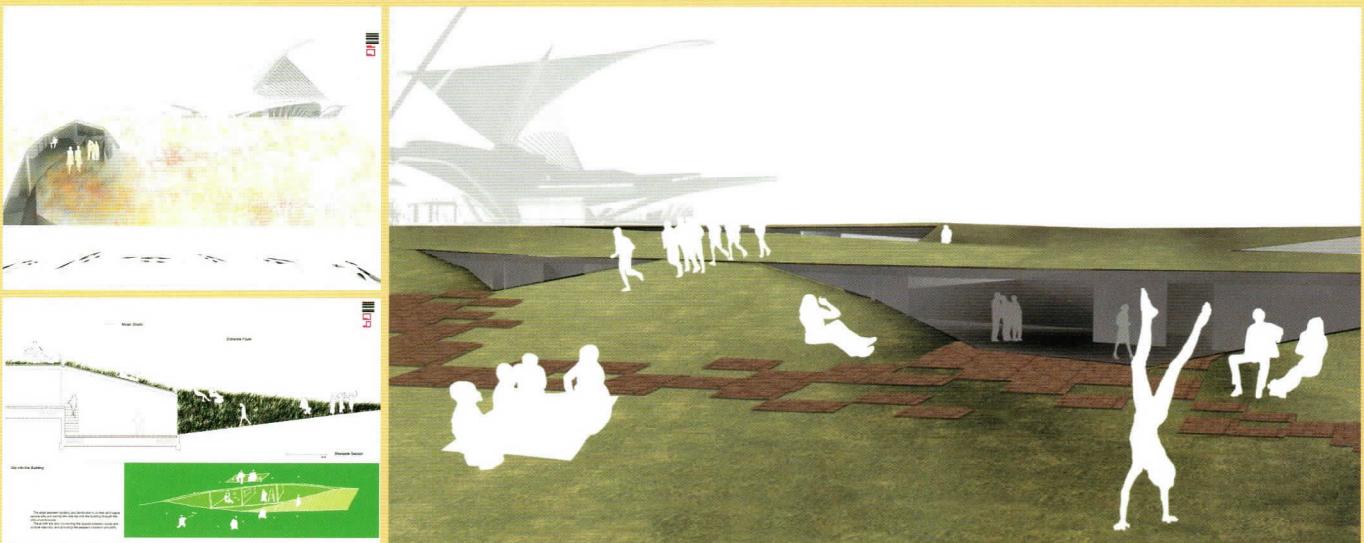
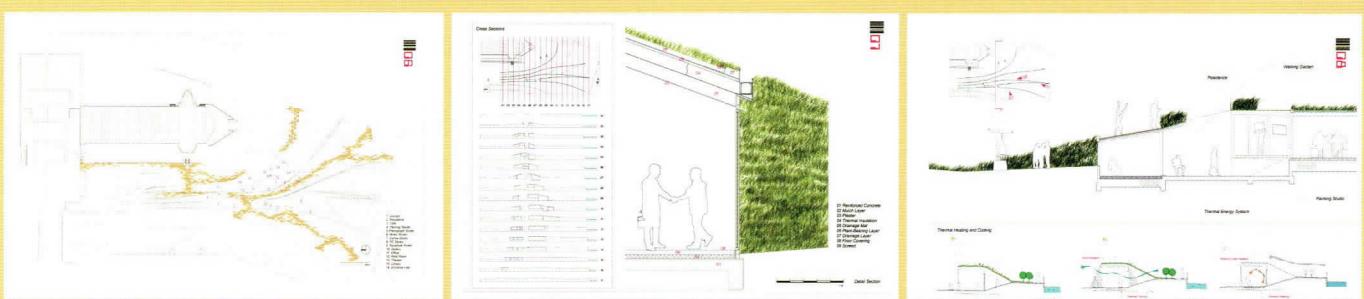
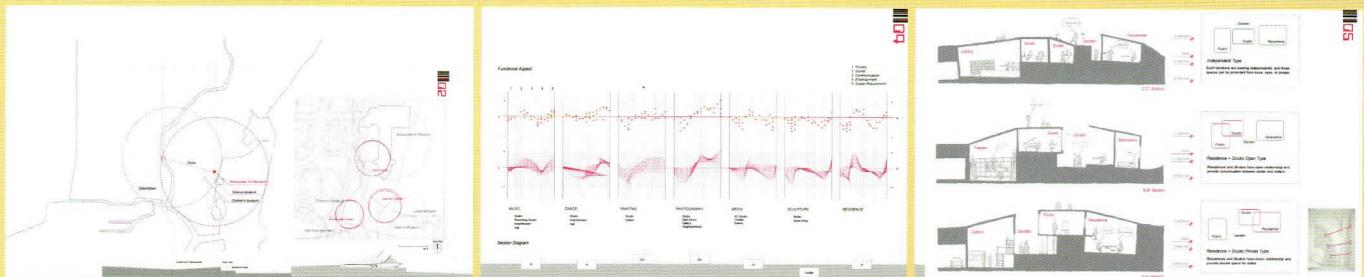
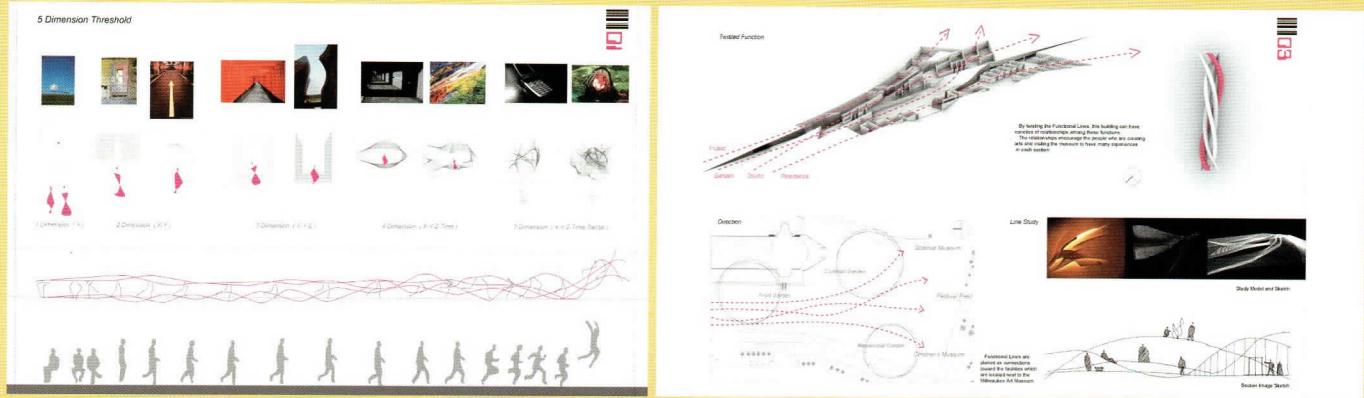
夏休みの期間を利用して、ニューヨークにあるnARCHITECTSという事務所で働きました。この事務所は若く小人数の事務所で、非常にクリエイティブな人たちでした。そんな人たちと過ごした夏はすごく充実したものでした。その中でも、フランスで計画されたアートインスタレーションでは、プロジェクトを進めるために1ヶ月現地に滞在し、デザイン・施工を行いました。実際プロジェクトが完成していくところを目の当たりにし、一員として関わることができ、非常に貴重な体験をすることができました。

工学院大学を卒業してからアメリカで生活をするなかで、建築のことだけではなく普段の生活も含め、一度日本の外から見つめなおすことができたことで、自分の方向性を見定めることができたように思います。このような体験をすることができているのも、たくさんの方々、特に両親の協力があってこそだということを実感しています。この場を借りて感謝の気持ちを伝えさせていただきます。



プルーマン鉄道博物館プロジェクト(大学院最優秀課題賞受賞)

このプロジェクトは、プルーマン歴史保護団体をクライアントにむかえ、19世紀の鉄道開発の歴史を保存、継承していくことをテーマとしてプロジェクトを行いました。ここでは、対になる二面性の関係をコンセプトに、ファンクション、マテリアル、ストラクチャといった要素を構成していき、過去と未来、ハードマテリアルとソフトマテリアル、パブリックとプライベートなど異なった二極の共生を、鉄道という媒体を通して提案しました。



ミルウォーキー美術館増築プロジェクト(大学院最優秀課題賞受賞)

ミルウォーキー美術館と共同で、今後迎えるであろうキャバシティーオーバーに対する解決策を探すことを目的にプロジェクトを進めました。既存の敷地には、サーリネンによる美術館本館、カラトラバによるエントランス増築、ダン・カイラーによるランドスケープの3つの相反する特色を持った要素が共存しています。周辺の芸術関連施設を考慮し、これらをつなぐインビジブルで補助的な建築を提案し、建築の公園化、公園の建築化といったテーマで計画を進めました。



「シアトル」あたりの 身近な情報です。

鴻巣泰宏



9階製図室が好きでした
こーのす やすひろ
(山下研1986年卒)

1963年	岐阜県に生まれる
1986年	工学院大学建築学科卒業
1992年	一色建築設計事務所勤務
1995年	退所と同時に渡米
1997年	杉本哲司とHidabito Association, Inc. (飛驒人Inc.) を設立
	米国政府より建築家として National Interestsの称号を得、移住
	Mavis M. Mallon、青木保司と共にLOST ARTSを設立
	連絡先 / Lost Arts 6857 Seabold Roard Bainbridge Island, WA 98110 lostarts@lostartsllc.com www.taliborn.com

現在工事中の現場にて



一緒に事務所をやっている
Mavis Mallonさん

背景

山下研19回生。山下先生と谷口先生の両先生に、建築の凄みを教えていただき、当時の学部の仲間や院生のかたがたからは、その実践を学ばせていただきました。比例は、西尾先輩。哲学は、小高先輩にやさしくおしえていただきました。こわかったけど! これから、「ありがとうございました。」

能力もないのに、院にいきたくて就職活動をしていなかったぼくに、山下先生は、「きみは、なんだかコチコチだから、一色建築設計事務所のYUJI(納賀雄嗣先生)のところにいって、あたまをやわらかくしてもらいたいなさい。」というような、あのスピーチ調の、みながあこがれた語り調の激励言葉をいただきました。当時すでに第一次面接はすでに

終わっていたのですが、納賀さんに電話連絡を入れていただき、2次面接から参加できることになり、就職できました。両先生のおかげです。

代々木の一色事務所には、「アメリカに住みながら働いてみたい。」という理由から6年半勤めさせていただきました。1992年、納賀学校を退社させていただき、渡米致しました。

なにかな、予感!

当時、納賀さんの事務所(一色事務所)には、北米から訪れる人が多く、シアトルの事務所とのネットワークもありました。

共同プロジェクトのあるシアトルから派遣されてくる仲間達。飛込み就職してくるカナダからの仲間。その仲間たちの建築に対する考え方



Z.Z.WEI STUDIO

方や技術の高さに気づきました。それに図面もきれい!比例もきれい!たまたま、できる人達であったのかもしれません。ただ、どうしてかぼくには、「この違いは、個人の才能の差異からうまれるものではないのではないか。!?」と思われ、「なにか、余裕があるんだよなあ。」って仲間と話したり、感じていました。仕事の後、飲みに行ったり、遊んだりして、話してみると、「建築一筋」というタイプでもなく、でも建築がうまい。生活環境、教育環境、居住環境の違いからうまれる、にじみでる差異なのか?…だとしたら、移り住んで数年肌で感じてみたい。それが渡米するきっかけであったのです。

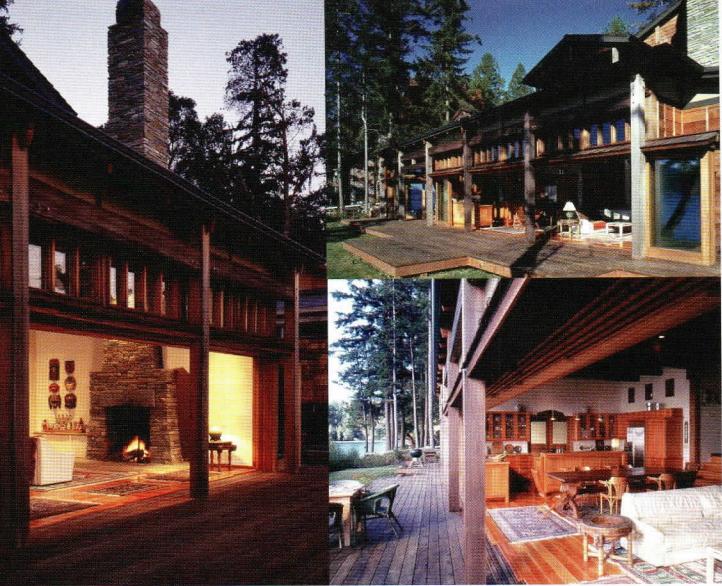
シアトルあたりからの身近な情報です。

渡米することを決め、一色建築事務所在籍中の休暇期間に建築というよりは、その哲学に影響を受けたチャールズムーア事務所(サンタモニカMRY)に飛び込み就職願いをしました。英語が話せませんから、アポも取れず、いきなりMRY事務所にスライドプロジェクター持参で、面接していただけるよう嘆願。1週間近くのモーテルにつめ、面接日をまちましたが、今考えると先方にあっては、大変なご迷惑をおかけしたことでした。無礼をいたしました。面接後、事務所内を案内していただきました。2点について驚きました。1:とてもきれいな建築空間で創作活動が行われていること。背筋がしびれるほどの空間で皆が働いている。そしてほとんどの製図スタッフは、英語を話すアジア人のことでした。しかし、ムーア事務所で、働くことはかない

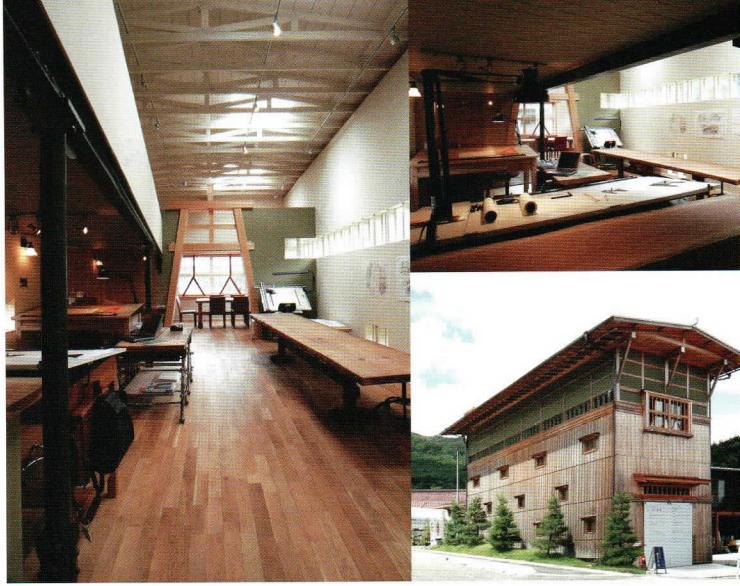
ませんでした。面接結果の手紙を翌週にいただきましたが、採用不可を綴るビジネスとしての手紙の内容に驚きました。長い文章には、激励のことば、ほめ言葉、などなどが随所にちりばめられている丁寧なものでした。ていねいな“お断り”的手紙でした。数年後には、ニューヨークに就職活動にいくのですが、その時も、どの事務所から届く通知の手紙も丁寧なものでした。名前をよく聞くような事務所になるほど文章が長い手紙であることも、つよく記憶に残っています。退社と渡米宣言済み、ただし、就職先まだ、みつからず。という時期。めぐまれた面接の機会をいただきました。当時、東京一色事務所の副所長は、山下研の先輩:菊池時夫先輩です。“シアトルにある設計事務所に面接の機会があるんだけど、どうだあ。”ということでした。



BERG邸



BERG邸



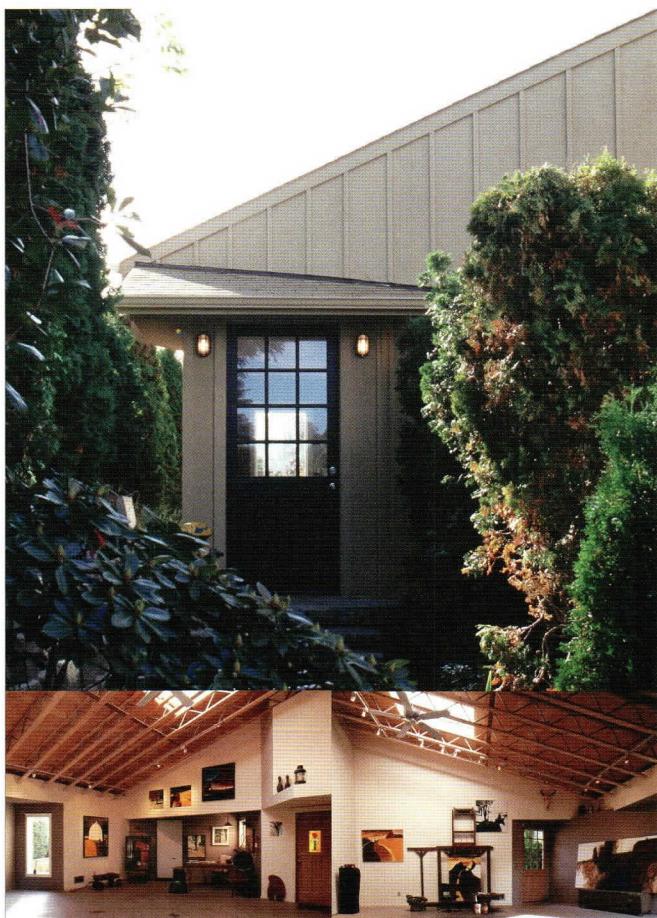
Tall Barn/LOSTARTS 高山オフィス

なんという機会、そしてありがとうございました、菊池先輩！面接は、2回ありました。自らを売り込む第1次、第2次は、4時間の短期設計。どのくらい図面が描けるかを読み取るものでした。どの程度、法律（その当時はUBC）を知っているかもこの段階で採点されました。日米共同プロジェクトを担当したとき、米国の基準法にふれていたため、何とか就職できました。2年後、別の事務所に移るのですが、そこでも試験はありました。梁の計算も要求されました。最初の事務所で働きながら、CADと共に夜間学びましたので、なんとか転職OKAY.その当時の僕の契約時給は、12ドル50セント。経験の浅いドラフトマンのレベルです。

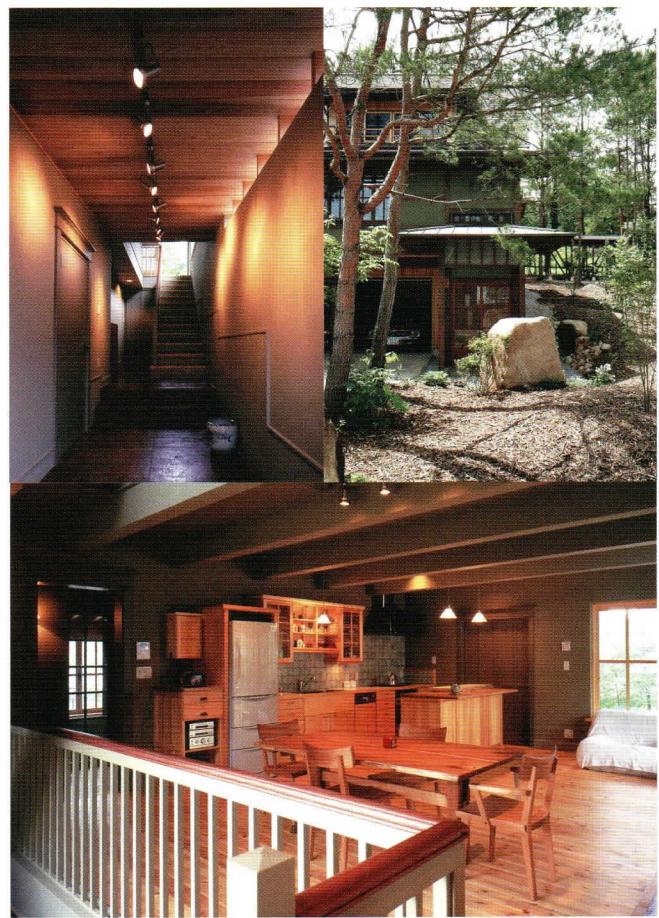
アメリカは広いところですから僕が知っている情報は、シアトル辺りの限られた情報です。1992年に僕が働き出したころは、勤務時間は、8時から5時。月曜日から金曜日まで。週に40時間勤務。残業というものは

基本的にありませんでした。忙しい時期会社側は、最低1週間前に残業依頼をスタッフに通知します。残業がある場合、会社は、スタッフに対して契約した時給の1.5倍を報酬することが雇用法で義務付けられてもいました。2006年最近では、月曜日から木曜日まで9時間勤務、金曜日は午前中のみの4時間、週に40時間勤務。というライフスタイルがシアトルあたりの事務所で働いているなかまたちです。

仮に自らの意思でスケッチをにつめたいなどの想いから5時を過ぎても事務所にいたい場合、ボスにその意思を伝え、会社が負担する、電気、水道、電話などを使わしてもらい、自分の時間として事務所で作業を続けます。どの事務所の上司も“事務所の電気を使っていいよ。”などとは、発言いたしませんが、事務所の役員とスタッフは、フェアでした。



Z.Z.WEI STUDIO



松原邸

ワシントン大、大学院のSTUDIOを覗けば、そこはやはり、旧校舎新宿9階の風景と似ています。熱く建築をみなが探っています。ここまでが学校。就職するとその学校感覚の延長は、週末や平日の夕刻以降の自らの時間で、ゆっくり個々のペースで続けられているようです。ぼくも5時から図書館詰め。という時期が続きました。

移住することにしてから、二人の仲間とLOST ARTSをつくってから、気長に続けています。シアトル辺りの、この辺のライフスタイル

からただ普通に知った情報を、自国に発信し、共有することです。山に囲まれた小さな生まれ故郷、比較的文化のまだ残る故郷のなかに情報発信しています。小さな日本にある、地方都市の文化と混ざり合って、なにかが自然に発生することを目的や願いとしています。地域の動向やその独自なライフスタイルが“生まれる”、“再考してみる”、“なにかのきっかけになればいいなあ。”などと故郷の仲間とはなしをしています。

写真 アトリエR畠 耕
URL <http://www.atelier-r-hata.com>





環境に優しい乗用車を introducerした 米国トヨタケンタッキー 乗用車製造工場に携わって



いば たかし
(十代田研昭和43年卒)

著書

- ・建物のLCA指針(案) 共著
(社)日本建築学会(丸善出版)
- ・鉄骨工事監理チェックシート 共著
(社)日本建築技術者協会(技報堂出版)

主な作品(大林組在職中)

- ・宮内厅 下田須崎御用邸
- ・九州電力 玄海1号原子力発電所
- ・日産自動車 久里浜分工場機械工場
- ・米国トヨタ ケンタッキー乗用車製造工場
- ・タイ 矢崎燃同工場
- ・日本CMK 新潟サテライト
- ・日本トランシティ 東松山物流センター
- ・東京都 豊島清掃工場
- ・華虹NEC 上海半導体工場

経歴

- | | |
|----|----------------------------------|
| 学歴 | 昭和36年 都立戴前工高 卒業 |
| | 昭和43年 工学院大学工学部建築学科(十代田研究室) 卒業 |
| 職歴 | 昭和36年 株式会社大林組入社(名古屋支店設計部) |
| | 昭和45年 大林組東京本社・設計部 |
| | 昭和61年 大林組東京本社・トヨタKy工事事務所(アメリカ赴任) |
| | 平成 6年 大林組東京本社・設計本部(設計部長) |
| | 平成12年 大林組東京本社・設計本部(設計技術部長) |
| | 平成15年 株式会社大林組定年退職 |
| | 平成18年 営玉堂一級建築士事務所開設(自営)現在に至る |

Email:iba-takashi@nifty.com

私のポートフォリオ

工学院大学建築学科(十代田研究室)を卒業以来約40年、一貫して建築の設計部門の業務を担当しており、現在も市井の設計屋として今までの経験をふまえて、もの作りの大切さを実践している。このことは各産業界全体の共通した事項であり、建設業界でも当然のことです。工学院大学建築系学科同窓会誌をとおして建設関連業界で活躍している先輩・同輩・後輩の方々が、もの作りの大切さ(技術の伝承)を再認識して頂けたら幸いです。

私は大林組に入社し、入社から定年退職までの全期間を設計部門に在籍し、前半の20年間は構造プロパーとして数多くの構造設計を担当させて頂き、残りの約20年間は「生産施設・物流施設・社会基盤系施設(清掃工場・産廃処理施設等)のグループリーダー」として意匠系・構造系部員を統括し、設備設計部門・施工部門とのコンカレント業務を通して、もの作りの大切さを学び、設計思想を建物にインプットさせて頂いた大林組の業務体制に満足し感謝しているだいです。

プロジェクトの序論

大林組在職中の私の代表作品の一つが「米国トヨタケンタッキー工場新設プロジェクト」です。トヨタ自動車は現在、環境に優しい車を地球の各地域で生産し、各国の消費者に提供しています。

環境を重視した車造りができるのも、トヨタケンタッキー工場建設当時のノウハウを活かしているからだと思います。そのベースになつたのが設計申請段階からの環境パーミットにおける米国環境局との対応の結果です。トヨタ自動車は地域の環境に合致した車造りを如何にしたらできるかのノウハウをこのケンタッキー工場で習得したのだと思います。新工場建設の計画設計の段階から竣工間際まで約2年半、工場建屋建設の設計部門の1人として参画し、トヨタ自動車の担当スタッフの方々と各テーマ毎にトヨタ流を設計に反映させる為、意見の交換を繰り返しあこない、時には徹夜状態のことも何回かありましたが計画を練り上げ実施設計を纏めあげていったわけです。

サラブレットの生育地から車の生産拠点へ

工場建設地にきつたケンタッキー州ジョージタウンは、人口1万1千人。葉タバコ畑とサラブレットなど競走馬の牧場が広がる静かな農村地帯。2年半後には、日産が進出しているテネシー州スマーナやホンダの工場があるオハイオ州メリービルなどと並んで日本車の生産基地に生まれ変わる。同地域を選んだ理由は、ケンタッキーの人達の伝統的な勤勉さと組合嫌いであり、同時にハイウェー網(アメリカ大陸を南北方向に走るI-75と東西方向に走るI-64の幹線自動車道路のジャンクション。このI-75の沿線には、ピック3の生産拠点がある)が整っており、鉄道などの交通の便も極めてよ



いからである。----工場用地選定にはトヨタは公開募集方式を採用し23州の中からケンタッキー州を選出。

プロジェクトの概要

広大な敷地面積1300エーカー(約523万m²)に、2000ccクラス(日本名カムリ)を年間20万台生産する規模の工場を構築する。工場施設は、生産工場建屋(プレス工場・塗装工場・組立工場・プラスチック工場から構成された一貫工場)を中心とし、他に車両検査を目的とするテストコース、工場全体の動力を供給する動力源エリア、及び事務所棟から構成されており、延べ面積37万m²の世界最大級のプロジェクトである。設計期間は昭和60年(1985年)11月～昭和63年(1988年)5月で、Fast Track方式における設計業務(CM対応)を担当した。工期は昭和61年3月～昭和63年5月の期間で2年半に満たない超突貫工事である。米国内の常識では工事だけでも3年半かかると言われた30万m²クラスの自動車工場を、造成工事(ダイナマイトを使用した大規模な土木工事)から生産建屋工事及び原動力設備工事を含め設計込みで2年7ヶ月で完成できたことは、Fast Track方式を採用したことにより、今までの自動車製造工場建設では考えられないことである。日本の自動車工場は、プレス工場・塗装工場・組立工場・プラスチック工場が別棟で形成されている分散型であるが、すべての生産ラインをひとつの巨大な建屋の中に配置する集中型を採用したことにより、各生産ライン間の連絡動線の短縮及び建屋の空調負荷の低減を計ると共に、ケンタッキー州の冬期気候条件下で、作業員が外気にさらされることのないようにし冬期の車の生産に影響がないような平面計画を採用した。自動車工場の大きな特徴は「頻繁な生産ラインの変更、それに伴う設備の移動・変更」といわれる工場内の改修工事である。将来予想される改修工事を効率よく対応できるように、生産ラインのモジュールと建屋の経済性を考慮し、共通の基本モジュールを採用した。また法規(Kentucky Building Code)上、避難距離の関係で要求される防火区画壁についても、KDOH(Kentucky Department of Housing)と打合せを重ね、防火区画を最小限にしフレキシブルな工場とした。

プロジェクトの特徴

本プロジェクトの特徴は、C.M(Construction Manager)の立場での設計である。

設計チームの役割は、発注者(トヨタ自動車)からの設計与条件を握りし、基本計画終了後、米国の設計事務所(協力設計事務所)をたくみにコントロールして実施設計を纏めたことにある。

トヨタの生産方式(ジャスト・オン・タイム)に合致した生産ライン機能を最大限に配慮した集中型生産工場になっていると共に、経済性を追求した建屋空間を作りだしている又、生産性の向上を求める、従業員の良好な作業環境を作り出すと共に、米国内においてトヨタ式管理が十分おこなえる生産工場になっており、ケンタッキーの風土にとけ込み自然環境、社会環境にも適合している。

タバコ畑と競走馬の牧場が広がる静かな環境に囲まれた広大な敷地を有効に利用したゾーニングをおこない、前面州道路と工場前面との間に300フィートに及ぶ緑地帯を設け、工場建屋及び事務所等の附属建屋をバランスよく配置させた。特に事務所棟周辺の景観は、ケンタッキー州のランドマークにふさわしく、フォーカスポイントとして地域住民に愛され、周辺の環境に違和感なく溶け込んでいる。

トヨタの張副会長(2006年5月時点の役職)の 着工20周年に会わせて

トヨタ自動車の張富士夫副会長が、2006年5月20日、ケンタッキー州レキシントン市で米国ケンタッキー工場の着工20周年に合わせて、ケンタッキー工場(ジョージタウン市)は米国でトヨタが単独で運営した初めての工場で、1986年5月に着工し、張副会長が工場立ち上げを進めた。会見では「米国のアイデアを日本で取り入れたり、米国的新工場の立ち上げを米国の既存工場が手伝ったりするような動きが活発になっている」と米国の生産体制を評価した。----この事は、エンドユーザーである消費者(世界の消費者)を意識し、環境に優しい車作りを常に掲げているトヨタ流の現場主導の実践哲学を伺うことができます。----このケンタッキー工場の完成が、現在の北米市場、ひいては世界市場でのトヨタの大躍進を支えていると私は実感するしだいです。1兆円利益の成功はここケンタッキーからはじまっていると確信している。トヨタだけでなくCMを担当した大林組、特に設計を担当した設計チームのマネージャーとして、私はあのケンタッキー工場を今でも誇りに思っている。



感性を養う旅



建築学科建築学コース3年
小菅 芙沙子
E-mail:fusako_ino_@hotmail.co.jp

1983年 神奈川生まれ
2002年 神奈川県立小田原高等学校卒業
2003年 工学院大学建築学科建築学コース入学
2007年 工学院大学建築学科建築学コース卒業見込み



イタリア ローマ パンテオン

■はじめに

2006年1月下旬から約40日間、フランス、イタリア、スイス、ドイツ、スペインの5カ国を訪れました。都市では、パリ、モン・サン・ミッシェル、フィレンツエ、ローマ、ミラノ、ヴェネツィア、シエナ、ピサ、オルヴィエート、バルセロナ、ミュンヘン、フュッセンなどに行きました。今回の旅行ではレンタカーを借りて車で移動しながら各地を見て周りました。40日間で約9000キロという距離を移動をしました。車での移動だと時間が余計にかかってしまう部分もあるのですが、

電車などの交通が不便な場所などにも車だと訪れる事ができたので充実した40日間を送ることができました。

■百聞は一見に如かず

今回の旅行を通して私が思ったことは実物を自分の目で見ることの大切さです。現代は情報化が進み、世界中の多くの場所の映像や写真を瞬時に見ることが可能であり、文献なども多くあるが、実物を自分の目で見ることには遠く及ばないということを実感しました。

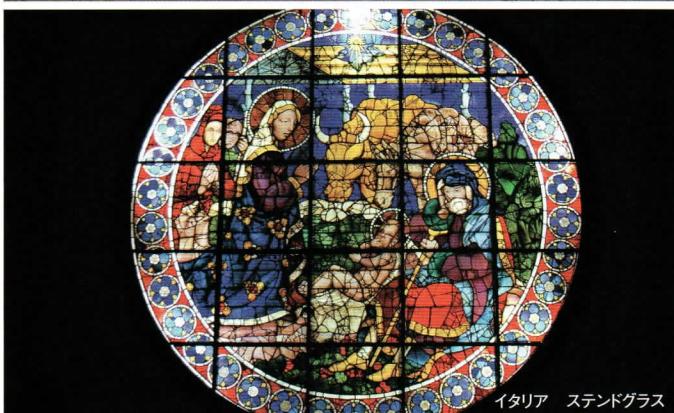
映像や写真ならば撮影した人の、文献などの文章なら文章を書いた人の感性や思惑などがどうしても影響するものであると思います。また、写真などを見た場合自分でイメージを作ってしまうが、そのイメージが実際と大きく異なるという経験が何度もありました。私は実物を自分の目で見たときどう感じるのか、どう思ったかということが大切なのだと実感しました。今回の旅行では、フィレンツエのドゥオモを見た時に自分がイメージしていたよりもはるかに大きかったこと、ファサードの造りの精巧さに



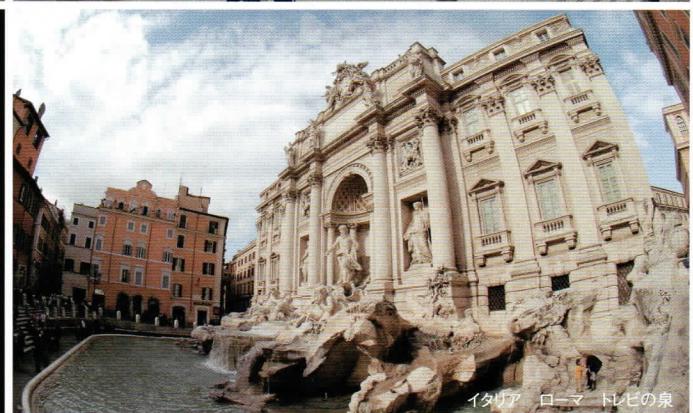
イタリア オルビエートのドゥオモ



スペイン バルセロナ サグラダ・ファミリア



イタリア ステンドグラス



イタリア ローマ ドレビの泉



イタリア ローマ コロッセオ

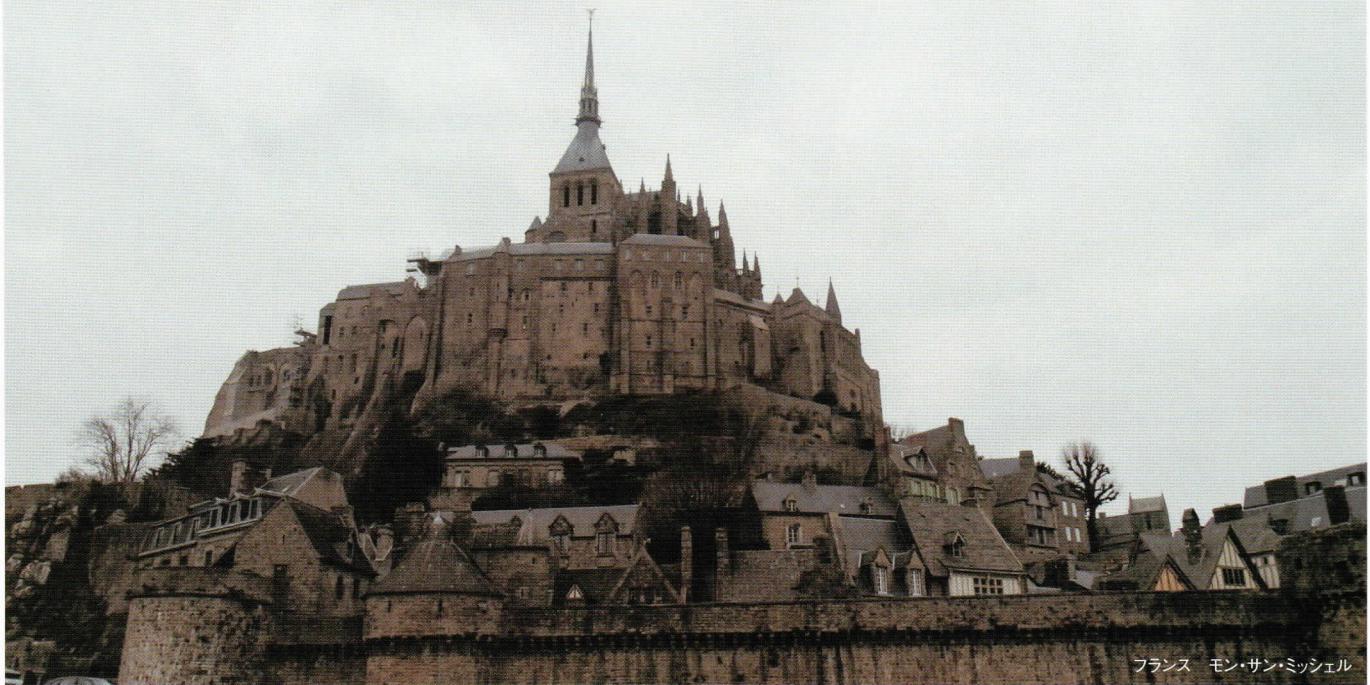
感動しました。ファサードの彫刻のどれをとっても精巧で吸い込まれるような印象を受けました。反対に、バルセロナのサグラダ・ファミリアを見たときは自分がイメージしていたよりも教会が小さくて、実物を実際に自分の目などの感覚器官を使って見ることは重要なことだと思いました。大学の授業などで学んで理解したつもりでいても本物を見ることによって自分は理解したつもりになっていただけであり、本当は理解していなかったのだということに気がつきました。人により同じ物を見て感

じることは違うので本物を見ることにより、はじめてそのものを自分が理解できるようになるのだと思いました。

■キリスト教を学ぶ重要性

ヨーロッパの社会はキリスト教によって構成されています。建築も街並もキリスト教をもとに造られています。そのため、キリスト教を知らなくても建物などをただ見てまわることはできるが、本当の意味で理解することはできないと思いました。日本では一般的にキリスト

教にあまりなじみがないように思います。私自身もキリスト教について知っていることはほとんどありません。そのため、美術館や教会の Fresco などを見ても何の場面が描かれたものなのかがわからないことが多くありました。西洋の建築などを学ぶにはキリスト教がどのような環境で生まれ、どのような考え方を持っているのかということを知らないければいけないと思いました。キリスト教の持つ考え方と共に感できるかどうかということではなく、キリスト教の教えなどを知ることによって、自分自身の視



フランス モン・サン・ミッシェル



ドイツ ノイシュバンシュタイン城



ドイツ ヴィース城



フランス ヴェルサイユ宮殿内部

野を広げるという意味でキリスト教を学ぶ必要性を痛感しました。

■おわりに

今回の旅行で多くのものなどを見てまわった経験をこれからに生かすためには、このまま日本に帰ってきたら旅行は終わりてしまうのではなく、自分が何を感じたのか、どう思ったのかということを自分なりに整理していかなければならぬと思いました。今の自分に足

りないものは何であるのかといふことも少しあつたように思えます。バルセロナのユースホステルでエレベーターの中に30分くらい閉じ込められてしまうという小さなトラブルにも遭遇しました。この経験により英語などの語学の必要性を実感させられました。また、旅行者に親切な国や人たちも多くいるので言葉が話せることにより、海外の人たちとコミュニケーションをとることができるように、困ったときなどにも気軽に助けてもらえることなどもあると思います。

今回の旅行では広い範囲をまわるために、1つの都市での滞在期間を短くして多くの都市をまわったため、主要な都市や場所にしかいけなかつたが、実際には交通の便が悪いためなどの理由で、ガイドブックなどにも載っていない小さな教会などが意外にも入ってみると面白いなどということがわかりました。また今度海外に行く機会があつたら、1つの都市をじっくり見てまわりたいと思いました。



建築学科・建築コース4年
濱 奈津子

千葉県立小金高校卒
工学院大学建築学科(建築コース)
2002年入学
2006年卒業
工学院大学大学院 工学研究科建
築学専攻
修士課程1年在籍中
東研究室 所属

新たな関係を求めて

はじめに

オランダに降り立つとそこは、日の光がさんざんと差し込み、忙しそうに人々が行き交い、でもどこかうきうきした空気を持っている場所で、コンコースと呼ぶに相応しいところでした。オランダ・スキポール空港の開放的な空間は、私の旅の不安を和らげてくれ、この旅の充実を予感させてくれているとも思えました。

2006年2月14日から3月1日にかけて、オランダのアムステルダム、ロッテルダム、ユトレヒトなどの各地と、ドイツのルール工業地帯のなかのデュースブルグを訪れました。今回の旅の目的は、主にオランダ・ドイツの前衛的な現代建築・ランドスケープデザインを見て回り、環境を改変させる建設行為と、人間も含めた生物の生息環境を創造する行為の調和の総合である「二次的自然環境」を体感することです。

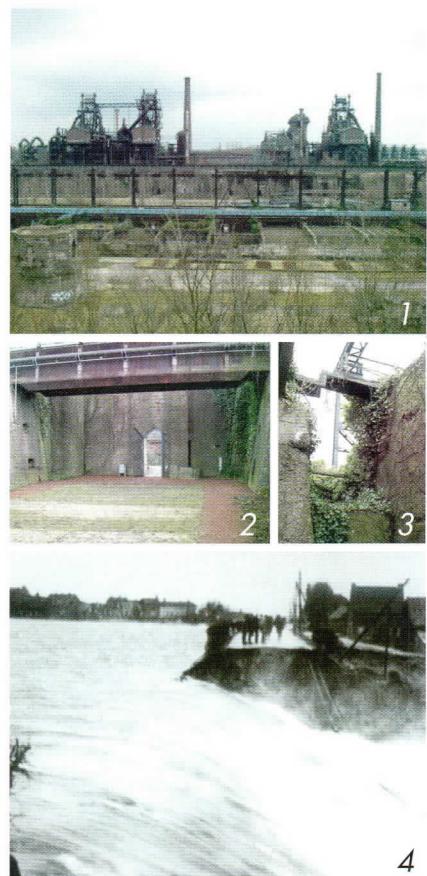
オランダはその国土のほとんどが干拓地であり、いわば、人の手によってつくられた大地です。そのような、大地さえもつくってしまうような行為、二次的自然行為のなかに、私

は「場と生態の新たな関係性」の萌芽を見ました。単に建築・ランドスケープをつくるのではなく、そこに生態系の生息環境さえも創造してしまうような計画は、大学に残り、研究を続けていく私にとって、とても魅力的なものでした。オランダ全体が建築・ランドスケープのユートピアであり、生活の豊かさを体現している場だと思われたのです。

ドイツへは卒業論文で取り上げた「エムシャー景観公園」の見学のために訪問しました。かつての製錬工場の中に、庭園やレクリエーションのための施設が用意されています。工業的景観を背景に、工場の遺構の歴史的価値と庭園の生態学的な美しさが溶け合い、まるでシュールレアリズム芸術を見ているようでした。

二次的自然環境をつくる

オランダは国土の約4分の1が海面下にあり、平坦な低地が続く独特の景観は、北海に面したオランダ南東部のゼーランド州から南ホラント州にかけてつくられた、大規模な堤防によって成立しています。堤防を



1 エムシャー景観公園
2・3 エムシャー景観公園庭園内部
4 洪水の様子(出典:『The Delta Works』)

造ることで生まれた新しい大地は、人々に耕作地と居住地を提供し、オランダの発展に貢献してきました。この堤防の建設を含めた一大治水事業「デルタ計画(The Delta Project)」がロッテルダムを代表とする、オランダ南部の大都市圏に住む人々の命と生活を守っているのです。かつて北海沿岸の堤防の決壊が原因で、オランダ南東部は数回にわたり大洪水に見舞われ、多くの人々が命を落としました。オランダにおいて、このような事業によって自然環境に手を加えることは、生きることと同じと言えます。生きるためにには必要な行為なのです。

オランダにおいて二次的自然行為(人が手を加え続けることによって維持される自然環境のこと)とは、生存のために本能をむきだしにした、鋭利な欲求の発現であるかに見えます。人間の思うままに自然を踏み荒らしているかのように。しかしここで、二次的自然行為はみだりに自然開発を行うことを意味しません。人間の生活と自然環境との折り合いをつけられる、ちょうどいい関係を保ちながら行われています。

「デルタ計画」の大規模な事業用地のな



5



6



7



8



9

5. ウォーターランドから見る大堤防
奥に立っているのは風車

6. 貝のランドスケープ・デザイン
デザインされた当初の姿
(出典:http://www.west8.nl/W8_Projects/L/L003_OSK.html)

7. デ・ホーフェ・ウェルウェ国立公園
奥に見えるのは湖ではなく砂丘

8. アムステルダム現代美術館
建替え工事中のため、一時的に駅前の郵便局跡をリノベーションして美術館としている

9. ボルネオ地区の集合住宅
運河にせり出すように面している。ファサードのデザインにはかなり自由がある

かに、お金を全くかけずにデザインされたランドスケープがあります。その計画は、予算の都合で事業がストップし、余ってしまった土地になされたものでした。オランダで食用として食べられる貝を、白色と黒色の縞模様になるように敷き詰めただけのシンプルなデザインです。そこに、多くの野鳥が飛来するようになりました。そして、驚いたことに貝の配列と同じように、白色と黒色の野鳥が並んで休むようになったのです。鳥は、自分の体の色と同じ場所を好む性質があります。外敵から身を守るために、計画者のアドリアン・ヒューゼは、このランドスケープを「生きた禅様式の庭のようだ」と形容しました。この計画が完成したのは1992年で、私はその15年後に現地へ行ったことになりますが、そのデザインには草花が繁茂していて、貝の縞模様をはっきりと確認することはできませんでした。植物さえもデザインに加わって、場所とデザインと生態とが一体になっていました。もともとその場所にあったかのように。

私は、この計画が「二次的自然行為」の理想形だと考えています。時には乱暴とも言える人間の環境改変に、歩み寄る形で自

然が入り込んでくる。その関係性をデザインが支えている。その現場に身を置き、空間を体験した時間や経験は、私にとって代え難い貴重なものでしたし、この視察を通してより一層研究への意欲が湧きました。

生活環境を維持するための絶えまぬ努力と奮闘によって、今日のオランダの前衛的な建築やランドスケープデザインに見られるような、環境を改变させることへのポジティブな姿勢が培われたのだろうと思います。オランダのアーキテクトたちは、人間の生きるフィールドでもある自然環境に対して関心をもちながら、デザインにおいては常に自然に挑むような態度で臨んでいるように感じられます。オランダにおける二次的自然行為が破壊的でないのは、自然環境と人間が対等な関係であるからではないでしょうか。自然は様々な自然現象を通じて、人間に与えもするし、奪いもする。人間はそれを受け容れるし、抵抗したりもする。両者がうまい具合にとけあつたとき、「二次的自然環境」が生まれます。私は、そのような理想的な「二次的自然環境」を数多くこの目で見て、その空間を感じてき

ました。オランダのラディカルなデザインは、自然環境が無条件に与えてくれる豊穣な大地に対して、人間の行いも同等にフェアでなければならない、そうあるべきだ、というメッセージのように思えます。それが、空間をつくりだす建築やランドスケープを通じて、人々の心を打つでしょう。すべては、自然に寄り添う精神が基になり、生まれるものだったのです。

「デザインを楽しむ」

オランダの建築やランドスケープデザインは、そのデザインの奇抜さや色彩の豊かさから多くの人の関心が寄せられています。単に建築物、ランドスケープをつくる、というではなく、[場所を自分の居場所にする]=[すみかをつくりあげる]ことに対する意識が見てとれます。場所を積極的に自分のものにしようとしている意識が、建築であったり、ランドスケープデザインであったり、ありとあらゆるデザインの現場に具現化されているのです。場所に住みつこうとする意思やそうあってほしいという願い、ここには人間の生活があ



10. west8の設計によるブリッジ
躍動感のあるユニークなデザイン

11・12. ロッテルダムのミュージアム・パーク
設計はイヴ・ブリュニエ 静謐な美しさをたたえる公園

13. ユトレヒト市中央美術館
個人邸宅をリノベーションした美術館
外からの光がガラスケースに映りこんで室内を明るく照らす

14. キューブ・ハウス
コモンスペースから見る室内は斜めの壁や窓となって
いる

15. FRESH H2O
ウォーターランドにあるパビリオン
海洋生物の展示を行っている クジラがデザインモチーフのようだ

るのだということをデザインが物語っている
ようです。

たとえば、アムステルダムの北東部・ボルネオ地区では、港湾地域の再開発の一環として、広範囲にわたって集合住宅の計画がなされています。この地区的マスター・プランを手掛けたwest8は、使用する建材の指定や建築面積の1/2をオープンスペースとする、などの一定の建築ルールを規定して、1haあたり100戸の高密度低層集合住宅を実現しました。23haの細長い敷地の中に、20の建築家チームが各ブロックをデザインすることで、街区を通り抜けるたびに住戸のデザインの違いを楽しむことができます。大きく二つの地域に分かれるエリア同士を結ぶのは、ジャンプする蛙を模したような楽しい造形の橋です。向こう岸へ渡る、単なる移動が楽しいことのように思えてきます。

また、ロッテルダムにあるミュージアム・パークは、周囲に4つの美術館・博物館があり、植栽が絵画のように配置された美しい公園です。人が景色の中に見え隠れするなかに、野鳥が降り立ち草花が咲く様子は、まさに都市の憩いの場として理想的でした。計画的に配置された植栽も、その場所から自然に生え出たように見えます。

オランダのアーキテクトたちは、どんなに馬鹿げたことでも、まず真剣に考えてみる、ということをしています。彼らの発想は、自己主



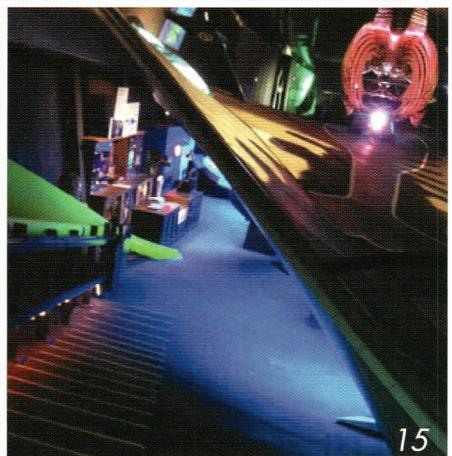
11

12

13



14



15

張の発見としてではなく、一人の人間として生きていることを楽しむ、そのためにつくるのだと私たちに伝えているかのように、ユーモア溢れるものです。そしてそこから建築のフィールドに大きくジャンプします。このジャンプは建築としての実現性を高めるためのもので、ここからが職能としてのアーキテクトの活躍の場です。それ以前のプロセスでは、生活者の視点というか、使う側の心を忘れていない、そういう感じを受けます。

このような、子どもの遊びのように自由で柔軟な発想から生まれる建築やランドスケープは、広く人間の感情の根本的なところを強く揺さぶる力を持っています。そのようにしてつくられた空間では、思わず寄り道したくなるような気持ちになったり、走り回りたくなるような楽しさを感じたりします。そのような感情の起伏は、言葉ではなく、空間がもたらしてくれたものであり、空間が私に直接語りかけていることがわかります。建築は、物理的に生活の場を人間に提供してくれますが、心理的にも建築やその周辺に親近感を与えてくれます。常々、「建築は関係性を生む」と考えていましたが、オランダではこのことが顕著に感じられました。

常生活のなかにも、あたりまえのようにとけ込んで、場所の潜在的な魅力と生物の生息環境が見事に調和した情景をつくりだしています。その情景は、人間の利己的な欲求を許容する、自然の寛容さを私に気付かせてくれました。同時に、オランダにおける二次的自然環境の豊かさを目の当たりにして、私たちは都市だけでなく、精神からも自然を追い出してしまっていないか、という疑念も持つようになりました。

自然に寄り添い、感慨や情緒を感じる感覚を持っている私たちにも、オランダのように理想的な二次的自然環境をつくりあわせることができるはずです。そのためには、建築やランドスケープが日々の生活を楽しむ舞台として人々に愛され、様々な感情を喚起するものであることが必要だと考えるようになりました。

このような発見と思索に満ちた体験の機会を与えてくださった建築学科の先生方、工学院大学建築系学科同窓会の方々に厚く御礼申し上げます。また、自然や人間に對するさまざまな視点を持つことができたのは、渡航を勧めてくださった指導教授の東先生と東研究室での活動のおかげです。これからは、工学院大学大学院の修士課程に属し、東研究室の院生としてより一層勉学に励んで行きたいと思いますので、ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願ひいたします。

おわりに

オランダにおける二次的自然環境は、国土開発などの大プロジェクトだけでなく、日

スウェーデン アスプルンド建築を堪能する旅



梅中 美緒

2006年3月建築都市デザイン学科卒業
2006年4月 大学院建築学科専攻修士課程1年
澤岡研究室在籍
神奈川県立多摩高等学校出身
Setsail_ume@hotmail.com

【ストックホルム】

スウェーデンの首都・ストックホルムは、14の島で構成され、市内の総面積のうち水の占有面積は13%に及ぶ。郊外まで含めると2万4,000ものarchipelago(群島)から成り立つ水の都だ。その群島を縫うように冷たい空気を突き抜けて航海し、月光が夜の海へとまっすぐに降り注ぐ、スウェーデンからフィンランドへ向かう船での一夜は、人生で味わった事のない体験の連続だった。「海」「夜」「月」「島」「船」「星」…私を興奮させる沢山のものに囲まれて、少年のように目を輝かせない訳にはいかなかった。

1250年頃、まちの中心部のガムラスタン島(旧市街)へ人が居住したのが都市の歴史の始まりだ。現在こそ総人口187万人を超える国際的大都市だが、今も歴史的建

造物が多く残り、世界で最も美しい首都と言われている。スウェーデンには北欧の建築界をリードし、誰もが国民的英雄と認める建築家がいる。エリック・グナー・アスプルンドだ。ストックホルムではアスプルンド建築をまるごと堪能する旅であった。

【Skogskyrkogården／森の火葬場】

市中心部から約6km南の郊外に、森に囲まれた墓地がある。世界遺産として登録され、キリスト・ユダヤ・イスラム教と宗派を問わずおよそ12万人が眠るこの墓地は、アスプルンドの手によって25年の歳月をかけて作られた。完成した1940年にアスプルンドは他界し、彼自身ここで眠る。人生の最後に、こんなにも美しい最高の名作を世の中に生み出し、全てをやり遂げたと告げるよう人に

生の幕を閉じたという事実は、この森の火葬場が唯一無二の最高傑作であるという事実をさらに確固たるものへとしているようさえ思える。

私が訪れたのはよく晴れた日で、ストライプ状に一面広がる気持ちの良い巻層雲と、ストライプ状に整備された芝生が呼応し、アスプルンドの空間がその隙間にひとつの曇りもなく存在していた。なだらかな丘を、空に吸い込まれるようにゆっくりと登り、広大な空間の焦点となっている巨大な十字架に受け止められる。この道行きを一歩ずつ踏みしめたびに、体の中を心地よい風が流れてゆき、全てが浄化されるような気分だった。

広大な敷地の中には、合理的な動線を持ちながら遺族感情に配慮した暖かい空間演出をも合わせ持つ火葬場や、森の中に埋

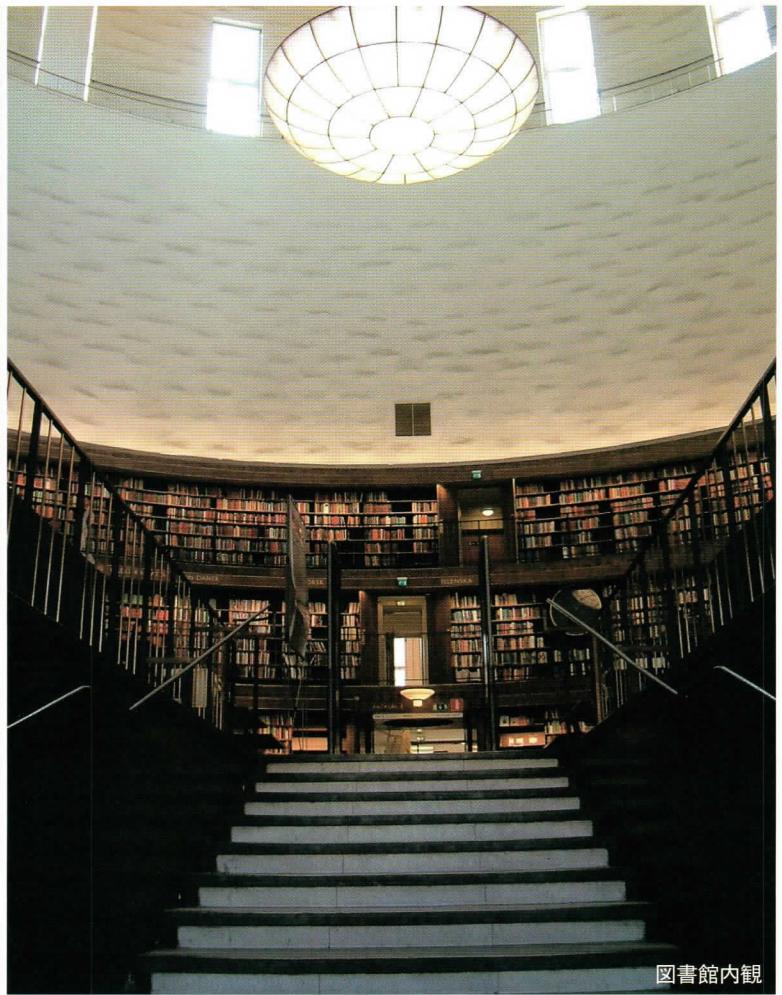


森の火葬場





森の礼拝堂



図書館内観



月光



ポーティコ



スカンディア・シネマ



森の墓地



図書館外観

もれるひかえめなスケール感でありながら、天井から落ちる光が天上の世界へと誘うような静かで親密な最後の時間を作り出す森の礼拝堂など、様々な場所で、数え切れないゾクゾクする瞬間を体験した。北欧の人々の森への憧憬を見事に表現したこの場所は、例外なく訪れたすべての人を、心の奥底から癒してくれるに違いない。

【スカンディア・シネマ】

ストックホルムで最も賑やかな繁華街に面するこの映画館は、外観からはアスプルンド建築である事が伺えない。しかし一度室内に入るとそのインテリアに感嘆させられる。真っ赤なインテリアに月型の拡声器、夜空に輝く

星のような照明、古代遺跡をかたどった装飾に囲まれて、1日1回しか上映しないという映画を鑑賞した。柔らかい音に包まれた至福の時だ。丁寧に案内して頂いた従業員の方の「この建築で働いていることを誇りに思う」という言葉は、建築家を志すものとして、最終目標のような言葉で、決して忘れられないだろう。

【ストックホルム市立図書館】

直方体に円柱が突き刺さるような単純な幾何学图形の構成をしたこの図書館は、通りから円柱の中心へと向かう階段から導き、円柱内部の開架書庫が図書館へ訪れた人々を向える。この図書館は、隣接する丘や公

園と共に長い間市民に愛されてきたが、市立図書館としての機能が年々拡大し、増築案の国際コンペを開催中だ。今後の変遷に注目すべき建築である。

【おわりに】

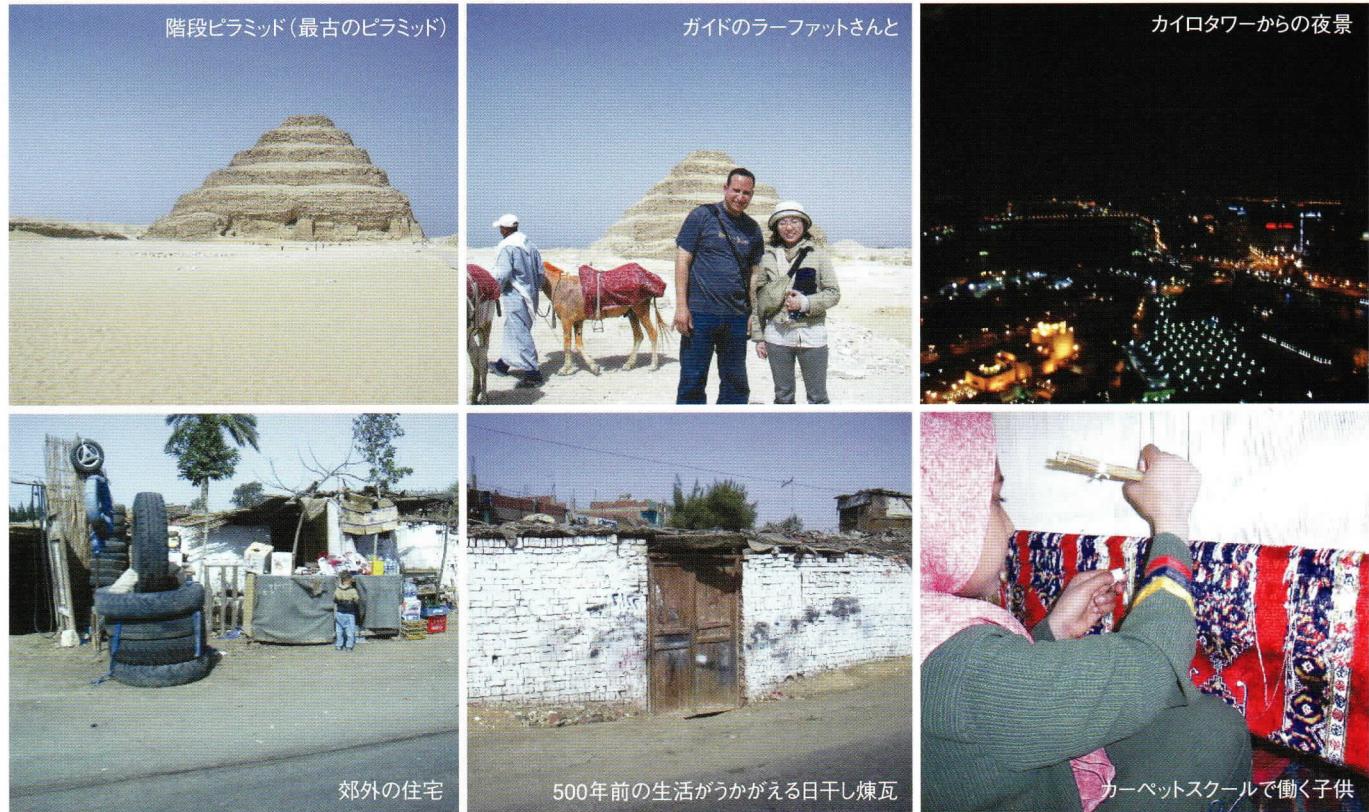
今回の旅では、スウェーデン国内においてはイエーテボリ(アスプルンド設計の裁判所)へも訪れ、スウェーデン以外にもオランダ・ドイツ・デンマーク・フィンランド・イギリスと、各国で多くの建築・都市を訪れ、大変貴重な経験をする事が出来ました。海外渡航を支援して下さった方々、共に旅をした笑顔溢れる仲間に感謝します。さらなる新しい自分を求めて、日々精進していきます。

エジプト・ ギリシャを訪ねて



丹羽 礼

神奈川県立生田東高等学校卒
工学院大学2部建築学科4年
2005年編入学
遠藤研究室



【エジプト】

エジプト首都カイロで、三大ピラミッドやスフィンクス、考古学博物館、モハメド・アリ・モスクをまわり、郊外のメンフィス・ダハシュール・サッカラでは階段ピラミッド、屈折ピラミッド、赤のピラミッド、ラムセスII世の巨像などを見学しました。王威を表す規模の大きさや当時の生活を窺い知ることができる遺跡を見ながら3000年の歴史を目の前にして興奮と感動の連続でした。

旅行の中で私は町の様子や人々の生活などについても興味を持ちました。日本とはまったく異なる文化や習慣についてガイドのラーファットさんがいろいろ話をしてくださいました。

エジプトの風土や人に触れ、エジプトの魅力を感じることができました。

カイロ市内ですまず目に飛び込んできたのは、いくつもの鉄筋剥き出しの建物でした。スラム化して老朽しているのかと思いましたが、イスラム教上借金をすることは良くないとされており、子どもの世代、孫の世代にかけて家を建てていき建築途中の建物の中で大所帯の家族が暮らしています。道路を走る車は高級外車やボロボロの車が入り混じり、社会格差の大きさを感じました。道路には信号がなく、あっても役目を果たしておらず朝のラッシュ時には警官が交通整理をしています。

生活スタイルもユニークで、エジプトの人

は毎朝ターメイヤ（えんどう豆のコロッケ）を会社で食べるそうですが、9時から11時30分まで食事をし、その後仕事をして昼には退社します。午後は喫茶店でお茶を飲んだり水パイプ（ニコチンを水に溶かして吸うタバコ）を愉しんでおしゃべりをしたり、アルバイトに行きます。日本で毎日忙しく生活している私達にとって驚きですが、これが一般的な公務員の生活スタイルだそうです。その一方ガイドは人気の職業で、国家試験に合格しなければならないのでガイドになる為の大学もあり難易度が高いのです。現在8500人のガイドが活躍しており、日本語を話せるガイドはわずか150人でラーファットさんも非常に忙しい毎日を送っているそうです。



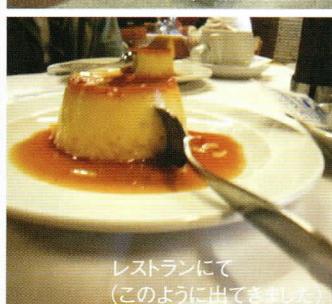
アテネのシンボルパルテノン神殿



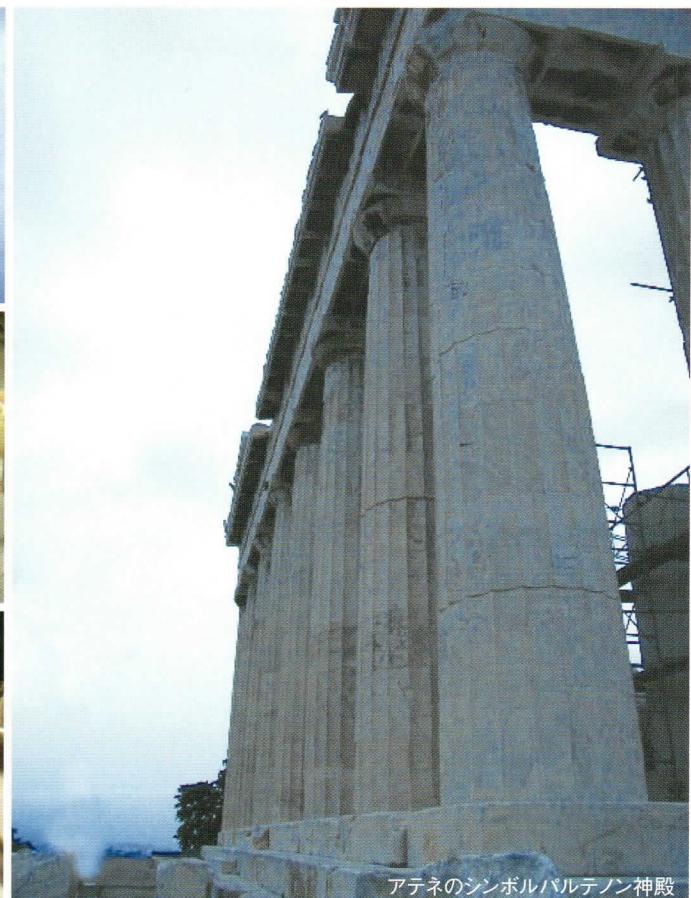
アルカイックスマイルの代表作
「孔子を担ぐ青年」



遺跡を駅構内で展示する
ステーションミュージアム



レストランにて
(このように出てきました)



アテネのシンボルパルテノン神殿

ラーファットさんはとても美しい日本語でエジプトに関する様々なことを教えてくれました。エジプト人はとてもんびりしていて明るく、私達を見ると「日本人だ」と人懐っこく挨拶をしてくれます。道を尋ねると大勢で教えてくれたり、車の多い道路を手を引いて渡ってくれたり、歌を歌って愉しませてくれたタクシーの運転手さんなど、温かい心をもった人たちに触れ合うことができました。

その一方、行く先々でチップを求められました。エジプトでは施しを受けることや与えることは当然とされており、小銭などのお金は施しにする感覚でイスラム教上美德とされているのです。エジプト人にとってイスラム教は生活に密着しており、朝6時前にはモスクからアザーンが聞こえ、一日に何度も祈りを捧げ週末にはガラベイヤをきて祈りを捧げます。長い文明の中でヨーロッパに侵略されてきたにも関わらず、ヨーロッパ色はエジプト北部のアレキサンドリアにしか及びませんでした。エジプト人の心が支配されなかった根底には、イスラム教の教えと変化することなくゆっくり流れれるナイル川が生活の中にあり、それらが工

ジプト人の心を作り出しているのではないでしょうか。エジプトは古代文明とたくさんのやさしい心に出会えた旅でした。

【ギリシャ】

アテネ市内でパルテノン神殿、アクロポリス、古代アゴラ遺跡、オリンピック競技場を周り、エーゲ諸島（エギナ島、ポロス島、イドラ島）とサントリニ島を周りました。エジプトに比べヨーロッパの町並みでしたが、規模は小さく地方都市といった様子です。シンタグマ広場という中心地の周辺に繁華街が広がっています。その周辺にはいくつかの丘があり、そこから見渡す遺跡や町並みは絶景でした。アテネの町は、地下鉄工事の際に遺跡が発掘されて工事が中止になるほど遺跡が多い町で、地下鉄構内にはステーションミュージアムと呼ばれる遺跡の展示を行っています。アテネ市民の交通手段は地下鉄やバスで、地下鉄は外国人でも分かりやすく乗りやすいものでした。

ギリシャ人は世界で一番ストレスをためないといわれるほど感情を表に出すそうで、仕

事に対しても不満を溜め込むことをせず単独でもストライキを起こして上司に訴えます。日常において喧嘩は日常茶飯事で、言いたいことを言ってその場で仲直りをするそうです。また、アテネ市民の平均月収は約8万と決して良くはないのですが、お休みは1ヶ月まとめてとることができ殆どの人はエーゲ海の島でバカンスを過ごしています。

ギリシャ人は体が大きく青い目に白髪に近い金髪で一見話し掛けくらいですが、ギリシャ人も素朴な一面を持つ人が多いようです。島に行くとギリシャ語しか話せないおじいさんやおばあさんに出会いとても親切にもらいました。ギリシャ人は美しいエーゲ海に囲まれ、きれいな目ときれいな心をもつた人がたくさんいました。

今回2カ国を旅してコミュニケーションの大切さを実感しました。その国の言葉で挨拶を交わすだけでとても打ち解けた空になります。話そうとする事がたくさんの人と触れ合うことができ、貴重な体験をすることができます。これからも観光では得られないそこに住む人たちの様子を知るための旅をしたいと思います。

ドイツの旅 人々から水と自然と



倉田研究室
上原碧

神奈川県立厚木高校出身
工学院大学工学部建築都市デザイン学科4年
E-mail:mido1984727@yahoo.co.jp

'ドイツに行きたい'と思ったきっかけは、本当に単純なものだった。家にあった雑誌に載っていた、ドイツの水辺の街並みの写真があまりにも綺麗だった。それから私は、なんなくではあるがドイツに興味を持ち始め、今回思い切って、実際に現地へ行ってみようと思った。

まず、ドイツという国はどのような所なのかということを、文献を参考にしながら簡単に説明しようと思う。この国はヨーロッパ諸国の中でも環境政策が特に進んでいる国と言える。湖の浄化対策や水源、森林、湿原などの保護対策などで、きわめて注目すべき成果をあげている。さらに、都市計画、都市景観については、街並の美観や人間優先の道路政策など、とても興味深い政策を実施し成功を遂げている。そして、これらの計画、政策はどれも市民参加、むしろ市民を中心



となって行った事業がほとんどで、それは日本がこれからもっとも参考にしていかなければならないことだと考える。

しかし、この旅の最終目的として、ただドイツを研究するだけでは、ドイツを讃え、今の日本を否定するだけで終わってしまう気がした。自分が日本人で日本で生活する以上、このドイツ旅行をきっかけに、自分の中に日本に対する何らかの思いやこれからの日本のあり方というものを、自分なりに得たいと言うのが正直な気持ちであり最終目標したい。

歩行者中心の街

ドイツの街を歩いているといったところに歩行者専用ゾーンの標識を見かける。(次写真)そのゾーンのほとんどは街の中心となる通りで、大小に関わらずその空間はいつも



賑わいを見せている。そこで人々は思い思いに過ごし語らう。当然ベンチやオープンカフェには人々が集まり、昼間からビールを飲んだりカフェを楽しむ。

そのような通りに絶対に忘れてはいるのが、緑と水である。通りには必ず噴水や水をモチーフにしたオブジェがあり、プランターの花や木々が通りをさらに賑わせている。それらの(木やプランター)の管理は市だけが行うのではなく、お店や目の前に建つ家の人がそれぞれ所有し管理をしているというのも、人々が考える自然への思いが伝わる。街の賑わい、魅力は市民一人一人の思いによって創られているというのがダイレクトに伝わってきた。



■ベンチで休む人々



■歩行者と車が共存した道路

緑あふれる街並み

ドイツ人はガーデニングに凝っている。というのは、街を歩いていると自然と実感する。趣味の人は、週に1回はガーデニングのお店に行くらしい。市場でも色とりどりの花々が咲き、家の庭やバルコニーでは、それぞれの家が競い合うようにきれいに飾られている。ドイツの人は普段の生活からも緑というものを大切にしている。

街にある木々も市民によって世話をされていることも多く、木一本切るにも市に届け出をださなければいけないほどの徹底ぶりだ。プロムナードに植えられた木も、散歩する人に合わせて高さが考えられていているようだった。

日本には都心の街の中では緑を見る機会が極端に少ない。それは日本人が考える緑や公園に対する意識が低いためではないか?そんなことを考えさせられた。



車のない街 フライブルクフォーボー団地

ドイツ南部にある小さな街フライブルクの中心地からSバーン(近郊鉄道)で約10分ほど行ったところにフーボー団地という集合住宅地がある。ここはフォーラム・フォーボー協会が計画し車のない団地づくりが成功した地区である。

この地区にはマイカーを放棄する代わりに様々な対策がなされている。施設集約や交通機関の充実将来を想定した計画が提案された。

団地内では子どもたちが走り回る様子や家族分の自転車が家の前に停めてあるのが見られた。ここでは団地の前には必ず自転車置き場が設けられ、住民のほとんどが生活の全般に自転車を利用している。フライブルクの中心地に帰ると、自転車の後ろに子どもを乗せて街に繰り出しているお母さんの姿も見られた。



魅力ある水辺空間

ドイツにいると水に触れる機会が実に多くある。どの街に行っても水を一度も見ないことはない。

ドイツの都市では最近、水辺の空間が見直されている。湖水や川には緑があり、また周辺地域の気候を和らげる効果がある。さらに川辺は散歩に実に適している。そのとおりだと思った。川辺を見るとなぜか歩きたくなり、水がある所はどこかホッとした気分になる。ドイツ人は川辺を散歩するのが大好きだ。川に限らず水辺空間には自然と人々が集まっている。

左下の写真は、ドゥッセルドルフのライン河岸プロムナードだ。このシンプルなプロムナードの下には高速道路が通っているとは、まったく思はず静かな川辺空間だった。ここもかつてはそのまま高速道路が通っていて市民とライン河が分断されてしまっていた。その過ちに気づきこの大きな計画を成し遂げ成功してしまっていることには、驚き感動した。

左上の写真はフライブルクの教会前の広場にある噴水で、毎朝開かれる朝市でお花屋さんが噴水の水を利用している風景だ。

このように水は人々の財源であり、憩いの空間となる。そのことを人々は生活中でお

おいに実感し、心得ている。この時私は、水、自然是私たちに多くのものを与え支えてくれているが、逆に私たちは自然に何をしているだろうと考えた。自分たちの欲求だけで、木々を伐採し、汚水を流し、川を汚し、自然本来の恵みや有り難みを忘れてしまってはいないだろうか?ドイツの人々は気づいている。というか日本の人々だって気づいているはずだと思う。



おわりに

ドイツという国はどこか心温まる国だと思った。他のヨーロッパの国とは違う魅力がある。今回この旅では、目まぐるしく毎日が過ぎる日々では気づくことのできないものを得たような気がする。それが何なのかはまだはっきりとは分からぬのだが…

私は日本に帰ってきて、このドイツで得たことを基盤に論文を書きます。今回ドイツに行つたことで発見した、日本に対しての問題意識を持ち、日本という国がどのような歴史を持ち出来上がったのかということも研究したい。この体験を活かし、内容の濃い論文が書けたらと思います。

最後に、今回旅行をするにあたって、大変お世話になりました倉田先生、奨励金を支援してくださいました工学院大学、同窓会の皆様、その他多くの人々には本当に感謝しています。ありがとうございました。



フランス & スイス 期待と不安に揺られながら



猪野俊幸

工学院大学1部建築学科
建築コース4年(初田研究室)
東京都立駒場高等学校卒
dm0601@ns.kogakuin.ac.jp



ラ・ロッシュ・ジャンヌ邸



サヴォア邸



スイス学生会館(国際学生都市)

フランス・パリは、遠い過去から現在に渡り、長期間活気を持ち、世界を代表する街である。私のこの旅は、日本にいては感じることのない、世界というスケールの大きさを、建築を通して体感してみたいという一つの願いから始まった。降り立ったのは、午後9時。事前に調べてきた予備知識はあるものの、眠気も飛ぶほどの緊張感で満たされる。初海外でフランス、言葉の通じない環境はもちろんはじめてである。期待と不安、相反する感情に揺られながらの旅となつた。

【ル・コルビジェ】

様々な刺激を与えた今回の旅で、最も欠かせない存在が、20世紀を代表する、スイス生まれのフランス建築家、ル・コルビジェである。私は彼の代表的な作品の幾つかを見て周ってきた。

彼の作品で、初めて出会ったのが、ラ・ロッシュ・ジャンヌ邸である。パリに初めて訪れ、

ここまでやってきたという時に感じたものとは異なる感動に包まれた。これまで自身の中には、住宅という枠組みを超えた住宅であり、過去にも関わらず、そこに新鮮を感じられるという、奇妙な感じに襲われる。室内にも関わらず、大きな開口部により、またスロープにより、まるで外にいるようであった。

次に訪れたのはサヴォア邸である。パリ市内から少し外れた場所に位置するこの住宅は、まるでこの建築のために用意された空間であると感じられた。近代建築の5原則をそのまま表したような建築は、その原理の凄みを知らされる。実際に目にするまでは、近代建築の5原則は建築家のためのものであると考えていたが、そうでないと思わされた。特に圧巻なのは、ピロティである。ロールスロイスが通れるといわれるこの空間は、住宅を取り囲むようにあり、住宅の中に回遊性を持たすことに成功している。室内も屋外との接点を多く持たせ、快適な開放感を与えるといえるだろう。

旅も終わりの頃、国際学生都市に訪れた。ここは様々な国からの留学生の寮があり、その中の一つに、彼の設計したスイス学生会館があった。これまでの住宅とは異なり、学生寮ということもあって、全体としての外部空間の繋がりではなく、その代わりに、各個人

の部屋と外部への繋がりが重視されていると思われた。

フランス国境付近のロンシャンという街に、礼拝堂がある。パリから5時間近くかけて到着した時には、感謝の気持ちでいっぱいになつた。彼の建築人生の晩年に建設されたこの作品は、あまり多くの彼の作品を見ていない私にも、その違いを教えてくれた。コンクリートを軽やかに表現し、写真でみて重々しく、蓋のように感じた天井は、羽のように感じた。単純に住宅と教会の違いではなく、住宅で感じられた光にはない、宗教的な厳格さをもつた光があること、トップライトの加減のある明るさ、そこに何かが宿っていることを示していくようであった。

【パリ】

この街は、通りを中心とした街区構成になつてている。どんなに短い、細い小道にも名前が付けられおり、住所にも通りの名前が記載されている。オペラ大通りやマドレーヌ大通りなどといった主要な通りには、その名前が示すように、ランドマークとなる壮大な建築物が建てられている。日本とは異なり、自然災害も少ないこの街は、古き時代の雰囲気を、目に見える形で残している。近年建てられたものも、浮き彫りになることなく、建築が建築と共に

ロンシャン礼拝堂





セーヌ川



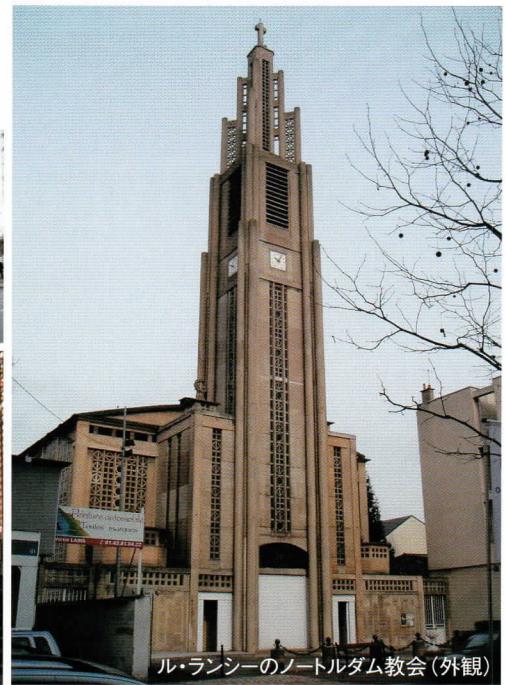
バーゼル市内



ヴィトラの家具美術館



ル・ランシーのノートルダム教会(内観)



ル・ランシーのノートルダム教会(外観)

存しているものが多い。近代的な高層建築は、パリ市内には無く、景観を乱すことのない、市内から少し外れた郊外に建てられている。パリのような過去を想起させる街並みには、斬新的な近代建築は必要のないものだと考えられた。この街の中で、個人的に一番気に入っている点は、建物が低いところである。高層ビルがなく、空までの道が近く感じられ、とても開放的な気分にさせてくれる。日当たりもとても良い。建物の高さは近年、日本でも大きな問題となっている。日本にいては感じられない、ありがたさを感じることが出来た。

パリは過去を感じるだけでなく、観ることができる街であり、街には個性というものがあるということを再認識させられた。

【バーゼル】

バーゼル中を走り回るトラム、少し郊外に出ると、スイス国鉄の駅が点々とし、バスもいくつかの中心的な駅を基点として走っている。人々はトラムなどの公的な交通網を優先し、便利さの面から見れば、交通状況はとても良好である。近代的な建築物は、過去の様式のものを際立たせないように並んでいる。自然環境が豊かであり、周囲と調和するように、国境の役割も果たしているライン川は雄大に存在する。その眺望は国境という隔たりを感じさせず、自由に人もトラムも横断し、一つの街の要素として欠かせず、とても良い環境を提供している。

過去の様式の建造物は、赤い壁面のものが多い。その壁面は、周囲の自然と調和し、樹木を想起させてくれる。自然環境が豊かな街の中では、ガラス張りの建物が、人工的に見えない。映し出す景色が目に優しく、日本にあるガラス張り建築とはまったく異なる。バーゼルという街は、他の海外の街と比べても、観ておくべき建築が多い街である。いずれもスイス国鉄のバーゼル駅から1時間かかる場所に、名の知れた建築家の作品が点在している。ドイツではヴィトラミュージアム、バイエラー美術館、フランスではロンシャンの礼拝堂、スイスではヘルツォークの作品が数多く、美しく優雅な街並と同調している。

【ル・ランシーのノートルダム教会】

近代における鉄筋コンクリート造教会堂の雛形であり、1923年にオウギュスト・ペレによって設計された建築物である。ヨーロッパでは、コンクリートによって建築物を軽やかに表現できると考えられている。一見、コンクリートは重く、固いイメージを抱かせる。実際、日本で見る打ち放しの建築物のほとんどに、私自身そういった印象を抱いた。しかし、このランシーのノートルダム教会には、不思議な感覚を抱かせられた。入ってすぐ正面に見える、青い大きなステンドグラスは圧巻であった。ランシーがあまり都会でないせいいか、教会に人気が無く、またそれが空間の凄みを伝えてきた。教会ということもあり、威厳や嚴

格さは感じさせられたが、それはPC造のせいではなく、全体的な空間のよるものだと考えられる。神への信仰心などがない私であるが、そこに何かが宿っていて、祈らなければならぬ雰囲気であった。一つの建築によって、独特な世界を作り出しているおの建築は、今回の旅の中でも、最も衝撃を受けたうちの一つであった。

この12日間は本当に充実していた。毎晩不安になり、毎朝期待が湧いてくる。人生の縮小版のような感じであった。これまで大学に4年間在学し、建築を学んできた。現在、情報化社会のおかげというか、せいというか、世界中の情報が動かずして、手に入れることが出来る。写真を見る、設計図を見る、有名な建築家が書いた本を見る、実際に見たという、似たような感覚を味わうことは容易である。私は今まで、それらの情報で満足していた。それは意識的に満足したものであつて、旅に出ることを億劫に感じていたことの表れであると、今なら考えられる。行って良かった。本当にそう思える。今まで行かなかつたことは、自分の落ち度であるが、後悔するよりも他にすべきことはたくさんある。今ならこの先、ひたむきにがんばれる気がする。

感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

小さな町並みと住まいづくり

Three Houses Designed As One in the Townscape, Tokyo

濱田 昭夫 Akio Hamada.



TAC濱田建築設計事務所 代表取締役
156-0053東京都世田谷区桜3丁目10-8
電話03-3706-3369
Fax 03-3706-9843
E-Mail: "tac hamada" <tac1984@nyc.odn.ne.jp>
URL:<http://www1.odn.ne.jp/~tac/>

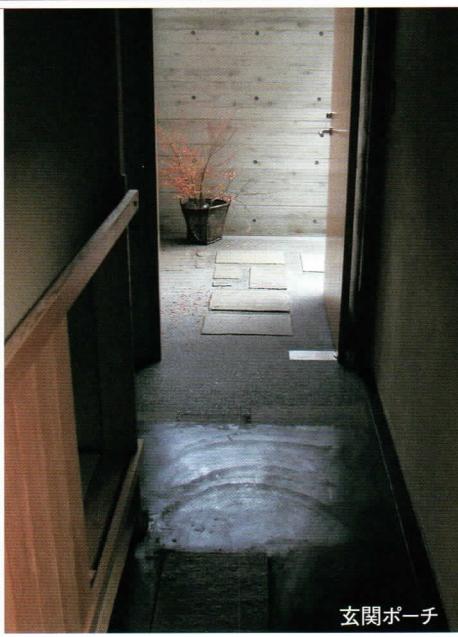
福岡県立八幡中央高等学校1965年卒
工学院大学建築学科(波多江研究室)1972年卒
工学院大学波多江アトリエ勤務
TAC濱田建築設計事務所設立
工学院大学講師

「環境と街づくり」をコンセプトとして住宅設計を基本に活動。
複合・中高層ビル、寺まで手掛ける。

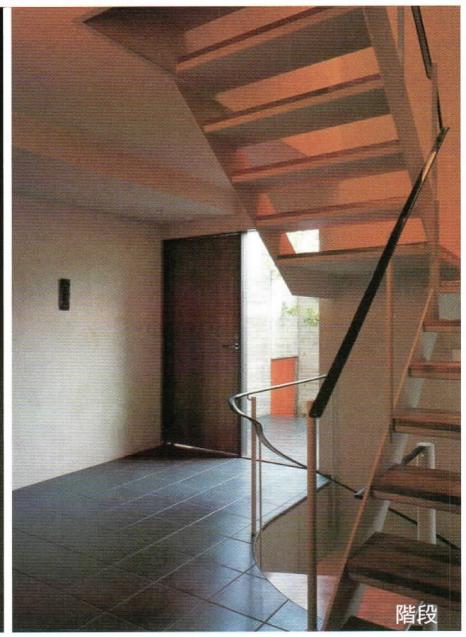




居間



玄関ポーチ



階段

【個人の都合で進行する街並みの今】

日本の住宅地の街並み、都市住宅を取り巻く住環境は混沌としており、秩序が重んじられ、美しく整備された欧米の街並みと比べ見劣りがする。

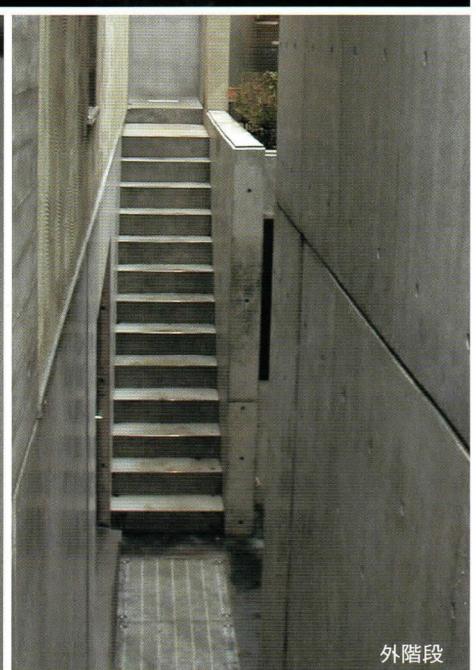
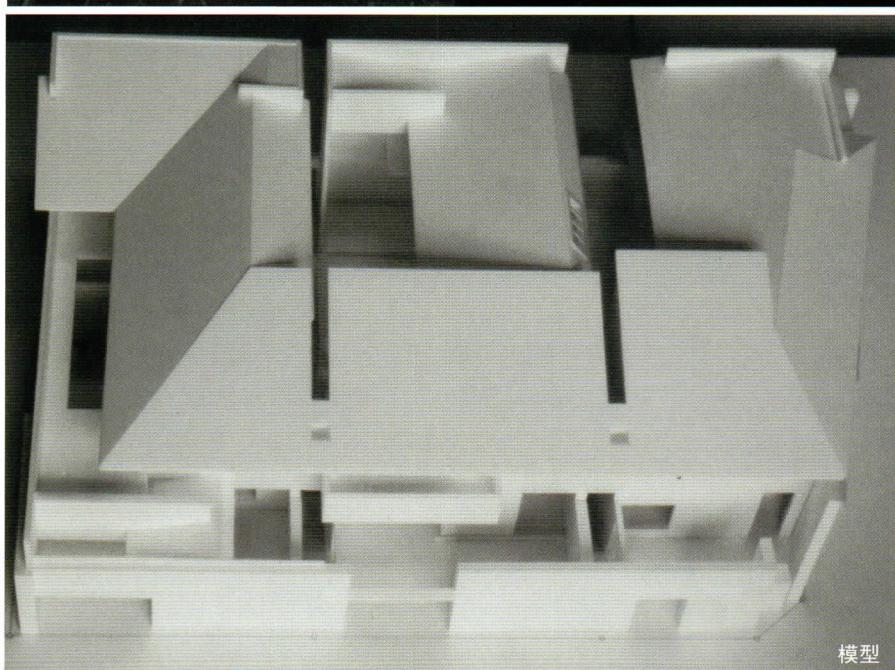
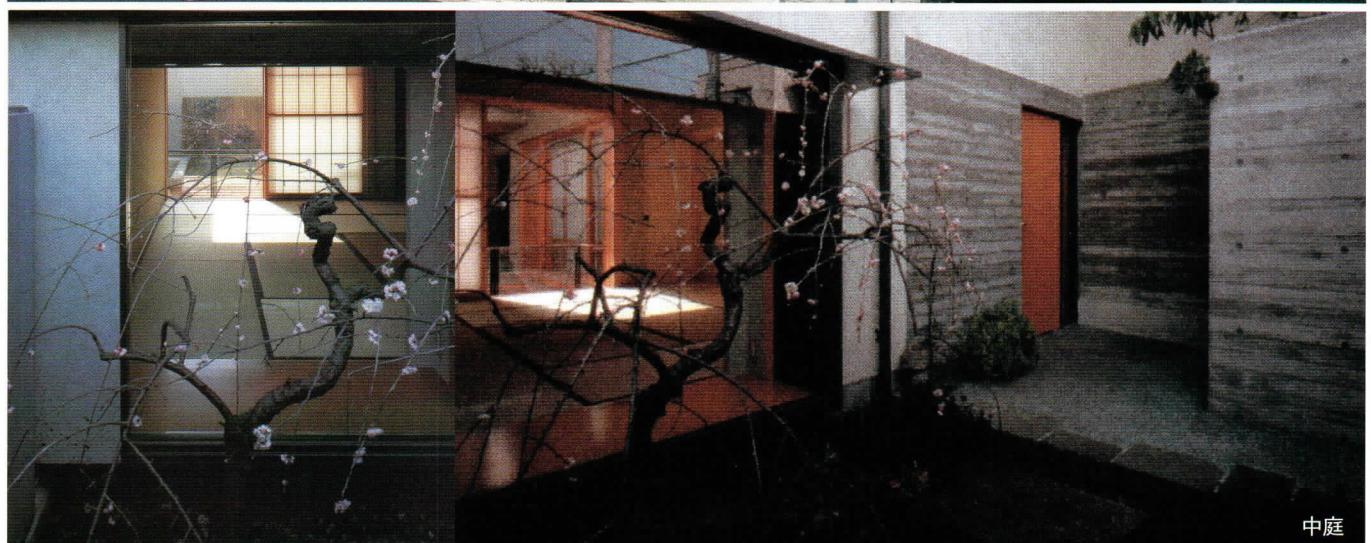
経済分野では世界のトップクラスにありながら、日本の住宅を取り巻く環境づくりや、街並み、景観についての文化意識はまだ低く、こうした意識の向上が、これからの大課題と言えるのではないだろうか。個人の多様な価値観や生活、ライフスタイルの実現を最優先した住宅

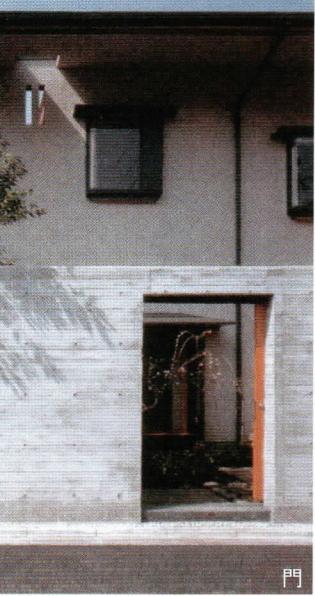
の建設が、狭い敷地に隣り合わせて進行している。外観、屋根、窓、大きさや高さ等の形状は無論のこと、外壁などの素材や色が無秩序に氾濫し、統一感のまったくないまま進行している。

こうした現実が、調和を欠いた住宅地の景観を生み出しているのである。

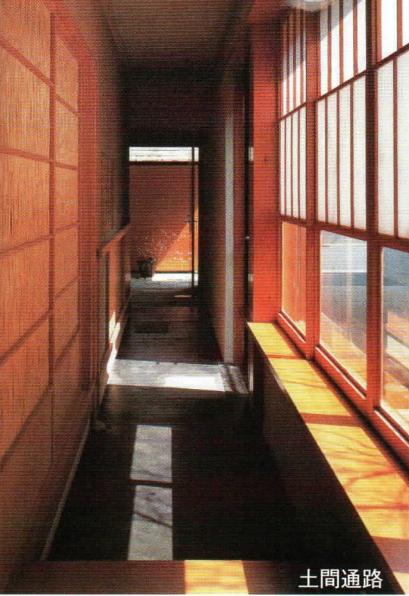
【小さな街並みづくりの実例】

ここに紹介するこの建物は3つの一戸建て住宅の集合体で、敷地がそれぞれに40坪弱、3軒隣り合って存在し、同時的に計画され、

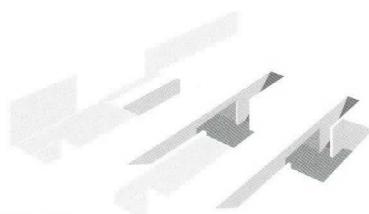




門



土間通路

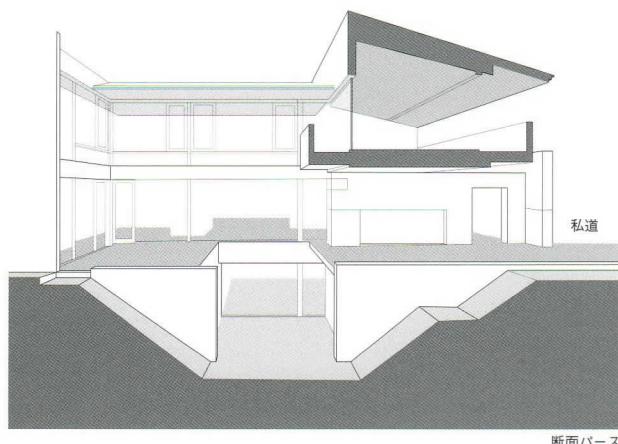


生活道・私道

将来サービス通路の計画

公道 幅員4m
(通過道路)

屋根伏図



断面バース

実現された住宅で、それぞれに地下室、外空間ドライエリアを基礎構造とした三軒連続した一体RCコンクリート構造となっている。

三軒それぞれの個性、都合を優先し、まったく別々の生活空間としながらも、外観は一体感を持たせた集合体として見られるよう計画した。

具体的には、屋根の軒高をそろえ、大きなひとつの屋根の連なりと見えるような構造とし、限られた敷地上に寄り合った3軒の建物が近接することになるため、それぞれに積極的に中庭、外空間を設けることにより、どのポイントでも光、風、開放感が得られるように計画した。

【こまぎれをなくす】

欧米の観光地や古都の街並みには、情緒と落ち着きがある。それは「甍の波と雲の波」と謳われているように、街を鳥瞰した目線を大切にした風景があるからである。

そこには調和の取れた統一性と連続性があり、屋根の形や素材が最小限に抑えられているからではなかろうか。

今日の街並みのように隣り合って別々の軒高や建物の形、さまざまな色、素材が雑多にこまぎれに存在している景観からは、決して情緒ある街並みは生まれない。

【共有スペースをつくる】

本計画地と近隣する街並みは、敷地の境界線同士の隙間スペースがほとんど使われておらず、「単に空いたあいまいなデッドスペース」として放置されたままになっている。これは都会でよく目にする風景である。

つまり、敷地における貴重なスペースが失われる上に、街並みを壊していることになる。

それに対しここでは、相互が譲り合い、幅1メートルの共有スペースを設けるだけでなく、この部分が地下への外階段、通路として活用すべく計画した。そのために「単に空いたあいまいなデッドスペース」が有効に生かされ、動線機能が持たされると同時に、光や風を伴った外空間として生まれ変わり、隣り合った建物に調和が生まれ、これが敷地に付加価値を与えていている。

【グランドフロアを活用する】

隣り合ったグランドフロア・外通路を通して生活動線をいかに豊かにするかは住まいにとって大きな鍵となる。

ここでは、三軒一体の敷地全体をグランドデザインとして捉えている。単に一軒の家では得られない、複合的な動線を創造することを目指し、個別の室内だけではなく、敷地内の外空間にもそれぞれにあった機能を持たせ、計画した。

具体的には、隣り合う三軒が連続し、一体になるこの敷地の特徴を生かし、敷地内へのアプローチ、車の出入り、前庭や中庭、玄関と室内までの通路や路地、土間、共有スペースなどを活用しながら、地下ドライエリア、ガス・電気・水道メーター、ポスト、ごみ置き場、勝手口などの様々な機能の相互の関係を考慮し、効率よく配置したことによって豊かな立体的な動線が生み出され、調和のある街並み・景観に繋がる。

地域社会の中で

金明小学校

石川 雅博

Architect in the Community

Kinmei Elementary School,
Kaga City

Masahiro Ishikawa

石川県加賀市立金明小学校の設計について
「地域社会の中で」





普通教室、前庭まで連続している



パーゴラ、将来緑のトンネルになる



パッサージュ、右が職員室

撮影:篠澤 裕

石川県加賀市立金明小学校は、公募によるプロポーザル、しかも45歳以下の若手建築家に仕事の機会を与えようという大幸甚加賀市長の粋なはからいによって、安藤忠雄氏を審査委員長として内藤廣氏、富田玲子氏によって審査が行われ、幸運にも最優秀賞となりはじめた仕事です、当時34歳でした。敷地のある石川県加賀市は福井県との県境にあり、市内には山代、片山津、山中温泉など有名な温泉地や、北前船の里として有名な橋立港があり、九谷焼、山中漆器の産地として有名で、人物で言うと「日本百名山」の著者である深田久弥、雪博士として有名な中谷宇吉郎の出身地でもあります。事業のプログラムは、40年近く前に建設され老朽化した校舎と講堂の建て替えで、児童数約140名、延べ面積2800m²と小さな小学校です。上空を小松基地から飛び立つ戦闘機が飛ぶため、防衛施設局仕様の防音1級校舎とすることがハードとして求められました。

「地域社会に学校建築を取り戻す」

この小学校でめざしたことは、学校建築を地域社会に取り戻そうという作業であったように思います。明治期に日本で学校建設がはじまった頃には、地域の人々が協力して、用地を提供する人、材木を提供する人、労働奉仕をする人など地域社会が子孫の教育のため、有形、無形の支援をし建設されていました。そして出来上がった校舎は地域社会にとって誇りであったに違ひありませんし、愛着を持って使われていたはずで、今なお日本各地で地域の文化遺産として保存されている校舎も少なくありません。しかしながら高度成長期以降の校舎建設は國の方針で教育の標準化がなされたように校舎まで全国どこへ行っても標準化され、地域特性に関係なくRC造南向きの四角い箱となり、地域社会の学校建設に対する情熱も薄れると同時に学校教育自体

への感心も薄れていったように思います。昨今、頻発する学校を舞台とした事件もこうした背景と無縁とは思えません。こうした問題意識は設計者だけが感じていたことではなく、地域社会や行政も含めて問題意識として共有されていたように思います。

「風土とつながりをもつ校舎配置」

「私のふるさとの山は白山であった。白山は生家の二階からも、小学校の門からも、鮎釣り川辺からも、泳ぎに行く海岸の砂丘からも、つまり私の故郷の町のどこでも見えた。真正面に気高く見えた。それは名の通り一年の半分は白い山であった」作家の深田久弥は日本百名山のなかでこう書いています。敷地を初めて見た時、2月のピンと張り詰めた空気のなか雪で白く覆われた白山がたいへん印象的でした。敷地は東側をその白山を中心とした山の連なりに囲まれ、西側は日本海を遠くに望むことが出来る加賀平野の田園地帯に位置します。

ここに通う児童たちの住む8地区の集落は田園を挟んで等距離で小学校を取り囲んでいて、それぞれの集落全てに神社があり、その単位でコミュニティが今なお風土とともに息づいています。校舎の配置は第一にこうした美しい自然環境のある風土に呼応させられないかと考えました。そしてまず白山の景観を活かせる軸線を設定し、この軸線に従って校舎の中心となる講堂を配置しました。そして白山連峰が加賀平野を取り囲むのと同じように、校舎も講堂から両翼を伸ばしながらグランドを取り囲む形とし、加賀平野を見立てとした学校領域を形成する校舎配置としました。この配置はさらに児童が住む神社を中心とした集落の領域、小学校の領域、集落と小学校を含めた学校区の領域、そしてそれを取り囲む加賀平野の領域という四つの白山を中心とした同じ空間構造をもつ領域を明確にし、集落から加賀平



校舎遠景、晴れると校舎の背景に白山が見える、手前が日本海側

野までの領域を入れ子にしながら階層性をもって秩序立てています。こうした自然環境豊かな風土につながりをもつ校舎の配置計画は、地域の人たちにとって親しみやすく校舎建築に対して感情投影しやすい下地となりました。

余談ですが、完成した校舎の姿は求心的な配置と景観軸によるせいか、ルドゥーの理想都市やイタリアのヴィラのような共同体建築を模したような佇まいにも見えます。

「多様な場の連鎖」

校舎は多様なスケールの空間によって構成されています。12m近い天井高をもつ講堂、階段のある吹き抜けのパッサージュ、トップサイドライトのある普通教室、教室前のオープンスペース、木の列柱廊のあるパーゴラ、3階の高さのある展望台、2階の特別教室群は平面もスケールも全て異なります。また校舎がグランドを取り囲む配置は様々な方向の窓を持つこととなり、それは白山の方向であったり、桜並木の方向であったり、グランドの方向であったり、あるいは展望台から日本海が見えたりと空間のスケールの変化とともに外の風景も印象的に変化します。こうした多様な場の連鎖は児童の日々の学校生活に変化を与え活き活きとしたものになります。そしてここで過ごす六年間の学校生活は印象的な場所の記憶を伴って心に刻み込まれると考えています。

「地域資源を活かす～杉材、九谷焼、漆」

「木を活かした校舎」というテーマがプロポーザル時からありました。であれば本来は木造で建設されるべきなのでしょうが、防音1級校舎の仕様のためRC造が絶対条件でありました。そういう制約条件のなかで、木を活かした校舎とするため、外装では防音性能に関係しない庇とグランド側のパーゴラと雁木の列柱で杉や松を使用しました。内部では講堂と普通教室をメインに杉板貼りにし、校名の由来となっている天然記念物の金明竹に配慮して講堂のベンチの背もたれパネルや照明器具のカバーなどポイントとなる部分に竹材を使用してい

ます。また加賀市は九谷焼の発祥の地であり、中山漆器の産地でもあります。校舎建設に伴い九谷焼組合の人たちの協力により児童に床に埋め込む金明竹をモチーフにした九谷焼タイルを制作指導してもらい、展望台には山下一三さんという作家の方に作品を制作してもらいました。一方、中山の漆器組合の職人さんには講堂の五つの竹パネルに伝統色である加賀五彩色に拭き漆仕上げをしてもらい、2階にある和室でも建具、枠、天井、地板を拭き漆で仕上げてもらいました。

「オープンな建設プロセス」

地域の住民で組織された建設委員会との意見交換、児童への説明会とワークショップ、学校職員の意見の吸い上げを何度も行いました。また建設段階では前述の児童による校舎に使う九谷焼タイルの制作、ゼネコンによる児童への建設現場のスケッチ会、また学校側からは児童の総合学習の時間に小学校建設の過程がビデオ制作され地元テレビ局で放映されました。このような取り組みは業者や学校、教育委員会、地域の人たちとの調整が大変面倒であり、敬遠されがちなのですが、市長をはじめとした関係者の情熱によって実現することができ、地域社会に対して学校建築への関心を高めることになりました。

「最後に」

この学校建設には私を含めて5名の建築学科のOB、OGが携わっています。意匠設計では私の他、大田邦夫君、山村沢子さん、設備設計では総合設備計画の若松宏氏、そして加賀市役所では永田万寿実氏、また積算担当の片桐積算の内山代表は工学院高校のOBでいました。工学院OB、OGのほかにもこの小学校建設には多くの人々の尽力によって実現することが出来ました。この場を借りて皆様にお礼を申し上げます。最後に現場監理には東京から深夜バスで毎週通いました。仕事を終えるまでに深夜バスで睡眠した日数は3ヶ月余りとなり走行距離は地球1周半ほどになりました。東京から加賀市には早朝5時に到着するのですが、その間に見た暁の白山や荒波の日本海に浮かぶ漁り火は生涯忘れられない風景あります。



夜は地域の活動の場となる



四阿から向かいのパーゴラまで150mの外部通路となっている。



教室前の前庭と展望台

撮影:篠澤 裕

卒業92年度 1993年3月大学院修了 山下研究室
東京都私立本郷高等学校出身

1968年 埼玉県出身
1991年 工学院大学建築学科卒業
1993年 工学院大学修士課程建築学専攻修了
1993年 小沢明建築研究室(-2002)
2002年 dpa設立 代表取締役
2006年 工学院大学非常勤講師



いしかわまさひろ
石川雅博

住所: 東京都渋谷区本町6-2-23dpaアトリエ
電話: 03-5371-4095
メールアドレス: ishikawa@dpa.co.jp
ホームページ: <http://www.dpa.co.jp/>
小学校の建設過程はブログで紹介しています。
<http://www.dpa.co.jp/blog/>

主な業務経歴

加賀市立金明小学校
尼崎の家
岩槻の家
工学院大学八王子SCプロポーザル二次選定(6/40)

小沢明建築研究室在籍時の主な担当物件
幕張ベイタウンパーティオス10番街
コース・アント・カンパニー・リミテッド 東京本社屋
幕張ベイタウンマリンフォート
鶴岡アートフォーラム基本設計

街にいきる
理想型“教会”事例
蒲田教会

設計：久野和作

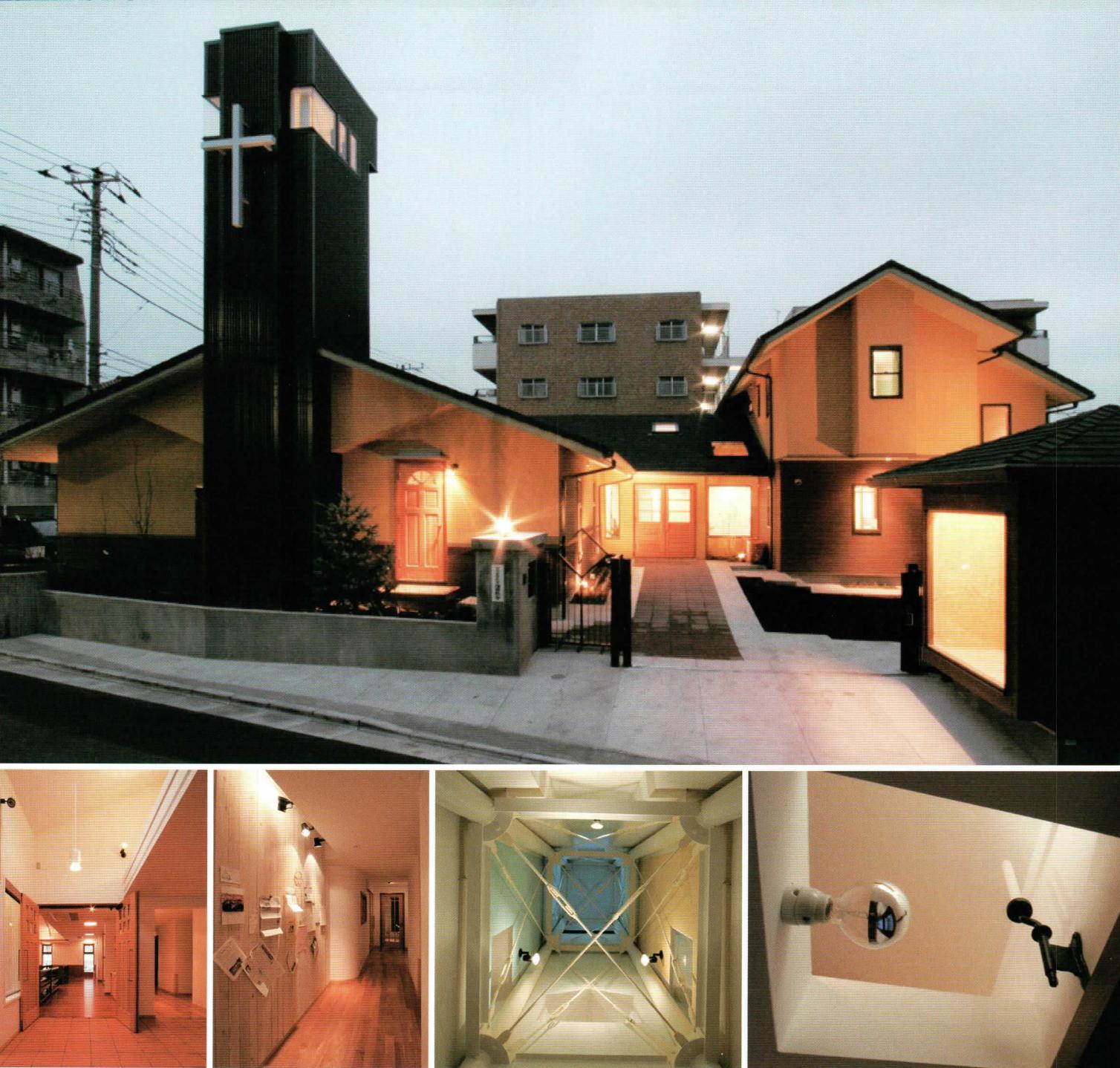
Ideal Resolution for any Church
and its Community

Kamata Church, Tokyo

Wasaku "wac" Kuno, AIA

設計主旨

- 築53年の教会+牧師館の建替え計画
- エントランスを蒲田小学校正門に対面させ街に顔を向けた
- 「伝導の軸」を南北に「交わりの軸」を東西に交差させた十字架型で構成
- エントランスに引きを創り広場と相まってアフター礼拝の交流空間に
- 公共性ある教会堂とプライベート性の高い牧師館を分離かつ共存
- 内部空間は包まれる安らぎ感と精神集中できる内向性を
- 建築素材は自然素材／無垢材を多用しさわやか感を重視



設計依頼の経緯

【建築家としての姿勢】

アメリカ建築家協会に所属している私はCPD単位獲得のため毎年開催されるAIAのコンベンションに通っている。その年はシカゴ大会への参加でF.Lライトのユニティ教会をはじめ多くの教会を見学してきました。帰国後聞いた第一声は「教会建て替えに伴いコンペを開催します」という蒲田教会の牧師からの留守電でした。ただちに参上し話を聞きました。建築委員会の作成した設計指示要項を見た時「建築することをIndustry(産業)としか解釈していない」というのが正直な感想でした。有能な営業設計士であるならば「早速持ち帰って作業し、皆さんの要望にお応えした設計図を期限迄に提出します」というべきところですが、私は「皆さんは教会を創る最も大切な事を見失っています。大事なことは床面積でも、総工事費でも、工事期間でもないのです。何故教会を建てたいのですか?教会を創る意味、どんな志で教会を創りたいのか、まずそれらを明確にすることです」つまり「何をどう創るかの教會員の総意、そのプロセスこそが教会づ

くりの真意である」と主張しました。

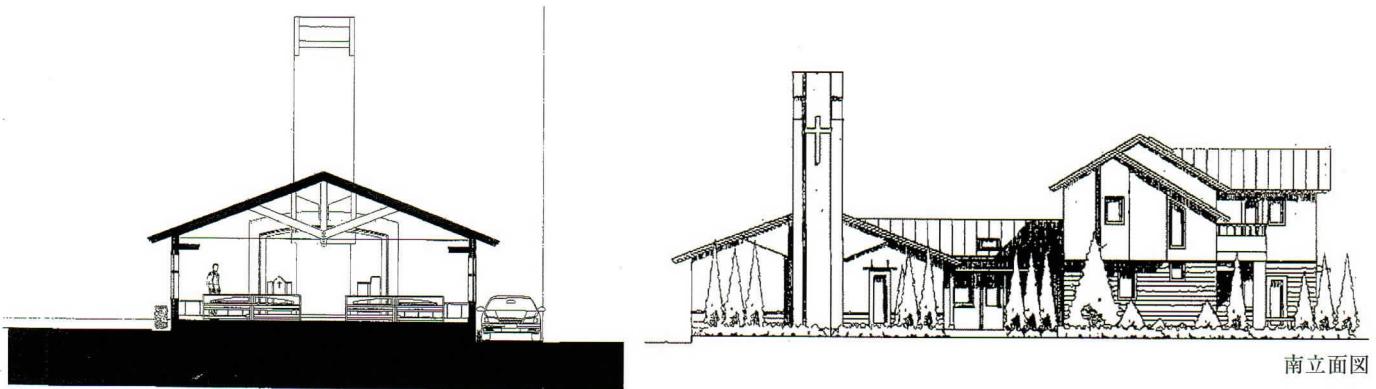
当初は4社の設計競技の参加への要請でしたが、このレクチャーが功を奏したのか後にコンペは中止され、設計依頼は我が事務所に一本化されることになりました。

【教会を設計したかった訳】

■両親は内村鑑三の無教会主義のクリスチャンでした。

私が小学生のころ教員をしていた父は絵を描くのが得意で、夏休みになると聖書の物語を何枚も大きな絵に描き、そして言いました。「近所の遊び仲間達を日曜日に呼んでこい。夏休みだけでも我が家が日曜学校だ」そして家の居間の板の間に、ランニングシャツの子供達が集ってきました。その時ふと、いつか父のために教会を建ててあげたい「人の集う場所を作りたい」と大それた夢を持ち続けたのです。





断面図

南立面図



【建築概要】

日本基督教団 蒲田教会

建物用途:	教会堂+牧師館
所在地:	大田区蒲田1丁目22
用途地域:	市街化区域内、準工業地域、第三種高度地区、準防火地域、建蔽率/容積率:50.03% (許容60%) / 64.14% (許容300%)
構造:	木造枠組壁工法(主要構造及び外周壁2x6), 塔(鉄骨造)
外部仕上:	上部/モルタル下地t=20, モエン大壁工法ジョリパット塗り 下部/防火サイディングt=16ニチハ・モエンレジエンドール
屋根仕上:	ガルバリューム鋼板自然石化粧仕上(アルメットディプロマット)
内部仕上:	床:フローリング(スマトラカリン、桜、バーチ、パイン) 壁/天井:石膏ボードt=12.5下地VP塗り
開口部:	アルミサッシュ:トステムデュオSG(1階)PG(2階) ガラス:単層ガラス(1階)複層ガラス(2階)
竣工引渡:	2005年12月8日、献堂式2006年1月23日
施工:	株式会社 ヤマムラ
構造設計:	オックス建築構造設計室 大庭正嗣
設計監理:	パルインターナショナル(株) 久野和作,AIA/JIA

敷地面積:	570.39 m ²	172.54坪
1階床面積:	266.64 m ²	80.66坪
2階床面積:	81.56 m ²	24.67坪
ロフト面積:	6.21 m ²	2.49坪
物置面積:	5.76 m ²	1.74坪
建築面積:	285.37 m ²	86.32坪
延床面積:	360.17 m ²	108.95坪
(牧師館部):	91.50 m ²	27.68坪



東京都立明正高等学校1964年卒

工学院大学大学院(山下研)1971修了

チャールス・ムーアの教えるカルフォルニア大学 UCLA 建築都市計画大学院へ留学1978年修了

その後南カルフォルニア設計事務所でハウジングやコンベンションセンターの設計実務

帰国後パルインターナショナル(株)設立

工学院大学非常勤講師、東レ・インテリア・スクール講師で教鞭

訳書:ポール・ラッソ「図形思考」「マイホーム プラン」誌、暮らしのエッセーを4年間連載など

雑誌出筆多数、OZONE セミナー「サスティナブルな街づくり」、都市活性化のためのコンベンション施設、Customer Oriented な建築をめざしてなど講演・木造の商業施設設計法などセミナー講習多数

所属:アメリカ建築家協会AIA、日本建築家協会JIA、日本ガーデンデザイナーズ協会 JAG、ライト建築アーカイブス日本WAAJ

久野和作

学科だより①

第1部建築学科の近況

2007(平成19)年度の入試改革とコース制について

建築学科は建築学コースと環境建築コースの2コース制が平成12年より発足し、7年目になりました。それぞれのコースの特徴を出しながら、全教員が教育に当たっています。しかしながら環境建築コースの目指す内容が建築学コースと大差ないと考え、環境建築コースの受験者数の減少が目立つようになりました。18歳の高校生に建築の広い分野の中で、環境をどのように捉えるか難しい所で、カリキュラムの組み立て方にも無理があったように反省しています。このようなことから、2007年度からは建築学科一括で入学試験を行い、1,2年は一つの学科として共通カリキュラムとし、3年進級時にコースを選択するよう改めました。また、試験も文理型(生物や国語)で受験が可能となる日程も新設し、多様な学生を受け入れる方向に改めました。

研究の成果

文部科学省の私大研究助成として、学術フロンティアプロジェクトも大きな成果を上げ終了しました。成果は「地震防災及び環境共生に関する新技術の研究開発」として最終報告がまとめられ、この継続研究として新たに「応用研究」が3年間の予定でスタートしました。また、日本建築士上学会より吉田倬郎先生が論文賞を、空気調和衛生工学会より野部達夫先生が学会賞を受賞されています。

教育の成果

本学とベルリン工科大学との国際ワークショップも2回目になり、ベルリンにて山本理顕先生、藤木隆明先生と学生14名が仮設建築のテーマで活躍しました。

就職状況

今年度は建設会社の述人が大変多く、バブル崩壊以降として最も良いと思います。しかしながら学生の希望職種が設計で施工が敬遠されています。実社会が求めている職種とのミスマッチをどう就職指導と教育内容に反映するかが課題です。

教員の近況

2006年3月に宮城千城先生、木村幸弘先生が退職されました。両先生とも大きな成果を残され、現在も非常勤として協力頂いております。

以上、紙面の関係から、お知らせしたいこともかなり省略しております。詳細は大学と建築学科のホームページを是非ご覧下さい。



建築学科主任教授
大橋 一正

建築都市デザイン学科の現状

建築都市デザイン
学科主任教授

倉田 直道

2006年度建築都市デザイン学科の入学定員は70人ですが、2006年12月現在の学生在籍数は、1年生99(31)、2年生99(27)、3年生77(16)、正規4年生79(30)、5年以上の留年生13(1)、合計367(105)であります。うち()内が女子学生です。また、2006年度入学試験の実質競争倍率は、サテライト入試が2.4倍、A日程入試5.8倍、B日程入試6.9倍、センター試験入試2.6倍で、例年と同様、入学試験においては他学科と比べて人気のある学科としての地位を維持しているものの、何れの日程の入学試験も昨年に比べると競争倍率が低下しており、全入時代に突入した影響が現れているといえます。

一方就職においては、ここ何年か続いた低迷期を脱し、久しぶりに明るい状況が見え始めています。近年学校推薦の依頼がなかつた組織事務所や大手ゼネコン設計部からの求人もあり、2007年3月卒業予定の学部生、大学院生の中から競争に勝ち抜いて組織事務所やゼネコン設計部に就職を決めている学生もいます。但し、建築都市デザイン学科では設計を希望する学生が多い現状に対して、社会における設計業務は依然少なく、特に学部生において希望する職につけないケースが多いという状況は変わっていません。全体として就職状況が好転していることは喜ばしいことですが、一方で就職活動が年々早くなっていることの大学の教育に対する影響は少なくありません。

2008年4月就職予定の求人募集は学部3年生や大学院修士1年生の12月から始まっており、学生もポートフォリオに入れる作品の準備が十分に出来ない状況の中で就職戦線がスタートするということで、少し行き過ぎのようにも思われます。またここ数年の傾向であるが、本学を卒業・修了した後、アメリカのイリノイ工科大学やペシルバニア大学、オランダのデルフト工科大学、デンマーク王立芸術アカデミーなど、海外の大学へ留学する学生も増えてきています。さらに留学後、フランスのドミニク・ペロー事務所など、引き続き海外の事務所で仕事に就いて活躍している卒業生もいます。

現在の建築系学科の教員構成は、専任教員30名(教授20名、助教授9名、特別専任教員1名)、客員教授1名、兼任講師94名であります。このうち建築都市デザイン学科の専任教員は11名(教授8名、助教授3名)で、専門分野別には、建築デザイン3名、都市計画・都市デザイン3名、建築計画1名、建築史・保存修復1名、生産・材料1名、構造1名、環境・設備1名となっています。

コンペや国際交流などにおける学生の活躍

本年度も、大学院生を中心に学外のコンペ等における入選など、学外での学生の活動成果が目立ちました。その代表的なものとしては、日本都市計画家協会関東甲信越支部主催「第15回東京都学生設計コンクール」金賞(瀬川幸太)、卒業設計日本一決定戦・仙台デザインリーグ2006・2年連続日本二(瀬川幸太)、東京商工会議所主催「大学・地域の協働による学生まちづくりプレゼンテーション大会in四谷」新宿区長賞(梨子田勉、猪野俊幸、奥田真史、深澤剛、川島一記、中嶋洋輔)、「シェルター学生設計競技2006」優秀賞(徳野由美子)、日本建築学会創立120周年記念支部共通事業第8回提案競技「美しいまちをつくる、むらをつくる」優秀賞(小林丈史、平岡真由子、菅沼瞬、加藤慎一、降旗宗一、高橋伸明、美浦康記)な

どであります。

コンペに加えて、藤木研究室(建築学科)が「第3回大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ2006」に招待参加し、研究室制作作品が一般公開されました。また、この作品は「AR Awards for Emerging Architecture 2006」において佳作に選定されました。

一昨年(本校にて開催)に引き続き、本学の提携校であるベルリン工科大学との交流のデザイン・ワークショップが8月30日から9月5日までの7日間ベルリンで開催され、本校から指導教員として山本教授及び藤木助教授、学部生4名、大学院生10名が参加しました。ワークショップのテーマは「Temporary Building 仮説」というもので、ベルリン工科大学と本校からの参加学生の混成6チームに分かれて作業を行い、言葉というコミュニケーションの壁を越えて、学内の日常的な教育だけでは達成できない経験と刺激を得てきました。また毎年フランスで開催されている国際アーバンデザイン・ワークショップに、今年も学科内及び主催者側の選考を経て大学院生が参加しました。6月にはアメリカのウイスコンシン大学ミルウォーキー校で建築の保存・修復を学んでいる学生12名と教員2名が学外研修プログラムで来日し、本学の学生と交流を行いました。ウイスコンシン大学との交流は2005年に次いで2回目であり、後藤教授と赤木助教授が窓口となり保存・修復をテーマとする講演会やフィールドトリップが行われました。また、11月には建築と都市と歴史的建造物の保全に関する制度や技術をテーマとする国際的な学術交流が台湾で開催され、建築系学科から今回の研究集会のオーガナイザーである後藤教授に加えて、澤岡教授、嵩教授、客員研究員、大学院生らが参加しました。年々こうした海外でのワークショップへの参加や海外の大学との交流などの機会が増えてきており、学生だけでなく教員とっても新しい知見や刺激を得る機会となっています。学内でもこうした国際交流を経済的に支援するプログラムが少しずつ出来てきていますが、今後建築系学科としても、国際交流を貴重な教育及び研究の機会として捉え、恒常的にそうした機会を増やし、多くの学生に提供できるようにすることが必要であると考えます。

昨年に引き続き、4年生の建築都市デザインの設計演習(杉並区阿佐谷地区)や大学院における都市デザインの演習(銀座)などでは、課題の対象となった地区において学内の設計課題の成果を展示・発表し、地元の人々と意見交換をする機会を得ています。こうした機会は学生にとって刺激となるだけでなく、地元のまちづくりに対する意識啓発にも貢献するといった点から、地元自治体をはじめとする関係者から評価を得ています。

新学部構想について

昨年度まで建築系学科内で検討してきました新学部構想は、残念ながら学長及び理事会の判断で継続検討という状況にあります。実情としては休止状態といつても良いかもしれません。しかし、建築関連分野を取り巻く社会・経済環境の変化や少子化に伴う急激な受験者数の減少や受験生の理工系離れなど受験状況の変化を考えると、次の時代に向けての建築教育の改革を進めることは不可避であり、引き続き、新建築系学部を含む新しい時代に応えた建築系学科の改革を推進する必要があると感じています。

学科だより③

2部建築学科主任のことば

今年度も残り少くなり、新しい学生を迎える時期に近づきました。2部主任として、この1年を振り返り、また新しい学生を迎えるにあたり、近況を報告致します。

本学は2006年度から3学部体制(2部は従来どおり)となり、新たな学園として出発致しました。また寂しいことに、本学の歴史の一角をなしてきた専門学校も募集停止になり、全学的には2部の学生数も大分減ってきました。時代の流れとはいえ、都心新宿にある大学としてはもう少しがんばりたいところですが。2部の学生数は表1のとおりです(2006年12月現在)。

1年生の在学生数が少なく高学年学生数が多いのは、編入学が多くなったからです。また、入学試験による一般入試より社会人入試が多くなりつつあります。そして、全学に占める建築学科の比率は年々高まっています。カリキュラムとしては、卒業研究が選択になったので、卒論や卒計なしで卒業する学生が多くなりました。これも編入学が多くなり、色々の専門科目を受講する方が良いと考えているのだろうか。色々な学歴や経歴を持った学生が多いのは、今も同じで、研究室によっては1部より活気があるという。近年は大学院推薦入学の制度もあり、2部からの進学も多い。中には博士課程まで進む者もいる。

今大学院では長期在学制度(はじめから修士を4年(正規は2年)で計画など)も検討中であり、社会全体としては働きながら学ぶ、働く経験の中から学ぶ方向性を見いだす、或いは、学ぶ

ことが単に就職のためだけではなくなりつつある。ただ授業のレベルと学力の質は保ちたい。

本学の立地条件から、2部教育も変革が求められている。一時期、建築系学科の学部化の検討がなされ、同時に2部も昼夜間制に移行すべきとの指摘も多かった。現在でも2部学生の1部授業の受講が可能で、「建築特別講義」などには多くの学生が受講している

(小数ではあるが東京理工系4大学単位互換制度を利用した他大学での単位修得3名)。1部の教育スペースや学生数の関係で、1部授業の受講には上限枠がある。本来ならもう少し認められてよいと思う(皮肉なことに夜間の教育スペースは十分確保できるが)。

2部教育の若干の改善は、実験実習関係の教育である。2部は実験スペース不足から、実験実習科目が実質困難な状態であったが、一級建築士受験の要件から、材料実験、構造実験、環境設備実験や測量実習なども実施すべく、2006年度から「建築基礎実験」科目を設置し、2007年度からは実験スペースも確保し、十分な実験実習授業を行う予定になっている。姉歯一級建築士の構造計算書偽装事件の影響等から、質の高い卒業生が求められるようになってきた。2部の4年間を有効に活かし、将来への実力を十分付けてほしいと思う。

■表1

学年 種別	1年生	2年生	3年生	4年生	合計	2部出身 大学院生数
2部全学 在学生数	99	168	211	320	798	
2部 建築 学科	学生数	44	75	93	125	337
	内編入生	0	12	39	40	91
	内女子数	13	13	23	38	87

注)2007年度の2部建築学科2~3年生への編入学は26名程度(全学は35名程度)の見込み。



建築学科2部主任教授

宮澤 健二

学科だより④

大学院建築専攻の近況

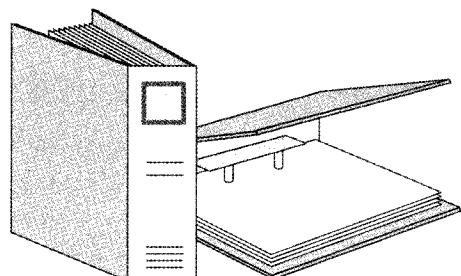
本学大学院は1964年に修士課程、1966に博士後期課程が設置されてから40年になります。その間に学内施設の整備(八王子校舎の実験施設など)、指導教員層の拡充(現在在籍の建築系全教員が修士課程担当、半数以上が博士課程担当)、大学院進学者の増加など建築学専攻の大学院教育はかなり充実してきました。しかし、建築系学科の特殊事情から、八王子校舎が有効に利用されていないため、大学院生室が不足している残念な事態もあります。

大学院発足当初は、修士課程の入学定員が7名であり、定員を順守していたため、大学院進学率は2%強でした。その後、入学定員の2倍までは入学可能となり進学率が5%位になりました。現在は入学定員が大幅に増えて40名であり、2006年4月の在籍者は修士1年が76名、修士2年が72名、2007年4月入学予定者が64名+ α (2月の試験で入学する分)です。在籍者、入学予定者にはI部、II部からの学内進学者のほか、社会人入学者、他大学からの入学者も1割強含まれています。また、女子の割合は約20%で、学部と共に年々増加傾向にあります。博士後期課程は13名(大半が社会人)です。

大学院への進学動機は様々ですが、設計事務所、建設業など採用企業側では即戦力となる修士課程卒業者を優先的に採用する傾向にあり、採用企業側のニーズの変化に対応しています。その他に計画系、特に設計系ではコンペやプロジェクトの実践を通して建築知識の高度化や想像力の研磨と建築家・設計者としての職能教

育、技術系では構造設計、研究開発や施工管理の職務希望者の専門教育などを希望する学生が増加しています。

大学院を担当する教員は前述のように建築系学科の全教員であり29名に達し、次年度はさらに3名の増加が見込まれています。その反面、大学院の教育・研究施設、なかでも大学院生室が大学院生数に対して不十分な状態が続いています。とくに、建築学専攻のうちでも進学希望者の多い計画系は新宿校舎の大学院生室、設計室、CAD室などで教育、研究、設計などが行われていますが、学生数に対して大学院生室や設計室が不足し、学生諸君に不便をかけていくだけでなく、入学者数を制限せざるを得ないのが実情です。



建築都市デザイン学科/教授
安原 治機

学科だより⑤

2006年度入試について

現在、建築系学科の入試委員は後藤修先生と私の2名です。2006年度の大学入試状況について報告いたします。

少子化や理工系離れ、さらには新設大学の増加など工科系大学には逆風が続いています。本学の志願者・受験者数も低下を続けており、表1、表2に示すように1部・2部とも2006年度も残念ながら前年度に比べ志願者・受験者数を減らしてしまいました。受験者数を確保するため1部では、昨年度より新学部（情報学部、グローバルエンジニアリング学部）の設置、およびS日程入試（1月に入試を行い、上位合格者には奨学金を給付する入試）、C-I・II（入試大学入試センター試験を利用し、合格発表を3月に行う入試）等を新設するなど、様々な対策を行っていますが、大きな流れは止められないのが現状です。一方、2部では他学科では1部にも増して厳しい状況であり、不人気学科の廃止なども検討されています。幸い2部建築学科では入試による入学者に加え、編入生（志願者43名、うち合格者36名）と社会人特別選抜（志願者19名、うち合格者17名）での入学者があり、何とか学科としての体制を維持できている状況です。

2007年度の建築系学科の募集人員は表3の通りです。2006年度に比べて最も大きな違いは、建築学科の建築学コースと環境建築コースの入試が一本化されることです。社会では環境や防災・防犯など需要が高まっていますが、高校生に環境建築コースの内容が理解を得にくく、建築学コースや建築都市デザイン学科に比べ入試では厳しい状況が続いていました。そこで2007年度より両コースで1・2年生

は全く同じ授業を行い、3年次よりコース選択を行うことになっています。A日程入試では両コースで2回を行っていましたが、2007年度は理系型入試と文理型入試で2回行う予定です。一方、2006年度に比べ、2007年度は指定校数を倍増し指定校推薦の入学者数を大幅に増やす予定です。現時点（2006年11月）で指定校推薦の志願者は大幅に増えていますが、これが今年の入試にどのように影響するのか、予断を許さない状況です。また建築系学科としては新たに資格優遇推薦入試が新設しました。これは全国規模の建築設計競技での入賞者や2級建築施工管理技術検定試験の学科合格者、CAD利用技術者の1級以上の保有者などを対象にした推薦試験です。

今後とも理工系の受験者数は減少すると見込まれており、厳しい入試状況は続きそうです。2部を含めて建築系学科を変革し、新学部の創設、理工系以外の学生や社会人学生の取り込み、などを引き続き検討していく予定です。今後とも皆様の御支援、御協力を頂ければ幸いです。

■表1 2005年度・2006年度 1部建築系学科受験者・入学者状況

学科・コース	2005年度			2006年度		
	志願者数	受験者数	入学者数	志願者数	受験者数	入学者数
建築学コース	1979	1884	116	1396	1323	154
環境建築コース	545	521	61	476	455	48
建築都市デザイン学科	1185	1127	105	1043	975	103

※推薦を含む数。編入は除く。

■表2 2005年度・2006年度 2部建築系学科受験者・入学者状況

学科・コース	2005年度			2006年度		
	志願者数	受験者数	入学者数	志願者数	受験者数	入学者数
建築学科	163	157	74	115	110	50

※推薦を含む数。編入は除く。

表3 2007年度 建築系学科募集人員

入試種別	募集人員	入試種別	募集人員
		第1部	第2部
学士編入	若干名	学士編入	35名
指定校推薦	工学部で88名	指定校推薦	全学で40名
研究論文推薦	若干名	公募制推薦	全学で30名
付属高校推薦	工学部で70名	本学専門推薦	若干名
資格優遇推薦入試	工学部で60名	付属高校推薦	全学で10名
大学入試センター試験利用		社会人特別選抜	全学で25名
C-I日程	建築27名 デザイン12名 建築5名	大学入試センター試験利用 一般入試	11名 40名
C-II日程			
一般入試			
S日程(1/31実施)	建築19名 デザイン8名		
A日程(2/5~8実施)	建築80名 デザイン36名		
B日程(2/20実施)	建築15名 デザイン1名		

※第1部の建築の人数は、建築学コースと環境建築コースの合計



建築系入試委員／教授
久田嘉章

2005年度 卒業設計・卒業研究題目

東研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	佐久間美穂	Riverside Renovation ~日本橋川から高速道路が無くなる日までに、わたしができること~ 流域特性をいかした川の駅の展望
1部 建築コース	菅原 里子	agri tower /神社・寺院における空間演出に関する研究
1部 建築コース	鈴木加奈子	green is a gift!! /岩瀬大町・新川町通りにおける歴史的景観修復コードの検討
1部 建築コース	戸田 早苗	カソスをひるがげる /超高层ビルの空中緑地によるメガストラクチャーシティの再生
1部 建築コース	濱 奈津子	要容するトボワリア /ブランディングにおける環境創造の理念の展開と今後の方向
1部 建築コース	程田 篤	企業の環境保護活動を利用した都市パリューの再構築
1部 建築コース	山中 美穂	住民参加のタイプの違いによる公園計画・公園管理の実態と展望~世田谷区における事例~
1部 建築コース	渡邊 佑介	都市における「場の捉え方」に関する研究~「脳内化される自然」から「体感する自然」へ~
1部 建築コース	渡會 裕子	さあ、もう、家に帰ろう! /カルビュジェの「建築的散策路」における楽曲構成と建築構成の比較について
1部 環境コース	加藤 優子	多機能都市としての川越市の分析(地方都市の活性化に向けて)
1部 環境コース	水代 珠美	園芸福祉活動実践の為のヒーリングランドスケープデザインに関する研究
1部 建築都市デザイン	木下 志帆	都市河川景観の表顔化に関する研究
1部 建築コース	石井 隆	環境共生集合住宅における環境共生要素別の維持管理の実態と今後の課題
院	木下 涼子	環境共生集合住宅における環境共生要素別の維持管理の実態と今後の課題

初田研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	猪野 俊幸	土地利用からみた銀座における都市の歴史的変遷
1部 建築コース	柿崎 実	宅地開発からみた三鷹市の近代における都市の変遷
1部 建築コース	勝村 久	交通機関からみた銀座における都市の歴史的変遷
1部 建築コース	川茂 雄	荒川・隅田川流域に設立された田中煉瓦の生産と建築
1部 建築コース	梨子田 勉	urban case stage /渋谷駅西側における歴史的変遷とその周辺地域
1部 建築コース	深澤 剛	community route /交通機関からみた新宿駅東口周辺における都市の歴史的変遷
1部 建築コース	藤 元博	SQUARE /近代における東京郊外の別荘に関する研究
1部 建築コース	川口 紀明	Eco.Roof /浅草における都市の歴史的変遷とその周辺地域
1部 建築コース	村田 博行	新宿駅東口周辺における都市の歴史的変遷とその周辺地域
1部 建築コース	奎谷 和章	新宿駅東口周辺における商店街からみた建築機能分布の変遷
1部 建築コース	山崎 雄太	KITAKU RENGA PROJECT+ /荒川・隅田川流域における明治・大正期の煉瓦の生産
1部 建築コース	吉田 大樹	交通機関からみた渋谷駅西側における都市の歴史的変遷
1部 建築コース	大木 梓	吉田 大樹
2部 建築コース	奥田 真史	交通機関からみた浅草における都市の歴史的変遷
2部 建築コース	藤原 刑士	tabiwayo ~多民族の交差点
2部 建築コース	平山 样子	渋谷駅西側における繁華街の発展と百貨店
2部 建築コース	山口 春香	土地利用からみた渋谷駅西側における都市の歴史的変遷
2部 建築コース	小山田 真	Cross content ~KODAN 新しいアリカタ~
2部 建築コース	辻 直子	カワニール
2部 建築コース	畠中 千秋	HINODE PROJECT
院	内野 伸勝	1933年から2004年における商店・事業所の分布からみた新宿駅東口周辺の変遷
院	久保 裕義	国立天文台における官舎の建築に関する研究
院	小黒 康典	1921年から2004年ににおける商店・事業所の分布からみた浅草の変遷
院	斎藤 佑介	東京都三鷹市下連雀における商店街の変遷
院	平井 充	1963年から2005年における商店・事業の分布からみた銀座の変遷

宮城研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	坂本 久水	教育環境および遊び環境から見た院内学級・院内分校の建築計画に関する研究
1部 建築コース	清水 哲明	井の頭公園の鍵とケア施設／完全独立型鍵とケア施設の利用特性に関する研究～他施設との平面構成と周辺環境の比較から～
1部 建築コース	森尻 正史	No border /小学校を地域開放するための安全対策に関する建築計画的研究
1部 建築コース	守屋 佳恵	CO・既存集合住宅におけるコクティイフ/ウイング機能導入の可能性に関する研究(大阪府営住宅団地におけるふれあいビーベングの実態調査からみた評価について)
1部 建築コース	横手 智昭	Station+Library=Communication /駅に併設された図書館のあり方に関する研究～東横市くらら図書館の利用実態からみたケーススタディ～
1部 環境コース	小松 爰	Spiral cycle /下町地区における認知症高齢者グループホームの現状と今後の改善点に関する研究～グループホーム施設のケーススタディ・スタッフへのアンケートから見た建物改善点および地域への参加に関する考察～
1部 環境コース	西野 亜希子	高齢者が元気になる五つの法則 /日本とフィンランドの高齢者居住施設における空間構成に関する研究
院	小林 拓人	介護老人保健施設におけるオープンスペースの利用環境に関する研究
院	谷村 裕昭	地域医療支援病院の部門別面積構成に関する建築計画的研究
院	橋本 敏之	児童のグループ形成からみた外遊びの実態と小学校屋外空間の特性について

山本研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	石井 光太	insert wedge /広告からみた1920年代の街並
1部 建築コース	石川 由佳	FRANK AND OPEN OFFICE ! /衣服・ファッションと建築空間について
1部 建築コース	石塚 勇	slot fast /池袋再生計画・1920年代と写真と眼
1部 建築コース	井上 健一	Triangle complex /アメリカ大衆社会と流線型
1部 建築コース	今井 達	Educational-park /戦争と建築
1部 建築コース	加藤 伸輔	PIPPES UNITS /座式から腰掛式へ
1部 建築コース	金井 直隆	INTERACTIVE SHELL /大正から昭和初期の都市と郊外
1部 建築コース	亀田 駿介	Collective House "OLD BOY" /1920年代の日本における、瓦斯の役割と人々の食生活
1部 建築コース	戸崎 格	privative /1920年代におけるトイレの近代化と衛生観念
1部 建築コース	皆川 詠美	PERFORMING ARTS VILLAGE /世界観旅行の成立
1部 建築コース	山本 紗弓	sub terraneum /衣服とからだ
1部 建築コース	吉川奈美子	imitation architecture /ラジオがある生活について
1部 環境コース	高倉 潤	团地について /1920年代の性
2部 建築コース	井上 幸三	有栖川宮記念図書館
2部 建築コース	安齊 史人	TUKISHIMA RENAGAYA PROJECT
院	内村 旭	住まいにおける共用空間に関する研究
院	小林 一朗	空間とコミュニティをパブリック・プライベートという概念から考察する
院	繁田 尊友	育児と労働 一幼児期における育児の方法と共同体の可能性を女性の就業形態から考える
院	染谷 晴美	モニタリング空間の研究
院	高野 邦仁	都市における子供たちの居場所に関する研究
		子供たちの居場所を再考することによってできる学校建築の可能性

赤木研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	有賀佐和子	125MILE /我が国における高齢者の居住環境研究に関する書誌学的研究-日本建築学会の既往研究を指標として-
1部 建築コース	太田 明彦	(Anti-) /我が国における高齢者の居住環境研究に関する書誌学的研究-日本建築学会の既往研究を指標として-
1部 建築コース	小島 直司	Book mark /子どもの遊び環境としての公園の構成に関する研究-広場・入口を中心として-

赤木研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	原山 翼	multilevel crossing city /子どもの遊び環境としての公園の構成に関する研究-広場・入口を中心として-
1部 建築コース	佐久間英彰	Waterfront-Manufacturing /我が国におけるWayfinding研究の現状と今後の課題
1部 建築コース	森野 和彬	クオリアの降るとき /我が国におけるWayfinding研究の現状と今後の課題
1部 建築コース	門谷百莉子	student interchange /我が国におけるWayfinding研究の現状と今後の課題
1部 建築コース	本間久美子	
1部 建築コース	増田 智佳	赤木伸二郎 集 /我が国における高齢者の居住環境研究に関する書誌学的研究-日本建築学会の既往研究を指標として-
1部 建築コース	新井 邦之	我国における高齢者の居住環境研究に関する考察-日本建築学会の既往研究を指標として-
1部 建築コース	杉山 知明	公共施設における開催講座の社会的役割とその参加者の学習環境に関する研究かけはし
1部 環境コース	赤間伸二郎	集 /我が国における高齢者の居住環境研究に関する書誌学的研究-日本建築学会の既往研究を指標として-
2部 建築コース	柏木雄一郎	我国における高齢者の居住環境研究に関する考察-日本建築学会の既往研究を指標として-
2部 建築コース	杉田 昌也	公共施設における開催講座の社会的役割とその参加者の学習環境に関する研究
2部 建築コース	三浦 広貴	わが国における認知症高齢者の居住環境に関する書誌学的研究
2部 建築コース	青谷 瑞紀	幼児の外部保育環境における安全と学びの関係性に関する基礎的研究
2部 建築コース	荒井 晴正	
2部 建築コース	森谷 拝平	
院	明山 泰之	
院	吉田 麻耶	

木村研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	木村 泰智	神保町を伝承する/インセンティブ型規制制度による公開空地等の在り方~都心業務地区を対象として~
1部 建築コース	玉井 佳	YOTSUYA ART TRAY /駅における人の立ち方について
1部 建築コース	鈴田 弘司	
1部 建築コース	高橋 弘樹	
院	佐藤 正彦	スマート・アーキテクチュアに関する基礎的研究
院	高橋 寛	街並景観の研究 一歩で走る基礎的研究

藤木研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	和泉 美実	図書館建設と/建築における生分解性プラスチック及びバイオマスプラスチックの現状範囲及び可能性に関する研究
1部 建築コース	金子 智史	for all music , (music e silent or music n noise) iff (music e silent or music n noise) /インテリアデザインにみるノイズとミュージックの手法
1部 建築コース	瀬川 幸太	そこでは暮らせるか サイバースペースとメディア都市に関する研究
1部 建築コース	藤原 憲也	激しくも、刹那に刻む／残存空間の状況及び特性に関する研究～文化形成から都市再生へ～
1部 建築コース	富田 直樹	Greenscape Garden /集落・土着建築物から見る世界の住文化に関する研究
1部 環境コース	小山 洋太	REMIX scape harmonized with PRASTICS /プラスチック建築実現の可能性に関する研究～歴史的変遷及び成形技術から～
1部 環境コース	黒田 博史	Read in KYOJIMA /自然環境に適合する建築のあり方について～自然環境と共に進化・つづける生物の模式を参考として～
1部 環境コース	斎藤 新	EFFECT /カキヨウアキオウスルコロ／ネットワーク理論を用いた、建築と自然との新しい共生手法についての研究
1部 環境コース	高橋 佳介	阿佐ヶ谷住宅計画／広告活動から考察する建築メディアとしての可能性 The Lines Creates.
2部 建築コース	清水 茂美	Dissolving boundary
2部 建築コース	若山 晃久	建築と地形の関係性に関する考察～既存地形を活かした設計方法の提案～
院	神谷 司	スマート・アーキテクチュアに関する基礎的研究
院	佐藤 正彦	複雑系システムを用いた新たな居住形態の提案
院	山形 章	

中島(智)研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	小田 貴政	TOKYO information /イタリア近代建築運動の形成
1部 建築コース	坂下 道介	日本とヨーロッパの古都比較
1部 建築コース	櫻岡 徹久	日本とヨーロッパの古都比較
1部 建築コース	白井 聰	イタリアのシネサンス思想都市について
1部 建築コース	松坂 仁	「官殿建築」にみる中国の建築とその芸術性」
1部 環境コース	斎藤 留世	現代における装飾の有用性について
1部 環境コース	佐野 仁志	インテリアの近現代
1部 環境コース	新見 朱里	プラハのラツチャニ地区とマラ・ストラナ地区の建築

久田研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 環境コース	青山 敦士	Web GISを活用した観光地における防災対策に関する研究
1部 環境コース	石井 幸洋	周期特性を考慮した表層地盤増幅特性に関する研究
1部 環境コース	閑田 健祐	東京都地盤の三次元データベースの作成と地盤増幅率に関する研究
1部 環境コース	園部 也	災害対応型地域防災訓練に関する研究
1部 環境コース	中嶋 仁一	防災トロットワットを行った建築の費用対効果に関する研究
1部 環境コース	中村 吉秀	工学院大学新宿校舎の地震防災に関する研究
1部 環境コース	馬場 和晃	国内の防災トロットワット事例に関する統計的研究
1部 環境コース	堀 勝則	工学院大学新宿校舎の地震被害想定に関する研究
1部 環境コース	田村 陽一	耐震補強の費用対効果を考慮した地震リスクマネジメントに関する研究
1部 環境コース	毛利 祥久	制振構造物の震度震時ににおける減衰特性に関する研究
1部 環境コース	金田 淳也	
1部 環境コース	村松 千照	
院	佐藤 哲也	WebGISを活用した防災活動支援システムの開発に関する研究
院	健太郎	機会犯罪の成立に関わる物的環境要因の解明とそれに基づく防犯環境設計手法の構築
院	松井 伸太郎	耐震診断結果に基づくRC造校舎の確率論的応答解析モデルと地震被害閑数の構築

宮澤研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	秋山 高規	実大振動実験における在来軸組み住宅の耐震性能に関する研究(T棟)
1部 建築コース	塙川 愛樹	伝統木構造に関する研究
1部 建築コース	普澤 見野	木造軸組構法住宅の立体弾塑性解析に関する研究
1部 建築コース	杉崎 誠一	粘弹性体シバーを用いた粘弹性制振壁の開発研究
1部 建築コース	成毛 智一	実大振動実験における在来軸組構法住宅の耐震性能に関する研究(T棟)
1部 建築コース	水姓健三郎	ドリックタッピングねじり抗力に関する研究
1部 建築コース	若谷 幸世	既存木造建物の耐震診断に関する研究
1部 建築コース	牧野 文雄	木造住宅の耐震診断ソフトの開発研究
院	庄子 友幸	既存木造住宅の耐震限界性能についての研究
院	服部 大介	

大塚研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	牧野原崇裕	卒業設計・卒業研究題目

近藤研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	大塚 純平	RC造柱梁接合部の通し配筋による耐力への影響の数値解析の検討
1部 建築コース	小松崎 大輔	RC造柱偏心梁接合部の耐震性能の数値解析的検討
1部 建築コース	関山 茂介	壁配置等に影響を受ける層せん断力の解析的検討

阿部研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	岩崎里香	コンクリートの中性化に及ぼす各種要因の影響に関する検討
1部 建築コース	古山 由佳	モルタルの流動性に及ぼすスラブ細骨材の種類の影響
1部 環境コース	原田 陽平	軽量コンクリートの引張強度試験に関する検討
1部 建築コース	早川 善一	セメントベース供試体の作製方法に関する検討
2部 建築コース	小沢 要子	セメントベース供試体の作製方法に関する検討

遠藤研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	小野圭次郎	大都市圏におけるマンションの収益還元法による価値の評価
1部 建築コース	富井 悠太	大都市圏におけるマンションの収益還元法による価値の評価
1部 建築コース	久野 貴司	リフォーム許容問題の実態と対応策について
1部 建築コース	村上 雄二	大手セネコの環境会計とその取り組み
1部 建築コース	山田 理史	J-REIT法人が所有する不動産の投資評価に関する研究
1部 建築コース	渡辺 岳吾	設備工事の市場単価と積み上げ単価の比較
1部 環境コース	加藤 裕規	建築の構造部材数量を基にした環境負荷の試算
1部 環境コース	小柳 智弘	大都市圏におけるマンションの収益還元法による価値の評価
1部 環境コース	高橋 也	大都市圏におけるマンションの収益還元法による価値の評価
1部 環境コース	星野 敦史	建築の構造部材数量を基にした環境負荷の試算
1部 環境コース	南郷 考徳	J-REIT法人が所有する不動産の投資評価に関する研究
院	驚美 克実	J-REIT投資法人の所有物件の収益性評価に関する研究
院	大出 晃司	大工・工務店における原価管理の実態に関する調査研究
院	小野寺 敏	J-REIT投資法人の所有物件の収益性評価に関する研究

吉田研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	餘久保智洋	循環型社会が求める住宅生産供給の研究～解体工事の事例の調査研究～
1部 建築コース	大野 崇	木造住宅の生産供給システムに関する研究
1部 建築コース	奥山 雄太	建築ライフスタイルに関する研究
1部 建築コース	國分加奈江	建築の資源循環特性に関する研究(サステナブル建築における開発事例の比較分析)
1部 建築コース	小暮 重昭	建築評価に関する研究～建築設備評価の現状と今後のあり方～
1部 建築コース	中山 優	建築の資源循環特性に関する研究(サステナブル建築における開発事例の比較分析)
1部 建築コース	西尾 審人	木造住宅の生産供給システムに関する研究
1部 建築コース	広瀬 健彦	建築評価に関する研究～建築設備評価の現状と今後のあり方～
1部 建築コース	森北 紗穂子	建築評価に関する研究～建築設備評価の現状と今後のあり方～
1部 建築コース	蔽 和也	循環型社会が求める住宅生産供給の研究～解体工事の事例の調査研究～
1部 建築コース	山下 光博	建築ライフスタイルに関する研究
		～医療施設建築と教育施設建築のストック調査とこれに基づく建築市場の展望～

宇田川研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	池田 純	戸建住宅における太陽熱利用システムの評価
1部 建築コース	大塚 寛高	事務所における空調システムのシミュレーションによる検討
1部 建築コース	米谷 仁洋	集合住宅における太陽熱利用給湯システムの評価
1部 環境コース	楠 崇史	空調システム総合性能の実験的研究
1部 環境コース	小林 淳	空調システム総合性能の実験的研究
1部 環境コース	田邊 長	集合住宅における太陽熱利用給湯システムの評価
1部 環境コース	長岡 志理美	大学高層校舎のエネルギー消費量実態と空調システム最適運転法
1部 環境コース	坂長 忠興	戸建住宅における太陽熱利用システムの評価
1部 環境コース	間辯 恵一	事務所建築における空調システムのシミュレーションによる検討
2部 建築コース	朝日 健一	

大橋研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	河原崎雄介	変性能の違いにおけるエアバリアシステムに関する研究
1部 建築コース	山村 高広	建物における省エネルギーシステムに関する研究
1部 環境コース	稻良 友基	建物における環境負荷低減を目的とした評価手法に関する研究
1部 環境コース	鈴木 仁治	積雪地域における環境負荷低減手法に関する研究
1部 環境コース	西沢規矩也	建物における環境改善効果に関する研究
1部 環境コース	藤谷 一樹	屋上緑化による環境改善効果に関する研究
1部 環境コース	宮裕裕香里	屋上緑化による環境改善効果に関する研究
1部 環境コース	石山 大輔	建物における省エネルギーシステムに関する研究
院	大森 浩之	事務所建物のトレイにおけるリニューアル計画とその効果に関する研究
院	高岡 直人	屋上緑化の環境改善効果およびヒートアイランド緩和効果に関する研究

塙田研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	有村 勇史	高層校舎に伝搬する環境騒音の高さ方向分布に関する研究
1部 建築コース	坂田 淳	集合住宅の音環境に関する調査研究
1部 建築コース	本田 力也	集合住宅の音環境に関する調査研究
1部 環境コース	山口 太賀	高層校舎に伝搬する環境騒音の高さ方向分布に関する研究
1部 建築都市ア	大串 麻希	高層校舎に伝搬する環境騒音の高さ方向分布に関する研究
2部 建築コース	根上 復成	高層校舎に伝搬する環境騒音の高さ方向分布に関する研究

野部研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	伊藤 友祐	オフィスにおけるグールチュアの実用性試験
1部 建築コース	恩賀 彩	クールチアの環境選択性が心理的評価に及ぼす影響
1部 建築コース	片山 翔介	太陽熱駆動換気機能を具備した建具に関する研究
1部 建築コース	佐久間晴行	スキノロードエミュレーターにおける縮率の影響評価
1部 建築コース	佐々木康彦	太陽熱駆動換気機能を具備した建具に関する研究
1部 建築コース	四方田誠司	大規模オフィスビルにおけるVAV空調システムの運転実績
1部 建築コース	芳賀 裕輔	個別空調機の運用時性能評価法
1部 環境コース	青砥 貴洋	スキノロードエミュレーターにおける縮率の影響評価
1部 環境コース	菅原 一浩	個別空調機の運用時性能評価法
1部 環境コース	松村 復朋	大規模オフィスビルにおけるVVWV水送搬系の運転実績
1部 環境コース	山内 康平	東北地方のT字病院における自然換気システムの評価
1部 環境コース	清水 賢	太陽熱駆動換気機能を具備した建具に関する研究
院	松島 孝幸	個別空調機の運用時エネルギー性能評価システムの開発
院		建物のエネルギー関連時系列データの類型化及び設計への適用に関する研究

村上研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	須貝 鉄次	大規模震災における被害情報収集マニュアルに関する研究
1部 建築コース	土志田俊次	IT機器を活用した被害情報収集実験に関する研究
1部 建築コース	保田健太郎	地域住民参加による地震被害情報収集実験に関する研究
1部 建築コース	杉崎 紘文	建築・都市空間における犯罪不安に関する研究
1部 建築コース	中田 雅人	災害時救援護のためのハイアワーに関する研究
1部 環境コース	齋藤 雄一	都心キャンパスの災害対応マニュアルに関する研究
1部 環境コース	須田 修平	住居侵入盗を誘発する物的環境の解明に関する研究
1部 環境コース	納見 貴博	様々な防犯対策と犯罪減少効果の関係に関する研究
1部 環境コース	箕輪 浩美	路上犯罪の発生と道路景観の関連に関する研究(その1)
1部 環境コース	吉村 直起	コンビニエンスストア対象強盗と誘発する物的環境要因の解明に関する研究
1部 環境コース	壬生 淳	地震防災対策におけるLCCOに関する研究
1部 建築都市ア	福田 洋祐	路上犯罪の発生と道路景観の関連に関する研究(その2)
1部 建築都市ア	厨 啓志	地震防災対策における研究
1部 建築都市ア	薄井 武夫	地域住民参加における防災ワークショップに関する研究
2部 建築コース	河野 長慈	東京都の犯罪情勢に関する調査研究
2部 建築コース	竹内 寛	企業・大学の防災対策に関する調査研究

倉田研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	田下 純多	空の器／西新宿超高層街公園空地における植栽パターンの研究
1部 建築コース	渡邊 啓太	Galleries link the city／都市における表層の形態と人のアクティビティの関係についての研究
1部 建築コース	渡部 良平	本の墓場 Library of the late architects／都市における表層の形態と人のアクティビティの関係についての研究
1部 環境コース	大谷 淳一	Branding of University／都市と廣告
1部 建築都市ア	川上 修史	extension of our daily lives／都市における表層の形態と人のアクティビティの関係についての研究
1部 建築都市ア	赤川 明香	集まつて住む／オープンスペースにおける着座行為と相互距離に関する考察
1部 建築都市ア	小澤 基靖	Act Locally, Make for Relation／屋外空間にみる街の個性に関する研究
1部 建築都市ア	神之門はな子	ジンシャデアソノ／日本における自転車まつりの可能性
1部 建築都市ア	桑原 大輔	I hear sound and know now／都市の性格と聴覚的環境との関係についての研究
1部 建築都市ア	柄 俊文	Renear (fleam)／街の景観に見る社会的意識
1部 建築都市ア	半田 梓子	Locality, reg./ecological designの手法
1部 建築都市ア	廣瀬 清美	井の頭水物語／エコロジカルデザインの手法
1部 建築都市ア	官下 佳奈	まつばごとミニミニ／場所性とは～向島八王子女のみ野の比較～
1部 建築都市ア	横田 俊介	～地場の材をもかたした暮らすをDesignする～／人間都市クリーナを実例の都市計画の実行過程と維持管理を考える
1部 建築都市ア	瀧澤 満平	Closed／都市情報誌に見る集客型商業エリアの空間と与えるイメージに関する研究
2部 建築コース	柿澤 秀彰	歌舞伎町文化施設 総合案内所の計画
2部 建築コース	山口 栄人	都市の固有性を活かした都市の魅力の再生：千代田区神田駿河台を例として改修における既存を活用したデザインに関する研究
院	斎藤 淳	改築との関係性からみた公園空地のデザインに関する研究
院	照沼 恒平	建築との関係性からみた公園空地のデザインに関する研究
院	西山 健	都市の固有性を活かした都市の魅力の再生：千代田区神田駿河台を例として改修における既存を活用したデザインに関する研究

野澤研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	原 信敏	The river station／舟運、新エネルギーから見た東京駅～東京地区から拡がる都心交通～
1部 環境コース	佐藤 悠大	国寺寺崖懸地の景観形成と景観改善の研究
1部 環境コース	濱本 純一	Connect Kodomo Project／子どもの遊び場づくりとしてのブレーバー事業に関する研究
1部 環境コース	和久田教士	floodings street／商店街における建物階層別の店舗立地についての研究～八王子西放射線ユードーを対象として～
1部 建築都市ア	植草利英子	銀座の屋外広告物のあり方に関する研究
1部 建築都市ア	樋橋 智博	大規模団地における再生手法についての研究
1部 建築都市ア	神谷 早織	テラス link town～八王子駅周辺における住民間交流の促進～
1部 建築都市ア	熊谷 美穂	情報社会における地域基盤となるポータルサイトのあり方に関する研究
1部 建築都市ア	佐藤 俊平	密集市街地における住宅建て替えの困難性に関する研究
1部 建築都市ア	鈴木 紗織	市街地整備手法としての横浜市における街づくり協議地区制度に関する研究
1部 建築都市ア	高橋 裕子	地域コミュニティ再生型コーポレーションセンターに関する研究
1部 建築都市ア	丹野 雅博	南毛地城5市活性化のための都市間連携についての研究
1部 建築都市ア	名和 托邦	府中駅周辺地区的都市開発における景観保護のための交通施策に関する研究
1部 建築都市ア	福島 隆徳	歩行者の回遊性に着目した八王子市街地活性化に関する研究
1部 建築都市ア	村上 圭子	～中野区平和森林公園地域と大泉学園地域を対象として～
1部 建築コース	剣田 圭一	市街地整備手法としての横浜市における街づくり協議地区制度に関する研究
2部 建築コース	大豆澤 健一	地域コミュニティ再生型コーポレーションセンターに関する研究
2部 建築コース	松村 千晶	市街地の緑化～東京の都市型農業の活用についての研究
2部 建築コース	安武 実大	駅前市街地再開発事業における計画手法・体系の評価
2部 建築コース	堀 駿史	歩行者の回遊性に着目した八王子市街地活性化に関する研究
院	麻田 ゆき子	渋谷駅周辺地区的市街地変容に関する研究
院	奥山 智司	歴史的景観の「本物性」を継承・創造する基準のあり方についての研究～佐原市佐原重要伝統的建造物群保存地区と周辺における基準の運用実態を事例として～
院	金井 亜弥	ユニアーバーサルデザインのまちへ向けた歴史的景観とバリアフリーの融合手法に関する研究～佐原市佐原重要伝統的建造物群保存地区を対象として～

対田研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	大森 雅子	Y15/Y15
1部 建築都市ア	飯森 成敏	Human Green House/Human Green House
1部 建築都市ア	佐野 温史	multiplex/Multiplex
1部 建築都市ア	未廣 大樹	HISU+E/HISU+E
1部 建築都市ア	仙作 宽城	佐原芸術都市／佐原芸術創造都市
1部 建築都市ア	中山 大輔	HISTORIC PRESENT/HISTORIC PRESENT
1部 建築都市ア	向田 審明	Go For Park/Go For Park
1部 建築都市ア	赤沢 俊輔	伝統的建造物群保存地区における現代建築物に関する研究～川越・ドギャラリー～
1部 建築都市ア	大貫 利義	都市建築とファッショントピカルな街づくり～甲州東北を対象として～
1部 建築都市ア	大脇 慶彦	アニメーション映画に描かれる未来都市についての研究
1部 建築都市ア	島元 良次	魅力的な街路空間の演出に関する研究
1部 建築都市ア	樋木 駿	～新宿モードオーバー～カッフェ～を事例として～
1部 建築都市ア	橋本 夏美	「ついいの広場」まちづくりにもたらす多様な可能性についての研究
1部 建築都市ア	山川 伸一	地域の駅前活性化～屋外広告看板の研究～
1部 建築都市ア	唐澤 俊吾	「真夏」にて都市のイメージを捉える～激動期の60年代から写真都市東京を被写体として～
1部 建築都市ア	石井 大将	住宅政策がめざしてきたものと住宅政策がもたらしたもの
2部 建築コース	野口 和夫	～東京都住宅マスタープランを対象として～
2部		

沢岡研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	宮坂 和巳	磯崎新研究 『建築』へのプロセス
1部 建築都市ア	梅中 美緒	systema city / adaptability 一ニーズに適応する可変建築・可動建築—
1部 建築都市ア	西田 知広	progresscape / adaptability 一一ニーズに適応する可変建築・可動建築—
1部 建築都市ア	小口 裕也	Reborn / 建築ストックの有効活用についてのコンバージョン研究
1部 建築都市ア	渡辺 吉晃	Playing in the Open-air 都市の中の自然遊び / 建築ストックの有効活用についてのコンバージョン研究
1部 建築都市ア	佐藤さやか	スキマ×サミットS-S / 原宿における建築の表層建築とアクティビティの多様性
1部 建築都市ア	申 英玉	SMALL VILLAGE - 原宿における建築の表層建築とアクティビティの多様性
1部 建築都市ア	林 孝幸	現象として起る身体 あるいは風景 / 原宿における建築の表層建築とアクティビティの多様性
1部 建築都市ア	松浦 暢	カホウサケ 開放 / 解放 / 美術館における行動誘発要素の発見及び調査
1部 建築都市ア	松本 正隆	デザインの森を散策する / 美術館における行動誘発要素の発見及び調査
2部 建築コース	小池 純	RHYTHM OF LIFE
2部 建築コース	内田 陽介	GREEN EDGE
院	赤坂 繁和	半外部空間の空間特性に関する研究
院	梅澤 宏行	「新宿3丁目の既存街区における半外部空間挿入のケーススタディ」～空間連続体の分節に関する研究
院	大山 高志	現代住宅における距離感
院	西村 悠子	内部空間と外部空間の関係性 ガラス面により限定された外部空間の配置による空間の可能性～

谷口研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 環境コース	阿部 友輝	地情にかかる／世代別価値観と空間要素の関係からみる商店街活性化手法の研究
1部 環境コース	山内 裕貴	Ueno Sightseeing Project / 地域高低差利用における回遊空間の研究
1部 建築都市ア	五十嵐理人	BOOK ENOUNTER. ~本と出会う場所~/ 世代別価値観と空間要素の関係からみる商店街活性化手法の研究
1部 建築都市ア	諫早美彩子	アクトワード / 「集まって住む」中の共有空間についての研究
1部 建築都市ア	石井 真	circle sympathy / 「集まって住む」中の共有空間についての研究
1部 建築都市ア	上村 加奈	ART makes harmony with people's space of dream & fantasy / 世代別価値観と空間要素の関係からみる商店街活性化手法の研究
1部 建築都市ア	佐藤みどり	Grove of Art / 地域高低差利用における回遊空間の研究
1部 建築都市ア	藤田達太郎	上野の人気アーケード / 地域高低差利用における回遊空間の研究
1部 建築都市ア	古河 茉奈	Prototype of the New Standard in the case of WAKABA dist./ 「集まって住む」中の共有空間についての研究
1部 建築都市ア	松山 敏久	Radial Grid - 地域高低差利用における回遊空間の研究
1部 建築都市ア	溝口 崇	No Green , No Happy Life / 世代別価値観と空間要素の関係からみる商店街活性化手法の研究
1部 建築都市ア	渡辺 佳奈	Community Housing ~New "co-housing"~ / 「集まって住む」中の共有空間についての研究
1部 建築都市ア	河野 俊明	社学融合 / 産業遺産の活用による臨海工業地帯活性化手法の研究
院	鶴嶽 彰仁	商店街における共空間の創出手法に関する基礎的研究
院	関 後輔	～三慶市連雀通り商店街をケーススタディとした実践的提案～ 高低差利用によるつなぎ空間の研究 ～上野におけるケーススタディ～
院	小林 茉莉	高齢期における住環境の課題と考察 一団塊世代の住居意識に対する研究一

望月研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	河原 匡宏	INNOVATION / ファサードからみる広告と建築の在り方
1部 建築コース	黒田 歩	EXPERIENCE MUSIC PROJECT / 音楽に携わる建築
1部 建築コース	田中 大也	INTERFACE / 調布市南部地域における施設計画調査研究
1部 環境コース	尼崎 祐之	Come in Contact / 地方建築物の可能性及び鎌ヶ島市若葉駅周辺の敷地調査
1部 環境コース	伊藤 良平	TSUKUBA STYLE / つくばでの都市と農村の共生についての研究
1部 環境コース	佐藤 匠	バッファーケンチク / 居間の形態から見る住宅設計手法
1部 環境コース	庭本 卓実	solid aggregate / 小田急線下北沢駅跡地利用について
1部 建築都市ア	宮沢 権吾	エイイ+マチ =マチ ~ヒガヒラツカゲ~ / 商業施設+住居の複合施設の研究
1部 建築都市ア	大和 篤史	respring, Katayamazumi / 石川県片山津温泉再開発に関する調査研究
院	内藤 力	建築の「おわり」と「はじまり」 ～建築の更新によって創出される空間の考察～
院	船原 友子	集合住宅の共用空間の計画に関する考察

安原研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 環境コース	石黒 刑	Seiseki middle land / 内部空間と照明における心理的影響に関する研究—ゆらぎ特性と空間の快適性及び照明の関係—
1部 環境コース	千葉由実子	cross / 店舗のファサードにおける心理的効果に関する基礎的研究
1部 建築都市ア	石井 雅和	DISCOVERY / 住宅における接道距離と植栽の有無による印象変化の研究
1部 建築都市ア	及川 聰	distortion / 内部空間と照明における心理的影響に関する研究—ゆらぎ特性と空間の快適性及び照明の関係—
1部 建築都市ア	大内 宏平	NOGAWA ART PROJECT / ビル下のオープンスペースにおける印象に関する研究—形態・構成要素による印象の変化について—
1部 建築都市ア	大高 彩子	A LIFE IS GAMBLE / 夜間景観に関する研究—時間経過に伴う印象変化の基礎的研究—
1部 建築都市ア	岡田 久美	COR ~SANCHA STATION SQUARE PROJECT~ / 劇場・多目的ホールの外観の印象に関する基礎的研究
1部 建築都市ア	織田 優子	HEALTH MEDICATION SQUARE = TACHIKAWA MINAMI PROJECT / 飲食店の内部空間における仕切りの研究
1部 建築都市ア	川井 真也	OPEN SPORTS PROJECT / ビル下のオープンスペースにおける印象に関する研究—形態・構成要素による印象の変化について—
1部 建築都市ア	木本佳奈子	89.90.91 / 店舗のファサードにおける心理的効果に関する基礎的研究
1部 建築都市ア	森藤 由佳	COMMUNITY LOUND? × COMMUNITY LAND??? / 夜間景観に関する研究—時間経過に伴う印象変化の基礎的研究—
1部 建築都市ア	鳴原 唯	BUKUROCK MARKET III / 飲食店の内部空間における仕切りの研究
1部 建築都市ア	庄司 豊	The sky park city / 内部空間と照明における心理的影響に関する研究—ゆらぎ特性と空間の快適性及び照明の関係—
1部 建築都市ア	松井 知子	sound museum / 夜間景観に関する研究—時間経過に伴う印象変化の基礎的研究—
1部 建築都市ア	山本 愛美	CINEART / 店舗のファサードにおける心理的効果に関する基礎的研究
2部 建築コース	篠原 圭一	店舗のファサードにおける心理的効果に関する基礎的研究
2部 建築コース	須藤 隆	内部空間と照明における心理的効果に関する研究—ゆらぎ特性と空間の快適性及び照明の関係—
2部 建築コース	山崎 洋平	店舗のファサードにおける心理的効果に関する基礎的研究
2部 建築コース	山田 悠介	内部空間と照明における心理的効果に関する研究—ゆらぎ特性と空間の快適性及び照明の関係—
2部 建築コース	平沼 寛史	保育環境の質的向上における保育者にとっての環境のあり方にに関する基礎的研究
院	岩崎 裕二	劇場・多目的ホールの外観の印象に関する基礎的研究
院	大田 絵美	河辺 真次
院	大矢 瑞貴	夜間景観に関する基礎的研究 一時間経過に伴う印象変化に関する研究—
院	岡 瞳子	店舗のファサードにおける心理的効果に関する基礎的研究
院	窪野 良太	内部空間と照明における心理的影響に関する研究—空間の快適性と照明の関係—
院	小堀 茂実	建物周辺のオープンスペースの印象に関する研究 一形態・構成要素が人に与える印象について—
院	府川 哲大	密度感が与える人間心理への影響に関する実験的研究

後藤研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	松永 孝夫	community / つくば市門前地区の町並みと消防に関する調査・研究
1部 建築コース	安本圭一郎	貞祥寺保存・再生計画 / 貞祥寺山門とその設計史料に関する調査・研究
1部 建築コース	吉村 雄飛	横浜市金沢区伊藤博文旧別邸の調査・研究
1部 環境コース	佐川 武正	Contrast / 宇和島市宇和島町岩松における町並みの形成に関する調査・研究
1部 建築都市ア	児島 朝子	意職人による御坂屋の調査・研究
1部 建築都市ア	岸田紗綾佳	わ～高齢者のためのグループホーム／庭と建物の関係からみた豪華造の調査・研究
1部 建築都市ア	武山明日香	防災センター / 秩父市中心市街地の町並みと保存に関する調査・研究
1部 建築都市ア	根本 雅之	Gain By Contrast ~信仰の今昔・土間の今昔～ / 郡上市白鳥町石徹白地区における集落の景観調査・研究
2部 建築コース	小林 由佳	小林・久恵
2部 建築コース	柳原 明日香	宇和島市宇和島町岩松地区的洋風建築について
2部 建築コース	國本 大史	Green CLIPPING
院	齊藤 哲朗	宇和島市宇和島町岩松における町並みと民家の特性に関する研究
院	岡本 将吾	茅産業の発展と建築の近代化 一静岡市山間部(旧清沢村)を例として一
院	小川 耕作	瓦葺から見た歴史的建造物の修理方法の研究
院	村上 幸祐	

小野里研究室

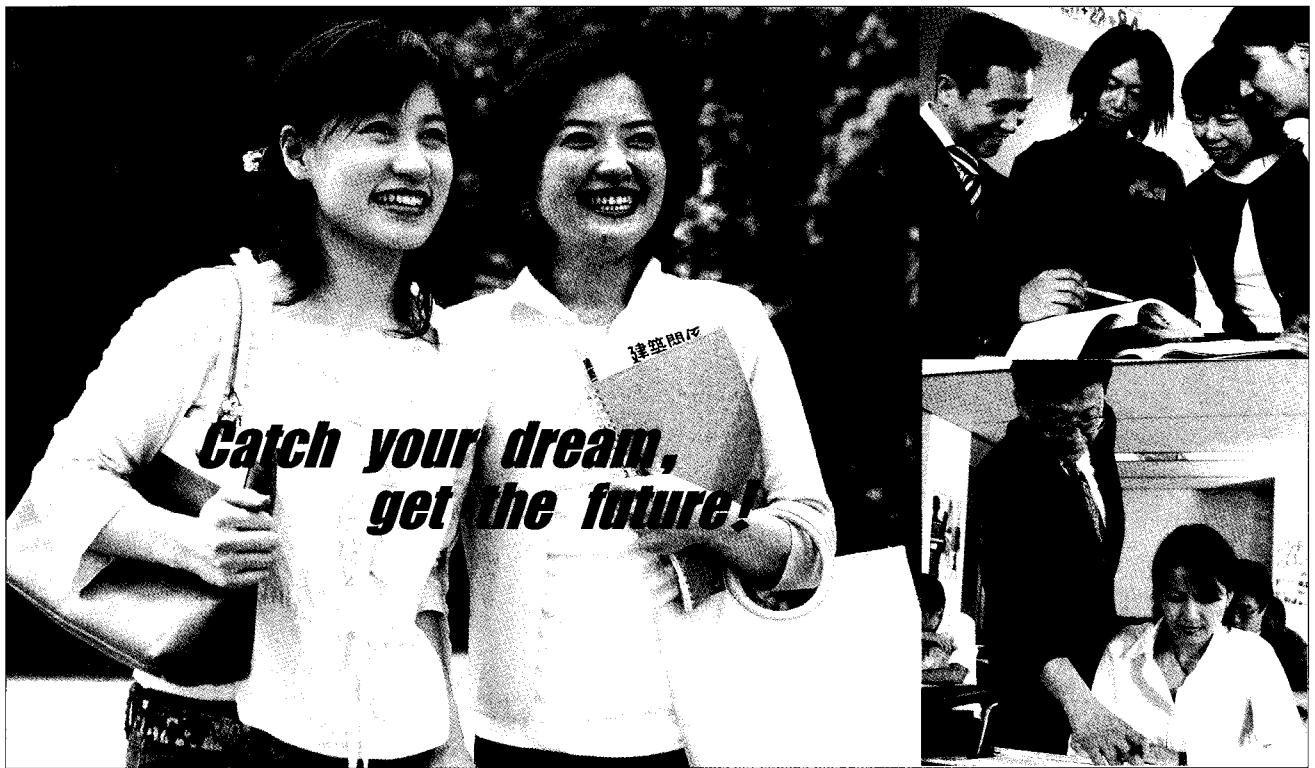
学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	奥崎 圭一	城郭建築の最大耐力に関する研究
1部 建築コース	鈴木 謙生	配筋工事に関する研究(現場の混亂を招く配筋方法の不統一について)
1部 建築コース	戸澤 知仁	集成材壁式工法の接合耐力に関する研究
1部 建築コース	柳田 達郎	鉄骨鉄筋コンクリート造耐震壁の壁筋の定着方法に関する研究
1部 環境コース	海塩 直希	Webを利用した建築構造支援教材の提案(目で見る力学)
1部 建築コース	野辺 和仁	完全リストの定着筋に関する研究
1部 建築コース	菊田 謙	PC耐震壁の工法別による耐震性能に関する研究
1部 建築コース	高橋 智磨	発泡スチロール製ボーラーを用いたボーラーライフに関する研究
1部 建築都市ア	熊木 健太	耐震壁壁板の有効圧縮強度係数に関する研究
1部 建築都市ア	中井 智哉	
1部 建築コース	井手 春里	エコセメントを用いたコンクリートの諸性質に関する実験的研究
1部 建築コース	金子 樹	(その1)エコセメントを用いたプレシジョンコンクリートの経時変化と基本物性
1部 建築コース	小林 克己	(その2)エコセメントを用いたコンクリートの諸性質に関する実験的研究
1部 建築コース	重富 裕貴	エコセメントの高強度コンクリートへの適用に関する研究
1部 建築コース	地引 直人	現場練習コンクリートの調合および品質管理に関する研究
1部 建築コース	閨屋 直人	年経竹筋コンクリートアーチ橋のコンクリートの調査
1部 建築コース	増田 博文	鉄筋コンクリートの中性化深さによる余寿命の推定に関する研究
1部 建築コース	和知 貴則	高強度コンクリートの圧縮強度に及ぼす試験方法の影響
1部 建築コース	村野 豪	低品質骨材コンクリートのフライアッシュによる品質改善に関する研究
1部 建築コース	上田 平将吾	高強度コンクリートの練混せ性能に及ぼすミキサー種類と練混ぜ方法の影響に関する研究

高研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
1部 建築コース	井手 春里	エコセメントを用いたコンクリートの諸性質に関する実験的研究
1部 建築コース	金子 樹	(その1)エコセメントを用いたプレシジョンコンクリートの経時変化と基本物性
1部 建築コース	小林 克己	(その2)エコセメントを用いたコンクリートの諸性質に関する実験的研究
1部 建築コース	重富 裕貴	エコセメントの高強度コンクリートへの適用に関する研究
1部 建築コース	地引 直人	現場練習コンクリートの調合および品質管理に関する研究
1部 建築コース	閨屋 直人	年経竹筋コンクリートアーチ橋のコンクリートの調査
1部 建築コース	増田 博文	鉄筋コンクリートの中性化深さによる余寿命の推定に関する研究
1部 建築コース	和知 貴則	高強度コンクリートの圧縮強度に及ぼす試験方法の影響
1部 建築コース	村野 豪	低品質骨材コンクリートのフライアッシュによる品質改善に関する研究
1部 建築コース	上田 平将吾	高強度コンクリートの練混せ性能に及ぼすミキサー種類と練混ぜ方法の影響に関する研究
1部 建築都市ア	小野 松景子	NHL(天然水硬性石灰)の環境性能と利用用途に関する研究
1部 建築都市ア	河辺 真次	愛知万博における施設モニタリングシステムの構築とその運用評価に関する研究
1部 建築都市ア	工藤 佳桂	愛知万博における施設の分別・リサイクルに関する調査研究
1部 建築都市ア	兼子礼比古	プロトタイプ外装の熱環境・光環境性能に関する実測調査研究
1部 建築都市ア	坂口 卓	保水機能を持った各種舗装材の性能評価に関する実測調査
1部 建築都市ア	放生 孝弘	戸建住宅団地におけるHEMSを活用したエネルギー需要マネジメントに関する研究
1部 建築都市ア	大介	保水性セラシックを使用したルーバー装置の試作とその性能評価
1部 建築都市ア	松高健太郎	移築再生民家における住まい方を考慮した省エネルギー手法に関する研究
1部 建築都市ア	三宅佐紀子	愛知万博における廃棄物の分別・リサイクルに関する調査研究
1部 建築都市ア	山田 正也	戸建住宅団地におけるHEMSを活用したエネルギー需要マネジメントに関する研究
1部 建築都市ア	納富 曜光	

林研究室

学部学科名	氏名	卒業設計・卒業研究題目
2部 建築コース	佐藤 優子	日本の安楽死・尊厳死問題～自由か不自由か～



*Catch your dream,
get the future!*

建築士・宅建

本気で合格をめざすなら
完全ライブ講義!!

講師が常にそれぞれの理解度を把握でき、受講生はその場で疑問点を解決！それが合格へ直結する受講生参加型の完全ライブ講義の最大メリットです。

**20歳代1級建築士
占有率 No.1**

20歳代1級建築士登録者占有率約 63.7%

「初受験一発合格」「学科+製図ストレート合格」を掲げる当学院の実績が、国交省発表の数字でも証明されました。

20歳代の
1級建築士登録者に
当学院OBが
占める割合

独学 +
他講習会利用
約 1,100 名

当学院OB
1,911名

約
63.7%

今すぐスタート！

- 1級建築士
- 2級建築士
- 宅地建物取引主任者
- 1級建築施工管理技士
- 1級土木施工管理技士

お問合せは
お気軽に

全国 1,122 教室、優秀な講師陣 1,100人

総合資格学院

札幌校	TEL. 011-219-3511	川越校	TEL. 049-291-5211	町田校	TEL. 042-724-3061	津校	TEL. 059-238-0711	樺原校	TEL. 0744-21-1911
盛岡校	TEL. 019-604-9311	熊谷校	TEL. 048-599-3531	川崎校	TEL. 044-850-3411	四日市校	TEL. 059-359-0711	岡山校	TEL. 086-235-5901
仙台校	TEL. 022-217-8421	船橋校	TEL. 047-425-8941	横浜校	TEL. 045-316-6811	草津校	TEL. 077-566-6911	福山校	TEL. 084-991-3811
山形校	TEL. 023-615-2911	千葉校	TEL. 043-290-7341	厚木校	TEL. 046-226-5788	京都校	TEL. 075-352-3011	広島校	TEL. 082-542-3811
水戸校	TEL. 029-300-4721	松戸校	TEL. 047-369-3821	藤沢校	TEL. 0466-55-2611	梅田校	TEL. 06-6374-1411	高松校	TEL. 087-811-2011
土浦校	TEL. 029-835-5181	柏校	TEL. 04-7168-9111	沼津校	TEL. 055-954-2611	新大阪校	TEL. 06-6101-1911	山口校	TEL. 083-974-4011
宇都宮校	TEL. 028-614-4881	成田校	TEL. 0476-24-5851	静岡校	TEL. 054-275-3311	京橋校	TEL. 06-6882-8211	天神校	TEL. 092-716-2081
前橋校	TEL. 027-226-7501	新宿校	TEL. 03-3366-2181	浜松校	TEL. 053-456-2211	なんば校	TEL. 06-6648-5511	博多校	TEL. 092-415-3555
新潟校	TEL. 025-242-2811	上野校	TEL. 03-3832-7201	岐阜校	TEL. 058-277-3701	堺校	TEL. 072-222-9311	小倉校	TEL. 093-522-7511
金沢校	TEL. 076-237-6811	池袋校	TEL. 03-3982-8211	名古屋校	TEL. 052-202-1751	神戸校	TEL. 078-241-1711	久留米校	TEL. 0942-36-7141
大宮校	TEL. 048-642-9811	五反田校	TEL. 03-3495-8871	小牧校	TEL. 0568-42-1211	姫路校	TEL. 0792-24-1411	熊本校	TEL. 096-212-6811
越谷校	TEL. 048-990-6971	吉祥寺校	TEL. 0422-23-6011	岡崎校	TEL. 0564-57-8161	尼崎校	TEL. 06-6430-6811		
所沢校	TEL. 04-2926-6241	立川校	TEL. 042-524-7841	豊橋校	TEL. 0532-57-0311	奈良校	TEL. 0742-30-1511		

鹿児島校 NEW OPEN

<http://www.shikaku.co.jp/>

UNION Renzo Builder

会社概要

社名 株式会社ユニオン建材ビルダー
設立 1996年10月24日
資本金 3,000万円
売上高 134億円（2003年度実績）
162億円（2004年度実績）
201億円（2005年度実績）
220億円（2006年度計画）

役員 代表取締役社長 伊藤正一
従業員 161名（平成18年11月1日現在）

事業内容

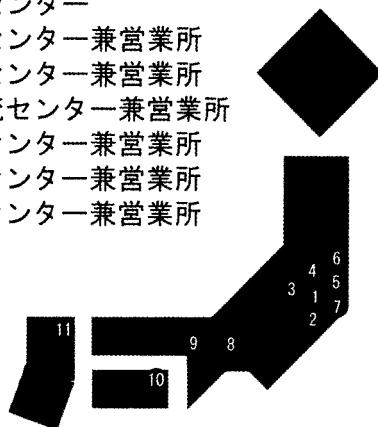
- 建築用材料の工事付き販売
- 建築の設計・施工
(東京都知事許可(般-10)第110691号)
- 建築材料の物流
- 建築構造用パネル及びプレカット材生産

新卒・中途社員募集のお知らせ

木造住宅 設計・積算
現場監理
住宅用建材 営業・商品開発・購買

所在地

- ①東京本社
〒104-0031 東京都中央区
京橋1-10-3 服部ビル8F
TEL. 03-3564-5461 (代)
FAX. 03-3564-5462
- ②神奈川物流センター兼営業所
- ③埼玉物流センター兼営業所
- ④栗橋工場
- ⑤古河物流センター
- ⑥水戸物流センター兼営業所
- ⑦千葉物流センター兼営業所
- ⑧名古屋物流センター兼営業所
- ⑨大阪物流センター兼営業所
- ⑩高松物流センター兼営業所
- ⑪福岡物流センター兼営業所



住宅イノベーション
株式会社 **ユニオン建材ビルダー**

日建設計

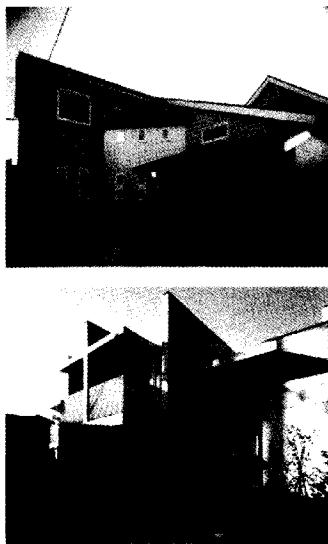
代表取締役社長 中村光男

東 大	京	〒102-8117	東京都千代田区飯田橋2-18-3	電話 (03)5226-3030
名	阪	〒541-8528	大阪市中央区高麗橋4-6-2	電話 (06)6203-2361
九	古	〒460-0008	名古屋市中区栄4-15-32	電話 (052)261-6131
東	州	〒810-0001	福岡市中央区天神1-12-14	電話 (092)751-6533
支所・その他	北	〒980-0021	仙台市青葉区中央4-10-3	電話 (022)221-4466
北海道(札幌)・東北(仙台)・秋田・神奈川(横浜)・静岡・北陸(富山)・京滋(京都)・神戸・ 中国(広島)・北九州・熊本・鹿児島・沖縄(那覇)・上海・台北				

<http://www.nikken.co.jp/>



FOR YOU
planning consultant



株式会社
FOR YOU PLANNING CONSULTANT
<http://www.fy-g.co.jp>

三好 薫
井坂 光宏
関口 映次
渡辺 博之
橋本 敬之

〒156-0044
東京都世田谷区赤堤4-22-11
TEL:03-3323-7311

MUTOH

教えるのも、教わるのも、
MUTOHなら安心です。

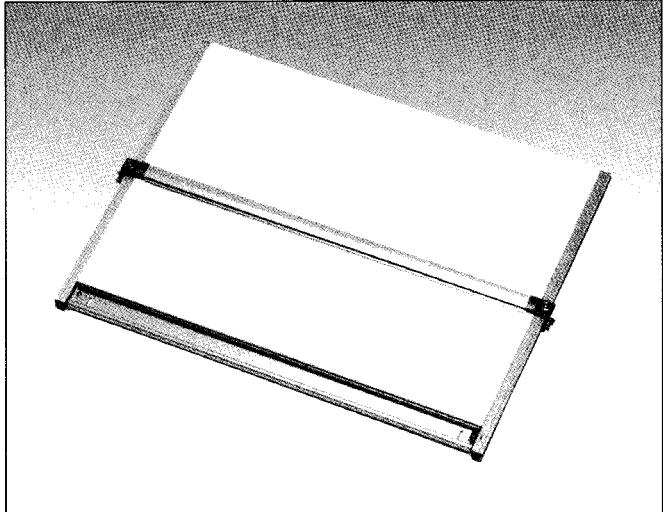
設計現場の即戦力となる人材育成には、優れた教材を使用したい。
そんな声に応えるのは、やっぱりMUTOHです。
あらゆる設計現場で、高い信頼性と
納入実績を誇るMUTOHの設計製図ツールは、
教育の現場でも活躍してくれます。

LINER BOARD **UM-09NK**

■ 塩ビシート圧着鋼板製図板使用 ■

工学院
特別仕様

場所を選ばず高い精度と操作性が得られる
コンパクトな平行定規、ライナーボード。
耐久性に優れ快適な操作性を提供する
シンクロベルト方式を採用した本格派。
A1サイズまでの作図に対応。図面への
固定は、付属のマグネットプレートで
ワンタッチ。しかも軽量・コンパクトです。
簡単に持ち運びできますので、思い
ついたらそこがワークスペース。アイ
ディアを生み出す頼もしい片腕です。



株式会社 ムトー エンジニアリング 東京都世田谷区池尻3-1-3 〒154-8560 TEL(03)5486-7139(直) FAX(03)5486-7172

文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

より快適な
水環境をめざして。



水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18 TEL.(03)3452-7441大代表 支店／札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋・大阪・九州 事業内容／給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

キミたちが大人になるころ、
ビルで、工場で、空気のような存在にな
なっていてほしい活動です。

人・空気・未来
高砂熱学工業

エアから、エコ。

Takasago
Green Air

グリーンエア®は、高砂熱学工業の地球環境活動。
人に自然にやさしい空気づくりのために。

省エネルギー・コンサルテーションから運用・メンテナンスまで。新しい空気環境をワンストップ・ソリューションで実現します。

ビルの空気環境のリニューアルをご提案します。 ホテル、病院等の空気環境づくりをお手伝いします。 半導体工場など特別な空気環境にもお応えします。

Green Air-Renewal

Green Air-Hospitality

Green Air-Factory

中電工は「総合設備エンジニアリング企業」として 社会の発展に貢献します。

- | | | |
|------------|----------------|--------------------------|
| ◆ 電気設備工事 | ◆ 水道施設工事 | ◆ 土木建築工事 |
| ◆ エネルギー関連 | ◆ 環境関連 | ◆ 電気機器の設計・製作・販売・修理・据付・保守 |
| ◆ 送配電線工事 | ◆ 防災・消防設備工事 | ◆ ソフトウェア関連 |
| ◆ 情報通信設備工事 | ◆ リニューアル・リフォーム | ◆ コンサルティング・メンテナンス業務 |
| ◆ 空調管設備工事 | ◆ 鉄塔工事 | ◆ 電気通信事業 |



中電工

本店／広島市中区小網町6番12号 TEL 082(291)7411

広島・岡山・山口・島根・鳥取支店
東京・大阪本部、名古屋・九州・四国支社

<http://www.chudenko.co.jp>

心を込めたお手伝い

日建学院グループ/建設系総合人材バンク

■職業紹介事業許可: 13-ユ-090149

■労働者派遣事業許可番号: 般13-090147

**Hearty
Network**

建設系職業紹介・人材派遣のエキスパート

「動く場」と「動く人」の出会いをご提供

ニッケン・キャリア・ステーション



<http://ncs.ksknet.co.jp>

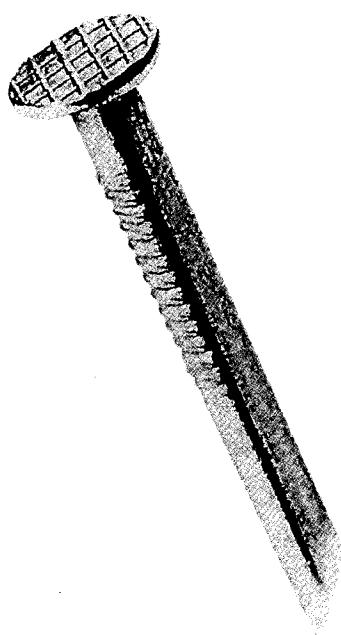
free call:0120-810-298 / e-mail:ncs@to.ksknet.co.jp

■本社/豊島区池袋2-68-1 日建サテライト館5F ■横浜支店/横浜市神奈川区鶴屋町3-32-14 新港ビル4F ■大阪支店/大阪市北区梅田2-5-6 桜橋八千代ビル6F

Zenitaka

それは

一本の釘から始まった。



晴れやかにそびえ立つ高層ビル、

近代的な橋、空港、ETC……

しかし、それも全て原点は、はるか昔、

一人の職人が打ち込んだ、一本の釘なのです。

なんとか良いものを作ろうとする

職人の精神――。

初心を忘れず、我々は明日に進みます。

◎ 錢 高 組

URL <http://www.zenitaka.co.jp/>

microArts

設計図・図面の管理を 飛躍的に効率化!

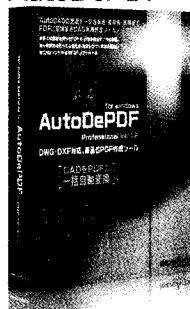
AutoCAD(DWG／DXF)、Jw_cad(JWW／JWC)、国交省SXF(SFC・P21)形式に対応

これからは図面は PDF です!

CADデータの精度をそのままPDFへ変換

- ・高速/高精度 有名PDFソフトの100倍のスピードでPDFを生成します。
- ・高圧縮 有名PDFソフトの10倍の圧縮率でPDFを生成します。
- ・多機能 レイヤ機能/連結変換機能/ファイル添付機能など多彩です。

AutoDePDF



ZumenPDFServer



ZumenPDFServer Ver1

CADデータや画像データを監視フォルダにドラッグ & ドロップするだけでPDFに高速変換します。
AutoCAD・Jw_cad・SXF(SFC・P21)に対応しています。

AutoDePDF Professional Ver1.2

AutoCAD形式専用のPDF変換ツールです。

JWtoPDF Professional Ver3 JWtoPDF LE ソフト電池版

Jw_cad形式用のPDF変換ツールです。

株式会社 マイクロアーツ

<http://www.microarts.jp/>

〒965-0872 福島県会津若松市東栄町1-14

TEL 0242-26-9920 FAX 0242-29-7194

暮らしをデザインする

TOSTEM



トステム株式会社／ビル建材本部 <http://www.tostem.co.jp/>

SUGA

風は心地よいですか、水はおいしいですか。

オフィス環境の快適を見つめて1世紀
わたしたちは空気と水のエンジニア、須賀工業です。
ビル設備のご提案を通じて、都市再生のお手伝いを続けています

空気調和・給排水衛生設備
創業1901年
須賀工業株式会社
本社 〒110-0005 東京都台東区上野5-18-10
電話 03(5688)8100
URL <http://www.suga-kogyo.co.jp/>

20歳過ぎたら
健診を。
人間の話では
ありません。



KANDENKO

電気設備など、中から疲れやすくなっているビルは、関電工でリニューアルを。ビルを診断、設計、施工してビル内環境を改善します。設備に関することは、ビルのドクター関電工にご相談ください。

ビルの誕生からリニューアルまで
総合設備の

関電工

住生活に密着した管理で、快適なマンションライフをご提案します。



ジャパンマンションコミュニティ株式会社

東京都品川区上大崎3-3-1 TEL 03-5420-5441 FAX:03-5420-5458



マンションの管理はお任せ下さい！若さとスピードでお手伝いします。

当社は、警備会社No.1のセコム株のマンションセキュリティシステム
を採用。「安心感」をご提供します！

分譲マンションの管理についてのご相談は

0120-290-310 (無料)

ISO 9001認証登録 (会計業務)

工学院大学校友会事業計画

(案より一部抜粋)

校友会企画部会 副会長 山本清 企画部長 北澤興一
理事 大谷一夫、大場光博、小川文夫、木本勝正、根本弘道、平山徹夫
企画部会サポートスタッフ 笹原克、谷口宗彦、渡辺征一郎

1.『求人紹介』開始の提案主旨

近年、建設業界からの即戦力になる人材確保の動きが活発になってきている。また卒業生のリストラや転職希望者から再就職の要請があり、リタイアした卒業生も再就職を希望している。これら卒業生の要求に応えると共に校友会の財政面への一助になることも考慮し、さらに、学園に対する支援も加味して『求人紹介業』の開始をここに提案いたします。初めに建築系でスタートして、順調になってから、電気系、機械系、応化系と拡大できるものと考えています。

2.『求人紹介業』推進の必要性と展開方法

日本経済もバブル経済の後遺症からようやく抜け出し、国内の産業も活況を呈してきている。この動きに関連して建設業界においては、リストラ等で人材を整理した反動から、人材不足に陥っている企業も多く、即戦力になる技術者を求める動きが活発化している。そして、建築系学科の研究室にも就職斡旋の相談が持ち込まれている。一方では、低収益態勢から脱却できずに業績が低迷している企業も多く、リストラされて職を失う技術者も後を絶たない。

校友会企画部会は、長年収益事業について検討(註1.2他参照)してきましたが、これら社会的な要請と卒業生の要求に応えるため、また校友会の財政にも寄与する道を創り、併せて、社会に貢献する大学のイメージを定着させ、受験生確保等学園への支援策も考慮して、第一段階として専門企業(註3)とタイアップし、建築系を中心とする技術者の『人材紹介業』を校友会の収益事業の一つの柱として提案致します。

3.工学院大学建築系学科卒業生の強み

本学は、明治21(1888)年、築地の工手学校を受け継ぎ、創立118年と長い歴史があります。平成18年、当大学卒業生は約138,000名を超え、工科系の大学として技術的・社会的に高い評価を得ています。このうち、建築系学科卒業生は約16,000名に達し、建設業界の中で幅広く活躍し、社会的評価も高く認知されています。学園の長い歴史と卒業生が、累々、築いてきた社会での働きや実績が本学の強みであり、今般の『求人紹介業』への展開が可能になったと考えます。

4.『求人紹介業』の推進組織

事業の展開は、専門企業とタイアップして推進します。企業からの人材必要情報は、同企業関連の全国130ヶ所の拠点にて調整し、校友会は工学院大学の卒業生への呼びかけ、専門企業との橋渡し作業を担当します。

事業推進するため当初はリスクな要素を排除し、経費の負担を可能な限り少なくして事業展開を考えます。『人材派遣業』も検討

しましたが、免許の取得、各種保険金の負担、収益率が低い等を考慮し、結論として、「求人紹介業務」を先行して実施することといたします。

①当初は暫定的に、校友会スタッフが対応します。当面、人件費は、ゼロで考えて取組み、経費の少ない可能な範囲で作業します。

②事業推進体制は、収益の見通しが立った段階で、大学、大学後援会と三者合同の組織を目指します。

5.校友会の当面の作業内容

- ①校友会HPおよび建築系学科同窓会HPなどへ呼びかけ、人材情報を確認できる場を確保し、就職作業の手順をお知らせします。
- ②校友会情報ネットメールの活用、及び同窓会メンバーに案内メールを発信します。
- ③卒業生向けチラシを作成し、校友会誌発送時(65,000部)に同封します。

6.キャリアカウンセリングを受けることが前提

就職希望者が専門企業でのキャリアカウンセリングを受けることから業務が始まります。

具体的な訪問先(註4/東京・横浜、大阪)にアクセスを確保できる方を優先します。

以上

備考 1.

①同窓会費納入が必要条件

「求人紹介」は工学院大学など、本学園の卒業生を対象とします。就職紹介の条件は、同窓会費納入の方を優先しますが、未納の方は就職決定後に2年分以上の会費振り込みを、お願い申し上げます。(建築系学科同窓会の年会費は郵便振り込みの場合は4,000円/年。VISAカード引き落としの場合は3,000円/年です)

備考 2.

(註1)「平成18年8月21日/工学院大学校友会(第18回)企画部会議事録/他大学の事業計画の事例について」

(註2)「平成18年9月4日/工学院大学校友会の事業化に向けて/ニッケン・キャリア・ステーションでの打ち合わせ」

(註3)【(株)ニッケン・キャリア・ステーション】同社は建築系資格取得教育を主な業務とする日建学院(全国130校)の子会社。建築系を中心に、人材紹介などを実施する建築業界に特化した会社。現在社員数135名(社員25名、派遣社員110名)顧客企業3,500社、登録人材6,000名。2006年9月で設立5年目、3年目から黒字経営。2005年11月横浜支店設立、2006年10月大阪支店設立。今後は3店舗で業務展開。今後も、各地に拠点展開計画を持つ。】

(註4)【求職者情報提供を、業務提携し開始するならば、2社間で〈業務提携に関する契約書〉を締結し、弊社登録の求人企業等へ人材情報の紹介を早期に行うことが可能。書類選考の上適材であればスピーディーに面接設定を行える。校友会が迅速に求職者情報を把握し、迅速に弊社宛に対して情報提供するシステム作りが必要です。】

表紙デザインのコンセプト 石井 真



あなたの音色は?

人にはそれぞれ個性がある。服装、性格、生き方…それは建築においても同じこと。
しかしながら現代のまちはその個性を失いつつある。

地方の中心市街地や幹線道路沿いのまち並みは写真だけではどこの風景かもわからない。
同じような建物が建ち並び、同じようなまちが形成されていく。

そんな時、以前ある先輩から聞いた話を思い出した。

建築はそこにある、または感じるものを言い、そうでないものはただの建物なんではないかと。
人と空間僕らは大学という所でそれを日々勉強し、個性的に表現してきた。

まちには個性を持たせることが出来る。

まちは独自の音色を響かせることが出来る。

奏でるのは僕ら。

そんなメッセージをこの表紙に込めました。

自分の音色を奏でよう。

工学院大学大学院修士課程1年 石井真(谷口研究室)
埼玉県立川越高等学校出身

NICHE 2007 Vol.30 編集後記

◆デザイン担当者が代わりました。

ニッヂのレイアウトデザイン会社が池袋のKSKデザインモールに変わりました。前号よりも誌面の充実やレイアウトデザインの向上を図り、印象的な誌面づくりを目指しました。ワインを作るように、ゆっくり熟成した、一味深みのある新作NICHEをご賞味下さい!

表紙デザインコンペは石井真さんのピアノの鍵盤の画像に決定。音楽系の同窓会かと思われそうですが、“make your sound”短いセンテンスが添えています。コンペに期待したのは、若さ溢れる個性的なデザインです。がらっと斬新なイメージに代わりました。30号記念特集に掲載した創刊～30号迄の表紙(11ページ)を見比べて下さい。表紙はその時代の顔になっています。

◆在校生や卒業生に新しい刺激を

同窓会誌の創刊号に、フルブライト留学から帰国間もない山下司先生の「ポール・ルドルフ」の記事。読み返すと山下先生の若い頃のエネルギーッシュな姿が目に浮びます。今回の記事も在校生の若い方々にも、きっと良い刺激になると思います。

「インド、人間と生と死」小野司さん。インドカシミールは危険地帯。1冊のスケッチブックに小さい文字で日記風に記述され、建築家のスケッチが丁寧に書き込んであります。行動力のある彼のように、私達も色々な刺激を、幾つになっても受けたいものです。

NICHE PASSPORTの在校生の記事を読むと、みんな現場で貴重な体験を積んで

います。1人きりになり自分から進んで新天地を求める、少しずつ気力や体力が養われ、人生経験が豊かになります。NICHEの記事を読んだ後輩が、新しい刺激を求めて、これからも未知の世界に旅立っていくでしょう。

◆新しい座談会テーマ

今年のNICHE座談会は二つあります。それぞれ司会は谷口宗彦、初田亨両先生が担当。新宿キャンパス28階校友会談話室で実施。これからも色々タイムリーな座談会を企画したいと思います。ご希望のテーマがございましたら、下記のメールアドレス迄ご連絡下さい。

◆大学の社会的バロメーター

NICHEの発行目的は、卒業生や在校生、大学関係者の活動を皆様にお知らせすることです。毎日大学について自分の研究室は知つても、卒業生の活動や他の研究室のことは分かりにくく、情報も伝わりにくいものです。

編集作業は縦糸と横糸。先ず時間軸の縦糸は、明治の輝かしき先輩、退職された諸先生、年輩の卒業生、現役バリバリの方々、各研究室や現役の大学生など、各年代ごとに多くの方々がいます。そして国内や海外の地域に、色々な業種で活躍中の卒業生が横糸。縦糸と横糸で織物を編むように、できるだけ多くの卒業生に呼びかけ誌面づくりを目指しました。ページをパラパラとめくつてみてのご感想は如何でしょうか?

各界で活躍する卒業生の活動を、毎年1

冊にまとめてお知らせすることは、大学の社会的な実績を示すバロメーターになります。

工学院大学の建築系学科卒業生に毎年NICHEを届けています。社会に出てはじめて出会った工学院大学の諸先輩にも、NICHEを話題にして気楽に話し掛けてください。社会の至る所に皆さんの仲間がいることを実感すると思います。

◆あなたが主役です

さて、ここまで読んで何か感じませんか? NICHEの誌面は、卒業生や在校生、教職員など工学院大学建築系学科関係者の出演するステージです。NICHEの主役は、今NICHEを読んでいるあなたが主役です。編集スタッフから声がかかりましたら、是非ご出演にご協力して下さい。我々編集スタッフは黒子に徹して、皆様のご出演をお待ちしています。

発行迄に多くの方々に大変お世話になっています。そしてNICHEの誌面から感じられる暖かい雰囲気は、卒業生諸先輩の母校を思う気持が現れているからです。

今回もご支援いただきました卒業生や在校生、教職員の皆様、多くの関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

NICHE編集長 大場光博

E-Mail : miu@tkg.att.ne.jp



夢へ一直線

多くの人の夢を、
この手でかたちに。
日建学院



Congratulations!! Now You're License holder.

あなたの「夢」応援します。

日建学院

資格一覧

■建設関連
建築士／建築施工管理技士
土木施工管理技士／管工事施工管理技士
造園施工管理技士／舗装施工管理技術者
技術士補／給水装置工事主任技術者
測量士補／コンクリート技士
コンクリート主任技士／CAD利用技術者

■不動産関連
宅地建物取引主任者
土地家屋調査士
マンション管理士
管理業務主任者

■会計・経営・労務関連
社会保険労務士
日商簿記
ファイナンシャル・プランナー
■電気関連
1級電気工事施工管理技士
第2種電気工事士

■IT関連
初級シスアド
■講習
エクステリアプランナー
監理技術者講習※
宅建登録講習※
宅建実務講習※

※(株)日建学院 実施

■実務
建築構造計算
確認申請
個人情報保護
秘書検定

お問い合わせ
資料請求
試験情報

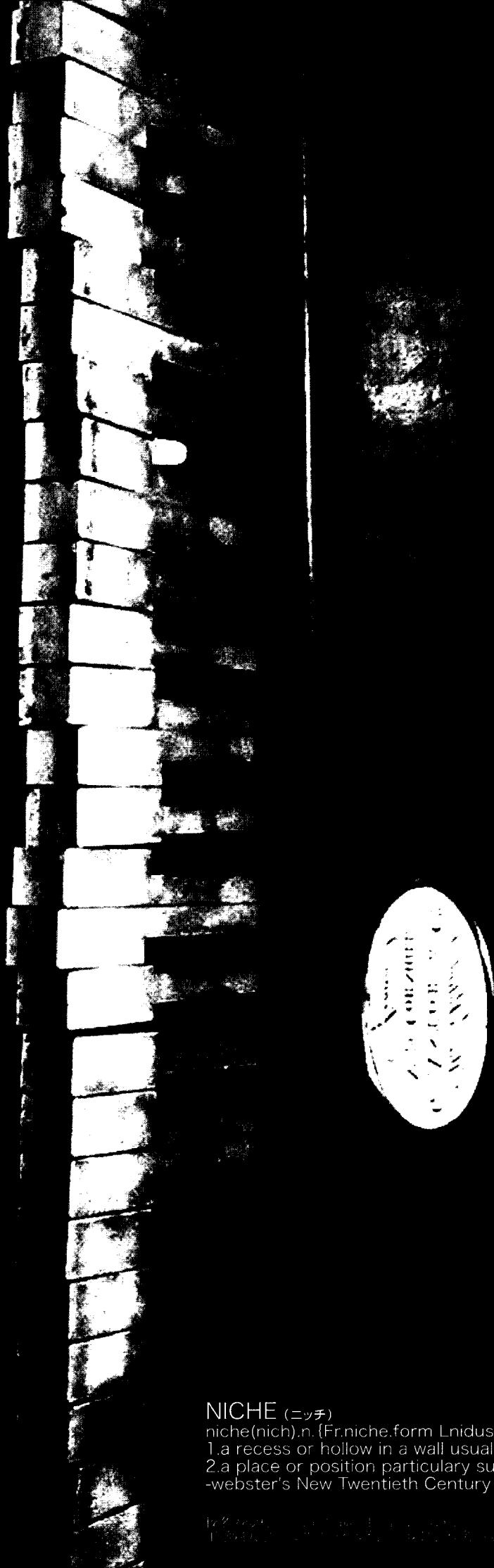
日建学院コールセンター ☎ 0120-243-229

受付／AM10:00～PM5:00（土・日・祝祭日は除きます） 株式会社建築資料研究社 東京都墨田区西池袋1-15-7 メディアコード：002128

<http://www.ksknet.co.jp/nikken/>

日建学院

検索



NICHE (ニッヂ)

niche(nich).n. {Fr. niche, form Lnidus a nest}

- 1.a recess or hollow in a wall usually intended for a statue,bust or vase.
- 2.a place or position particulary suitable for the person or thing in it.

-webster's New Twentieth Century Dictionary-